仙台市文化財調査報告書第 338 集

三神峯遺跡（みかみねいせき）

－第６次発掘調査報告書－

２００９年３月
仙台市教育委員会

序　　文

日頃より仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

三神峯遺跡が所在する三神峯公園は、昭和４２年に開園されました。ソメイヨシノやヤエザクラ、シダレザクラなどのサクラの木が多く、花見の名所として知られており、花を愛でる多くの市民で賑わいます。開園から約４０年が経過し、桜の木の枯損などにより、園内の景観が損なわれつつあるため、平成１７年度に再整備計画を策定しました。

再整備に伴う工事に先立って、平成１９年と平成２０年に三神峯遺跡の発掘調査を実施しました。三神峯遺跡は、縄文時代の遺跡として戦前から知られており、過去５回の調査によって縄文時代前期の住居や土器が発見されており、当時の集落の様相を考える上で重要な遺跡であります。

仙台市教育委員会では、文化財を保護するとともに、あらゆる場面での活用に取り組んでいく所存であります。この調査報告書が、地域の歴史の解明と市民の皆さまの文化財保護へのご理解につながれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に際しまして、ご協力とご助言くださいました多くの方々に深く感謝を申し上げます。

平成 21 年３月

仙台市教育委員会
教育長　　荒井　崇

例　　言

1．本書は宮城県仙台市太白区三神峯一丁目地内に所在し、三神峯公園再整備事業に伴って行われた三神峯遺跡の第６次の発掘調査報告書である。

2．平成 20 年度の第６次発掘調査は仙台市教育委員会の指導のもと、大成エンジニアリング株式会社が行った。

3．本書の執筆は、仙台市教育委員会　大久保弥生、荒井　格、大成エンジニアリング株式会社　山中リュウ、宇井義典が担当した。執筆担当箇所は下記のとおりである。

第Ⅰ章第１節　大久保　　第Ⅱ章　山中　　第Ⅲ章　山中　　第Ⅳ章　山中　　第Ⅴ章　山中・宇井

第Ⅵ章１～３・５　山中　第Ⅵ章４　荒井　　第Ⅶ章　山中

4．本書の編集は、仙台市教育委員会　大久保弥生、荒井　格の指導のもと、大成エンジニアリング株式会社　山中、市川康弘、山崎裕子が行った。

5．縄文土器の整理は、大成エンジニアリング株式会社学術顧問　安孫子昭二が監修した。

6．石器・石製品の石材は、大成エンジニアリング株式会社課長　伊藤俊治が鑑定を行った。

7．発掘調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である（五十音順・敬称略）。

安島　勲　安部滋子　粟野　拓　荒瀬誠史　井上　孝　大久保ひとみ　荻田　仁　加藤宏美　金山由美
熊谷和子　栗原照男　小林恵太郎　佐久間僚子　佐藤伸次　座間重雄　澤田克江　塩原勝晴　島脇有紀
神野佳子　鈴木勝広　瀬戸宏征　大工原豊　仙台市太白区公園課　武田浩司　長曽我部昭親　土屋明彦
富下伸一　鳥井文子　中川恭一　中沢祐一　二戸捷幸　二瓶　稔　福田裕史　真中和行　三浦宗子　三木敏道
柳瀬忠彦　山岸　優　山中美礼　吉村健二

8．本書に係る遺物・写真・実測図版等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

9．**発掘調査参加者**：青木秀美　阿部春樹　井上伊登奈　木村　博　斎　義勝　佐々春子　佐藤　敦　佐藤和彦
佐藤巧弥　佐藤宗幸　志村久美子　菅井常夫　菅原寛之　須藤克則　高野　陸　高橋伸夫　竹沢竹敏
唯野一雄　唯野良子　早坂　誠　富士あさよ　三浦陽子

整理作業参加者：青木雄大　大崎美鈴　小野真美　上條房喜　栗山結花　小室峯子　末松　宏　中村君江
萩原明美　藤瀬和枝　柳田美須穂　山内淳司

凡　　例

１．本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄　2002）に準拠している。

２．遺構図に示す標高値は、東京湾平均海抜高度（T. P）を基準としている。

３．遺構の断面図および調査区壁面断面図に示す標高は、64.000ｍもしくは64.500ｍの位置を示している。

４．各遺構の図版において、調査区の壁面で土層を確認している箇所は、遺構の上端ラインが平面図と必ずしも一致しない。これは、調査段階の遺構確認面と断面で確認された掘り込み面の位置が異なるために生じたものであり、遺物包含層掘り下げの段階で遺構のプラン等が明確に確認される位置まで掘削を行った結果である。

５．本書で使用した地図は下記の通りである。

第１図　『仙台市史　特別編１』より転用し、遺跡の推定位置を図示。

第２図　国土地理院地形図（Ｓ＝１／25,000）「仙台西南部」平成15年３月１日発行。

「仙台東南部」平成19年３月18日発行。

第３図　三神峯公園再整備事業計画図を用いて作製。

６．本書で用いている公共座標は、世界測地系　平面直角座標第Ｘ系に基づく。

７．遺構の位置を明確にするため調査区内に４ｍ間隔でグリッドを設け、遺構配置図に座標と名称を標記した。

８．図中および本文記載の方位の北は、すべて真北である。

９．各遺構の土層説明は、含有物の量について、微量＜少量＜含む＜やや多い＜多い、の５段階に分類し、「粘性」「締まり」について、弱い＜やや弱い＜あり＜やや強い＜強い、の５段階に分類した。

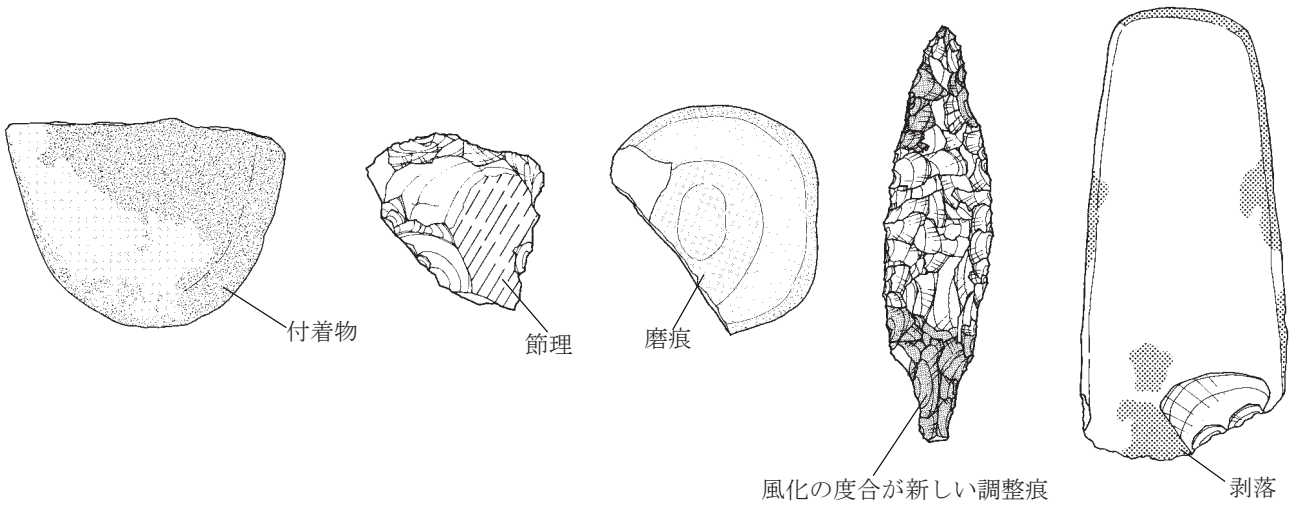
10．報告書で使用した縮尺は下記の通りである。縮尺の詳細は各図のスケールを参照されたい。

遺構　1/20、1/40、1/60　　遺物　1/3、1/2、2/3、1/1

11．調査において検出された遺構については以下の遺構略号を使用し、各遺構ごとに番号を付した。

ＳＫ　土坑　　Ｐ　ピット　　ＳＸ　性格不明遺構

12．石器実測図における表現方法は以下のとおりである。



目　　次

序　文
例　言…… i
凡　例…… ii
目　次…… iii
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
　第１節　調査原因 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
　　１．周辺の遺跡 …… 2
　　２.三神峯遺跡の概要と第１次・第２次・第３次の調査成果 …… 8
　　３.三神峯遺跡第４次・５次調査の概要 …… 9
第Ⅲ章　調査の方法と概要 …… 11
　第１節　調査の方法 …… 11
　　１．調査区の設定 …… 11
　　２．基準杭の設定 …… 11
　　３．調査の方法 …… 11
　第２節　調査経過 …… 11
第Ⅳ章　基本層序 …… 14
第Ⅴ章　検出遺構と出土遺物 …… 19
　　１．土坑 …… 19
　　２．ピット …… 23
　　３．性格不明遺構 …… 25
　　４．遺構外出土遺物 …… 43
第Ⅵ章　成果と課題 …… 84
　　１．検出された遺構について …… 84
　　２．遺物包含層について …… 85
　　３．遺物包含層出土の石器について …… 85
　　４．おわりに …… 87
第Ⅶ章　まとめ …… 88
引用参考文献
報告書抄録
奥付

挿 図 目 次

第 1 図　仙台市の地形 …… 3
第 2 図　遺跡地図 …… 6
第 3 図　調査地点 ……10
第 4 図　深掘区 ……13
第 5 図　Ｂ区南壁・南西壁断面図 ……15
第 6 図　焼土範囲 ……16
第 7 図　遺構全体図 ……17･18
第 8 図　SK1･2･5･6 土坑・ピット 8･71 ……29
第 9 図　SK3･4 土坑・ピット 67 ～ 70 ……30
第 10 図　SK7･9 ～ 11･14 土坑・ピット 18･19･35･73 ……31
第 11 図　SK16･19 ～ 23 土坑・ピット 20･47 ～ 49･64 ～ 66･72 ……32
第 12 図　SK24 ～ 27 土坑・ピット 4･6･11･12･15･16･21･22 ……33
第 13 図　ピット 23 ～ 26･29･36･37･41･45･53･54 ……34
第 14 図　ピット 74 ～ 76 ……35
第 15 図　SX1 性格不明遺構 ……36
第 16 図　SK3･4･9 土坑出土遺物 ……37
第 17 図　SK5･14･16 土坑・ピット 13･16･20 出土遺物 ……38
第 18 図　ピット 4･34･35･39･49･52･61･72･74 出土遺物 ……39
第 19 図　ピット 75･77･SX1 性格不明遺構出土遺物 ……40
第 20 図　遺物包含層出土の土器（1）…… 51
第 21 図　遺物包含層出土の土器（2）…… 52
第 22 図　遺物包含層出土の土器（3）…… 53
第 23 図　遺物包含層出土の土器（4）…… 54
第 24 図　遺物包含層出土の土器（5）…… 55
第 25 図　遺物包含層出土の土器（6）…… 56
第 26 図　遺物包含層出土の土器（7）…… 57
第 27 図　遺物包含層出土の土器（8）…… 58
第 28 図　遺物包含層出土の土器（9）…… 59
第 29 図　遺物包含層出土の土製品 …… 60
第 30 図　遺物包含層出土の石器（1）…… 61
第 31 図　遺物包含層出土の石器（2）…… 62
第 32 図　遺物包含層出土の石器（3）…… 63
第 33 図　遺物包含層出土の石器（4）…… 64
第 34 図　遺物包含層出土の石器（5）…… 65
第 35 図　遺物包含層出土の石器（6）…… 66
第 36 図　遺物包含層出土の石器（7）…… 67
第 37 図　遺物包含層出土の石器（8）…… 68
第 38 図　遺物包含層出土の石器（9）…… 69
第 39 図　遺物包含層出土の石器（10） …… 70
第 40 図　遺物包含層出土の石器（11） …… 71
第 41 図　遺物包含層出土の石器（12） …… 72
第 42 図　遺物包含層出土の石器（13） …… 73
第 43 図　表土・攪乱出土遺物（1） …… 74
第 44 図　表土・攪乱出土遺物（2）…… 75

表 目 次

第 1 表　周辺の遺跡 …… 7
第 2 表　ピット一覧表（1） ……26
第 3 表　ピット一覧表（2） ……27
第 4 表　ピット一覧表（3） ……28
第 5 表　遺構出土遺物観察表（1） ……41
第 6 表　遺構出土遺物観察表（2） ……42
第 7 表　遺物包含層出土遺物観察表（1） ……76
第 8 表　遺物包含層出土遺物観察表（2）…… 77
第 9 表　遺物包含層出土遺物観察表（3）…… 78
第 10 表　遺物包含層出土遺物観察表（4）…… 79
第 11 表　遺物包含層出土遺物観察表（5）…… 80
第 12 表　遺物包含層出土遺物観察表（6）…… 81
第 13 表　遺物包含層出土遺物観察表（7）…… 82
第 14 表　表土・攪乱出土遺物観察表 …… 83

写 真 図 版 目 次

写真図版１　調査区全景 ……93
写真図版２　Ａ区完掘状況（部分）……94
写真図版３　Ｂ区完掘状況（部分）……95
写真図版４　Ｃ・Ｄ区全景 ……96
写真図版５　遺構（１）……97
写真図版６　遺構（２）……98
写真図版７　遺構（３）……99
写真図版８　遺構（４）……100
写真図版９　遺構内出土遺物（１）……101
写真図版 10　遺構内出土遺物（２）……102
写真図版 11　遺構内出土遺物（３）……103
写真図版 12　遺物包含層出土土器（１）……104
写真図版 13　遺物包含層出土土器（２）……105
写真図版 14　遺物包含層出土土器（３）……106
写真図版 15　遺物包含層出土土器（４）……107
写真図版 16　遺物包含層出土土器（５）……108
写真図版 17　遺物包含層出土土器（６）……109
写真図版 18　遺物包含層出土土器（７）……110
写真図版 19　遺物包含層出土土器（８）…… 111
写真図版 20　遺物包含層出土土器（９）…… 112
写真図版 21　遺物包含層出土土器（10）…… 113
写真図版 22　遺物包含層出土石器（１）…… 114
写真図版 23　遺物包含層出土石器（２）…… 115
写真図版 24　遺物包含層出土石器（３）…… 116
写真図版 25　遺物包含層出土石器（４）…… 117
写真図版 26　遺物包含層出土石器（５）…… 118
写真図版 27　遺物包含層出土石器（６）…… 119
写真図版 28　遺物包含層出土石器（７）…… 120
写真図版 29　遺物包含層出土石器（８）…… 121
写真図版 30　遺物包含層出土石器（９）…… 122
写真図版 31　遺物包含層出土石器（10）…… 123
写真図版 32　遺物包含層出土石器（11）…… 124
写真図版 33　遺物包含層出土石器（12）…… 125
写真図版 34　表土・攪乱出土遺物（１）…… 126
写真図版 35　表土・攪乱出土遺物（２）…… 127

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査原因

今回の発掘調査は、三神峯公園再整備事業に伴うもので、仙台市長　梅原克彦より平成 18 年 5 月 9 日付けで当遺跡の発掘通知が仙台市教育委員会に提出された。主幹課である仙台市太白区建設部公園課とは、通知以前より協議を重ね、遺跡が壊される部分を最小限に留めるため、確認調査に基づく設計見直し、並びに盛土の厚さや掘削深度等の工法を変更するという方針のもと、公園再整備計画を進めることとした。

今回の６次調査は、平成 20 年度整備工事に伴うもので、123 ㎡の確認調査を行い、その内、計画の見直しや工法の変更が不可能であった 391 ㎡を本調査とした。

当調査は、仙台市教育委員会の指導・監督のもと、大成エンジニアリング株式会社（代表取締役　古川　健）が受託し調査を行った。遺跡中央北側の駐車場整備部分を主な対象とし、整備設計図面から調査区の設定を行った。平成 20 年 9 月 16 日に仙台市文化財課、太白区公園課の立会のもと、調査区埋め戻し状況を確認し、野外調査を終了した。

第２節　調査要項

遺　跡　名	三神峯遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 01004）	
所　在　地	仙台市太白区三神峯一丁目地内	
調調査面積	514 ㎡	
調 査 期 間	平成 20 年６月 24 日～９月 16 日	
調 査 主 体	仙台市教育委員会	
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課	
担 当 職 員	調査係主査	荒井　格
	調査係主事	大久保弥生
	調　査　員	山中リュウ（大成エンジニアリング株式会社）
	調査補助員	市川康弘（大成エンジニアリング株式会社）
	計　測　員	浅見克己（大成エンジニアリング株式会社）
	計測補助員	山川克也（大成エンジニアリング株式会社）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

三神峯遺跡は、仙台市太白区三神峯一丁目に所在する。市営地下鉄の長町南駅から約 1.7 ㎞西方にある三神峯公園内に位置し、縄文時代を中心とする集落遺跡である。

仙台市は、宮城県の中央やや南寄りに位置し、西側は山形県に接し、東側は太平洋岸まで広がる横長の区域である。また、市境の北側付近には七北田川が、南側付近には名取川が流れている。山地から海岸線までを含むことから、地形は変化に富み、おおむね西から東にかけて山地・丘陵地・低地の順で展開している。低地はさらに、台地とその東側に仙台湾まで広がる沖積平野とに二分される。本遺跡はこのうち名取川によって形成された台地（河岸段丘）の東端に位置し、台地の東側は沖積平野と接している（第１図）。この河岸段丘は三神峯遺跡Ｃ地点の報告において青葉山段丘とされている（仙台市教育委員会 1980）。

仙台市を代表する河川には、名取川・七北田川の他に広瀬川がある。広瀬川は関山峠周辺を水源とし、熊ヶ根で大倉川と合流した後、愛子盆地、仙台市中心部を流下し、名取川に流れ込む。本遺跡は、名取川と広瀬川が合流する地点の西約 4.5㎞ の位置にあたる。

三神峯遺跡の範囲は、現在三神峯公園として開放されている地域の全域を含む（第２図）。遺跡の所在する台地は、東側・南側は沖積平野へ向かっての急斜面となっている。北側・西側は丘陵地や台地へ向かうが、名取川に注ぎ込む小河川が台地を分断しているため、遠望すると遺跡の所在する台地は、東西に長い独立した丘陵のように見える。この丘陵全体が遺跡範囲であり、総面積は 75,000 ㎡（仙台市教育委員会 1980）である。台地上はほぼ平坦であり、標高は 64 ～ 69 ｍを測る。南東に広がる沖積平野との比高差は約 40 ｍである。

今回の調査地点は、遺跡の立地する台地の北西縁辺部に位置し、台地の平坦部に近い南側の標高は約 64.6 ｍ、最も低くなる西側では約 63.5 ｍを測る（第５図）。

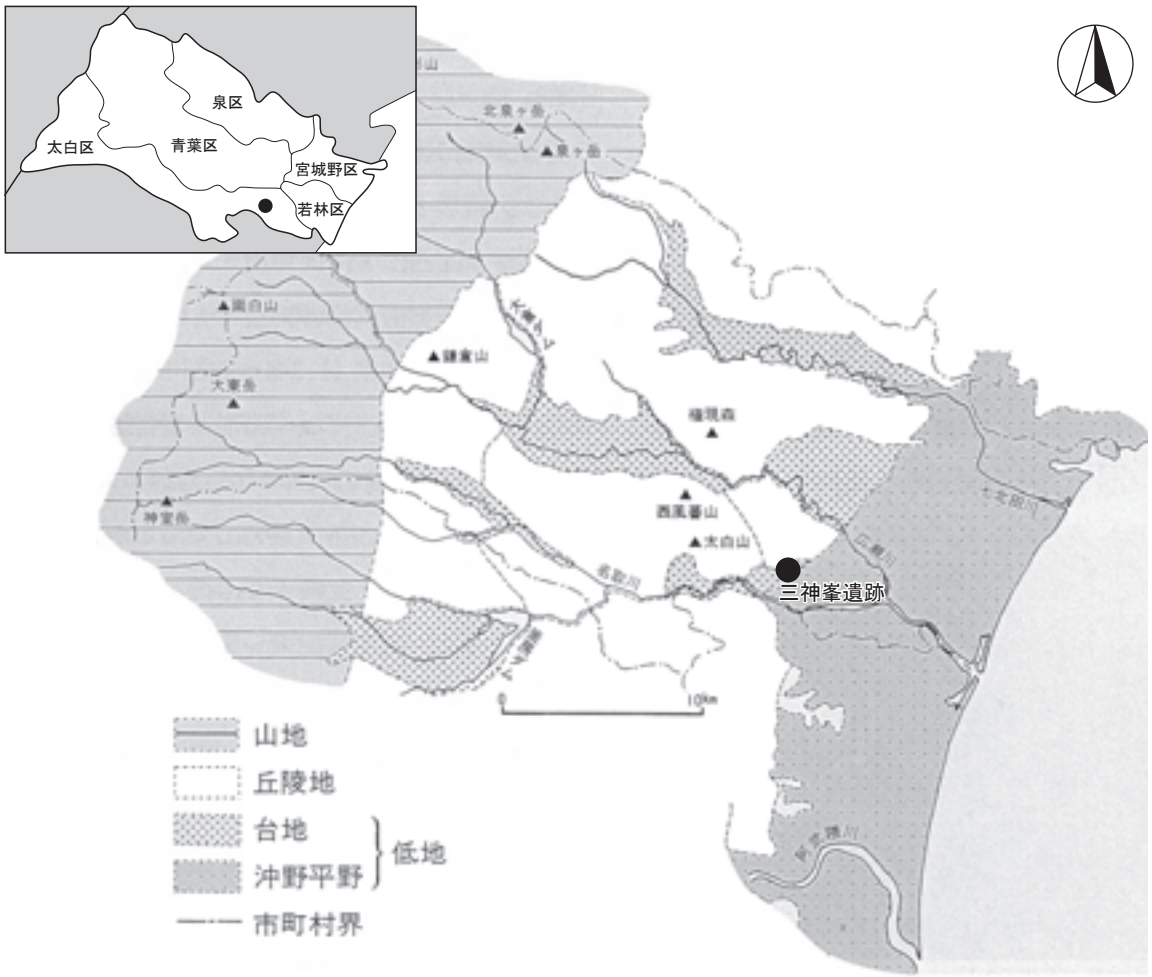
第２節　歴史的環境

１．周辺の遺跡（第２図）

三神峯遺跡（１）の周辺では、これまで旧石器時代から近世までのさまざまな時代の遺跡が調査されている。以下に、これまでの調査遺跡の中から、今回の調査において主体となる縄文時代の遺跡を中心に、本遺跡周辺の遺跡を概観してみたい。

旧石器時代　旧石器時代の遺跡としては、太白区鈎取の西方に位置する山田上ノ台遺跡（２）、太白区役所の西方に位置する富沢遺跡（３）などが挙げられる。山田上ノ台遺跡は、三神峯遺跡と同様に名取川によって形成された河岸段丘上に位置し、後期旧石器時代の地層から複数の石器集中部（ブロック）が検出された。富沢遺跡は、三神峯遺跡の東側に広がる沖積平野に位置し、第 30 次調査において約２万年前の地層から炭化物集中部と石器集中部（ブロック）が検出された。また低地という地理的環境から、有機物（特に埋没林）を良好な状態で保存しており、約２万年前の人間活動の痕跡を当時の自然環境を含めて考えることのできる貴重な遺跡といえる。三神峯遺跡は、山田上ノ台遺跡と富沢遺跡の間に位置しており、地理的には山田上ノ台遺跡と類似している。このことから、本遺跡においても旧石器時代の遺構や遺物が存在する可能性も考慮されるが、今回の調査を含めてこれまで旧石器時代の明確な資料は確認されていない。

縄文時代　今回の調査において主体となる縄文時代の遺跡は、本遺跡周辺では御堂平遺跡（４）、芦ノ口遺跡（５）、上野遺跡（６）、山田上ノ台遺跡、北前遺跡（７）、泉崎浦遺跡（８）、山口遺跡（９）、下ノ内浦遺跡（10）、下ノ内遺跡（11）、六反田遺跡（12）、大野田遺跡（13）、伊古田遺跡（14）、王ノ壇遺跡（15）、今熊野遺跡（16）などが挙げられる。いず



『仙台市史　特別編１』より　一部加筆

第１図　仙台市の地形

れも集落跡と考えられており、地理的な立地から見ると、丘陵地に展開する遺跡、河岸段丘上に展開する遺跡、沖積平野に展開する遺跡に分けられる。

丘陵地に展開する遺跡としては御堂平遺跡がある。三神峯遺跡の北西約２㎞の丘陵麓、笊川沿いに位置し、縄文時代中期の大木９式の土器がピット内に横倒しの状態で発見された。検出例の少ない大木９式期の遺跡として注目される。

名取川によって形成された河岸段丘上に展開する遺跡としては、芦ノ口遺跡、上野遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡などがある。いずれも名取川の北岸に位置し、三神峯遺跡から 2.5km 以内に位置している。芦ノ口遺跡は、三神峯遺跡の北側に隣接しており、縄文時代早期後半の素山２式の土器などが出土している。また、晩期前半の頃の粘土採掘坑と考えられる土坑などが検出されており注目される。上野遺跡は、仙台市において縄文時代中期を代表する拠点集落として著名であり、特に中期中頃の大木８ａ・８ｂ式期を中心とする。遺構は竪穴住居跡や、貯蔵穴として用いられたフラスコ状土坑などが検出された。山田上ノ台遺跡は、縄文時代中期末頃の大木 10 式期における大集落として著名である。竪穴住居跡や墓、貯蔵穴などが検出され、それらの配置から当時の集落の構造をおおよそ復元することのできる遺跡として重要である。集落の構造は、台地の中央部に広場を持ち、南側・東側縁辺に住居跡が展開し、その内側に貯蔵穴や墓のエリアがあり、北側・西側はごみ捨て場として使用された結果として遺物包含層が堆積しているというもので、当時の集落のひとつのモデルとなっている。北前遺跡は、これまでの調査によって縄文時代早期末頃の船入島下層式期、前期末頃の大木６式期、中期後半の大木９・10 式期の遺構や遺物が見つかっている。発見例の少ない早期の集落として著名であり、また山田上ノ台遺跡と隣接していることから、その関連性が注目される。

これらの遺跡は、今回調査を行った三神峯遺跡と地理的に類似点が多く、その生活環境もほぼ同じであったと考えられるため、集落の構造等を理解するうえで非常に重要である。

低地にあたる沖積平野に展開する遺跡には、山口遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡、大野田遺跡、伊古田遺跡、王ノ壇遺跡などがある。いずれも名取川北岸の自然堤防上に立地しており、三神峯遺跡から約３㎞以内に位置している。それぞれの遺跡の時期は縄文時代中期中頃から後期中頃に含まれ、集落が連続して営まれていたことが判明しており、このことから、これらの遺跡は「遺跡群」としてひとくくりに捉えることが可能である。遺跡の変遷をたどると、中期中頃の大木８ｂ式期に六反田遺跡で竪穴住居跡が構築され、中期末頃の大木 10 式期に下ノ内遺跡が展開し、後期初頭の南境式前半期に再び六反田遺跡の集落が展開する。その後、後期前葉の南境式期の遺跡として下ノ内浦遺跡（墓域）、山口遺跡（集落）、大野田遺跡（祭祀・墓域）が展開し、後期中頃の宝ヶ峯式期の伊古田遺跡、王ノ壇遺跡へと変遷していく。また、下ノ内浦遺跡では早期前半の日計式期の竪穴住居跡も検出され、山口遺跡では早期後半の素山２式の土器がまとまって出土していることから、低地にあたる沖積平野においても縄文時代の早期から集落が営まれていたことが確実となった。

名取川南岸の丘陵地に展開する遺跡としては、今熊野遺跡などがある。三神峯遺跡から南へ約５㎞の場所に立地する集落遺跡であり、縄文時代前期初頭の大木１式・２ａ式期の遺構を主体とする。50 軒を越える竪穴住居跡が調査され、縄文時代前期初頭の拠点的集落として注目される。三神峯遺跡とほぼ同時期の集落であり、住居跡の形態等に類似点が多いことからその関連性が指摘されている。

弥生時代　弥生時代の遺跡は、土手内遺跡（17）、原遺跡（18）、富沢遺跡、山口遺跡、下ノ内浦遺跡、西台畑遺跡（19）、郡山遺跡（20）、安久東遺跡（21）などが挙げられる。縄文時代と比べ集落の中心が台地や丘陵から、平野部へ移行することが特徴的である。

台地に立地する遺跡としては、土手内遺跡や原遺跡がある。いずれも市内で発見例の少ない弥生時代後期の天王山式期の竪穴住居跡が検出されているが、集落の規模としては小さく、地域の拠点集落と言えるような大規模な集落跡はそれより東側の沖積平野に分布している。

大規模集落として特に注目されるのが、弥生時代中期前半から後期までの水路や水田跡が発見された富沢遺跡とその周辺の遺跡群である。富沢遺跡では、中期前半の寺下囲式期と考えられる水路や、中期中頃に展開した大規模な水田跡が後期まで連続して続いていた様子が観察されている。富沢遺跡の南西と南東に隣接して位置するのが、山口遺跡と下ノ内浦遺跡である。いずれも弥生時代後期の天王山式期の遺構が検出され、前者からは水田跡が、後者からは集落に伴う墓域が確認されており、同一集団である可能性も指摘されている（仙台市 1999）。

富沢遺跡の東側、広瀬川南岸の自然堤防上には西台畑遺跡と郡山遺跡がある。いずれも弥生時代中期中頃の桝形囲式期の遺構が検出されており、前者からは共同墓（仙台市 1995）が、後者からは水田跡が検出されている。

名取川南岸の平野部には、安久東遺跡がある。安久東遺跡では、遺物包含層から弥生時代前期の遠賀川系の土器が出土し、平野部においてすでに前期から初期農耕社会が出現していた様子が窺われる（仙台市 1999）。

古墳時代　古墳時代の遺跡は、古墳や横穴墓に代表される「墓」に関係する遺跡と、竪穴住居跡を中心に構成される「集落」に関連する遺跡と、水田跡や窯跡のような生産活動に関係する遺跡に大別される。

三神峯遺跡周辺で墓に関係する遺跡としては、前期に安久東遺跡で検出された４世紀前半の前方後方形の周溝墓がある。中期には、５世紀中頃に裏町古墳（22）が築造され、５世紀後半頃に三神峯遺跡と同じ台地の南西側斜面に立地する三神峯古墳群（23）が築造される。ほかに、中期後半から後期にかけて連続して築造された群集墳として大野田古墳群（24）がある。この遺跡の範囲には、五反田古墳（25）、五反田木棺墓（26）、五反田石棺墓（27）、鳥居塚古墳（28）、王ノ壇古墳（29）なども含まれている。後期になると、６世紀に一塚古墳（30）や二塚古墳（31）、７世紀には安久遺跡（32）や安久諏訪古墳（33）を含む群集墳として安久東古墳群（34）が築造される。

また、この頃に新たに横穴墓が出現し、向山横穴墓群や土手内横穴墓群（35）が築造されていく。向山横穴墓群は、地域的に近接した大年寺山横穴墓群（36）、愛宕山横穴墓群（37）、宗禅寺横穴墓群（38）、茂ヶ崎横穴墓群（39）、二ツ沢横穴墓群（40）の総称である。

集落に関連する遺跡としては、土手内遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡、六反田遺跡、安久東遺跡などがある。土手内遺跡では、前期の塩釜式期の竪穴住居跡や、中期の南小泉式もしくは引田式期の竪穴住居跡などが検出され、丘陵上に位置する集落として注目される。下ノ内遺跡、伊古田遺跡、六反田遺跡は相互に近接して立地しており、当該地域における集落の変遷を考える上で重要な遺跡といえる。下ノ内遺跡からは、前期の塩釜式期の竪穴住居跡、中期の南小泉式期の竪穴住居跡、終末期の栗囲式期の竪穴住居跡などが検出された。伊古田遺跡からは、前期の塩釜式期の竪穴住居跡や土坑などが検出された。六反田遺跡からは、前期の塩釜式期の竪穴住居跡や溝と、終末期に属する住居跡などが検出された。安久東遺跡では、前期の塩釜式期の竪穴住居跡が検出され、その居住域の西側で検出された周溝墓の母体となる集落として注目される。

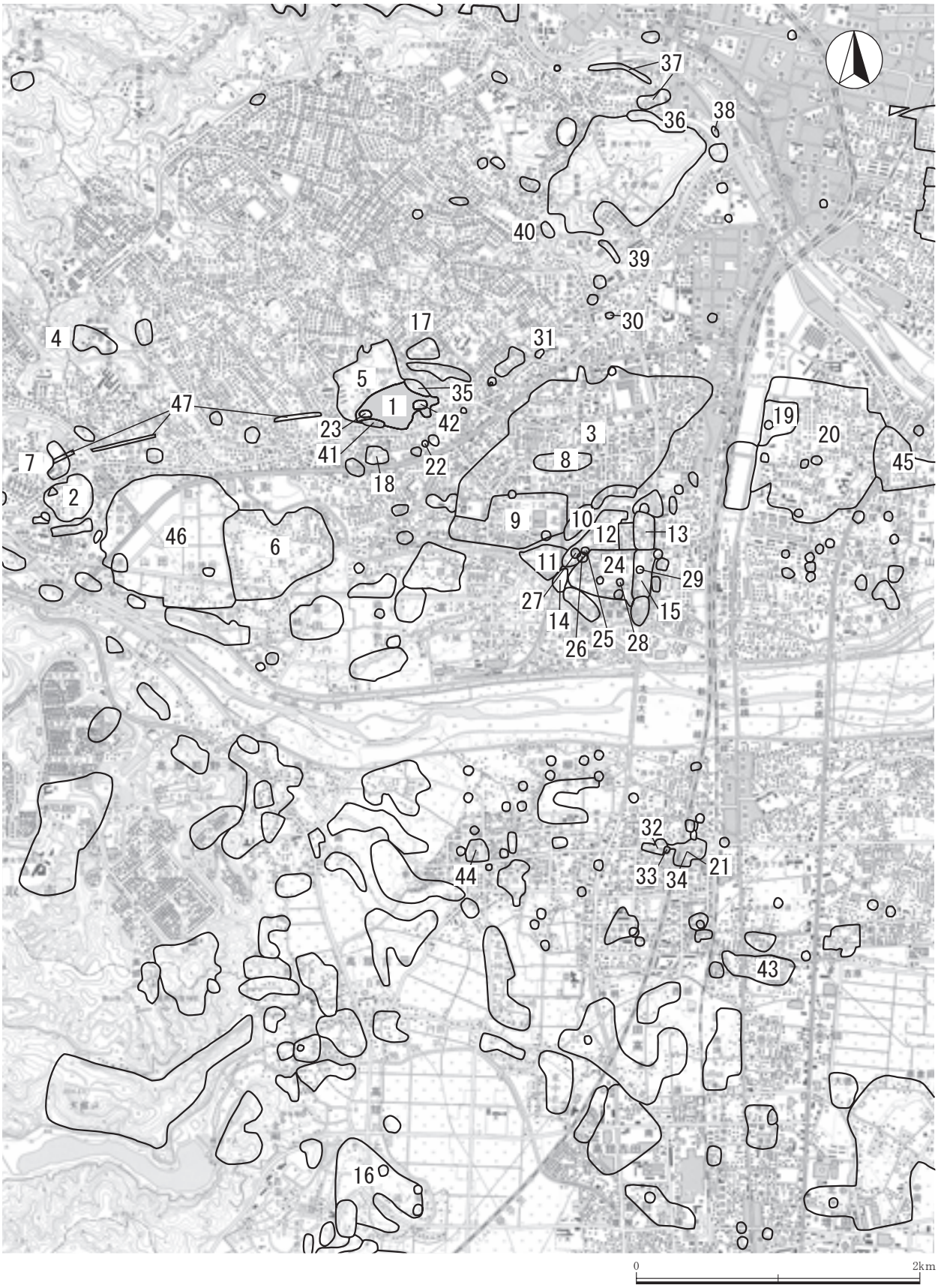
生産活動に関係する遺跡としては、富沢遺跡、富沢窯跡（41）、金山窯跡（42）などが挙げられる。富沢遺跡では、後期から終末期にかけての水田跡が検出されている（６～７世紀）。富沢窯跡は、三神峯遺跡の立地する台地の南西側斜面に位置する埴輪窯跡である。操業時期は、中期後半（５世紀後半）頃と考えられる。この遺跡のすぐ上の緩やかな斜面地には、同じ時期に築造された三神峯古墳群が所在しており、ここで焼かれた埴輪が使用された可能性が高い。金山窯跡は、同じ台地の南側斜面に位置し、富沢窯跡の操業していた時期と同時期の須恵器を生産していた窯跡である。

古代　古代の遺跡は、住居跡を中心に構成される「集落」に関連する遺跡と、水田跡や窯跡のような生産活動に関係する遺跡と、律令制による支配が拡大したため新たに出現した官衙や寺院跡に代表される官立施設に関係する遺跡に大別される

集落に関連する遺跡としては、六反田遺跡、山口遺跡、中田南遺跡（43）、芦ノ口遺跡、御堂平遺跡などがある。六反田遺跡では、７世紀末頃から平安時代にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝などが検出された。また生産活動に関係する遺構である畑跡も検出されている。山口遺跡では、奈良時代の竪穴住居跡・土坑・溝や、平安時代にあたる 10 世紀頃の竪穴住居跡と生産活動に関係する遺構である水田跡などが検出されている。中田南遺跡では、奈良時代の遺構として８世紀第１四半期頃を中心とする竪穴住居跡が多数検出され、平安時代の遺構として９世紀頃を中心とする掘立柱建物跡などが検出されている。集落内で銅の鋳造を行っていたことなどがわかっており、このことから官衙と関連のある集落と考えられている。芦ノ口遺跡では、10 世紀中頃と考えられる竪穴住居跡やピットが検出されている。御堂平遺跡では、平安時代の竪穴住居跡が検出されていることから集落であったと考えられるが、特に注目される遺構としては同時に検出された礎石建物跡がある。出土遺物から平安時代後半から中世の仏堂跡と考えられる。

生産活動に関連する遺跡としては、前記の六反田遺跡・山口遺跡の他に、富沢遺跡、泉崎浦遺跡、郡山遺跡、下ノ内浦遺跡、王ノ壇遺跡、大野田遺跡、北前遺跡などがある。山口遺跡・富沢遺跡・泉崎浦遺跡は互いに隣接して展開しており、それぞれから水田跡が検出されている。富沢遺跡では、奈良時代から 10 世紀まで続く水田跡が確認されており、真北方向を基準としていることから条里型の水田とされる。他に、飛鳥時代から奈良時代初期にかけての官衙や寺院が検出されたことで著名な郡山遺跡において、10 世紀前半以前に営まれた水田跡や平安時代の畑跡が見つかっている。六反田遺跡・下ノ内浦遺跡・王ノ壇遺跡・大野田遺跡は互いに隣接して展開しており、それぞれから畑跡が検出されている。北前遺跡では、平安時代の窯跡が調査されている。半地下式の窖窯で、灰原から須恵器片・土師器片が出土している。

三神峯遺跡周辺で官衙や寺院跡に関係する遺跡としては、前記の郡山遺跡や御堂平遺跡がある。特に郡山遺跡は



第２図　遺跡地図（S=1/40,000）

No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文前・中・平安
2	山田上ノ台遺跡	散布地・集落	段丘	後期旧石器・縄文早～後・平安・近世
3	富沢遺跡	集落・水田・散布地	後背湿地	後期旧石器・縄文・弥生～近世
4	御堂平遺跡	集落	丘陵麓	縄文中・平安・中世
5	芦ノ口遺跡	集落・窯跡?	丘陵	縄文早・弥生・平安
6	上野遺跡	集落	段丘	縄文中・奈良・平安
7	北前遺跡	集落・散布地	段丘	縄文早・前・中・後・平安・近世
8	泉崎浦遺跡	集落・水田・墓	自然堤防・後背湿地	縄文後・弥生・古墳・平安・近世
9	山口遺跡	集落・水田跡	自然堤防・沖積平野	縄文～中世
10	下ノ内浦遺跡	集落	自然堤防	縄文早・前・後・弥生・古墳・奈良・平安・中世
11	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文中～晩・弥生・古墳・奈良・平安・中世
12	六反田遺跡	集落	自然堤防	縄文中～晩・弥生～平安・近世
13	大野田遺跡	祭祀遺跡・集落	自然堤防	縄文後・弥生中・古墳・奈良・平安
14	伊古田遺跡	集落	自然堤防	縄文後
15	王ノ壇遺跡	集落・屋敷	自然堤防	縄文後～中世
16	今熊野遺跡	集落・貝塚	丘陵	縄文早・前・弥生～平安
17	土手内遺跡	集落	丘陵	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
18	原遺跡	集落・古墳群	丘陵麓	弥生・古墳・平安
19	西台畑遺跡	集落	自然堤防	縄文・弥生中・古墳
20	郡山遺跡	官衙・寺院・散布地	自然堤防	古墳(末期)～平安
21	安久東遺跡	集落・古墳群	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
22	裏町古墳	前方後円墳	丘陵麓	古墳
23	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳後
24	大野田古墳群	集落・円墳群・官衙	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
25	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳
26	五反田木棺墓	円墳	自然堤防	古墳
27	五反田石棺墓	円墳	自然堤防	古墳
28	鳥居塚古墳	円墳	自然堤防	古墳中
29	王ノ壇古墳	円墳	自然堤防	古墳
30	一塚古墳	円墳	丘陵麓	古墳中
31	二塚古墳	前方後円墳	丘陵麓	古墳
32	安久遺跡	集落	自然堤防	縄文晩・弥生・平安・中世
33	安久諏訪古墳	円墳	自然堤防	古墳後
34	安久東遺跡	集落・古墳群	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
35	土手内横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
36	大年寺山横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
37	愛宕山横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
38	宗禅寺横穴墓群	横穴墓群	段丘	古墳後
39	茂ケ崎横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳後～奈良
40	二ッ沢横穴墓群	集落・散布地	段丘	横穴墓群
41	富沢窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良・平安
42	金山窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳中
43	中田南遺跡	集落・屋敷	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
44	松木遺跡	集落	自然堤防	平安・中・近世
45	北目城跡	城館・集落・水田	自然堤防	縄文後・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
46	山田条里遺跡	散布地・条里・屋敷	段丘・自然堤防	縄文・奈良・平安・近世
47	杉土手(鹿除土手)	土手	丘陵	縄文・近世

第１表　周辺の遺跡

多賀城以前の陸奥国府であり、時期的に大きく二段階の変遷が認められる。Ⅰ期官衙は７世紀中頃から末頃まで、それを取り壊して造営されたⅡ期官衙は７世紀末頃から８世紀初頭まで機能していたと考えられる。またⅡ期官衙の周辺には、付属寺院である「郡山廃寺」や、その東側に位置する「寺院東方建物群」や、Ⅱ期官衙の南側に位置する「Ⅱ期官衙関連施設」などの遺構が展開している。

中世　中世の遺跡は、主に河川沿いの自然堤防上に展開している。検出される主な遺構としては、一定の区域を持ち大小の掘立柱建物や井戸などによって構成される屋敷跡や水田跡などがある。三神峯遺跡周辺では、名取川の北岸沿いに山口遺跡、富沢遺跡、王ノ壇遺跡があり、名取川の南岸沿いに松木遺跡（44)、後河原遺跡などがある。山口遺跡では、12 世紀後半から 13 世紀初頭の屋敷跡と 13 世紀以降の水田跡が検出されている。富沢遺跡では、13 世紀から 17 世紀初頭の屋敷跡と水田跡が検出されており、新旧２時期に分かれる。旧期の屋敷は有力農民層の屋敷跡、新期の屋敷地は堀と呼べるような規模の大きな区画溝が検出されたことから領主層の居館の敷地である可能性が考えられる。王ノ壇遺跡では、鎌倉時代頃の武士的領主の屋敷跡や墓域などが検出されている。名取川の南岸に位置する松木遺跡では、鎌倉時代頃の屋敷跡と火葬遺構などが検出されている。後河原遺跡では、室町時代か

ら近世初め頃の武士階級のものと思われる屋敷跡や火葬場跡、水田跡が検出されている。

近世　近世の遺跡は、三神峯遺跡周辺では北目城跡（45）、富沢遺跡、山田条里遺跡（46）、下ノ内浦遺跡、杉土手（47）などがある。北目城跡は、名取川と広瀬川にはさまれた郡山低地の東部に位置する平城である。発掘調査によって17 世紀前半の大規模な堀などが調査されている。富沢遺跡では、屋敷跡・墓地・水田跡などが検出された。水田跡の調査では、水路が村境を示す「境堀」の役割を兼ねていた様子が観察されている。山田条理遺跡では、江戸時代後期から明治時代前半の屋敷跡が検出され、当時の絵図に描かれた「ヤチヤシキ」という有力農民の屋敷地と整合する。下ノ内浦遺跡では、掘立柱建物跡などが検出され、旧河川が埋没した近世以降にその土地が居住域として利用された様子が観察された。杉土手は、鹿除土手の別称であり、「シシ」の害から田畑や宅地を守るためのものである。

２. 三神峯遺跡の概要と第１次・第２次・第３次の調査成果

三神峯遺跡の調査は、これまで 1967 年の第１次調査（白鳥 1974）、1973 年の第２次調査（仙台市教育委員会 1973）、1975 年の第３次調査（仙台市教育委員会 1980）を含め５次にわたる調査が行われており、今回が６回目の調査となる（第３図）。それ以前にも梅原末治氏、松本彦七郎氏、山内清男氏、伊東信雄氏、林謙作氏らによる遺物の表面採集や小発掘が行われており、比較的早くから縄文時代前期初頭の遺跡として知られていたようである。

第１次調査では、本調査の前に台地の東半部を対象に 21 箇所の試掘調査が行われている。縄文時代早期から中期にかけての土器が出土し、台地の東斜面から南斜面にかけて良好な遺物包含層が分布していることと、台地の中央部では遺物包含層が殆ど検出されないことが確認された。本調査は、台地の南東側の縁辺部付近に４ｍ × ４ｍのトレンチを横並びに２本設定して行われた（第３図）。調査の結果、遺構は検出されなかったが、３層に分かれる遺物包含層（第Ⅰ～Ⅲ層）中から多量の縄文土器・石器が出土した。層厚は第Ⅰ層が 20 ～ 60㎝、第Ⅱ層が 20 ～ 40㎝、第Ⅲ層が 30 ～ 50㎝であり地表面から地山までの深さは最深部で約 110㎝、最も浅い部分で約 70㎝を測る。出土した土器はすべて縄文時代前期初頭に属し、総点数 4,337 点を数える。土器型式でみると、上川名Ⅱ式および桂島式～大木 2a 式期に属するもので、特に大木１式、大木 2a 式の土器を中心とする。石器は、製品 301 点と、多量の剥片と砕片が出土している。調査面積が 32 ㎡と狭いながら、遺物包含層中から多量の遺物が出土したことにより、戦前からの三神峯遺跡の評価が間違いなかったことが確認され、報告文は「縄文前期大木１式期および大木 2a 式期を中心とする良好な遺物包含層を検出したことにより、この遺跡が縄文時代前期初頭における比較的大規模な集落跡であることが推定される」と結ばれている（白鳥 1974）。

第２次調査は、国有地と民有地の境界を示すための鉄柵設置工事に伴って行われた。台地の北東側の縁辺部に２箇所のトレンチを設定し、合計 26 ㎡を調査した（第３図）。調査の結果、縄文時代前期初頭と考えられる竪穴住居跡の一部が２軒分検出され、またそれらと同時期と推定される遺構が１基検出された（この遺構は平面形・規模・配置から竪穴住居跡とされているが、検出のみであるため詳細は不明である）。遺構は、表土直下の「灰褐色土層」面で検出され、Ａ地点で確認されたような遺物包含層は検出されなかった。遺物は、石器 10 数点以外はすべて縄文土器で、その多くが住居跡の堆積土上層から出土した。縄文土器は大木１～ 2a 式のものを主体とすることから、これらの遺構は縄文時代前期初頭に構築され、廃絶したものと推測される。住居跡が発見されたことにより、第１次調査において指摘された大集落が存在する可能性をより強めることとなった（仙台市教育委員会 1973）。

第３次調査は、送電線鉄塔の移設工事に伴う緊急発掘として行われた。台地の北東側の縁辺付近に位置し、第２次調査地点の西側にあたる（第３図）。調査面積は、拡張した範囲を含めて 128 ㎡である。調査の結果、縄文時代前期初頭に属する竪穴住居跡５軒、土器埋設遺構１基、100 基を超えるピットが検出された。１号・２号住居跡および土器埋設遺構は大木２a 式期に属し、３号～５号住居跡も縄文時代前期初頭に属する。近接するＢ地点で検出された住居跡とほぼ同時期に存在したものと考えられる。遺構が確認された灰褐色粘質シルト層（基本層第３層）および、その上部に堆積する「黒褐色シルト層」（基本層第２層）は遺物包含層である。基本層第２層は、上層と

下層に分かれ、層厚は上層 20 ～ 40cm、下層 10 ～ 20cm を測る。基本層第３層は、層厚約 30cm を測る。遺物は、表土から土師器･須恵器が少量出土したものの､それ以外はすべて縄文土器と石器である。縄文土器は､総点数 7,435 点出土し、表土と遺物包含層からの出土が多く、基本層序第３層からの出土は少ない。遺物包含層出土の土器を型式別にみると、縄文時代前期初頭の大木１式以前の型式～大木 2a 式期に属するもので、特に大木１式、大木 2a 式の土器を中心とする。これは、第１次調査地点で確認された遺物包含層出土遺物と同様の傾向である。石器は、剥片・礫を含めて総点数 1,406 点が出土し、縄文土器と同様に、表土と基本層第２層からの出土が多く、基本層第３層からの出土は少ない。また、第３次調査地点は表土下に第１次調査地点同様３枚の遺物包含層を持ち、そのうち遺構は大木１式期以前の土器を包含する基本層第３層上面で確認されている。したがって、基本層第３層の遺物包含層は遺構が構築される以前に堆積したものと考えられる。第２次調査地点においても､住居跡は「灰褐色土」層の上面で確認されており、この層は第３次調査地点における基本層第３層と対応関係にあるものと考えられる。

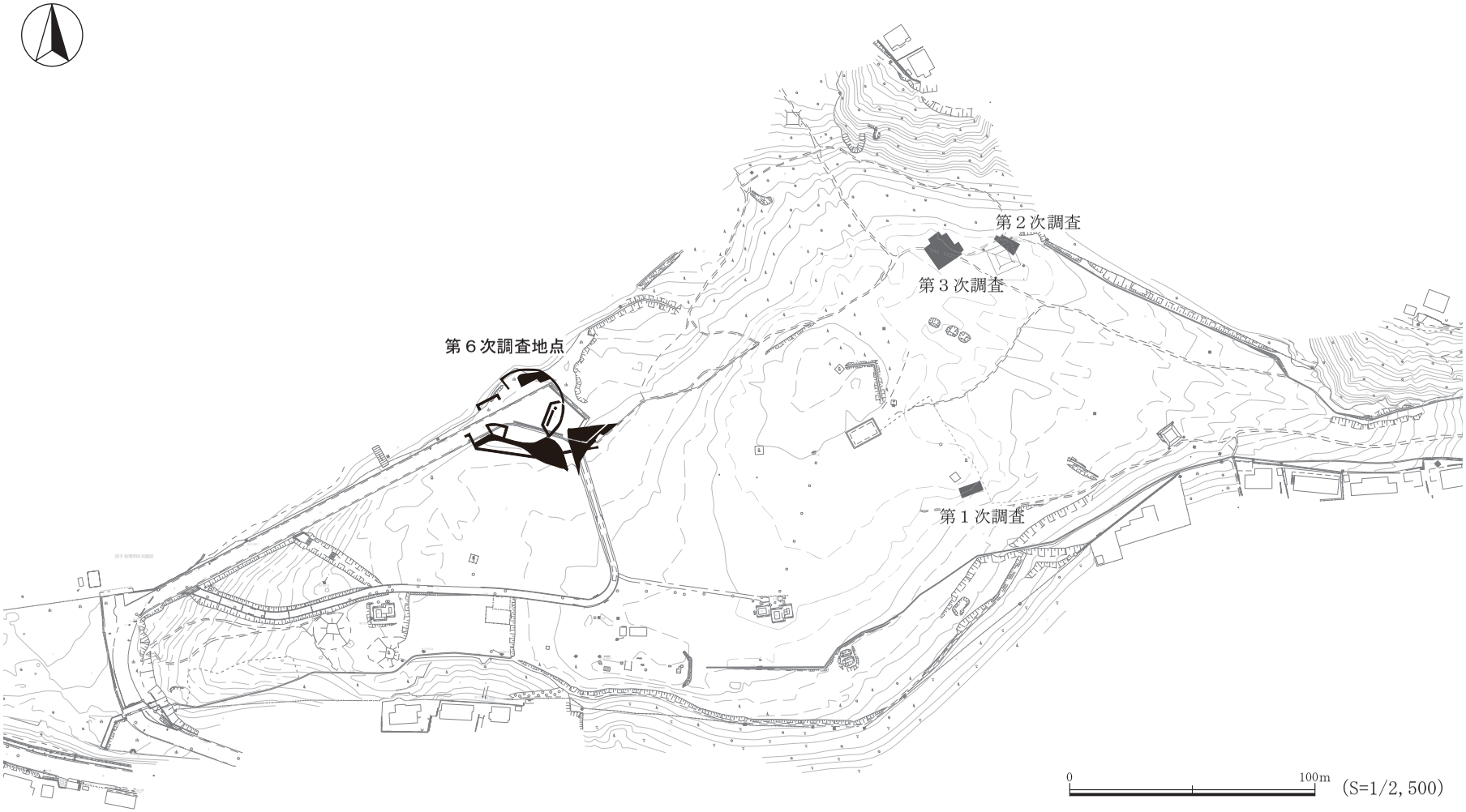
隣り合う第２次調査地点と第３次調査地点において合計７軒の竪穴住居跡が発見されたことにより、遺構は少なくとも台地の北東側で濃密な分布を示すということがわかった。このことについて名取市の今熊野遺跡の調査状況と比較して「市内はもちろん、県内でも、縄文時代前期初頭の集落跡としては屈指の規模のものということができよう」とされている（仙台市教育委員会 1980)。

第１～３次の調査は、いずれも台地の東半部で行われ、特に台地の北東側において竪穴住居跡が濃密に分布していることが確認された。遺物包含層も含めて縄文時代前期初頭の遺物が多量に出土することから、当該時期に青葉山から東に張りした台地を利用して、大規模な集落が営まれたことは間違いない。しかし、第３次調査地点の報告において指摘されているとおり、丘陵全体（特に西側）での遺構の分布状況や時期的な変遷は全くわからないままである。

今回の調査面積は 514 ㎡と過去最大規模となった。遺跡全体の規模から考えると僅かな面積であるが、三神峯遺跡の集落の展開状況を知る上で貴重な成果を得たといえる。

３. 三神峯遺跡第４次・５次調査の概要

調査次数	調査原因	調査期間	トレンチ	調査面積	主な遺構	主な遺物
第4次	公衆用トイレ建設	平成6年1月10～11日	1	35.75㎡	土坑2基、焼土遺構1基、性格不明遺構（縄文土器多数含む。竪穴住居跡または遺物包含層か）1基	縄文土器
			2	18㎡	なし	なし
	身障者用トイレ建設	平成6年12月15日	1	30㎡	性格不明遺構（焼土粒、炭化物粒、縄文土器含む）1基	縄文土器
第5次	公園整備	平成19年3月12日～3月20日	A	27㎡	古墳周溝（1号墳）、土坑7基	土器
			B	3㎡	古墳周溝（2号墳）	なし
			C	19㎡	古墳周溝（3号墳）、溝跡1条	円筒埴輪、縄文土器
			D	11.5㎡	性格不明遺構1基	なし
			E		溝跡1条、焼土遺構3基	縄文土器
			F	17.5㎡	溝跡3条、土坑5基	円筒埴輪
		平成19年8月20日～9月7日	1	4㎡	なし	なし
			2	45㎡		
			3	8㎡		
			4	55㎡		
			5	48㎡		
			6	65㎡	土坑3基、溝跡1条	円筒埴輪
			7	20㎡	なし	なし
			8	15㎡	土坑2基、ピット1基、性格不明遺構1基	土器
			9	15㎡	土坑3基、ピット19基	縄文土器、石器



第３図　調査地点

第Ⅲ章　調査の方法と概要

第１節　調査の方法

１．調査区の設定

今回実施した発掘調査は、三神峯公園の再整備事業に伴うものである。調査は公園整備の掘削工事が行われる範囲を対象とし、公園整備担当課である太白区公園課による計画図面に基づいて位置出しした部分に調査区を設定して実施した（第３図）。調査面積は約 514 ㎡である。

調査区は、主に駐車場整備のための工事箇所であり、不整な形状となっている。このため、調査区を便宜的にＡ区からＤ区までの４区に分けた（第７図）。Ａ区の範囲は、公園内の道路を境にその南東側のエリアであり、Ｂ区に向かって歩道上に突出した箇所までを含める。Ｂ区の範囲は、公園内の道路を境にその南西側のエリアとした。Ｃ区の範囲は、公園内の道路を境にその北側のエリアとし、北西の「コ」字状の調査区までを含む。Ｄ区の範囲は、公園内の道路上に設定されたエリアであり、中央部に３箇所設定されたトレンチ状の調査区である。

２．基準杭の設定

測量は「平面直角座標系第Ｘ系」を基準として行った。

調査範囲の北西に位置するＸ＝－ 197.000km、Ｙ＝＋ 2.000km の地点を原点とし、調査区全面に４ｍ四方の基準杭（グリッド杭）を設定した（第７図）。グリッド名は、西端（Ｙ＝＋ 2.000 ～ 2.004km の範囲）から東端へアルファベット順に並べ、北端（Ｘ＝－ 197.000 ～ 197.004km の範囲）から南端へ数字順に並べたものを組み合わせて表示した（例：Ａ１区、Ｂ２区、Ｃ３区など）。

３．調査の方法

表土の除去は主に重機を使用し、それ以外は人力により掘り下げた。遺構の検出や掘り下げを行う時は移殖ゴテ・ヘラを使用した。遺物包含層とその下層を確認するための深堀区の掘削には移植ゴテと適宜スコップを使用した。遺構の測量は、平面図については器械測量を行い、断面図については手作業により１／ 20 で記録化を行った。

遺物は、遺物包含層から出土したものはグリッド毎に一括して取り上げたが、個体としてある程度のまとまりを持つものや特徴的な遺物については、その位置を図化してから取り上げた。遺構出土遺物は、可能な限り出土位置の記録化を行ったが、湧水などの影響により出土位置が不明確になってしまったものや小破片については、一括遺物として取り上げた。遺物の測量は、器械測量を行い座標と高さ（絶対高）を記録し、個体が識別できる状態で出土したＳＫ４土坑の土器については、その出土状況を手作業により１／ 10 で図化した。

写真撮影は、35 ミリ判モノクロ、カラーリバーサル、デジタルカメラを使用した。

調査現場の管理については、調査区周辺にパイプ仕切フェンスを設け、来園者の安全確保に努めた。また、三神峯公園は桜の名所として著名であるため、桜の木の周辺では、表土掘削の段階で当初使用していた 0.4 ㎥のバックホーを 0.2 ㎥のものに変更し、桜の枝や根を回避しながら注意深く作業を行った。人力掘削の段階では、桜の根の周辺では移植ゴテのみでの作業とし、止むを得ず根を切断する場合は癒合薬を塗布するなどの処置を行った。また、公園内の歩道以外は芝生となっているため、残土を仮置きする際にはブルーシートを下に敷いて芝生を養生し、日々の調査終了後には防塵対策としてブルーシートを上に掛けるなどの対策を行った。出土した遺物や発掘資材は公園内に設置した仮設事務所に保管し、休日等には巡回を行った。

第２節　調査経過

６月 26 日（木）から発掘調査を開始した。Ａ区から開始し、重機による表土掘削を行った。桜の枝や根に配慮して、翌 27 日（金）に重機を小型のものに変更して表土掘削を継続した。桜の枝を回避しながらの作業であるた

め、Ｂ区の表土掘削と交互に進めることとした。重機による掘削の終了した箇所から、随時人力による攪乱の除去作業を行った。Ａ区の表土掘削は30日（月）までに終了し、引き続きＢ区の表土掘削を行うとともに、Ｃ区の表土掘削を開始した。７月２日（水）にＢ区の表土掘削を終了。３日（木）から、Ｃ区の表土掘削を一時中断し、Ｄ区の表土掘削に着手した。４日（金）には、Ａ区･Ｂ区の遺物包含層上面での全景写真の撮影を行った。７日（月）には、Ｄ区の表土掘削が終了し、遺物包含層上面での写真撮影を行った。その後、Ｃ区の表土掘削を再開した。また､この日からＡ区の遺物包含層を掘り下げ開始した｡主に移植ゴテを用いて人力で行い､適宜スコップを使用した。10日（木）に、残っていたＣ区の表土掘削が終了し、遺物包含層上面での写真撮影を行った。７月16日（水）に、Ｃ区壁面の土層断面図の作製を行った。翌17日（木）には、Ｄ区壁面の土層断面図の作製を行った。Ｃ区・Ｄ区は、遺跡の立地する台地の北側斜面に近いため表土の堆積が厚く、予定される工事の掘削深度に到達した時点においてもほとんどの箇所が表土または遺物包含層に覆われていた。このため、工事により破壊されない箇所については、遺跡の保存のためにそれ以上の掘削を行わないこととし、調査を終了とした。同日、安全のためにＣ区・Ｄ区は先行して埋め戻しを行った。

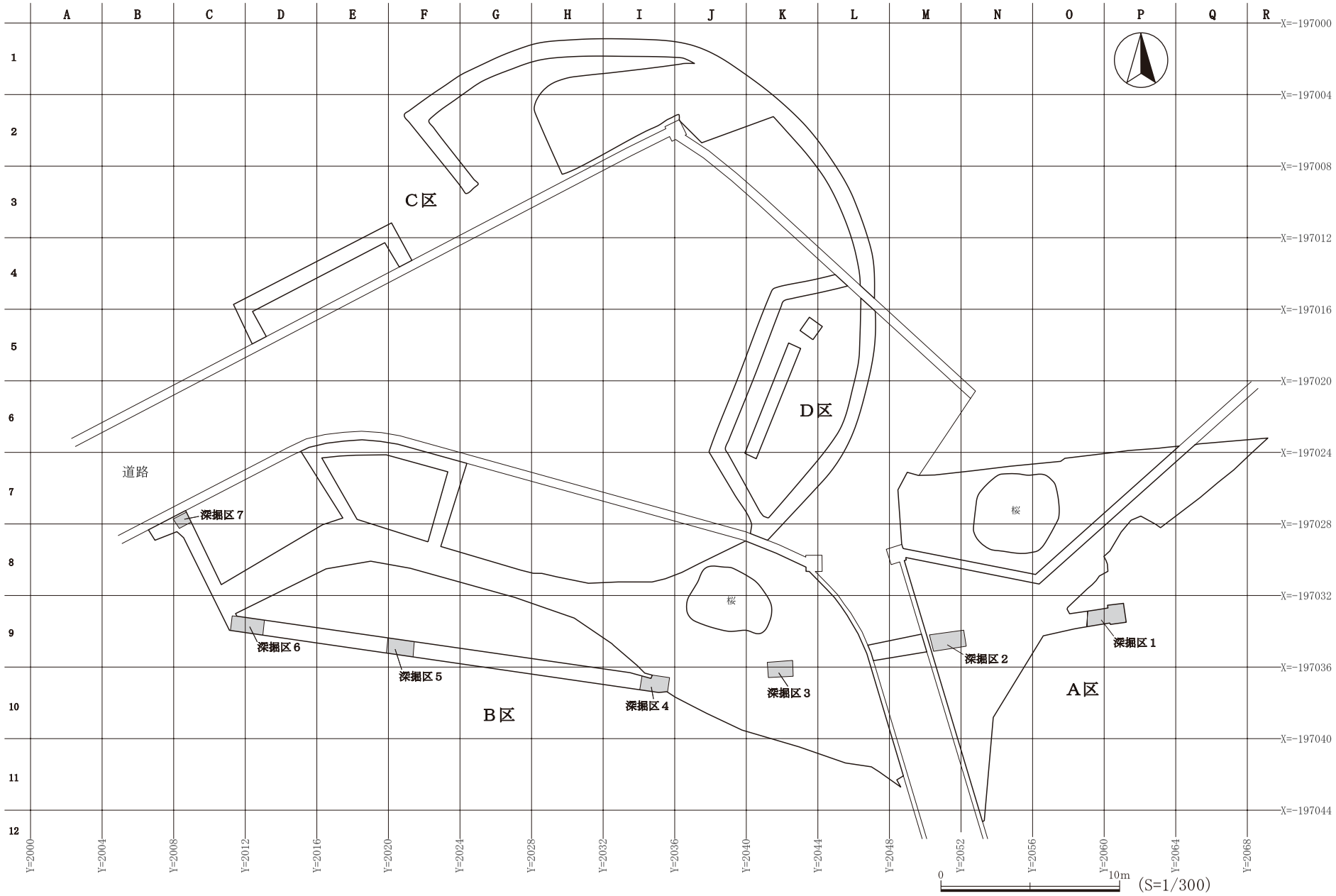
７月22日（火）から、Ａ区と並行してＢ区の遺物包含層の掘り下げを開始した。23日（水）に、Ａ区の遺物包含層は掘り下げ終了した。Ａ区北西付近は、遺物包含層の掘り下げ中から堆積の様子が異なる傾向がみられたため､28日（月）に精査したところ大規模な攪乱が確認された。範囲が不明瞭であったため半截状に掘削したところ、旧斜面に堆積した盛土であることが判明した。この攪乱周辺はすでに工事の掘削深度に到達していたため、範囲を図化し掘削を終了した。８月８日（金）に、Ｂ区南壁の土層断面図の一部を先行して作製した。11日（月）には、Ｌ10区周辺で検出された焼土集中部を断ち割り、その断面図を作製した。同日、Ｂ区の遺物包含層掘り下げ作業がほぼ終了した。12日（火）から、Ａ区・Ｂ区の遺構検出作業を行った。お盆休み明けの18日（月）に、調査区全体の遺構検出状況の写真撮影を行った。その後、Ｂ区南壁の土層断面図の追加を行った。

８月20日（水）から遺構の調査を開始したが、ほとんどの場所で遺物包含層を掘削した時点で工事掘削予定深度まで達しており、遺構を掘削した範囲は、Ａ区からＢ区まで延びる暗渠排水溝設置予定範囲のみである。その他のエリアは、遺構の平面プランを図化したのみである。22日（金）に、４号土坑から縄文土器深鉢が横倒しになった状態で出土し､出土状況微細図を作製した。26日（火）から､各遺構の土層断面の写真撮影と図化作業を開始し、完掘したものから完掘写真を撮影、平面図を作製した。28日（木）には、Ａ区北壁に土層堆積状況を確認するためのサブトレンチを掘削した。９月２日（火）に、Ａ区北壁の土層断面図を作製した。

９月３日（水）から、遺構の調査を行った範囲以外を埋め戻し開始した。９日（火）に、遺構の掘削調査を行った範囲の全景写真を撮影した。その後、旧石器時代の遺構・遺物確認のため深堀区を７箇所に設定し（第４図)、そのうちの２箇所の掘削を開始した。

９月10日（水）に、全景写真を撮影した後に検出されたピット３基を完掘し、遺構の調査を完了した。Ｂ区南壁の土層断面図の追加を行った。深堀区の残り５箇所を掘削開始した。また、掘削に影響しない深堀区は随時重機で埋め戻した。11日（木）には、深堀区１の土層断面図を作成した。12日（金）には、深堀区２・３の土層断面図を作成し、Ａ区の埋め戻し作業を行った。16日（火）に、現場撤収作業と並行して、Ｂ区南壁の土層断面図に深堀区４・５・６の断面図を追加し、深堀区７を含む西壁の土層断面図を作成した。測量作業終了後、すべての調査区を重機により埋め戻した。今回の調査地点は、調査終了から公園整備工事が開始されるまで、再び市民に開放されることになっている。このため現況の道路・歩道部分は埋め戻し後砕石を敷設し、公園利用者の安全に配慮した。また、調査開始時に撤去した公園利用者への案内看板も再び設置した。

埋め戻しがほぼ終了したのち、仙台市教育委員会、太白区公園課の立会いのもとに調査の最終確認を行い、現場を引き渡し、発掘調査を完了した。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
X=-197000
X=-197004
X=-197008
X=-197012
X=-197016
X=-197020
X=-197024
X=-197028
X=-197032
X=-197036
X=-197040
X=-197044
Y=2000
Y=2004
Y=2008
Y=2012
Y=2016
Y=2020
Y=2024
Y=2028
Y=2032
Y=2036
Y=2040
Y=2044
Y=2048
Y=2052
Y=2056
Y=2060
Y=2064
Y=2068
C区
D区
B区
A区
道路
桜
桜
深掘区７
深掘区６
深掘区５
深掘区４
深掘区３
深掘区２
深掘区１
0
10m
(S=1/300)

第４図　深掘区（1/300）

第Ⅳ章　基本層序

基本層は８層に分けられる（第５図）。部分的に公園の構造物跡や木根の影響により攪乱されている箇所があるものの、基本的には、表土層、遺物包含層、自然堆積層（いわゆる地山）という堆積状況である。以下に、その詳細を述べる。なお、含有物の量、粘性・締りの強弱は５段階で表記している。

Ⅰ層　褐色（7.5ＹＲ４／３）シルト層。ロームブロック（径約１㎜）・焼土・炭化物を微量含む。粘性・締り共にあり。

表土の直下において確認される遺物包含層である。層厚は、旧地形の傾斜に影響を受けているため、場所により約 10 ～ 40 ㎝と大きな差がある。全体的な傾向としては、台地の平坦部に近い南側・東側が 11 ～ 18 ㎝と最も薄く、西側に行くにつれて徐々に厚くなり、約 30 ㎝前後の厚さになった段階で現地形と旧地形がほぼ同様の傾斜となるため、層厚がほぼ一定となる。層厚に大きな差を示すのは、調査区の南東側（Ａ区）から北西側（Ｃ区）へ向かう傾斜である。遺物包含層の掘削を行ったＡ区・Ｂ区の北側においても最大約 40 ㎝の層厚を測る。

調査区内の６箇所から、この層の下部において焼土集中部が確認された（第６図）。断ち割って断面を観察したところ、周辺の土質に被熱の痕跡が見られないことなどから、別の場所から運び込まれ廃棄されたものと判断される。三神峯遺跡第１次調査（Ａ地点）の遺物包含層第Ⅰ層に含まれていた「ブロック状の焼土」（白鳥 1974）と同様のものと考えられる。

出土遺物は主に縄文土器や石器であるが、古代に属する土師器や須恵器も少量出土している。遺構は、本層を掘削中すでに確認されていたＳＫ１土坑を除きすべてこの層の直下において検出された。

Ⅱ層　灰褐色（7.5ＹＲ４／２）シルト層。ローム粒子を微量含む。焼土・炭化物を少量含む。粘性あり、締りやや強い。

調査区西端付近の緩やかな斜面地周辺でのみ確認された。良好な遺物包含層であるⅠ層の直下に堆積しているが、遺物の出土は認められなかった。遺構は、この層の上面において確認された。層厚は、６～ 16 ㎝である。

Ⅲ層　褐色（7.5ＹＲ４／４）シルト層。ローム粒子をやや多く含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性・締り共にあり。

下部のローム層への漸移層。この層より下部はいわゆる地山である。本層の上面が、今回の調査における主要な遺構確認面である。この層より下位では、遺構や遺物は確認されていない。

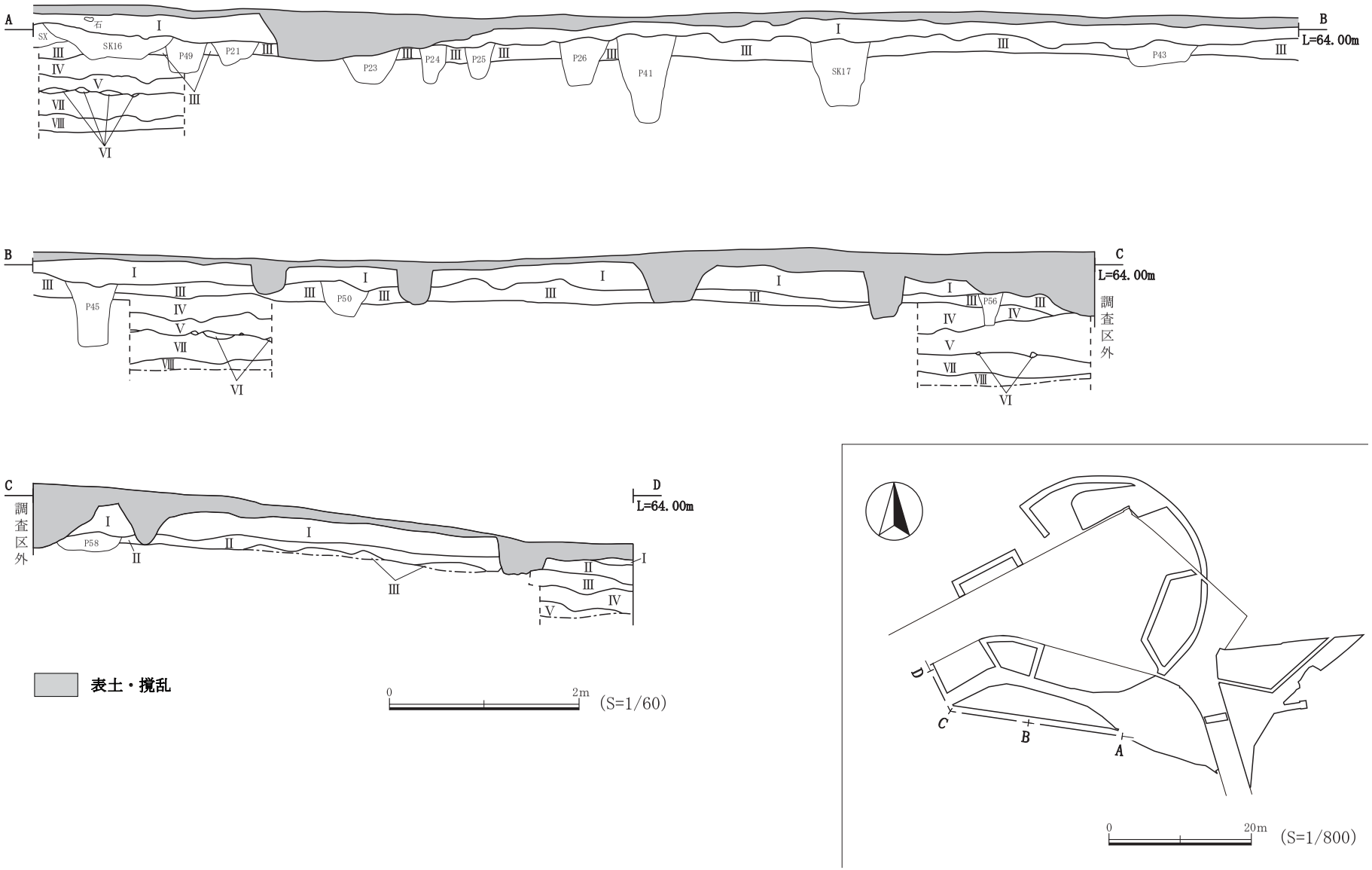
Ⅳ層　明褐色（7.5ＹＲ５／６）ローム層。黒色スコリアを少量含む。粘性あり、締りやや強い。

Ⅴ層　明褐色（7.5ＹＲ５／８）ローム層。黒色スコリアを少量、Ⅵ層の川崎スコリア層起源のスコリア粒を微量含む。粘性あり、締り強い。

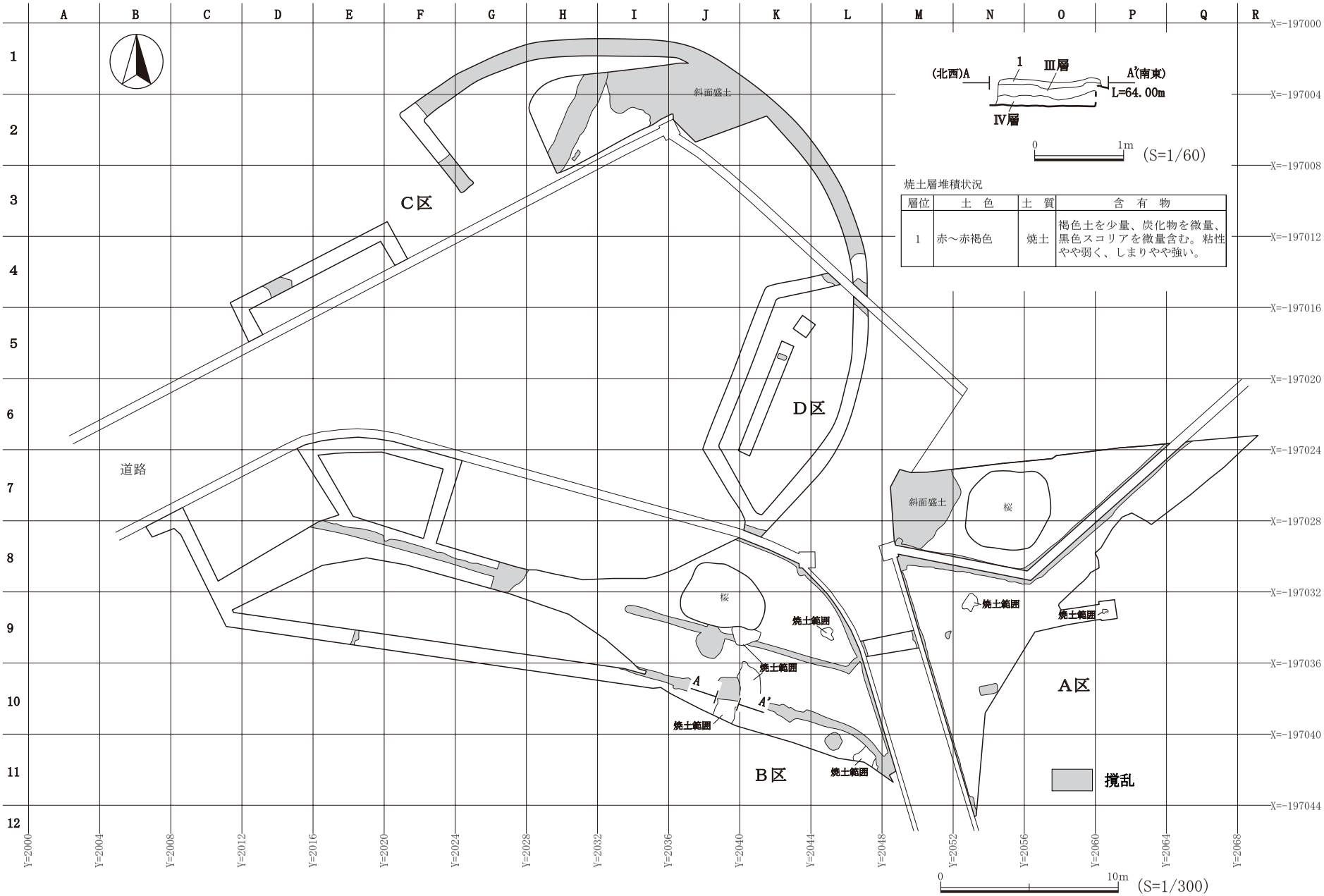
Ⅵ層　橙色や赤色からなるスコリア層。蔵王起源の川崎スコリア層（Za － Kw）である。主にブロック状に確認されたが、場所により、層状に堆積する箇所や、堆積が肉眼で確認できない箇所などがある。

Ⅶ層　にぶい褐色（7.5ＹＲ５／４）を呈するローム層。黒色スコリアを少量、橙色スコリアを微量含む。小礫を微量含む。粘性・締り共にあり。

Ⅷ層　段丘礫層。ロームブロック（径約５㎜）を含む。黒色スコリアを微量含む。粘性やや強く、締りやや弱い。



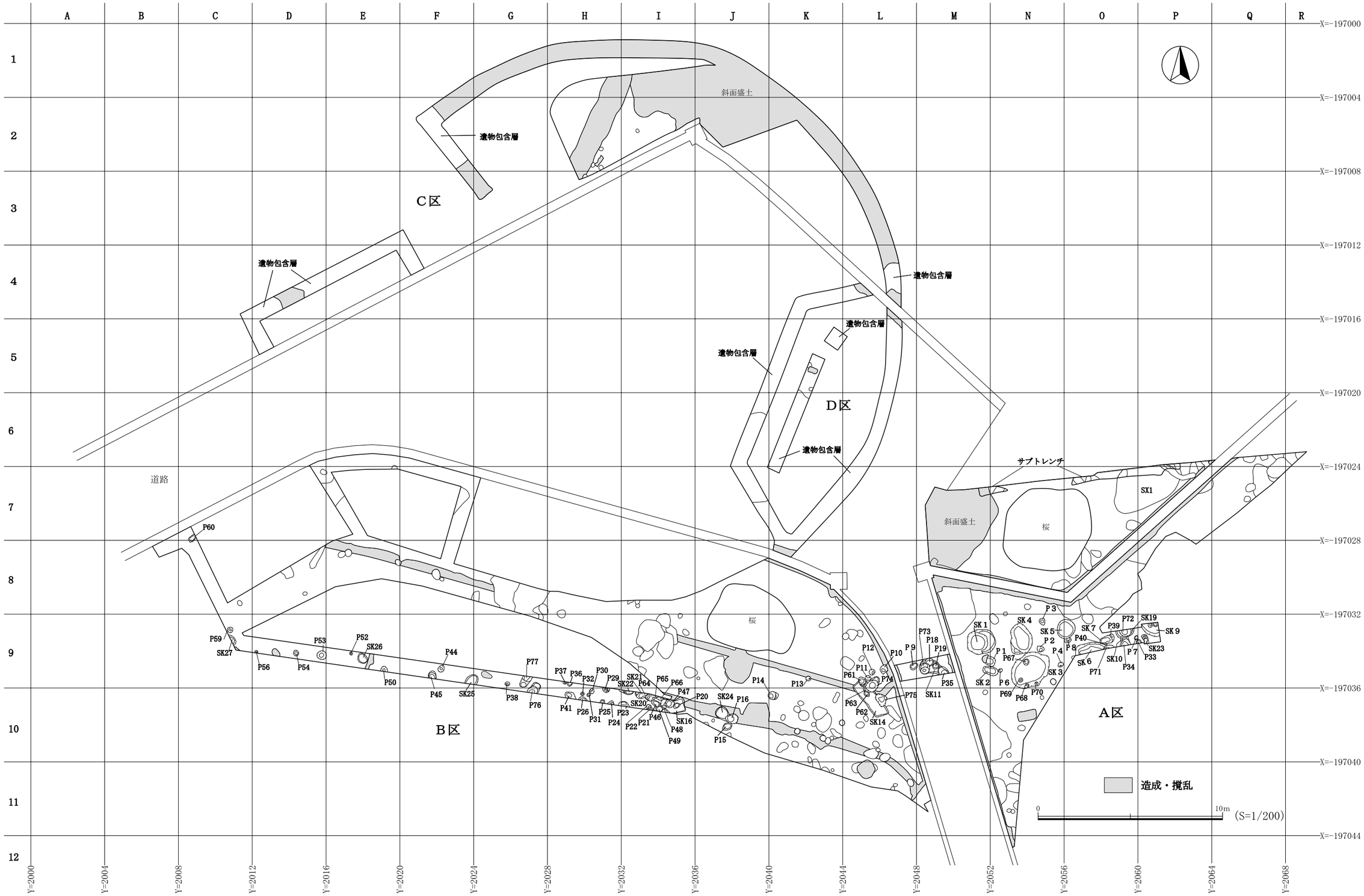
第５図　Ｂ区南壁・南西壁断面図（S=1/60・800）



焼土層堆積状況

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	赤～赤褐色	焼土	褐色土を少量、炭化物を微量、黒色スコリアを微量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。

第６図　焼土範囲（S=1/300）



第７図　遺構全体図（S=1/200）

第Ⅴ章　検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は合計 227 基である（第７図）。このうち、調査を行ったものは 88 基で、その内訳は、土坑 21 基、ピット 67 基である。それ以外の 139 基は、工事によって破壊されることがないため、性格不明遺構としてプランを図化した。

出土した遺物は、破片資料を含め合計 18,933 点である。このうち遺構から出土したものが 877 点、遺物包含層から出土したものが 16,537 点、表土・攪乱から出土したものが 1,519 点である。時期的には、縄文時代の土器・石器が主体となるが、古代の土師器・須恵器も少量（24 点）出土している。

本節では、調査を行った遺構 88 基についてその詳細を記述する。性格不明遺構については、Ａ区北壁で土層観察用のサブトレンチを掘削した際に、部分的に調査を行ったＳＸ１について記述する。また、遺構外出土遺物として、遺物包含層、表土・攪乱から出土した遺物について記述する。

遺構番号は、基本的に現場調査において付したものを踏襲している。このため、整理作業の段階で木根等の攪乱と判断されたものや、土坑とピットを振り替えたものなどは欠番となっている。

１．土坑

ＳＫ１土坑（第８図）

Ｍ・Ｎ９区に位置する。確認調査時に、遺構東側の一部の調査がなされている。本遺構のみ基本層Ⅰ層の掘り下げ中に検出された。他の遺構はすべてⅠ層の直下より検出されている。平面形は、円形に近い楕円形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 152 ㎝、短軸 135 ㎝、深さ 32 ㎝を測る。底面形は直径約 80 ㎝の円形を呈し、遺構の東側は深さ 20 ㎝のテラス状の平坦面となっている。長軸方向での方位はN―82°―Ｅである。

出土遺物　縄文土器 46 点、石器８点が出土している。土器はすべて破片資料であり、大木４・５式の特徴を持つものなどが含まれる。石器は剥片が主体であり、他に２点の二次加工のある剥片が出土している。

ＳＫ２土坑（第８図）

Ｍ・Ｎ９区に位置する。平面形は楕円形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 84 ㎝、短軸 46 ㎝、深さ 12 ㎝を測る。長軸方向での方位はN―75°―Wである。

出土遺物　縄文土器の破片資料が７点出土したが、時期を特定できるものは含まれていない。

ＳＫ３土坑（第９図）

Ｎ９・10 区に位置する。確認調査時に遺構の一部がトレンチ状に掘り込まれている。平面形は楕円形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 235 ㎝、短軸 178 ㎝、深さ 39 ㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁に向かって緩やかに立ち上がる。長軸方向での方位はN―49°―Ｅである。ピット 67 ～ 70 を切っている。

出土遺物（第 16 図１～４、写真図版９）　縄文土器 155 点、土製品１点、石器９点、礫２点が出土している。土器はすべて破片資料であり、大木４式の特徴を持つものなどが含まれる。石器は、石鏃４点、敲石１点、凹石１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片２点である。

１は、深鉢の口縁部である。地文にＬＲ縄文を施し、折り返した口縁部を横方向によるナデ調整で仕上げている。内面も同様にヨコナデである。繊維の混和が見られないことや、丁寧な器面調整で仕上げられていることなどから、前期大木式の後半以降のものと推測される。２は、土製円盤である。縄文土器片を利用して、周縁を研磨することにより直径約 2.7 ㎝、厚さ 0.5 ㎝の円盤に仕上げている。表面は摩滅しており文様は判然としない。裏面の調整はヨコナデである。３は、瑪瑙製の石鏃である。基部に抉りのある、いわゆる凹基無茎鏃である。一方の脚部を欠

損している。４は、安山岩製の凹石である。磨痕と敲打痕および凹痕の残された礫石器である。表と裏両面に磨痕が、上下左右の側面に敲打痕が認められる。被熱により、全体が薄黒く変色している。

ＳＫ４土坑（第９図）

Ｎ９区に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 163 ㎝、短軸 120 ㎝、深さ 46 ㎝を測る。底面はやや凹凸があり、壁は急激に立ち上がる。遺構の南西側は、深さ５～ 15 ㎝のテラス状の平坦面となっている。長軸方向での方位はN―20°―Wである。

出土遺物（第 16 図１～４、写真図版９） 縄文土器 67 点、石器５点が出土している。土器は大木６式の特徴を持つものなどが含まれる。石器は、磨石１点、剥片４点である。

１は、深鉢の口縁部破片資料である。櫛歯状工具による平行沈線が横位に施されている。胎土に繊維が混和していることから、前期大木式の前半期のものと考えられる。２・３は、深鉢の口縁部付近の破片資料と胴部下半部である。２は、遺構の東側において、堆積土第１層と第２層の中間から出土した。３は、その南側 15 ㎝の位置で、２とほぼ同じレヴェルから出土し、接合関係はないものの同一個体と考えられる。胴部下半部が横倒しに潰れたような状態で出土した。２・３ともに、地文は表面の摩滅が著しいため不明瞭であるが、おそらくＲＬ縄文と考えられる。２には、やや太い粘土紐が横位に貼り付けられ、そこに刺突が施されている。その下部には半截竹管による平行小波状沈線文が施されている。大木６式と考えられる。４は、深鉢の胴部破片資料である。ボタン状貼付文が付加され、その周辺に結節浮線文が巡っており、大木６式と考えられる。

ＳＫ５土坑（第８図）

Ｎ・Ｏ９区に位置する。平面形は直径約 100 ㎝の円形を呈する。深さは、25 ㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが後世の木根の痕跡が多く残されている。ピット８を切っている。

出土遺物（第 17 図１、写真図版９） 縄文土器 11 点、石器２点が出土している。土器はすべて破片資料であり、繊維が混和された土器などが含まれる。石器は、磨製石斧１点、剥片１点である。

１は、玢岩製の磨製石斧である。基部は裏面からの力により欠損し、刃部は使用の結果により刃こぼれやつぶれが生じている。裏面の中央部付近に敲打の痕跡が認められる。磨いて整形した後に生じているため、何らかの使用の結果によるものと考えられる。

ＳＫ６土坑（第８図）

Ｏ９区に位置する。遺構の南側は調査区外へ及んでいるため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 173 ㎝、短軸 51 ㎝、深さ 76 ㎝を測る。底面は段丘礫層（基本層Ⅷ層）に達しているため凹凸が激しい。壁の立ち上がりは急激であり、底部付近では垂直に近い。また、下端の輪郭が細長い楕円形を推測させることから、陥穴である可能性が考えられる。ピット 71 に切られ、Ｐ 40 を切っている。

出土遺物 縄文土器 28 点が出土している。すべて破片資料であり、大木４式の特徴を持つものなどが含まれる。

ＳＫ７土坑（第 10 図）

Ｏ９区に位置する。平面形は楕円形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 68 ㎝、短軸 42 ㎝、深さ 24 ㎝を測る。底面はほぼ平坦である。長軸方向での方位はN―73°―Ｅである。本遺構からの遺物の出土はなかった。ピット 39・40 を切っている

ＳＫ９土坑（第 10 図）

Ｐ９区に位置する。遺構の北側と東側は調査区外へ及んでいる。このため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 99 ㎝、短軸 84 ㎝、深さ 23 ㎝を測る。

出土遺物（第 16 図１、写真図版９） 縄文土器 10 点が出土している。すべて破片資料であり、前期末頃の特徴を持つものなどが含まれる。１は、深鉢の口縁部付近である。太い粘土紐を貼り付け、その縁を細い粘土紐で縁取っている。縁を巡る粘土紐は部分的に鋸歯状の山形文を構成する。大木６式に見られる球胴形深鉢の一部である可能性が考えられる。

ＳＫ 10 土坑（第 10 図）

Ｏ９区に位置する。遺構の南側は調査区外へ及んでいる。このため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 53 ㎝、短軸 38 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。ピット 34 を切っている。

出土遺物 縄文土器 17 点、石器１点が出土している。土器はすべて破片資料であり、時期を特定できるものは含まれていない。石器は二次加工のある剥片が出土した。

ＳＫ 11 土坑（第 10 図）

Ｍ９区に位置する。遺構の北側・南側は調査区外へ及んでいる。平面形は不整形を呈する。検出された範囲での規模は、長軸 166 ㎝、短軸 73 ㎝、深さ 7 ㎝を測る。長軸方向での方位はN―69°―Wである。

本遺構は４基のピットと重複し、断面などの観察から新旧関係を判断したもののその判別は困難であった。形状が不整形であることや掘り込みが浅いことを考えると、周辺に展開するピットの縁辺が削れたり、崩落して浅い掘り込み状になった可能性が考えられる。ピット 19・73 に切られ、Ｐ 18・35 を切っている。

出土遺物 縄文土器１点が出土している。竹管文の施された破片資料であるが、時期は不明である。

ＳＫ 14 土坑（第 10 図）

Ｌ９･10 区に位置する。平面形は細長い長方形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 230 ㎝、短軸 80 ㎝、深さ 18 ㎝を測る。底面はほぼ平坦で､壁の立ち上がりは急激である。長軸方向での方位はN―36°―Wである。ピット 74・75 に切られ、Ｐ 61・62・63 を切っている。

出土遺物（第 17 図１、写真図版９） 縄文土器 47 点、石器４点、礫１点が出土している。土器はすべて破片資料であり、大木６式の特徴を持つものなどが含まれる。石器は、磨石１点、剥片２点、砕片１点である。

１は、土器の深鉢口縁部である。波状口縁の波頂部に太く短い粘土紐を縦位に貼り付け、その下位に半截竹管の連続刺突が施された横位貼付文が二重に付加されている。また、半截竹管による平行沈線が、縦位・横位に施される。大木６式に属すると考えられる。

ＳＫ 16 土坑（第 11 図）

Ｉ 10 区に位置する。遺構の南側はわずかに調査区外へ及んでいる。平面形は不整四角形を呈する。検出された部分での規模は、長軸 129 ㎝、短軸 82 ㎝、深さ 29 ㎝を測る。ピット 20・47・48・66 を切っている。

出土遺物（第 17 図１、写真図版９） 土器 16 点、石器３点が出土している。土器はすべて破片資料であり、地文に撚糸文が施されたものなどが含まれる。石器は、石核１点、スクレイパー状の二次加工が施された剥片１点、磨石１点である。

１は、珪質頁岩を石材とした石核である。先行する剥離面を打面として、少なくとも２回の打面転位が行われて

いる。ａ面、ｄ面、ｆ面に自然面を残し、石核調整による表皮（自然面）の除去の痕跡が認められる。ｂ面の上部縁辺には最終段階に施されたと考えられる調整痕が認められるが、その後の剥片剥離作業は行われていない。自然面の観察から原石は亜角礫であったと推測される。

ＳＫ 19 土坑（第 11 図）

Ｏ９区に位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでいる。このため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 100 ㎝、短軸 40 ㎝、深さ 25 ㎝を測る。本遺構からの遺物の出土はなかった。ピット 72 に切られ、ピット 34 を切っている。

ＳＫ 20 土坑（第 11 図）

Ｉ 10 区に位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでいる。このため、平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 74 ㎝、短軸 38 ㎝、深さ 38 ㎝を測る。ＳＫ 21 土坑に切られ、ピット 46･64･65･66 を切っている。

出土遺物　縄文土器７点が出土している。すべて破片資料であり、大木４式の特徴を持つものなどが含まれる。

ＳＫ 21 土坑（第 11 図）

Ｉ 10 区に位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでおり、平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 68 ㎝、短軸 33 ㎝、深さ 28 ㎝を測る。遺構の西側は、深さ 22 ㎝のテラス状の平坦面となっている。ＳＫ 20 土坑、ピット 64 を切っている。

出土遺物　縄文土器４点が出土している。すべて破片資料であり、大木４式の特徴を持つものなどが含まれる。

ＳＫ 22 土坑（第 11 図）

Ｈ・Ｉ 10 区に位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでおり、このため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 80 ㎝、短軸 24 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが、西端に底部からの深さ 19 ㎝の窪みがある。本遺構からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ 23 土坑（第 11 図）

Ｐ９区に位置する。遺構の南側は調査区外へ及んでおり、平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 53 ㎝、短軸 30 ㎝、深さ 34 ㎝を測る。遺構の南側は、深さ 30 ㎝のテラス状の平坦面となっている。西側の壁は、調査区境付近で内傾した立ち上がりとなる。長軸方向での方位はN―20°―Wである。本遺構からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ 24 土坑（第 12 図）

Ｊ 10 区に位置する。上端は攪乱により削平されている。検出された範囲での規模は、長軸 66 ㎝、短軸 63 ㎝、深さ 16 ㎝を測る。底部は緩やかに窪み、断面形は皿状を呈する。長軸方向での方位はN―54°―Wである。ピット 16 に切られている。

出土遺物　縄文土器 22 点、石器３点が出土している。土器はすべて破片資料であり、大木４式の特徴を持つものなどが含まれる。石器は、磨石１点、微細剥離痕のある剥片１点、被熱した剥片１点である。

ＳＫ 25 土坑（第 12 図）

Ｆ・Ｇ９区に位置する。遺構の南側は調査区外へ及んでいる。このため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 62 ㎝、短軸 55 ㎝、深さ 26 ㎝を測る。底部はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。本遺構からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ 26 土坑（第 12 図）

Ｅ９区に位置する。平面形は楕円形を呈する。検出された部分での規模は、長軸60㎝、短軸49㎝、深さ18㎝を測る。底部にはやや凹凸が認められる。長軸方向での方位はN―23°―Wである。本遺構からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ 27 土坑（第 12 図）

Ｃ９区に位置する。遺構の南西部分は調査区外へ及んでいる。このため平面形は不明である。検出された範囲での規模は、長軸 63 ㎝、短軸 22 ㎝、深さ 21 ㎝を測る。

出土遺物　縄文土器６点、石器２点が出土している。土器は胴部の破片資料であり、時期を特定できるものは含まれていない。石器は、二次加工が施された剥片１点、剥片１点である。

２．ピット

今回の調査ではピットが 67 基検出された。しかし、小規模なものが多く、また調査区が不整形であり全体の展開状況が把握できないことなどから、規則的な配置を持つかどうかなどの検討は困難である。

ここでは、検出された中で特にピットが密集している箇所について記述する。遺物は、実測図を掲載したものについて詳細を述べる。各ピットについての詳細は、ピット一覧表（第２～４表）を参照されたい。

Ｏ・Ｐ９区からは、８基のピットが検出された（第７図）。このうちピット７・33・34・39・40・71・77 の７基は特に隣接して展開している。規模や深さを比較すると、ピット 71 と 77 に類似点が認められる。いずれも調査区外へ及んでいるため全形は不明であるが、検出された範囲での規模が 60 ㎝を超えていて大型である。また深さも 60㎝ 以上であり、他のものよりも深い。両者の間隔は、下端の中心間で約 140 ㎝を測る。断面から柱痕跡などは確認されなかった。ピット 72 からは大木６式の特徴を持つ縄文土器などが出土している。

Ｍ９区からは、４基のピットが隣接して検出された（第７図）。ＳＫ 11 土坑との切り合い関係などから、ピット 19・73 が新しく、ピット 18・35 が古い。規模や深さの比較からは類似点などは認められなかった。最も大きいものはピット 35 である。南側が調査区外へ及んでいるため全形は不明であるが、検出された範囲での規模が 50 ㎝を超え、深さは 90 ㎝以上を測る。胴部に撚糸文が施されている縄文土器片などが出土している。

Ｌ９・10 区からは、９基のピットが検出された（第７図）。このうちピット 61 ～ 63・74・75 の６基は特に隣接して展開している。ＳＫ 14 土坑との切り合い関係などから、ピット 74・75 が他のものよりも新しい。規模も他のものより大きく、長軸・深さともに 70 ㎝以上を測る。両者の間隔は、下端の中心間で約 95 ㎝を測る。断面から柱痕跡などは確認されなかった。双方から、大木６式の特徴を持つ縄文土器などが出土している。

Ｉ 10 区からは、11 基のピットが検出された（第７図）。このうちピット 20 ～ 22・46 ～ 49・64 ～ 66 の 10 基は特に隣接して展開しているが、小規模なものが多く、長軸・深さともに 40 ㎝を超えるものはピット 66 のみである。ピット66は、ＳＫ20土坑に切られ、ピット65を切っている。大木４式の特徴を持つ縄文土器片などが出土している。

出土遺物（第 17 ～ 19 図、写真図版 10・11）

ピット４－１は、珪質頁岩を石材とした石核である。打面の設定に計画性が見られず、多方向から剥離を行っている。円礫の表皮（自然面）を除去して打面とし、順次転位を繰り返している。裏面の一部に除去されなかった自

然面が残る。ａ面の左側縁辺には微細な調整痕が認められる。

ピット13－１は、深鉢の口縁部破片である。梯子状に組まれた粘土紐が横位に展開し、その下位においては斜行している。粘土紐の付加により地文は不明瞭であるが、ＬＲ縄文と推測される。大木４式もしくは５式に相当すると考えられる。

ピット16－１は、深鉢の口縁部破片である。波状口縁の波頂部付近にあたり、口縁に太い粘土紐が帯状に貼り付けられている。貼付粘土帯の下部は三角形に刻みが入れられ鋸歯状に仕上げられている。大木５式の後半段階と推測される。

ピット20－１は、繊維を混和した深鉢の口縁部破片である。口縁に沿って沈線文が３条施されている。大木２ａ・２ｂ式に相当すると考えられる。

ピット34－１は、深鉢の口縁部破片資料である。口縁に沿って太い粘土紐を貼り付け、その一部を把手状に盛り上げている。前期後半以降のものと推測される。ピット34－２は、珪質頁岩製の尖頭器である。ａ面・ｂ面とも先端部周辺と基部に、風化の度合が他の部分と異なる調整痕が認められる。ある期間使用された後、再利用をするために先端部と基部に再び加工が施された結果によるものと考えられる。

ピット35－１は、安山岩を石材とした磨石である。ｂ面に磨痕が認められ、部分的に平坦面となっている。

ピット39－１は、深鉢の口縁部破片資料である。口縁に沿って角棒状工具によると思われる沈線が１条施され、その下部に「く」字状の沈線文が施文されている。口唇部はやや肥厚し内側へ向かってわずかに内湾している。胎土に繊維の混和が認められないことから、前期中頃以降のものと判断される。

ピット49－１は、深鉢の口縁部破片である。口縁部に沿って円形竹管による刺突文を交互に２段施されている。地文には羽状縄文が施される。胎土には繊維が混和されている。大木２ａ式に相当すると考えられる。

ピット52－１は、深鉢の胴部破片である。胎土に繊維が混和されている。地文は、一段の撚紐からなる単純な撚糸文と網目状撚糸文を組み合わせて構成されている。大木２ａ式と推測される。

ピット61－１は、深鉢の口縁部破片である。口縁部に沿って３段重ねに貼り付けられた粘土紐に、棒状工具による連続刺突文が施される。粘土紐貼付の下部にはボタン状の貼付文が付加されている。地文は不明瞭であるが、ＬＲ縄文と推測される。大木６式に相当すると考えられる。ピット61－２は、板状土偶の胴部破片である。表面の胸部にあたる位置に円筒状の粘土紐が貼り付けられている。その他に文様の痕跡は認められない。粘土紐貼付は、前期大木式後半段階を特徴づける手法であり、本遺物もその時期に属する可能性が考えられる。

ピット72－１は、深鉢の胴部破片資料である。半截竹管による平行沈線文を縦位に施し、沈線の間に同様の工具を回転させることによって円形の刺突文を連続して施している。円形の刺突文を交点として、その両側に櫛歯状工具によって斜行する沈線文を施している。大木３式に相当すると考えられる。ピット72－２は、深鉢の口縁部破片資料である。肥厚した口縁部にボタン状の貼付文が付加され、それを太い粘土紐で縁取っている。粘土紐に沿うように沈線文が施され、縁取りを強調しているかのようである。口唇部には細い粘土紐が土器の内面へ向かって列状に貼り付けられている。大木６式に相当すると考えられる。

ピット74－１は、土器深鉢の口縁部破片資料である。文様はきわめて不明瞭であるが、ループ文が多段に施されているものと考えられる。胎土に多量の繊維が混和されている。大木１式に相当すると考えられる。ピット74－２は、土器深鉢の口縁部破片資料である。口縁に沿って角棒状工具による刺突文が連続して施されている。胎土に繊維が混和されていることから、前期前半頃のものと推測される。ピット74－３は、土器深鉢の頸部破片資料である。ＬＲ縄文と思われる地文に、小波状の粘土紐を貼り付けている。大木４式に相当すると考えられる。ピット74－４は、土器深鉢の胴部破片資料である。地文に斜行縄文が施された後、半截竹管による平行沈線文が縦位・斜位に施され、交点にはボタン状貼付文が付加されている。大木６式に相当すると考えられる。

ピット 75 －１は、土器深鉢の口縁部から頸部にかけての破片資料である。幅広の口縁部一帯が文様帯となっている。太い沈線文が横位・斜位に施され、弧状・半環状の沈線がその間を埋めている。大木６式に相当すると考えられる。

ピット 77 －１は、土器の深鉢口縁部である。器面の摩滅が激しく、文様は不明瞭であるが、ループ文が施されているものと考えられる。胎土に多量の繊維が混和されている。大木１式に相当するものと考えられる。

３．性格不明遺構

ＳＸ１性格不明遺構（第 15 図）

Ｏ・Ｐ７区に位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでいる。このため平面形は不明である。トレンチ状に一部を掘削したのみのため、詳細は不明であるが、確認された範囲での規模は、長軸 343 ㎝、短軸 240 ㎝を測る。深さは、調査区北壁の観察では 25 ㎝であるが、南の台地上へ向かって遺構の堆積土も厚くなるため、南側ではより深くなっているものと考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。このため断面形は皿状を呈する。遺構確認段階から遺物が集中的に出土し、サブトレンチ内も同様の傾向であったことから、住居跡である可能性も考えられる。

出土遺物（第 19 図１～７、写真図版 11） 縄文土器 116 点、土偶１点、石器 10 点が出土している。土器はすべて破片資料であり、大木６式の特徴を持つものなどが含まれる。石器は、石錘１点、スクレイパー状の二次加工が施された剥片２点、剥片７点である。

１は、土器の深鉢口縁部である。地文に斜行縄文が施された後、粘土紐を鋸歯状に貼り付けている。大木５式に相当すると考えられる。２は、土器深鉢の口縁部から胴部である。口縁部に波状と渦巻き状とが組み合わさった沈線文が施されている。口縁部から頸部までの幅は狭く、わずかに肥厚している。頸部には半截竹管による平行沈線文が二重に施され、口縁部と胴部を区切っている。上段の沈線の間に半截竹管による連続刺突文が施文されている。胴部には半截竹管による平行沈線文が斜位に施されている。胴部に施された地文は摩滅が著しく判然としない。大木６式に相当すると考えられる。３は、土器の深鉢口縁部と胴部である。互いに近接した地点から出土しており、胎土や文様を観察した結果同一個体であると判断した。口縁部は波状口縁であり、波頂部の直下に弧状の沈線文、ボタン状貼付文、刺突文が施文されている。その両脇には口縁に沿って沈線文が多重に施され、その間に竹管による押引文が施文されている。胴部は地文に無節の縄文を施し、その上から半截竹管による平行沈線を横位・斜位に施している。大木６式に相当すると考えられる。４は、土器の深鉢胴部である。近接した地点から出土した破片が接合したものである。また、出土地点は３とも近く、胎土や文様構成に類似点が多いため同一個体である可能性も考えられる。地文に縄文が施された後、半截竹管による平行沈線を縦位・横位・斜位に施し、縦位に施された沈線と沈線の間に同じく平行沈線による波状文を縦方向に施文している。大木６式に相当すると考えられる。５は、深鉢の口縁部破片である。撚りの粗い単節の縄文原体を斜めに回転することによって、縦方向の縄目模様を施文している。胎土に繊維の混和が認められないことから、前期後半以降に帰属するものと考えられる。６は、板状土偶の破片である。文様等の痕跡が認められないため詳細は不明であるが、脚部にあたるものと推測される。７は、泥岩製の石錘である。横長の円礫を素材とし、左右の両端に、表裏両面から粗く調整がなされている。上下の両端には、摩滅の痕跡が認められる。

〔規模／長軸×短軸×深さ(cm)、〈　〉は残存値〕

ピット番号	位置 グリッド	平面形	規 模	堆 積 土	新旧関係	出土遺物	挿図番号
1	M・N9	不明	〈48〉×48×21	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりあり。	単独	7点	―
2	N9	不整楕円形	40×33×18		単独	―	―
3	N9	不整楕円形	38×31×21		単独	―	―
4	N9	楕円形	32×24×69	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子を含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。	単独	3点	第12図
6	N9	円形	22×20×18	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや弱い。 2. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子をやや多く含む。粘性・しまり共にあり。	単独	―	第12図
7	O・P9	楕円形	26×20×10	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子・焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	1点	―
8	O9	不明	38×〈33〉×10	1. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、黒褐色土を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK5土坑に切られる。	―	第8図
9	L・M9	楕円形	46×34×19	1. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ10㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	2点	―
10	L9	隅丸の方形	52×42×30	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ3㎜)を微量、焼土・炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。	単独	―	―
11	L9	楕円形	32×26×35	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。	単独	2点	第12図
12	L9	円形	33×31×35	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ20㎜)を含む。粘性あり、しまりやや強い。	単独	3点	第12図
13	K9	円形	27×26×72	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	3点	―
14	J・K10	楕円形	57×44×81	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～10㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	14点	―
15	J10	楕円形	50×39×23	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりあり。 2. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5㎜)をやや多く含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや弱い。	ピット16を切る。	1点	第12図
16	J10	不整楕円形	70×53×75	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 2. 7.5YR4/6 褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～10㎜)を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。	ピット15切に切られ SK24土坑を切る。	29点	第12図
18	M9	ほぼ円形	50×44×38		SK11土坑、ピット73に切られる。	8点	第10図
19	M9	円形	35×32×58	1. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を含む。焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや弱い。	SK11土坑を切る。	―	第10図
20	I10	不整楕円形	38×26×30	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ10㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりあり。	SK16土坑に切られる。	1点	第11図
21	I10	不明	〈48〉×〈14〉×26	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・焼土・炭化物を微量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。 2. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5㎜)を含む。粘性、しまり共にあり。	ピット22を切る。	―	第12図
22	I10	円形	30×26×16	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	ピット21に切られる。	―	第12図
23	H・I10	不明	56×〈26〉×31	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)を少量含む。焼土・炭化物を含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 2. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～10㎜)を含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	1点	第13図
24	H10	不明	〈34〉×〈20〉×40	1. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	―	第13図
25	H10	不明	25×〈20〉×34	1. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	―	第13図
26	H10	不明	〈47〉×〈19〉×50	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ5～10㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	―	第13図

※ピット番号が抜けているものについては、欠番とした。

第２表　ピット一覧表（１）

〔規模／長軸×短軸×深さ(cm)、〈　〉は残存値〕

ピット番号	位置 グリッド	平面形	規 模	堆 積 土	新旧関係	出土遺物	挿図番号
29	H9・10	楕円形	40×〈27〉×7	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10㎜)を少量含む。焼土を含む。炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。	単独	―	第13図
30	H10	隅丸方形	28×27×9	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ローム粒子・焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	―	―
31	H10	楕円形	23×18×26	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。	単独	―	―
32	H10	円形	20×20×18	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	―	―
33	O・P9	不明	28×〈21〉×17	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子・焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	―	―
34	O9	不明	〈45〉×42×28	1. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。キメややあらい。	SK10・19土坑に切られる。	4点	―
35	M9	不明	〈50〉×48×95	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 3. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ローム粒子・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。	SK11土坑に切られる。	7点	第10図
36	H9	不明	〈30〉×〈22〉×32	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5㎜)・焼土を少量含む。炭化物を含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。	ピット37に切られる。	1点	第13図
37	H9	不明	〈21〉×〈14〉×86	1. 7.5YR2/3 極暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)を少量含む。焼土・炭化物を含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。 2. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5㎜)を含む。焼土を少量含む。炭化物を含む。粘性・しまり共にあり。 3. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 4. 7.5YR4/4 褐色。シルト。ローム粒子を含む。炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	ピット36を切る。	1点	第13図
38	G9	楕円形	26×22×11	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	―	―
39	O9	不整楕円形	51×38×53	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜～10㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや弱い。キメややあらい。	SK7土坑に切られる。	2点	―
40	O9	不明	〈40〉×〈39〉×37	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10㎜)を少量、炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK6・7土坑、ピット71に切られる。	―	―
41	H10	不明	〈66〉×〈37〉×84	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を含む。炭化物を含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 2. 7.5YR5/6 明褐色。シルト。ロームブロックをやや多く含む。焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。 3. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10㎜)を含む。炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	―	第13図
44	F9	楕円形	41×33×16	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5㎜)を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。	単独	―	―
45	F9	不明	〈50〉×45×67	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子・焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～10㎜)を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	8点	第13図
46	I10	楕円形	48×30×17	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を含む。炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。	SK20土坑に切られピット49を切る。	―	―
47	I10	楕円形	50×44×28	1. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ10㎜)を含む。焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	SK16土坑に切られる。	―	第11図
48	I10	円形	23×22×49	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや弱い。 2. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK16土坑に切られピット49を切る。	4点	第11図
49	I10	不明	40×33×37	1. 7.5YR2/3 極暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	ピット46・48に切られる。	1点	第11図
50	E9	不明	〈40〉×28×38	1. 7.5YR4/3 褐色。シルト。ロームブロック(φ1㎜)・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。	単独	―	―
52	E9	円形	18×17×34	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ5㎜)を少量含む。焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	5点	―
53	D9	円形	50×49×71	1. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。 2. 7.5YR3/3 暗褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 3. 7.5YR3/4 暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5㎜)を少量、炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。	単独	9点	第13図

※ピット番号が抜けているものについては、欠番とした

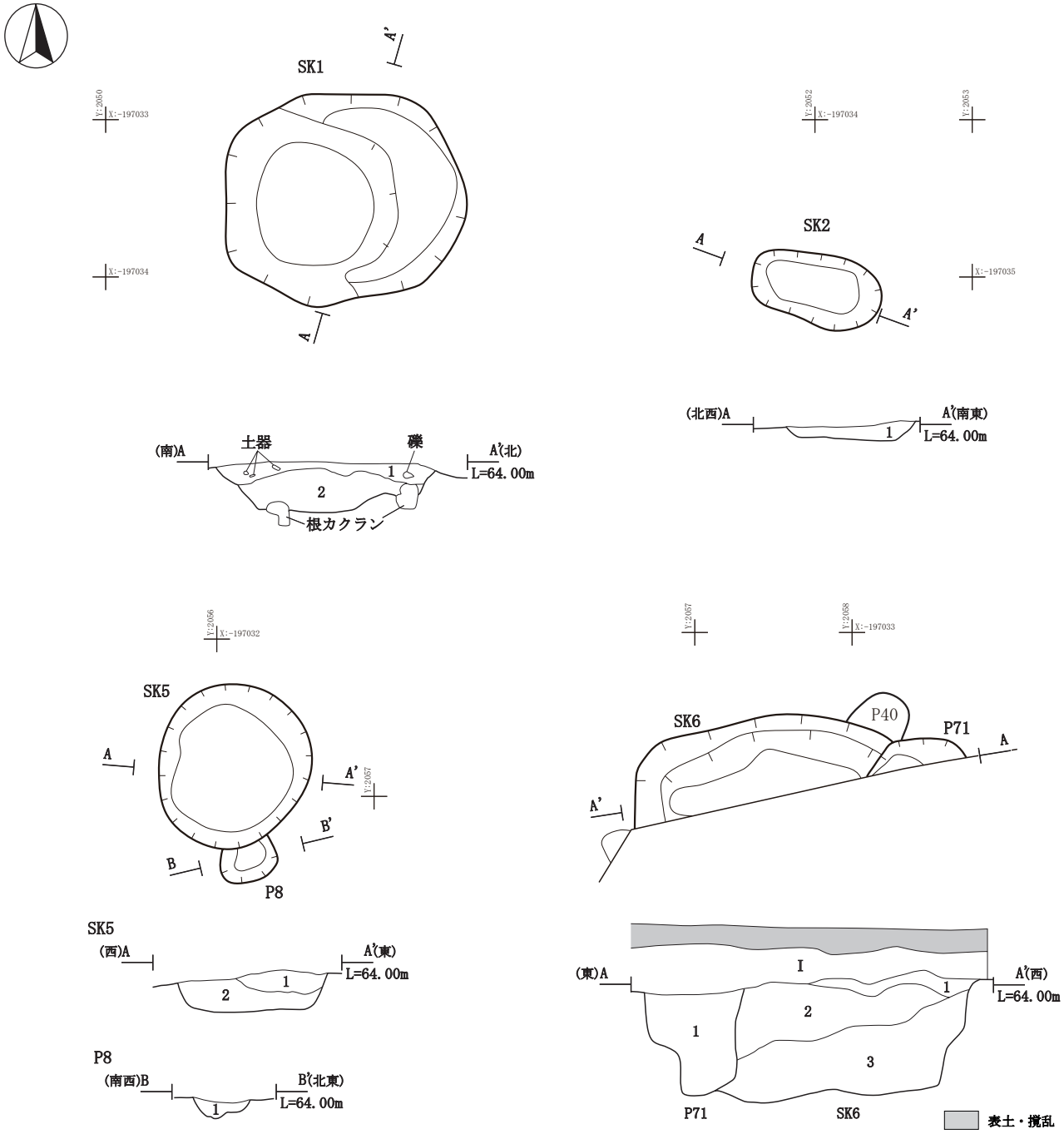
第３表　ピット一覧表（２）

〔規模／長軸×短軸×深さ(cm)、〈　〉は残存値〕

ピット番号	位置 グリッド	平面形	規　模	堆　積　土	新旧関係	出土遺物	挿図番号
54	D9	円形	30×28×29	1. 7.5YR3/2　黒褐色。シルト。ローム粒子を少量含む。焼土を微量含む。 粘性やや強く、しまりやや弱い。 2. 7.5YR2/3 極暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5mm)・焼土を微量含む。 粘性・しまり共にあり。 3. 7.5YR4/4　褐色。シルト。ローム粒子をやや多く含む。 粘性やや強く、しまりあり。	単独	4点	第13図
56	D9	不明	18×〈14〉×33	1. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ローム粒子・焼土・炭化物を微量含む。 粘性・しまり共にあり。	単独	3点	－
59	C9	円形	33×31×31		単独	－	－
60	C7・8	不明	〈44〉×29×15		単独	－	－
61	L9	楕円形	54×36×60	1. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5mm)を少量、焼土を微量、 炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK14土坑に切られる。	7点	－
62	L10	不明	37×〈25〉×14	1. 7.5YR3/4　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10mm)を少量、焼土を微量、 炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。	SK14土坑に切られ ピット63を切る。	－	－
63	L9・10	楕円形	42×24×27	1. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5mm)を少量、焼土を微量、 炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK14土坑、ピット62・ 74に切られる。	－	－
64	I10	楕円形	40×30×16	1. 7.5YR4/3　褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10mm)を含む。焼土・炭化物を 微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK20・21土坑に 切られる。	－	－
65	I10	不明	〈36〉×〈14〉×56	1. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1mm)を微量、焼土・炭化物を少量 含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。 2. 7.5YR4/3　褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。 粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK20土坑、ピット66に 切られる。	－	第11図
66	I10	不明	〈42〉×〈18〉×75	1. 7.5YR3/4　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10mm)・焼土・炭化物を少量 含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～10mm)を含む。 焼土・炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK20土坑に切られ ピット65を切る。	4点	第11図
67	N9	楕円形	35×30×19	1. 7.5YR4/3　褐色。シルト。ロームブロック(～φ5mm)・焼土・炭化物を少量含む。 粘性やや強く、しまりあり。	SK3土坑に切られる。	－	第9図
68	N9	楕円形	28×20×39	1. 7.5YR4/3　褐色。シルト。ロームブロック(～φ5mm)・焼土・炭化物を少量含む。 粘性やや強く、しまりあり。	SK3土坑に切られる。	－	第9図
69	N9	円形	23×22×10		SK3土坑に切られる。	－	第9図
70	N9	円形	17×16×20		SK3土坑に切られる。	－	第9図
71	O9	不明	〈62〉×〈17〉×64	1. 7.5YR3/4　暗褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～5mm)を少量、焼土を 微量、炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりあり。小礫～中礫含む。	SK6土坑、ピット40を 切る。	－	第8図
72	O9	不明	67×〈35〉×96	1. 7.5YR4/3　褐色。シルト。ロームブロック(φ1～10 mm)・焼土・炭化物を少量 含む。小礫を少量含む。粘性あり、しまりやや弱い。 2. 7.5YR4/4　褐色。シルト。ローム粒子を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。 粘性やや強く、しまりやや弱い。	SK19土坑を切る。	21点	第11図
73	M9	円形	60×56×38	1. 7.5YR3/4　暗褐色。シルト。ロームブロック((φ1～10mm)を含む。焼土・炭化物 を微量含む。粘性・しまり共にあり。	SK11土坑、ピット18を 切る。	10点	第10図
74	L9・10	楕円形	90×58×72	1. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～5mm)を少量含む。焼土を含む。 炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。 2. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ5mm)・焼土・炭化物を少量含む。 粘性あり、しまりやや強い。 3. 7.5YR2/2　黒褐色。シルト。ローム粒子を微量、焼土を少量含む。炭化物を含む。 粘性やや強く、しまりあり。	SK14土坑、ピット63を 切る。	69点	第14図
75	L10	不整形	74×54×77	1. 7.5YR3/4　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ3mm)を少量、焼土を微量、炭化物 を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR4/4　褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ1～10mm)を含む。 焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。	SK14土坑を切る。	18点	第14図
76	G9・10	不明	〈66〉×52×71	1. 7.5YR4/3　褐色。シルト。ローム粒子～ブロック(φ5mm)を含む。焼土を微量、 炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。 2. 7.5YR4/4　褐色。シルト。ローム粒子をやや多く含む。 粘性あり、しまりやや強い。	単独	3点	第14図
77	G9	不明	〈67〉×46×50	1. 7.5YR3/3　暗褐色。シルト。ロームブロック(φ1～20mm)を含む。焼土を微量、 炭化物を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。	単独	9点	－

※ピット番号が抜けているものについては、欠番とした

第４表　ピット一覧表（３）



ＳＫ１

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。
2	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）・焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。

ＳＫ５

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ5mm）を含む。炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。
2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ5mm）を少量含む。焼土・炭化物を微量含む。黒色スコリアを微量含む。粘性あり、しまりやや強い。

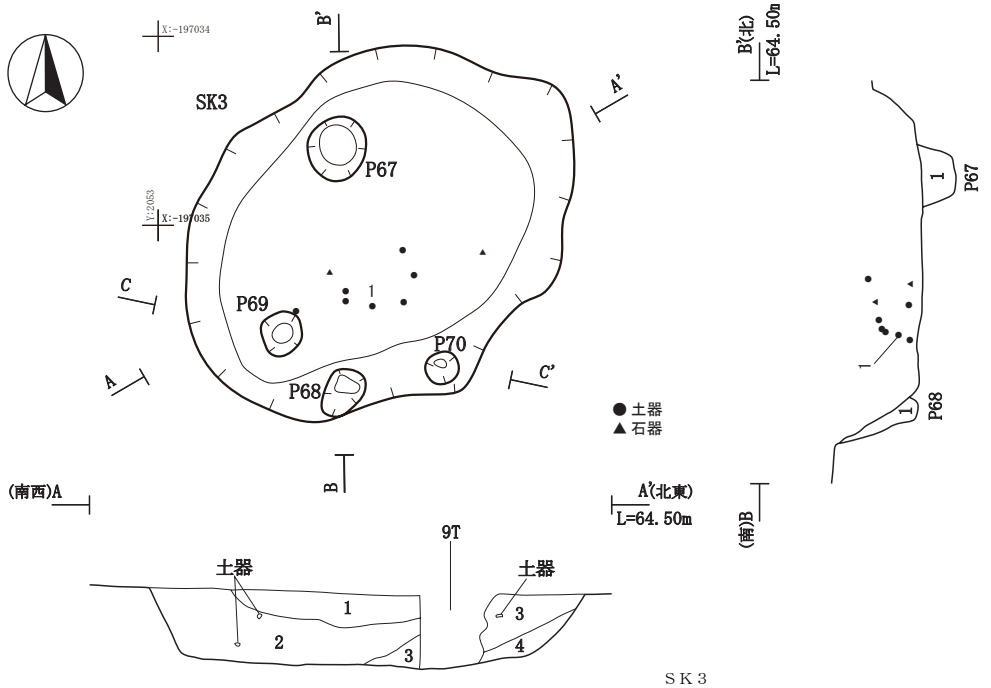
ＳＫ２

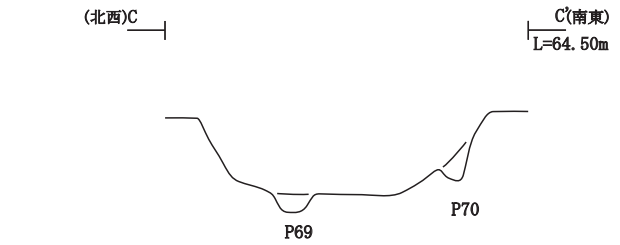
層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ30mm）・焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。

ＳＫ６

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子・焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。
2	7.5YR4/6　褐色	シルト	ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。小～中礫をやや多く含む。
3	7.5YR4/4　褐色	シルト	ローム粒子・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。小～中礫を含む。

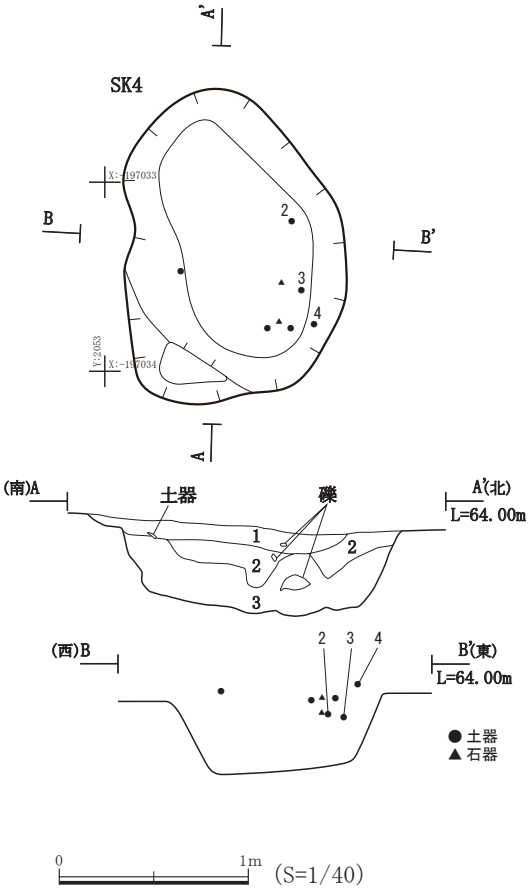
第８図　ＳＫ１・２・５・６土坑・ピット８・71

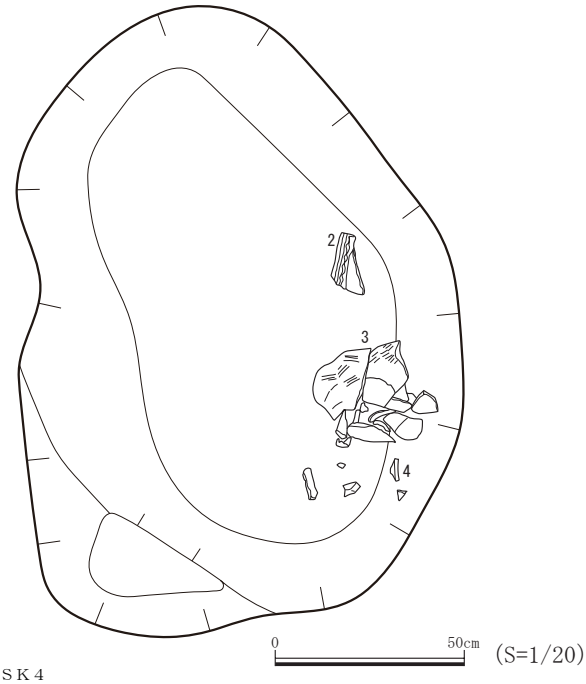




SK3

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ2mm）・焼土・炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。
2	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	ロームブロック（φ2mm）・焼土を少量、炭化物を含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。
3	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ2mm～8mm）を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。
4	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ3mm）を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。

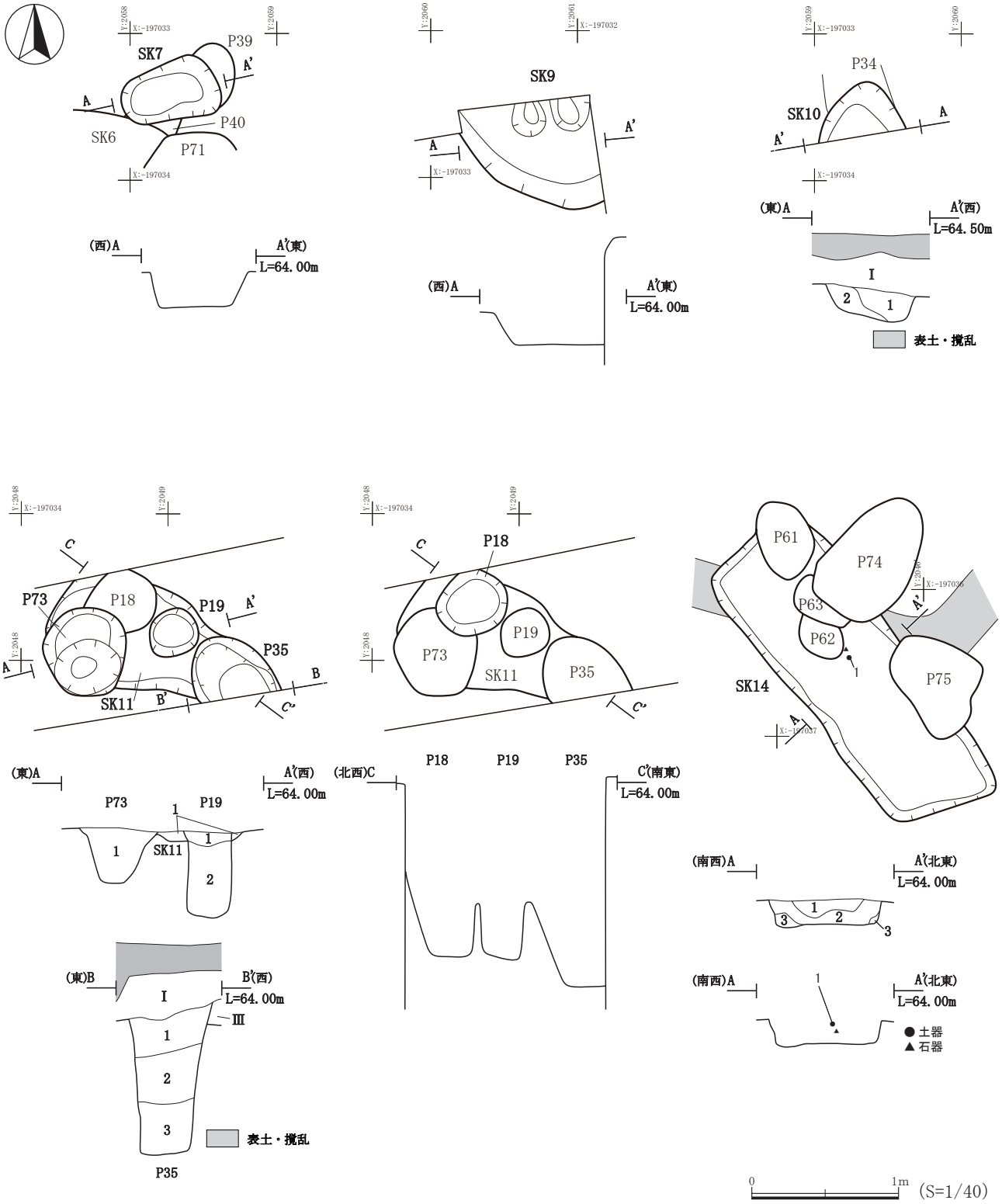




SK4

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ2mm）・焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。
2	7.5YR4/4　褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ5mm）を含む。焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。
3	7.5YR4/6　褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ10mm）をやや多く含む。焼土・炭化物を微量、黒色スコリアを少量含む。粘性あり、しまりやや強い。

第９図　ＳＫ３・４土坑・ピット 67 ～ 70



ＳＫ10

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR4/4　褐色	シルト	ロームブロック（φ1～5mm）を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや弱く、しまりあり。
2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子・焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。

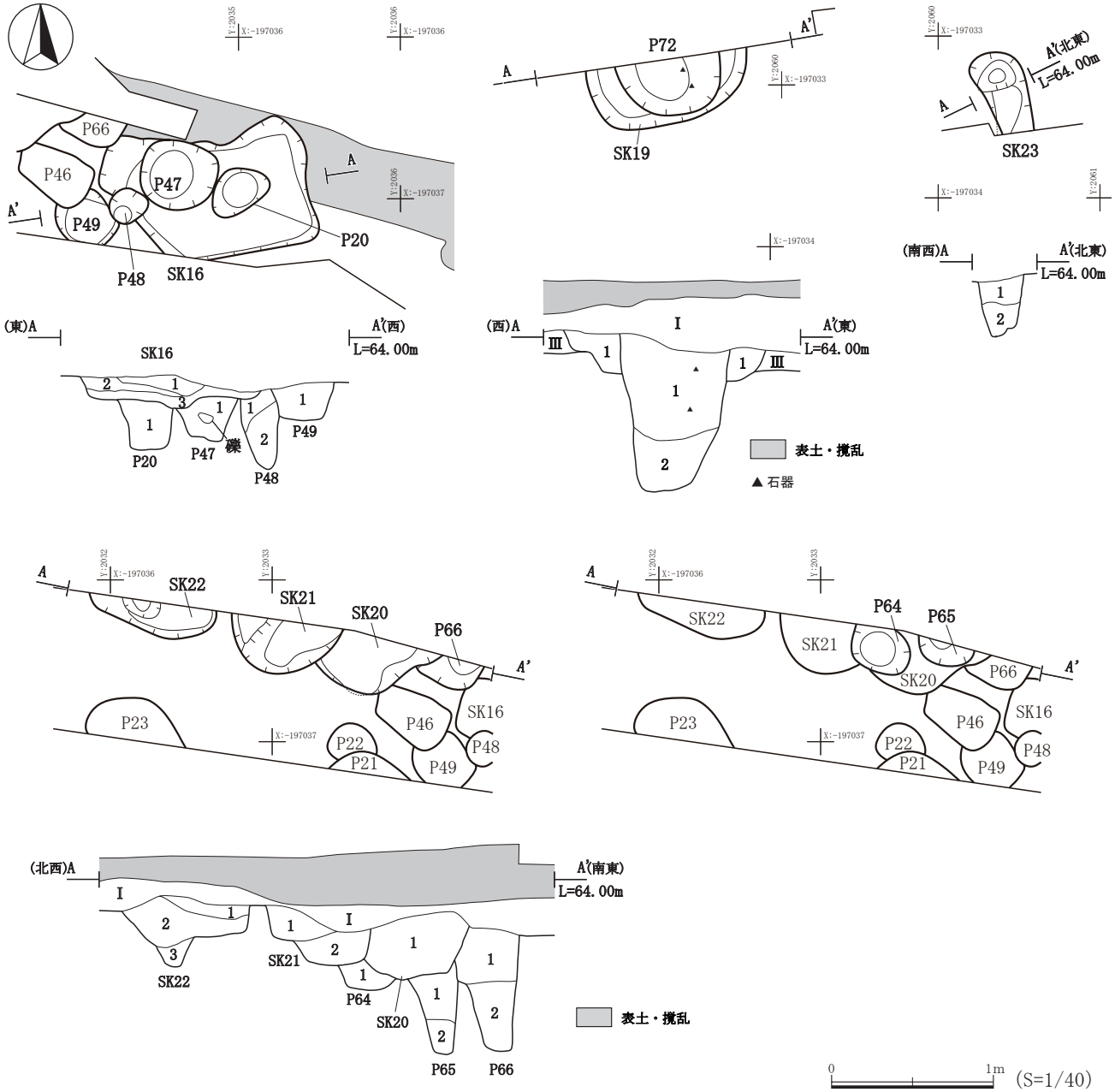
ＳＫ11

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ1～5mm）・焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。

ＳＫ14

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ2mm）を微量含む。焼土を含む。炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子・焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。
3	7.5YR4/4　褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。

第10図　ＳＫ７・９～11・14土坑・ピット18・19・35・73



ＳＫ16

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ1mm）・焼土を少量含む。炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。
2	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ1mm）を少量、焼土を微量、炭化物をやや多く含む。粘性・しまり共にあり。
3	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。

ＳＫ21

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ1mm）・焼土・炭化物を少量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
2	7.5YR4/4　褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を少量、焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。

ＳＫ23

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ5mm）を含む。焼土を微量、炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。
2	7.5YR4/4　褐色	シルト	ローム粒子・炭化物を微量含む。小礫を少量含む。粘性やや強く、しまりあり。

ＳＫ19

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。

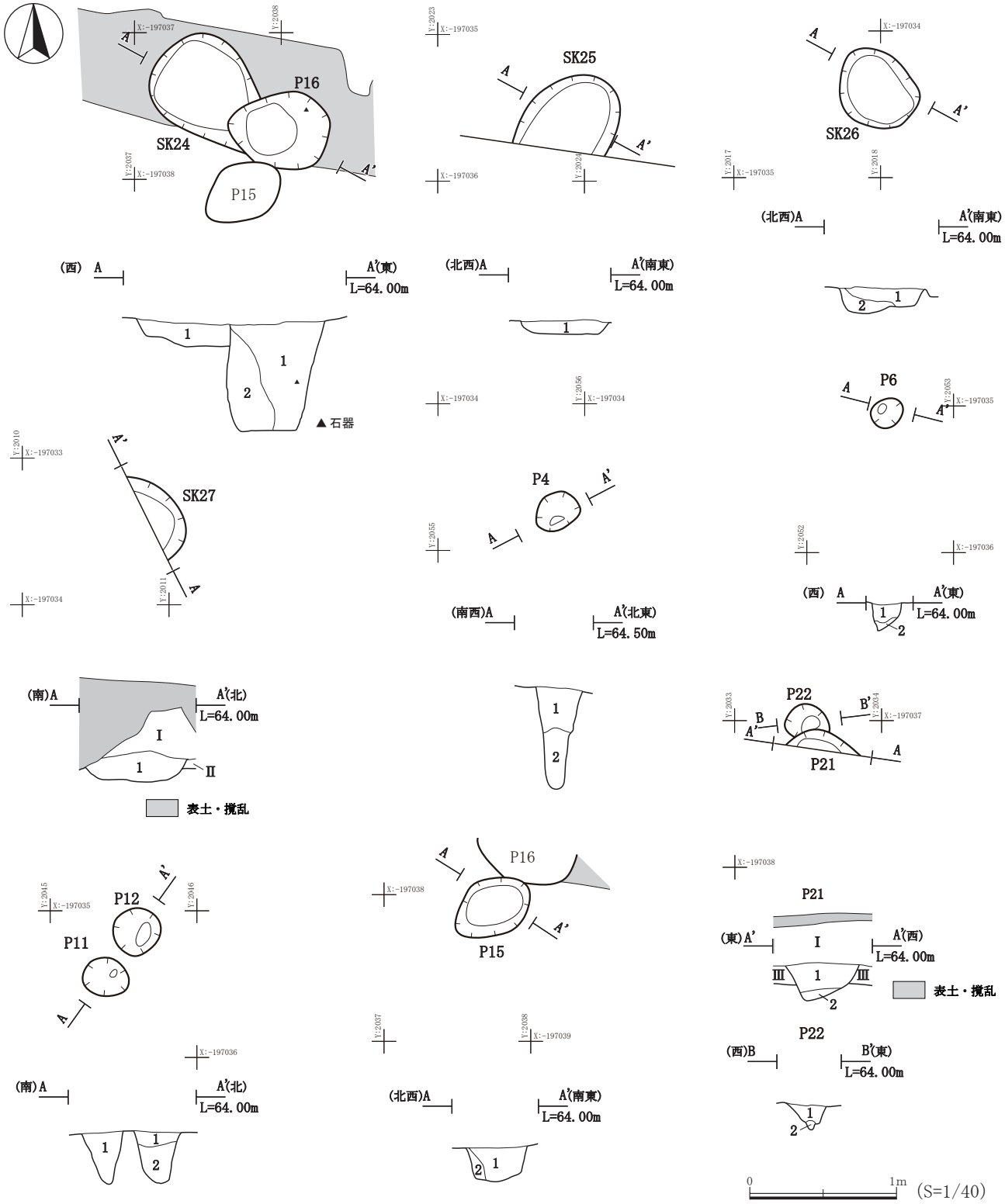
ＳＫ20

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ1～10mm）を含む。焼土を少量、炭化物を含む。粘性・しまり共にあり。

ＳＫ22

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ローム粒子を微量、焼土を少量、炭化物を微量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）・焼土・炭化物を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。
3	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を微量、焼土・炭化物を少量含む。粘性・しまり共にあり。

第11図　ＳＫ16・19～23土坑・ピット20・47～49・64～66・72



ＳＫ24

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR4/4　褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ1～10mm）を含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性・しまり共にあり。

ＳＫ25

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR4/4　褐色	シルト	ロームブロック（φ1～5mm）をやや多く含む。焼土・炭化物を微量含む。黒色・赤色スコリア微量含む。粘性あり、しまりやや強い。

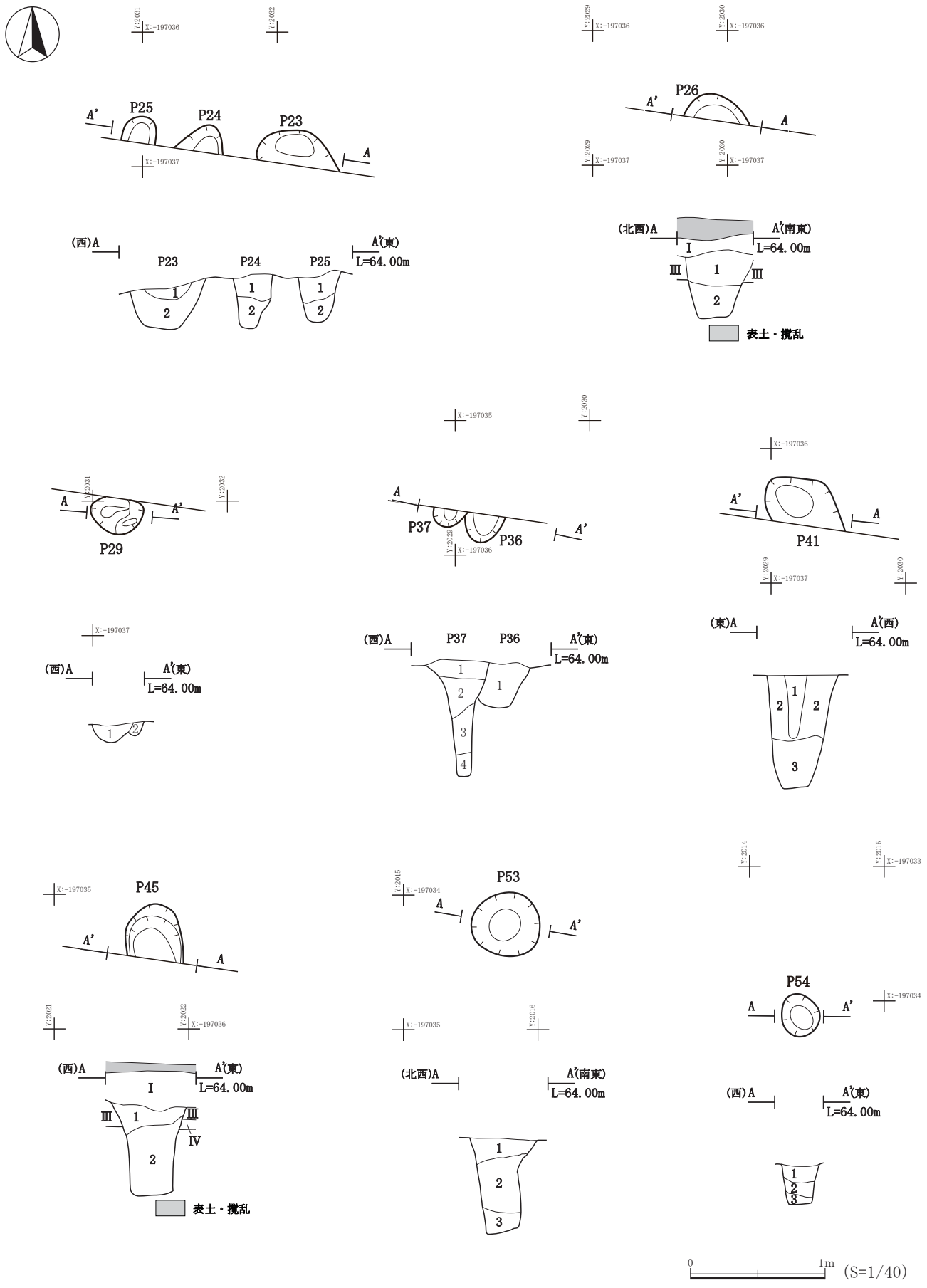
ＳＫ26

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ1mm）・焼土・炭化物を微量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
2	7.5YR4/3　褐色	シルト	ローム粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。

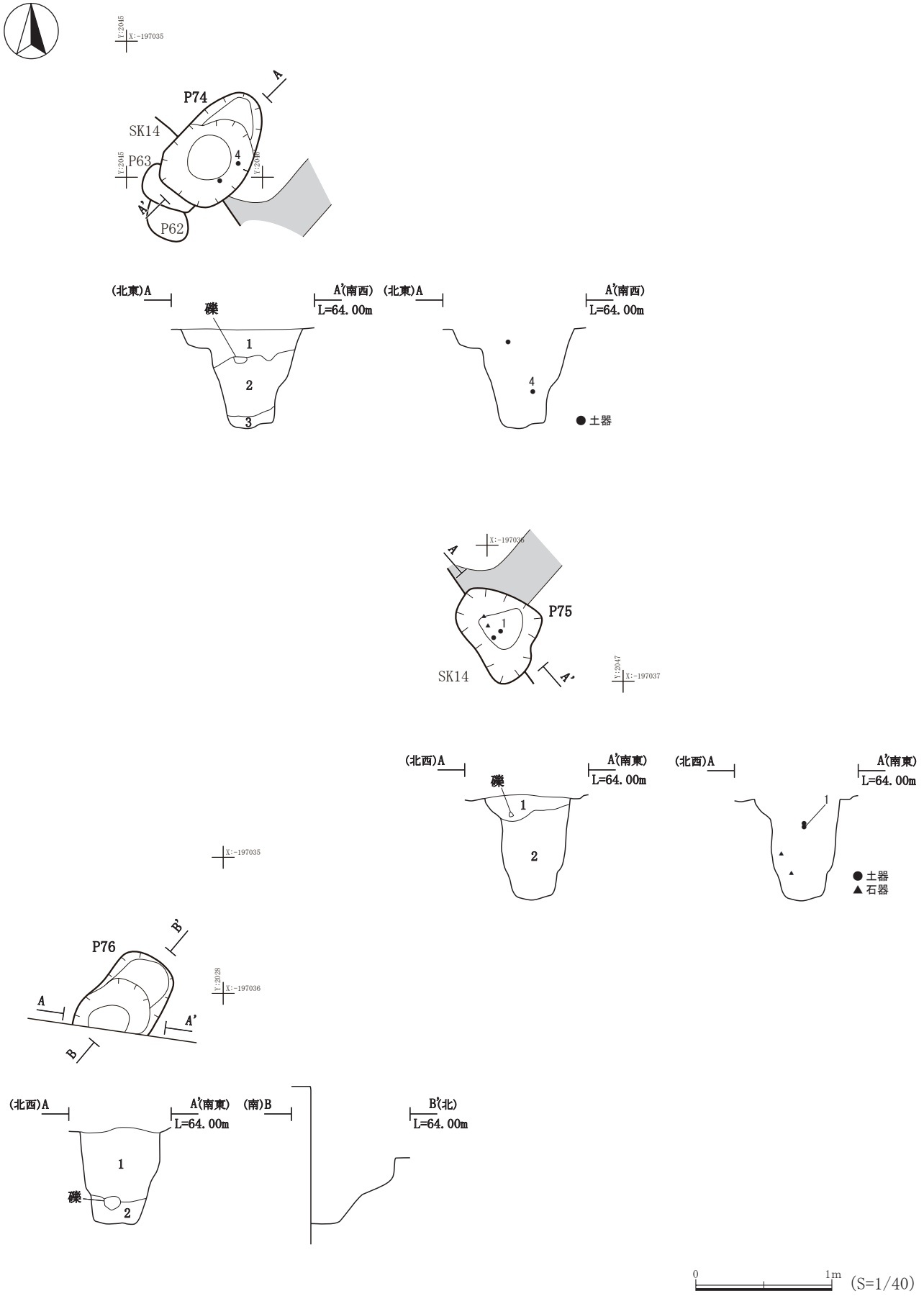
ＳＫ27

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR4/3　褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや強い。

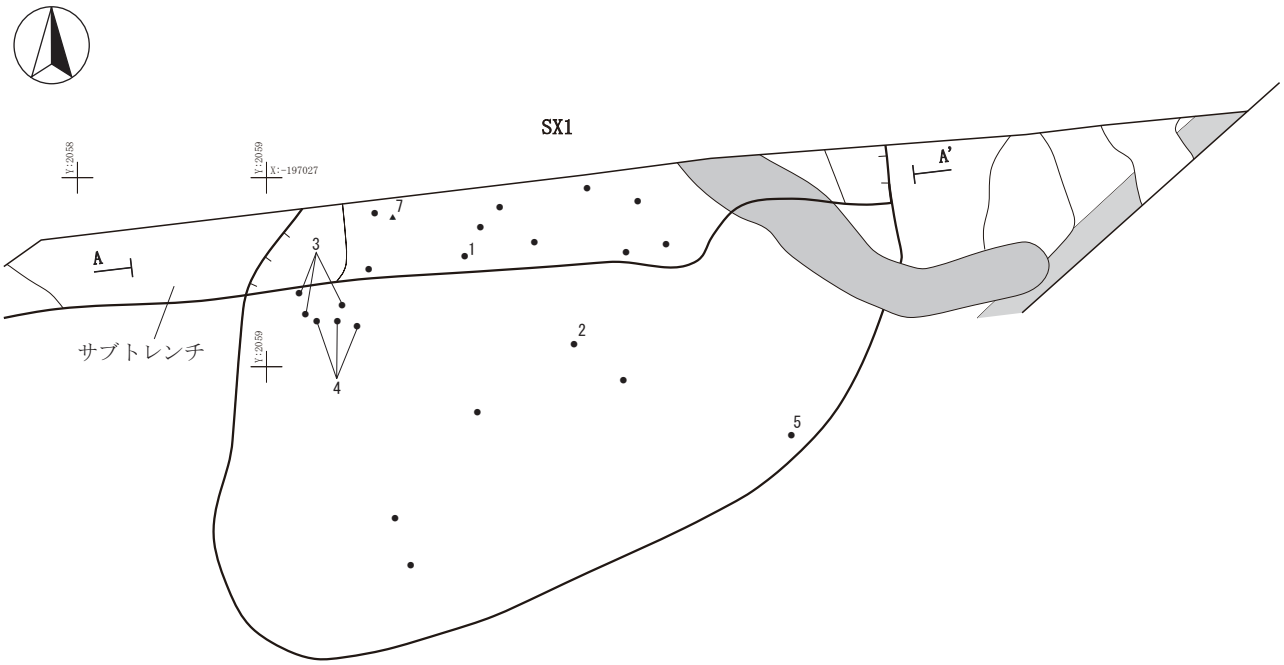
第12図　ＳＫ24～27土坑・ピット４・６・11・12・15・16・21・22

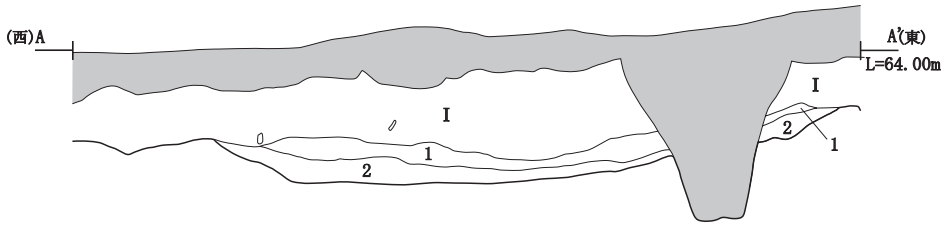


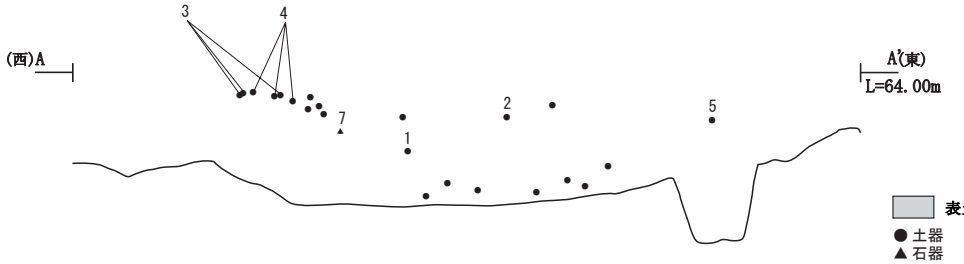
第13図　ピット23～26・29・36・37・41・45・53・54



第14図　ピット74～76







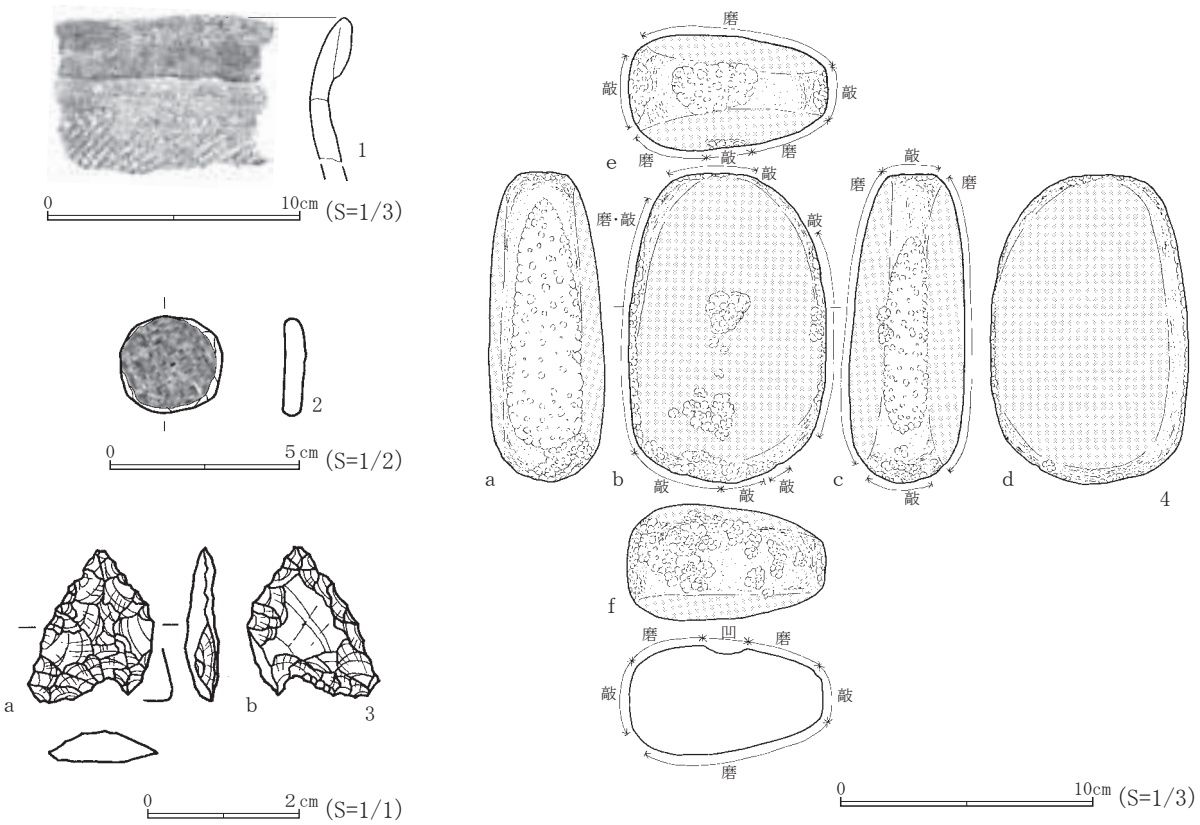
表土・攪乱
● 土器
▲ 石器

0 1m (S=1/40)

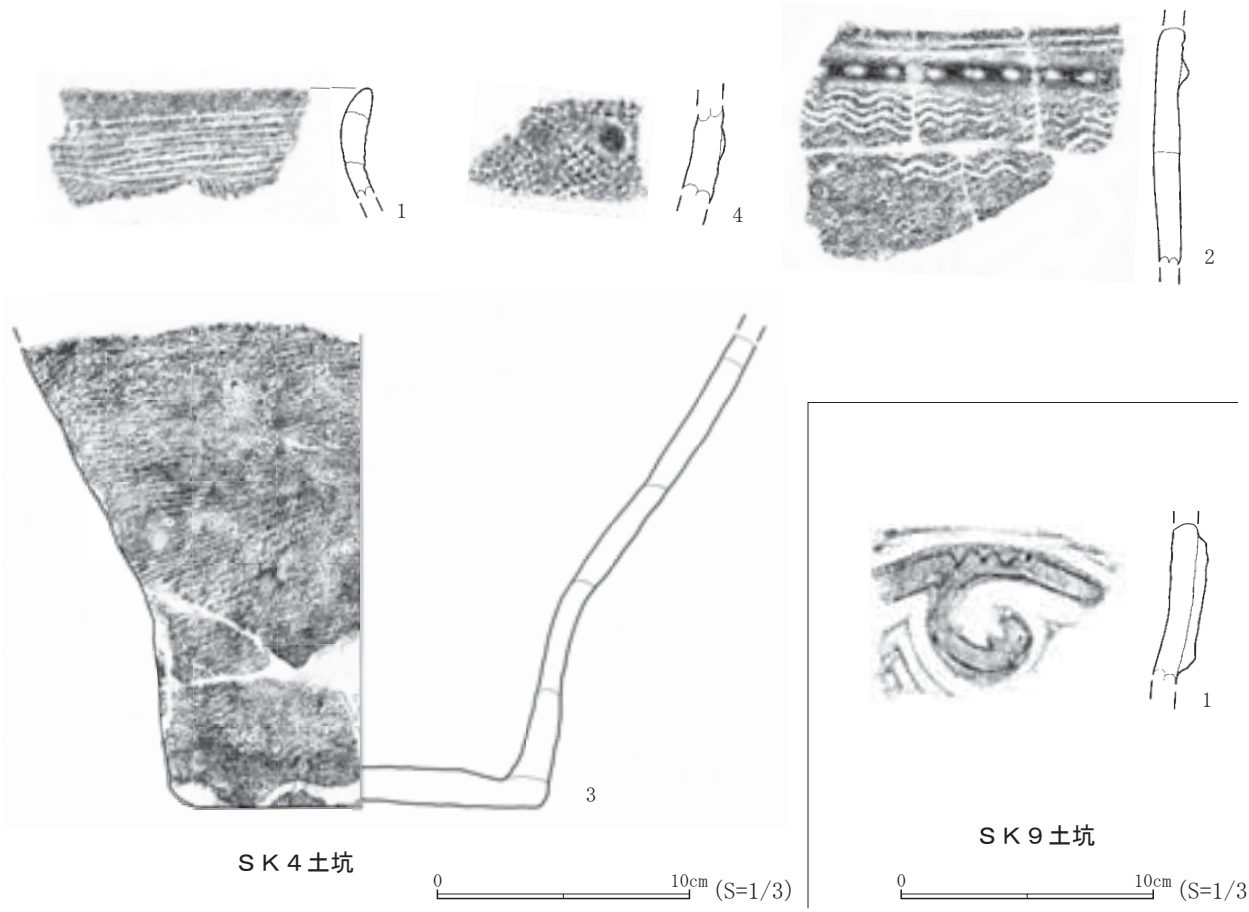
ＳＸ１

層位	土　色	土　質	含　有　物
1	7.5YR4/4　褐色	シルト	ローム粒子～ブロック（φ～10mm）をやや多く含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。
2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	ロームブロック（φ5mm）を少量含む。焼土・炭化物を微量含む。粘性あり、しまりやや弱い。

第 15 図　ＳＸ１性格不明遺構



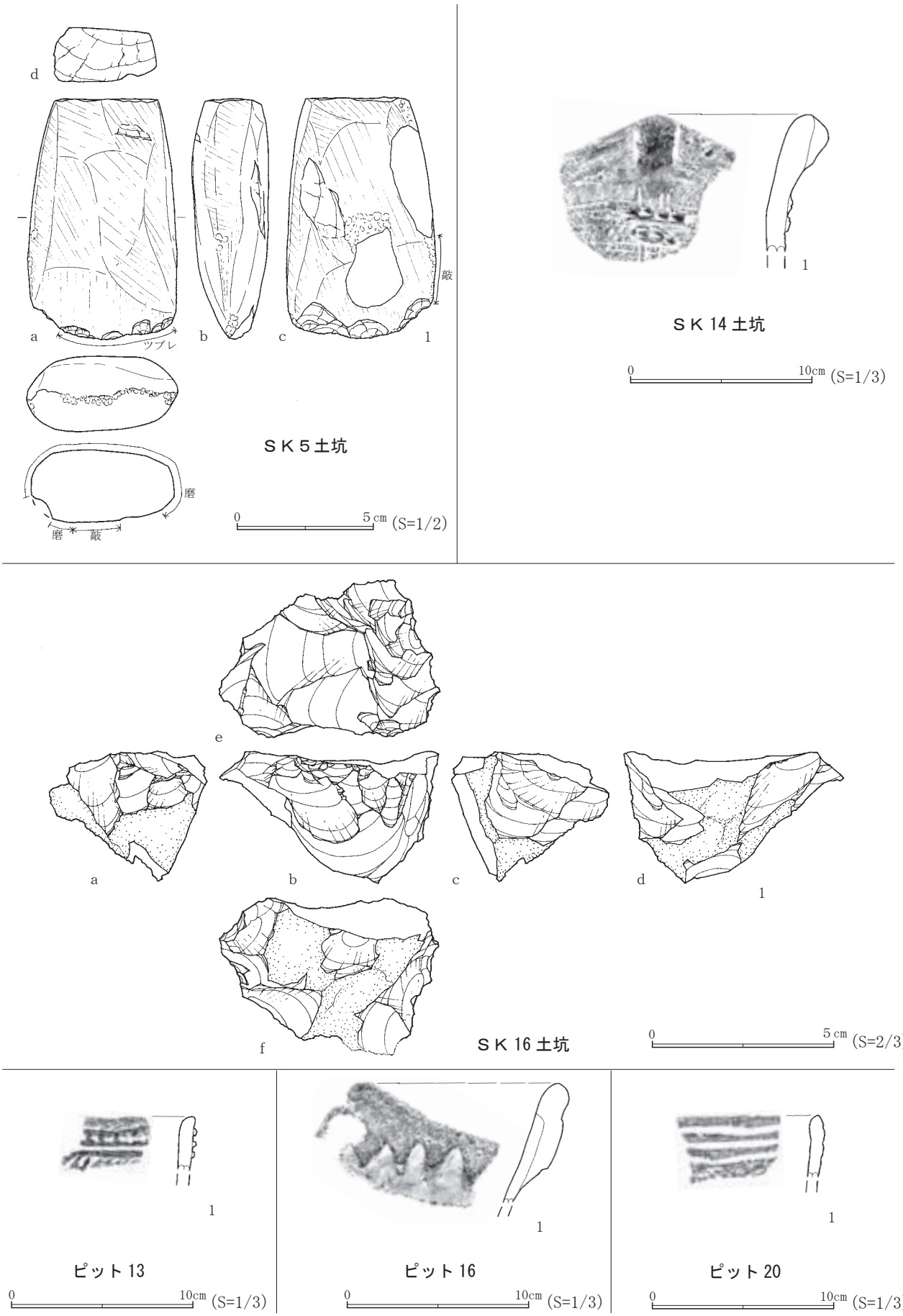
ＳＫ３土坑



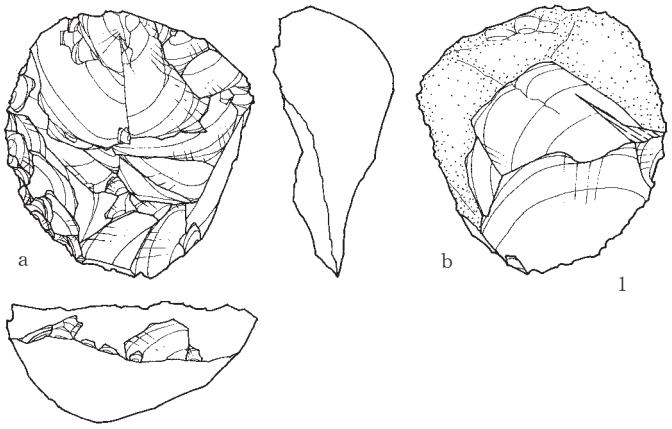
ＳＫ４土坑

ＳＫ９土坑

第 16 図　ＳＫ３・４・９土坑出土遺物

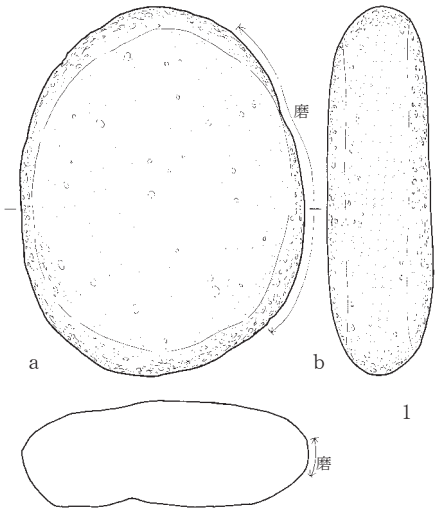


第 17 図　ＳＫ 5・14・16 土坑・ピット 13・16・20 出土遺物



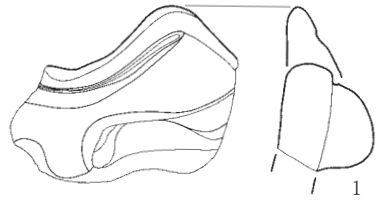
ピット4

0 5cm (S=2/3)



ピット35

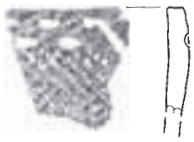
0 10cm (S=1/3)



0 10cm (S=1/3)

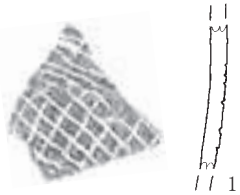
ピット39

0 5cm (S=1/3)



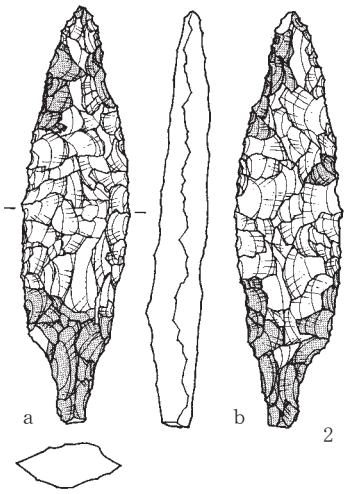
ピット49

0 5cm (S=1/3)



ピット52

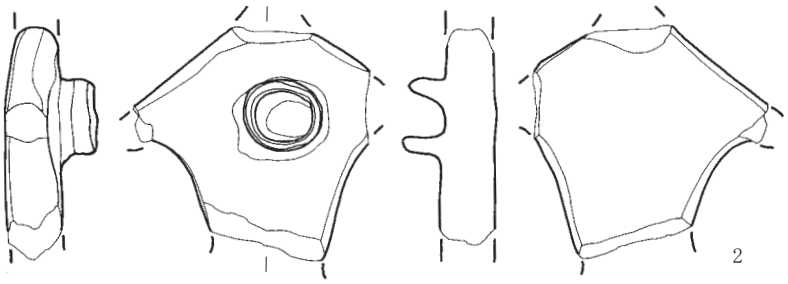
0 5cm (S=1/3)



ピット34

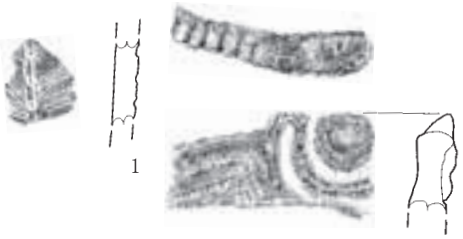
0 5cm (S=2/3)

0 10cm (S=1/3)



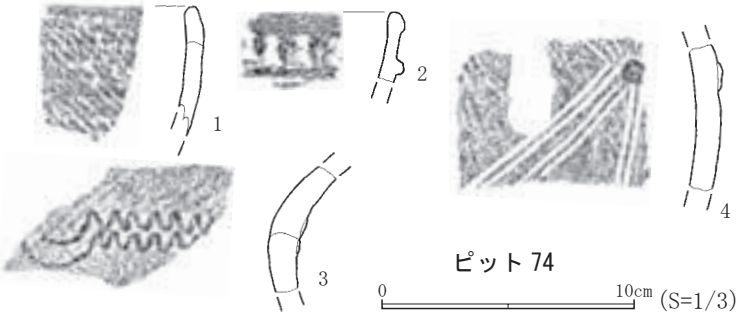
ピット61

0 5cm (S=1/2)



ピット72

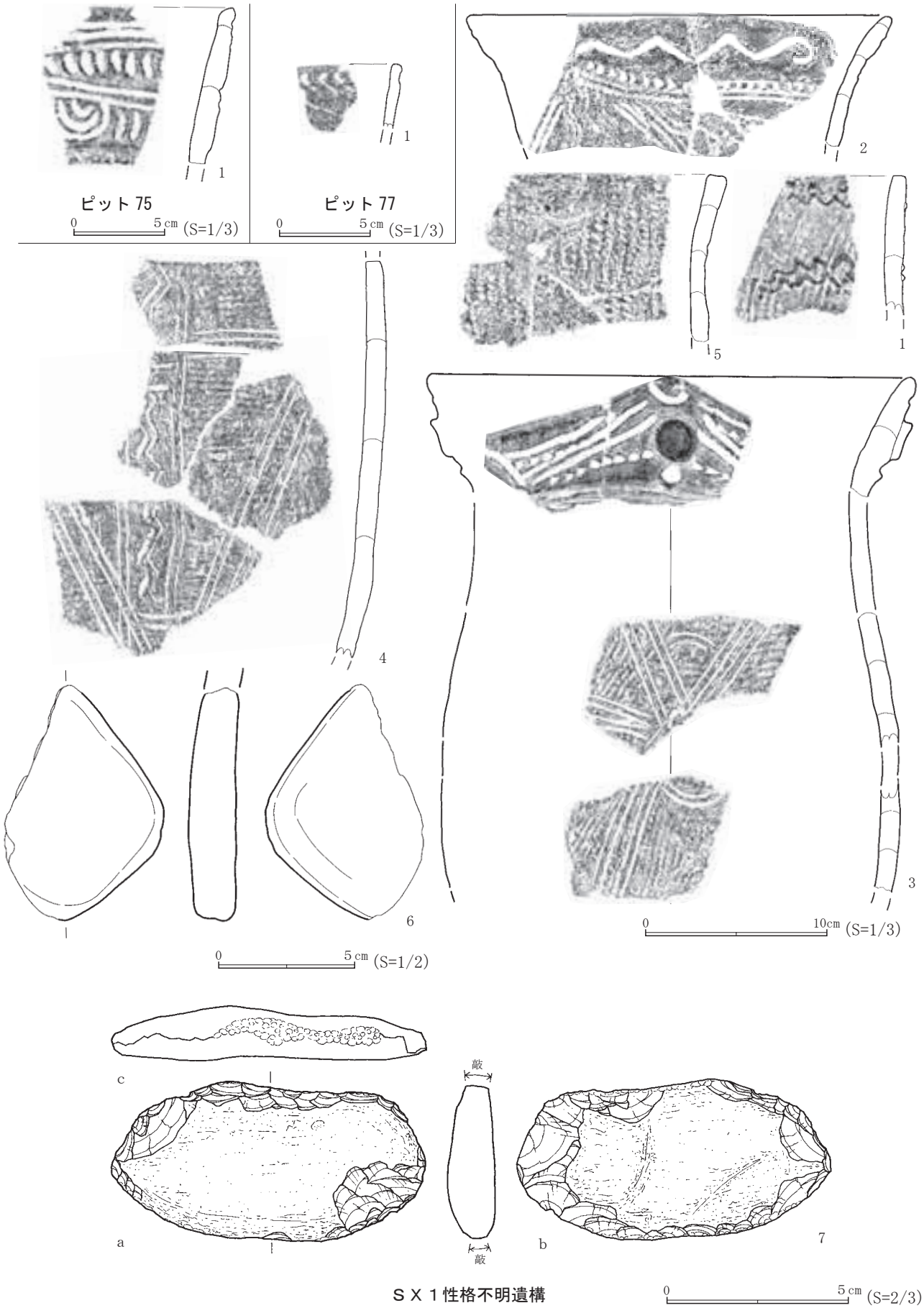
0 10cm (S=1/3)



ピット74

0 10cm (S=1/3)

第18図　ピット4・34・35・39・49・52・61・72・74出土遺物



第 19 図　ピット 75・77・ＳＸ１性格不明遺構出土遺物

SK3

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第16図 1	SK3	1～4層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR　口縁部折り返し	図版9-1

挿図番号	遺構	層位	種別・部位	径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	写真図版
第16図 2	SK3	1～4層	土製円盤	2.7			0.5	4.6	地文不明瞭	図版9-2

挿図番号	遺構	層位	種別	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第16図 3	SK3	1～4層	石器	石鏃	瑪瑙	20	17	5	1.1	無茎鏃	図版9-3
第16図 4	SK3	1～4層	石器	磨石	安山岩	123	79	46	674.0	磨凹石	図版9-4

SK4

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第16図 1	SK4	1～3層	縄文土器	深鉢・口縁部	櫛歯状工具による横位平行沈線文　繊維混和	図版9-1
第16図 2	SK4	2 層	縄文土器	深鉢・口縁部	磨滅激しい　地文縄文RL？　刺突が施された横位粘土紐貼付　半截竹管による平行・小波状沈線文	図版9-2
第16図 3	SK4	2 層	縄文土器	深鉢・胴部下端～底部	磨滅激しい　地文縄文RL? 口径－ 器高(18.8) 底径13.7	図版9-3
第16図 4	SK4	2 層	縄文土器	深鉢・胴部	ボタン状貼付　結節浮線文	図版9-4

SK5

挿図番号	遺構	層位	種別	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第17図 1	SK5	1・2層	石器	磨製石斧	ヒン岩	89	55	28	221.0		図版9-1

SK9

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第16図 1	SK9		縄文土器	深鉢・口縁部	太い粘土紐貼付　その縁を細い粘土紐が縁取られ部分的に鋸歯状文が構成される	図版9-1

SK14

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第17図 1	SK14	1～3層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文？　波状口縁　波頂下に縦位粘土紐貼付文　平行沈線文　半截竹管による刺突が施された2条の横位貼付文	図版9-1

SK16

挿図番号	遺構	層位	種別	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第17図 1	SK16	1～3層	石器	石核	珪質頁岩	36	60	43	64.3		図版9-1

P4

挿図番号	遺構	層位	種別	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第18図 1	P4	1・2層	石器	石核	珪質頁岩	50	48	23	44.7		図版10-1

P13

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第17図 1	P13	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文不明瞭　縄文LR？粘土紐貼付による梯子状文	図版10-1

P16

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第17図 1	P16	1・2層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　鋸歯状貼付文	図版10-1

P20

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第17図 1	P20	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部に沿って3条の横位沈線文　繊維混和	図版10-1

P34

挿図番号	遺構	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第18図 1	P34	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　口縁部に沿って太い粘土紐貼付　その一部を把手状に盛り上げる	図版10-1

挿図番号	遺構	層位	種別	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第18図 2	P34	1 層	石器	尖頭器	珪質頁岩	82	21	12	16.3	基部と先端部に二重パティナあり	図版10-2

P35

挿図番号	遺構	層位	種別	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考	写真図版
第18図 1	P35	1～3層	石器	石皿	安山岩	146	113	42	810.6		図版10-1

第５表　遺構出土遺物観察表（１）

P39

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第18図 1	P39	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部に沿って角棒状工具による沈線文 その下に斜行する沈線文が「く」字状に施文	図版10-1

P49

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第18図 1	P49	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文羽状縄文 口縁部に沿って円形竹管による刺突文を交互に2段施される 繊維混和	図版10-1

P52

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第18図 1	P52	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文網目状撚糸文 繊維混和	図版10-1

P61

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第18図 1	P61	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR？ 波状口縁 口縁に沿って棒状工具による連続刺突文が施された3条の粘土紐貼付 その波頂下にボタン状貼付	図版10-1

挿図番号	遺 構	層 位	種 別・部 位	径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考	写真図版
第18図 2	P61	1 層	板状土偶・体部		6.2	6.3	2.5	61.0	胸部に粘土紐を円形に貼付	図版10- 2

P72

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第18図 1	P72	1・2層	縄文土器	深鉢・胴部	半截竹管による縦位沈線文 櫛歯状工具による斜位沈線文 交点に円形刺突文	図版11-1
第18図 2	P72	1・2層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部に細い粘土紐が列状に貼付 口縁部にボタン状貼付と太い粘土紐と沈線文による縁取り押引き沈線文による施文	図版11-2

P74

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第18図 1	P74	1～3層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文不明瞭 ループ文(多段)？ 繊維混和	図版11-1
第18図 2	P74	1～3層	縄文土器	深鉢・口縁部	隆帯貼付 棒状工具による押引き文 繊維混和	図版11-2
第18図 3	P74	1～3層	縄文土器	深鉢・頸部	地文縄文LR？ 粘土紐貼付による小波状文	図版11-3
第18図 4	P74	1～3層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文 半截竹管による縦位・斜位沈線文 交点にボタン状貼付	図版11-4

P75

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第19図 1	P75	2 層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	横位・斜位沈線文 その間に弧状・半環状の沈線文	図版11-1

P77

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第19図 1	P77	1 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文ループ文(末端環付)？ 繊維混和	図版11-1

SX1

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第19図 1	SX1	1・2層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 口縁部に2条1組の粘土紐貼付による鋸歯状文	図版11-1
第19図 2	SX1	1・2層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	口縁部波状沈線文 平行沈線間刺突文 半截竹管沈線文による施文 口径推23.0 器高(7.3) 底径-	図版11-2
第19図 3	SX1	1 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文無節 波状口縁 波頂下に弧線文・ボタン状貼付・刺突文 その両脇に3条の横位沈線文と竹管押引文 胴部に半截竹管による横位・斜位沈線文とその交点を挟んで向き合う弧線文	図版11-3
第19図 4	SX1	1 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文 半截竹管による縦位・横位・斜位沈線文と波状文	図版11-4
第19図 5	SX1	1・2層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文0段多条	図版11-5

挿図番号	遺 構	層 位	種 別・部 位	径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考	写真図版
第19図 6	SX1	1・2層	板状土偶・体～脚部		8.7	5.9	1.7	80.9		図版11- 6

挿図番号	遺 構	層 位	種 別	器 種	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	備 考	写真図版
第19図 7	SX1	1・2層	石器	石錘	泥岩	44	87	15	60.3		図版11-7

第６表　遺構出土遺物観察表（２）

４．遺構外出土遺物

①遺物包含層出土遺物

遺物包含層はＡ・Ｂ区で遺存状況が良好であり、斜面際のＣ・Ｄ区でも確認されたが、工事掘削深度が遺物包含層中に達しないため、調査していない箇所が大半である。したがって、遺物包含層出土の遺物はほとんどがＡ・Ｂ区からのものである。

縄文土器　今回の調査において遺物包含層（基本層Ｉ層）から出土した土器は計 15, 104 点である。時期的には縄文時代前期後半のものを中心としているが、前期前半にあたる遺物も相当数出土している。すべて同一の層中から混在した状態で出土しており、過去の三神峯遺跡の調査のように、層位的に遺物の時期を分けることは不可能であった。

掲載した縄文土器は計 164 点である。時期別に掲載することを目指して、できる限り土器型式別に分類を行い、型式の古いものから順に掲載した。破片が大多数を占めるため、時期の検討が困難なものはより近いと思われる型式に含めて掲載し、その旨を文章で示した。ただし、大木３・４式の判別において、分類作業の過程で解釈を誤った部分があり、大木５・６式に含めるべき遺物を大木３・４式に混在させて掲載してしまった。時間的な制約により、図版は当初の順番のまま掲載するが、型式の異なるものについてはその旨を文章で示している。

第 20 図―１～４・10 は地文に斜行縄文が施されている。いずれも単節であり、０段多条のもののなどがある。第 20 図―６～９は地文に羽状縄文が施されている。６は０段多条、８は直前段多条の原体を用いている。９は結束の羽状縄文である。第 20 図―５は口縁部周辺に末端環付のループ文が施されている。ループ部分のみが多段に施されている。上記の１～ 10 は、いずれも胎土に繊維が混和されており、口縁部周辺をも含めて文様はシンプルで、縄文原体とその組み合わせで表現されている。それらの特徴から大木１式に比定されるものと考えられる。ただし、1・４は口唇部や口縁部に刻みが施され装飾されていることから、大木２式に含まれる可能性も考えられる。

第 20 図―11・16・22 は地文に撚糸文が施されている。11 は絡条体に２条一組の撚紐を巻きつけて、菱形状の文様を形成している。16 には装飾として連続刺突文が加えられている。22 は縦走Ｌ撚糸文を施した後、粘土紐を横位に貼り付け、そこに連続刺突を施している。第 20 図―12 ～ 15・20 は地文に網目状の撚糸文が施されている。12 には口縁部の装飾として連続刺突文が３列施されている。第 20 図―17･25 は装飾の施された口縁部破片である。17 は波状口縁の波頂部から刺突の施された３条の粘土紐が縦位に貼り付けられ、口縁に沿って刻みの施された粘土紐が横位に貼り付けられている。その上下には沈線文が横位・斜位に施され、波頂部から垂下する粘土紐と粘土紐の間には、刺突が施されている。地文は不明瞭であるが、斜行縄文と考えられる。25 は口縁部に沿って連続刺突の施された粘土紐が貼り付けられている。第 20 図―19 は地文に結節回転文が施され、口縁に沿って沈線文が施されている。第 20 図―18・21 は口縁部付近に結節回転文が施され、その下部に単節の縄文が施文されている。18 は口縁部に沿って沈線文、刺突文で装飾されている。第 20 図―23・24・26 は、地文に斜行縄文が施されている。23 はＬＲ縄文、24・26 はＲＬ縄文である。第 21 図―27 は地文にＬＲ縄文を施文し、口縁部に波状の沈線を施している。第 21 図―28 は波状口縁の波頂部から刺突の施された粘土紐が縦位に貼り付けられ、口縁に沿って刻みの施された粘土紐が横位に貼り付けられている。口唇部から横位貼付文の間には連続刺突文が２段施されている。第 21 図―29・31・33 ～ 38 は、地文に「Ｓ字状連鎖沈文（撚糸文）」（撚りのない紐を巻いた短軸絡条体）が施されている。31 は、３段に施されたＳ字状連鎖沈文と２条一組の撚紐からなる撚糸文を交互に組み合わせて施文している。第 21 図―30 は沈線によって口縁部を装飾し、その下部に 31 と同様の２条一組の撚紐からなる撚糸文を施している。第 21 図―32 は地文に結束縄文が施されている。上記の 11 ～ 38 は、いずれも胎土に繊維が混和された土器で、地文に斜行縄文や撚糸文が施され、口縁部付近に沈線や刺突、粘土紐貼付などによる装飾が施されている。それらの特徴から大木２式に比定されるものと考えられる。さらに、文様の特徴から 11 ～ 16 までは大木２ａ式、27 ～ 38 までは大木２ｂ式と考えられる。

第21・22図―40・44・68は、半截竹管による平行沈線の間に連続刺突文が施されている。第21図―45は半截竹管による平行沈線の間に、押引による連続爪形文が施されている。第22図―48・51・54・61・63・64・66は、粘土紐貼付文に刻みが施されたもので、48・51は半截竹管による沈線文、54・61は連続刺突文、63・66はその両方の組み合わせ、64は円形竹管による刺突文が施文されている。第22図―50・56・57・59・65・71は、沈線文が施されたものである。50は胴部全体に鋸歯状の沈線を組み合わせ、菱形の文様にしている。56は横位の沈線と円形の刺突文との組み合わせである。57は格子状の沈線である。59は横位・斜位の沈線と連続刺突との組み合わせである。65は口縁に沿って波状に施された２条の沈線間に、斜位の沈線を施したものである。71は横位や格子状に施された沈線文と、口唇部から口縁に向かって転がされた撚糸文の組み合わせである。第22図―55・62は、連続刺突が施されたものである。55は半截竹管、62は丸棒状工具によって横位に施文されている。また、62は円形竹管による刺突文が施されている。第22図―67・70は、円形竹管による刺突が施されたものである。70は円の中に沈線を施し円を２分割している。第22図―69は、地文に付加条ＬＲ縄文＋ｒを施されている。上記の40・44・45・48・50・51・54～57・59・61～71は、竹管工具による施文や沈線、刻み目を持つ粘土紐貼付文などが施されており、それらの特徴から大木３式に比定されるものと考えられる。

第23図―72・73・79は、小波状の粘土紐が貼り付けられている。72は口唇部から口縁の内側にかけての貼り付けである。73は粘土紐貼付文の下部にボタン状の貼付が見られる。第23図―78は、地文のＬＲ縄文の上から沈線文を施したものである。上記の72・73・78・79は、細い粘土紐の貼り付けによる小波状文や、沈線文が施されており、それらの特徴から大木４式に比定されるものと考えられる。

第23図―49・86・87・88・89は、口縁を全周する肥厚帯の上下に刻みを施されたものである。大木５式の前半段階に多用される鋸歯状の粘土紐貼付文から引き継がれた文様形態とされ、大木５式の後半段階のものと推測される。第22図―52は、大木５式の前半段階で口唇部に付加されていた、鋸歯状の粘土紐が簡素化されたものと考えられる。第23図―75・82・83は、太く短い粘土紐を鋸歯状に整形して口唇部に貼り付けたものである。75には粘土紐上に刺突を施している。82・83の口縁部周辺には、細い粘土紐貼り付けによる鋸歯状文が施されている。第23図―80・81・84・90は粘土紐を鋸歯状に貼り付けたものである。横位や縦位が主体となる。84は横位に貼り付けた粘土紐に連続刺突文を施し、その下段に鋸歯状の粘土紐を貼り付けている。90は鋸歯状の粘土紐貼付文と沈線文を組み合わせている。第23図―85は、波状口縁部に梯子状の粘土紐を渦巻状に貼り付けている。渦の中心に穿孔が施されている。第23図―91・92・93は、口縁を全周する肥厚帯の、上下どちらか一方のみに刻みを施したものである。91・93は肥厚帯の下部に、92は上部の口唇部に施文されている。上記の49・52・75・80～93は、細い粘土紐を短く切って折り重ねたような鋸歯状の連続山形文を貼り付けるものや、梯子状に組まれた粘土紐を貼り付けるもの、太く短い粘土紐を鋸歯状に整形して口唇部に貼り付けるもの、肥厚した口縁部に刻みを施すことによって、鋸歯状の口縁部を形成するものなどがあり、それらの特徴から大木５式に比定されるものと考えられる。

第21・22・25～27図―39・41・46・47・58・100・116・118・124・125・128・133・134は、頸部から胴部に沈線文が施されている。半截竹管による平行沈線を主体とし、横線・縦線・斜線・弧線・波線などを組み合わせて表現している。58は口縁部に沿って刻みの入った粘土紐が貼り付けられ、沈線文の上からボタン状貼付が付加されている。100は球胴形深鉢である。胴部に沈線文とボタン状貼付文が施され、肥厚した口縁部には波状口縁の波頂部に太くて短い粘土紐が縦位に貼り付けられ、他の部位には太い沈線や刺突が施されている。116は同じく球胴形深鉢である。波状口縁の波頂部には刺突が施され、胴部には沈線文が施されている。118は長胴形深鉢である。肥厚した口縁部に太い沈線と刺突文、胴部に沈線文が施されている。頸部には刻みの入った粘土紐貼付文が施されている。124は同じく長胴形深鉢である。刻みの入った粘土紐を横位に貼り付けて、口縁部と胴部を区切っている。胴部には沈線文とボタン状貼付文が施されている。125は長胴形深鉢の胴部であり、沈線文の交差する場所

にボタン状貼付文が付加されている。128 は肥厚した口縁部に窓枠状の太い沈線が施され、その周縁に刻みが施されている。頸部から胴部に沈線が施され、その上にボタン状の貼付文が付加されている。第 21・24・27 図―42・43・99・135・136 は、平行沈線の沈線間に連続刺突文や連続爪形文が施されたものである。42 は長胴形深鉢で胴部に施された並行沈線の間に連続爪形文が施され、その上にボタン状貼付文が添付されている。43 は長胴形深鉢で、肥厚した口縁部の下端に刻みが施されている。胴部は平行沈線の間に連続刺突文が施されている。99 は長胴形深鉢で、波状口縁の波頂部直下に環状の粘土紐が貼り付けられている。胴部は平行沈線間に連続刺突文が施され、交点にボタン状貼付文が付加されている。136 は長胴形深鉢の胴部と口縁部の間に、沈線間に連続刺突の施された文様が配置されている。胴部に付加されたボタン状貼付文の位置は、波状口縁の波頂部の垂直下に相当している。第 22・25・26 図―53・60・110・120 はボタン状貼付文の付されたものである。53 は波状口縁の波頂部直下にボタン状貼付文と棒状貼付文が付加され、周辺に刺突が施されている。60 は球胴形深鉢の口縁部に沈線文とボタン状貼付文が施されたものである。110 は球胴形深鉢で、肥厚した口縁部下端に刻みが施され、波状口縁の波頂部直下にボタン状の貼付文が付されている。120 は長胴形深鉢で、肥厚する口縁部には刻み、連続刺突、沈線などが施され、胴部には粘土紐貼付による環文･鋸歯状文や連続刺突を施した粘土紐貼付文、ボタン状貼付文が施されている。第 23・25 ～ 27 図―74・76・77・101・102・105・117・119・121 ～ 123・126・129・130 は、肥厚した口縁部の隆帯への施文である。74・76・101・102・105・119・126・130 のように、太く短い粘土紐などを貼り付け、器面から盛り上げて表現する手法と、77・117・121 ～ 123・129 のように太い沈線や刺突で器面を凹ませて表現する手法とがある。第 24 ～ 26 図―94・96 ～ 98・103・104・106・107・109・114・127・137 は球胴形深鉢である。94 は胴部破片であるため装飾は不明であるが、地文に結束羽状縄文が施されている。96 は、今回の調査において、土器の口縁部装飾帯がほぼ全周する形にまで復元できた唯一の資料である。地文に結束羽状縄文が施され、口縁部の２箇所に大型のボタン状貼付文、他の１箇所に蕨手状・棒状の貼付文が付加されている。合計３箇所に配置された貼付文の間には、細い粘土紐による縁取りや、鋸歯状文などが貼り付けられている。97 は口縁から胴部にかけて結節浮線文で装飾されている。98 は口縁部周辺に細い粘土紐を貼り付けた装飾が施され、胴部に結束羽状縄文、Ｓ字状連鎖沈文（撚糸文）が交互に施文されている。底部裏面には網代痕が確認される。114 は狭い口縁部に刻みの入った粘土紐を貼り付けている。貼付部分を観察すると、貼付前の粘土紐に鋸歯状の刻みを残したまま口縁に貼り付けた痕跡が認められる。前型式である大木５式の鋸歯状装飾帯の名残である可能性が考えられる。頸部には２条の沈線の間に変形爪形文が施されている。胴部にかけては沈線文で装飾している。137 は突起の付いた口縁部である。円形浮文などで装飾され、その他の箇所は格子目状文や三角形彫去による陰刻などで装飾している。第 25・27 図―108・131・132 は、粘土紐を貼り付けた装飾である。108 は細く短い粘土紐を口端部から連続して垂下させ、口縁部には横方向や格子状に貼り付けている。131 は口唇部に刻みを施され、口縁部に沿って粘土紐を横位に２段貼り付けている。地文はＬＲ縄文である。132 は幅の広い口縁部に刺突の施された粘土紐貼付文が付加され、それを境に上部は斜位沈線、下部には鋸歯状沈線が施されている。第 25・27 図―111 ～ 113・138 は深鉢の胴部破片である。111 ～ 113 はＳ字連鎖沈文（撚糸文）が縦方向に施文されている。138 は地文にＬＲ縄文を施され、破片の上端に沈線文が認められる。第 25 図―115 は、肥厚して幅の広い口縁の下端に刻みが施されている。地文にＬＲ縄文が施されている。第 27 図―139・140 は胴部の破片資料である。地文に小形の巻貝による回転文が施され、半截竹管による平行沈線を施されている。上記の 39・41 ～ 43・46・47・53・58・60・74・76・77・94 ～ 140 には、結節浮線文・竹管文・ボタン状貼付文などが施され、肥厚した口縁部には太く短い粘土紐による装飾が付加されている。また、これらの中には球胴形深鉢が含まれている。これらのことから、大木６式に比定されるものと考えられる。

141 は、口縁部に沿って３条の縄文Ｌ原体を押圧している。142 では、三角形陰刻文と半截竹管による押引文が

組み合わさっている。143 は、押引文、三角形陰刻文、沈線文が組み合わされている。上記の 141 ～ 143 は、その特徴から大木７式以降に比定されるものと考えられる。

144 ～ 149 は、ミニチュアである（第 28 図）。すべて器面の摩滅が激しく、地文などを観察することはできなかった。胎土に繊維が混和された痕跡等も確認できなかった。

150 から 163 は、型式を判別できなかったものや、底部の破片などである（第 28 図）。150 の地文は不明瞭であるがＲ縄文であろうか。口唇部に円形の連続刺突文が施されている。151 は無文土器である。口縁まで４本の輪積みの痕跡が明瞭に観察される。152 は地文にＲＬ縄文が施されている。155 は地文にＬ縄文の施された深鉢である。器形は大木６式の球胴形深鉢に類似するが、詳細は不明である。153・154・156 ～ 163 は底部の破片である。153・154・156・157・159 ～ 161・163 は表面の摩滅が激しく、地文などを観察することはできなかった。胎土に繊維を混和された痕跡等も確認できなかった。156 は底部裏面にスダレ状の圧痕が認められる。157・159・160・161 には、底部裏面に網代痕が確認される。158 は摩滅が激しいが、地文に斜行縄文が施されていると思われる。底部裏面に網代痕が確認される。162 は摩滅が激しいが、地文はＲＬ縄文と考えられる。底部裏面には木葉痕が確認される。

第 28 図－ 164 は、地文にＲＬ縄文を緻密に施し、沈線文と磨消縄文によって入組帯状文を構成するものと推測される。口縁部の瘤状の装飾には三叉文が施されている。縄文時代後期末葉の瘤付土器（金剛寺式）に比定されるものと考えられる。

土製品　今回の調査において遺物包含層（基本層Ｉ層）から出土した土製品は計 20 点である。このうち掲載した土製品は計 15 点である（第 29 図）。それぞれ種類別に掲載する。

165 は土製耳飾である。断面形は鼓状を呈し、中央部に穿孔が施されている。

166・167 は土器片錐である。166 は器面に刺突文の施された土器片を素材とし、平面形はほぼ方形に加工されている。4 辺すべてに刻みが施されている。167 は摩滅が激しく、文様は不明である。隅丸の長方形に加工された土器片の４辺すべてに刻みが施されている。

168 から 172 は土製円盤である。大きさはさまざまで、170 は直径約 6.5 ㎝、172 は直径３㎝である。また、171 は平面楕円形を呈する。169 は繊維土器を素材としている。

173 から 179 は土偶である。173 は板状土偶の腕部である。表面に円形刺突文を充填しており、「手」にあたる部分には穿孔が施されている。他の部分に文様は施されていない。174 には顔面の表現がなされていないものの、板状土偶の頭部であると考えられる。文様は施されていない。175 は板状土偶の頭部と考えられる。２箇所穿孔されていることから、顔面を表現しているものと考えられる。その他に文様は施されていない。176 は、板状土偶の脚部である。表面に円形刺突文を充填しており、沈線で渦巻きを施している。裏面にも同じく円形刺突文を充填しているが、沈線で鋸歯状文が施された範囲内には刺突が施されていない。側面は無文である。177 は板状土偶の体部と考えられる。表面は半截竹管による縦位沈線文、裏面は横位や山形の沈線文で装飾している。178 は板状土偶の脚部と考えられる。文様は認められないが、脚部の先端にわずかに「脚」の表現が確認できる。179 は板状土偶の胴部から脚部である。表面に土偶整形時の指頭痕が認められる。その他に文様は施されていない。

石器　遺物包含層（基本層Ｉ層）から石製品を含めて 1394 点の石器が出土した。出土した石器は 26 種の器種に分類し、各種の点数は以下のとおりである。石鏃無茎 91 点、石鏃有茎３点、尖頭器７点、石箆 12 点、石錐５点、石匙縦型 19 点、石匙横型３点、楔形石器３点、石核 29 点、掻器・削器 44 点、二次加工のある剥片 126 点、微細剥離痕のある剥片 90 点、剥片 836 点、砕片１点、磨製石斧６点、石錘１点、石皿６点、磨石･敲石 61 点、凹石２点、砥石３点、台石１点、礫・礫片 34 点、原石１点、不明４点、異形石器３点、垂飾２点、石剣１点である。

石材使用の傾向としては、珪質頁岩が全体の８割近くを占め、流紋岩、碧玉、鉄石英、凝灰岩、玉髄、メノウな

どが認められる。その他に黒曜石が 24 点出土した。透明度の高い漆黒のものと、黒に灰色の部分が縞状に入るものとの２種に大別される。以下に第 33 ～ 45 図の掲載遺物の説明を行う。なお、記載における表と裏は、実測図中のａとｂもしくはｃに対応している。素材の背面・腹面が認められる場合には背面・腹面という言葉も併用する。

180 から 195 は石鏃である（第 30・31 図）。180 は珪質頁岩製のもので、細身の平基無茎である。整形剥離は斜行に丁寧に施されている。181 は流紋岩製、182 は珪質頁岩製の抉りの浅い凹基無茎である。181 の裏面には素材の腹面が残存する。182 には素材の腹面・背面の一部が残存している。183 から 192 は抉りの深い凹基無茎である。183 は玉髄製である。器体中央から脚部にかけて肥大し、尖端部はａ面からの力により折損している。184 は珪質頁岩の剥片を素材とし、ｂ面には腹面が残存する。周縁調整はａ面からｂ面の順序で行われている。185 は珪質頁岩製である。全体的な形態は二等辺三角形を呈し、脚部はわずかに外側に開いている。尖端部はｂ面からの力により折損する。186 は珪質頁岩製である。形態は均整の取れた二等辺三角形を呈し、脚部の抉りは深い。周縁調整は丁寧に施されている。187 は珪質頁岩製である。形態は均整の取れた二等辺三角形を呈し、脚部の抉りはやや浅い。尖端部はａ面からの力により折損している。188 は流紋岩製のやや厚手の剥片を素材としている。189 は鉄石英製である。形態は三角形を呈し、尖端部は両側縁を抉るように調整を施して尖らせているが、尖端部はｂ面からの力で折損している。尖端部の形態は 185 と共通している。190 は珪質頁岩製である。両側縁はやや内反し、脚部の抉りは深い。尖端部には衝撃剥離が認められる。191 は碧玉の剥片を用いている。素材の剥離面が背面と腹面の両面に残存する。両側縁は弧を描き、脚部の抉りは深い。192 は珪質頁岩製の剥片を用いている。ａ面とｂ面にはそれぞれ素材の背面と腹面が大きく残存し、調整は周縁調整に留まる。尖端部はａ面からの力により折損している。

193・195 は有茎石鏃である。193 は珪質頁岩製の細身で形態が二等辺三角形を呈するものである。尖端部はａ面左側縁から折損している。器体中央の両側縁に浅い括れが認められるが、整形剥離面よりも新しい二重パティナが認められる。195 は玉髄製のものである。ｂ面には素材の腹面が残存している。尖端側は折損している。

194 は珪質頁岩製の縦長剥片を素材とし、細身の二等辺三角形状を呈した、抉りの浅い凹基無茎鏃である。脚部は浅い凹基である。両側縁の浅い抉りは周縁調整よりも新しく、二重パティナが認められる。

196 から 203 は縦型の石匙、204・205 は横型の石匙である（第 31・32 図）。204 の１点を除き、素材は全て珪質頁岩である。196 は横長剥片の打面側を右に用いており、素材の背面と腹面が残存している。つまみ部は殆ど認められない。197 は縦長剥片の打面側を上に用いている。右側縁側に自然面が残存している。素材の剥離面と周縁調整の剥離面には風化の度合いに違いがあり、二重パティナが認められる。198 は縦長剥片の打面側を上に用いている。ａ面の整形剥離は押圧剥離により丁寧に施されている。つまみ部に二重パティナが認められている。199 は縦長剥片の打面側を上に用いている。200 は横長剥片の打面側を右に用いている。背面・腹面は大きく残存している。ｂ面の調整を施した後にａ面の調整に移っている。201 は縦長剥片の打面側を上に用いている。つまみ部分には二重パティナが認められる。202 は縦長剥片の打面側を上にして用いている。点状の打面が認められる。器面は丁寧な押圧剥離により覆われている。つまみ部の作出形態が緩やかである。203 は縦長剥片の打面側を上に用いている。整形剥離として器面に押圧剥離を施した後、右側縁の周縁調整には急斜度調整を施している。つまみ部分の作出は緩やかである。204 は玉髄製の横長剥片の打面側を上に用いている。周縁調整には急斜度調整を施している。つまみ部の剥離痕は素材や周縁調整部分とは風化の度合いが異なっており、二重パティナである。205 は横長剥片の打面側を上に用いている。打面は平坦打面である。末端と左側縁は折損している。器面に整形剥離は及ばず、周縁調整に留まっている。

206 から 211 は石箆である（第 32･33 図）。素材は 211 の流紋岩を除き、全て珪質頁岩である。206 から 208・212 は基本的に片面調整のものである。206 は厚手の大形横長剥片の打面側を左に用いている。両側縁の整形剥離や周縁調整をみると、素材の変形が著しいことが窺える。刃部は浅い弧状に整形されている。また、刃部に施され

た調整剥離の稜がやや摩滅している。207 は縦長剥片の打面側を下に用いている。背面側には自然面が大きく残存している。両側縁の整形剥離をみると、素材の変形が著しいことが窺える。腹面ではバルブの除去が行われている。208 は厚手の縦長剥片の打面側を下に用いている。刃部は丁寧な周縁調整により半円状に作出されている。209 は厚手の横長剥片の打面側を右に用いている。 b 面には素材の腹面が認められ、調整剥離は密ではない。刃部は浅い弧状を呈している。210 は一部残存する腹面の様子から、縦長剥片を用いたと考えられる。両面の求心状の整形剥離をみると、大形剥片が素材となっている。211 は横長剥片の打面側を右に用いている。 b 面の整形剥離が完結しておらず、周縁調整があまり認められないことから、未製品と考えられる。

213 から 219 は尖頭器である（第 33 図）。218 は流紋岩、219 は頁岩を素材とし、他は全て珪質頁岩を用いている。213 は厚手の柳葉形尖頭器である。断面形は菱形を呈する。押圧剥離による整形剥離や周縁調整によって器面が覆われている。大形剥片を素材としている。214 は大形のものであり、部分的に旧剥離面が残存する。周縁調整は b 面から a 面の順で行われている。尖端は丸味を帯びている。215 は未製品である。 a 面には剥離面の風化の度合いの異なる二重パティナが基部側と左側縁に認められる。 b 面は整形剥離が全体を覆い、両側縁に周縁調整が施されている。また、器厚を減じるために整形剥離を行っており、階段状剥離が起きている。216 は素材に残る剥離面や整形剥離が全体を覆い、細かい周縁調整は認められない。そのため未製品と考えられる。217 は横長剥片の打面を右に用いている。218 は縦長剥片を素材としている。腹面側には整形剥離が施されず、左側縁に周縁調整が部分的に施されている。219 は大形で厚手の剥片を素材としている。整形及び調整剥離面の稜は比較的鋭いが、素材の剥離面は手擦れなどにより、稜が摩滅している。二重パティナが認められ、再加工品の可能性が高い。

220 から 222 は石錐である（第 34 図）。220 は珪質頁岩製である。両側縁及び尖端部と a 面・ b 面の剥離面の風化の度合いが異なっており、二重パティナが認められる。尖端部は摩滅している。221 は珪質頁岩製である。尖端部は左側縁側から折損している。222 は流紋岩製であり、厚手の剥片を素材としている。錐の軸部分は短い。

212、223 から 231 は全て珪質頁岩を素材とした掻器・削器・二次加工のある剥片である（第 33 ～ 35 図）。212 は横長剥片を用いた掻器である。腹面ではバルブの除去が行われている。周縁調整には浅い調整が施されている。223 は厚手の縦長剥片を素材とした掻器で、肥厚した末端側にスクレイパーエッジが作出されている。素材の打面は平坦打面であり、厚みがある。末端側に一部自然面が残存する。両側縁に微細剥離痕が認められる。224 は斜軸の横長剥片を用いた二次加工のある剥片である。両側縁は a 面と b 面が交互に剥離されており鋸歯状を呈している。素材の打面は平坦打面であり、３ヶ所の加撃痕が認められる。その内の 1 点は素材の剥離時に同時割れを起こしている。末端側には自然面が残存する。両側縁に二重パティナが認められる。225 は縦長剥片を用いた削器である。打面には打面調整が施されている。左側縁には連続する浅い二次加工が、右側縁には押圧剥離による調整が施されている。226 は捩れのある縦長剥片を用いた二次加工のある剥片である。右側縁には一部後世の欠損が認められる。右側縁と左側縁の末端側にはインバースリタッチが施され、尖端部が作出されている。227 は捩れのある縦長剥片を用いた削器である。打面には打面調整が施されている。末端側と右側縁の中ほどに、連続するインバースリタッチが認められる。228 は方形状の剥片を用いた削器である。両側縁とも二次加工は浅いが、鋸歯縁状にスクレイパーエッジを作出している。229 は方形状の剥片を用いた掻器である。末端側にはスクレイパーエッジを作出している。230 は方形状の剥片を用いた複合掻器である。周縁に二次加工によるスクレイパーエッジが作出されている。打面は自然面であり、背面にも自然面が残存している。自然面の様子から原石は亜角礫と考えられる。

232 から 245 は石核である（第 35 ～ 38 図）。232 の黒曜石、244 の鉄石英の２点を除き、全て珪質頁岩を用いている。232 はサイコロ状のものである。剥離作業面は主に b 面に認められる。 a 面に自然面が認められ、その形状から原石は角礫であったと考えられる。233 は原石粗割段階の厚手の大形剥片を用いた盤状求心石核である。両面から横長剥片を作出している。 b 面の一部に自然面が残存する。234 は厚手の大形剥片を素材としている。元々大形石核

であったものを分割し、分割面を打面として剥片剥離を行っている。小形の不定形剥片が作出されている。235 は一回り大きな石核を半割し、半割面を打面として剥片剥離が行われているものである。236 は原石粗割段階の大形剥片を素材としている。 f 面に一部自然面が残存する。打面には打面形成剥離が施されている。

237 から 241 は厚手の剥片を素材としている。237 は、石核から剥離されたものを更に石核として用いている事例である。238 では、打面が固定され、 a 面を作業面として連続的に剥片剥離が行われている。但し、作出される目的剥片が小振りなため、何らかのブランクであった可能性も考えられる。239 では、打面を転移させての剥片剥離が行われている。 a 面の左側には被熱による剥離が認められる。240 は盤状求心石核で、横長剥片を作出した後に打面を固定し、連続的に剥離を行っている。241 は厚手の剥片を素材としている。 b 面の剥片剥離を行った後、打面転移をして素材を剥離した可能性がある。242 は分割礫を素材としている。背面を打面として横長剥片を剥離している。原石は亜角礫であったと考えられる。243 では、原石を分割せずに剥片剥離を行ったと考えられる。作出されている剥離面は大きく、打面転移が頻繁に認められる。また、石核が小形化したため、 e 面を打面とした剥片剥離が行われている。244 は小形亜円礫を原石としている。原石の平坦部分を打面として剥片剥離を行っているが、連続して目的剥片は作出されていない。245 は分割礫を素材としている。分割面を打面として剥片剥離を行っている。原石は亜円礫であったと考えられる。

246 から 248 は磨製石斧である（第 38 図）。246 は輝緑岩を用いたものである。全面に研磨が施されていたと考えられるが、剥落が著しい。刃部に欠損が認められ、使用の際に生じたものと考えられる。247 は珪質凝灰岩を用いたものである。全面に丁寧な研磨が認められる。刃部は直刃であり、横方向の研磨が認められる。刃部の両面には刃部と直行する線条痕が認められる。248 は珪質凝灰岩を用いたものである。刃部側で折損している。 c 面の剥離痕は被熱による可能性が考えられる。刃部はやや弧状を呈し、両面には刃部と直行する線条痕が認められる。

249 から 251 は石皿である（第 39 図）。249 は石英安山岩の扁平円礫を用いたものである。表面の中央部分に窪みが認められる。250 は凝灰質砂岩の扁平円礫を用いたものである。表面の中央部分に窪みが認められる。251 は安山岩の扁平円礫を用いたものである。表面の広範囲に研磨痕が認められる。

252 から 255 は磨石・凹石である（第 40 図）。252 は安山岩の扁平円礫を用いている。両面及び両側面に使用痕が認められ、両面に浅い凹みが認められる。253 は安山岩の扁平円礫を用いたと考えられる。両面及び両側面に使用が認められ、 a 面に浅い凹みが認められる。254 は安山岩の扁平円礫を用いている。両面を凹石として、 c 面を磨石として用いられている。255 は火山礫凝灰岩の扁平円礫を用いている。

256・257 は磨石・敲石である（第 40・41 図）。256 は安山岩の扁平円礫を用いている。両面に顕著な磨りが認められる。両側面及び両端面に浅い敲打痕が認められる。257 は砂岩の扁平円礫を用いている。両面に磨りが認められる。右側面に浅い敲打痕が認められる。

258 から 263 は磨石である（第 41 図）。258 は多孔質安山岩の円礫を用いたと考えられる。両面及び両側面を用いたと思われる。259 は砂岩の扁平円礫を用いている。両面とも顕著に磨られている。260 は安山岩の円礫を用いている。261 は安山岩の扁平円礫を用いている。262・263 は安山岩の円礫を用いている。

264 から 266 は異形石器、267・268 は垂飾、269 は石剣である（第 42 図）。264 は鉄石英を素材とする。両面とも剥離面に覆われている。器体の上部にはつまみ部の様な浅い調整が施されている。265 は珪質頁岩を用いている。周縁調整は丁寧に施されている。266 は珪質頁岩を用いている。周縁調整は丁寧に施されている。267 は頁岩を用いている。両面穿孔で孔を穿とうとしているが、やや位置がずれている。268 は粘板岩を用いている。上端側には孔があけられ、両面穿孔により貫通している。下端側は折損している。素材は板状に整形され、両面及び両側縁は研磨により整形されている。 a 面には 20 ヶ所、 b 面には 10 ヶ所の穿孔が認められる。左側面には研磨による一条の溝が残存する。269 は千枚岩を用いている。両端とも折損している。上端側がやや細くなっている。

②表土・攪乱出土遺物

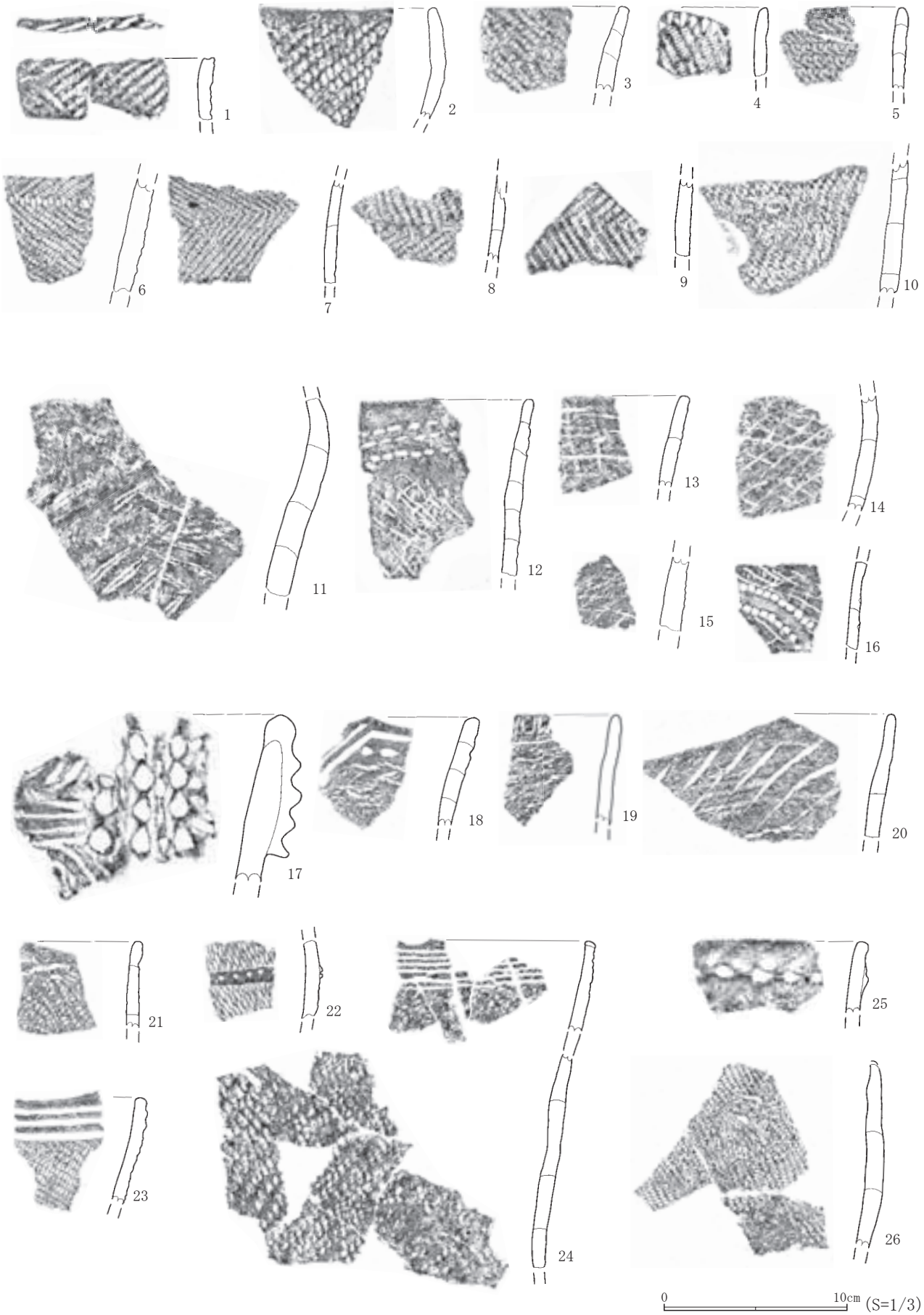
今回の調査において遺構や遺物包含層以外から出土した遺物は、土器 1,392 点、土製品５点、石器 119 点、土師器・須恵器３点である。このうち 23 点を掲載する（第 43・44 図）。

１から 11 は、縄文土器である。１は、地文に網目状の撚糸文が施され、口縁に沿って２条の沈線文が施されている。胎土には繊維が混和されている。破片の中央付近に補修孔と思われる孔が穿たれている。大木２a 式のものと推測される。２は、地文にＲ撚糸文が施され、その上から半截竹管による平行沈線文が施されている。胎土に繊維の混和が認められる。大木２式に相当すると考えられる。３は、口縁に沿って粘土紐が横位に貼り付けられ、上から連続刺突が施されている。粘土紐の下部には２段の連続刺突文が施されている。大木３式と推測される。４は、肥厚した波状口縁の波頂部に刺突文が施され、頸部に沈線文とボタン状の貼付文が付されている。大木６式に相当すると考えられる。５には、半截竹管による平行沈線が、横線・縦線・斜線・弧線・波線などを組み合わせた意匠で施文されている。大木６式に相当すると考えられる。６の口唇部、口縁部には小波状の粘土紐が貼り付けられている。大木４式と推測される。７の口唇部には棒状の粘土紐が列状に貼付けられ、口縁部には半截竹管による押引文と三角形印刻文が施されている。大木７式に相当すると考えられる。８は、肥厚した口縁部に太く短い粘土紐を縦位に２列貼り付け、その下部に小波状の沈線文を施している。大木６式に相当すると考えられる。９は、太い粘土紐を貼り付け、その周りと口縁部縁辺に緻密な結節浮線文を施している。大木６式に相当すると考えられる。10 は、口唇部と口縁部に連続爪形文が施され、平行沈線により区画されている。内面には、口縁部に沿って粘土紐が貼り付けられている。大木６式に相当すると考えられる。11 は、口唇部に刻みが施され、口縁部には連続爪形文や三角形印刻文が施されている。内面の口唇部直下に粘土紐の貼り付けが施されている。大木７式に属すると推測される。

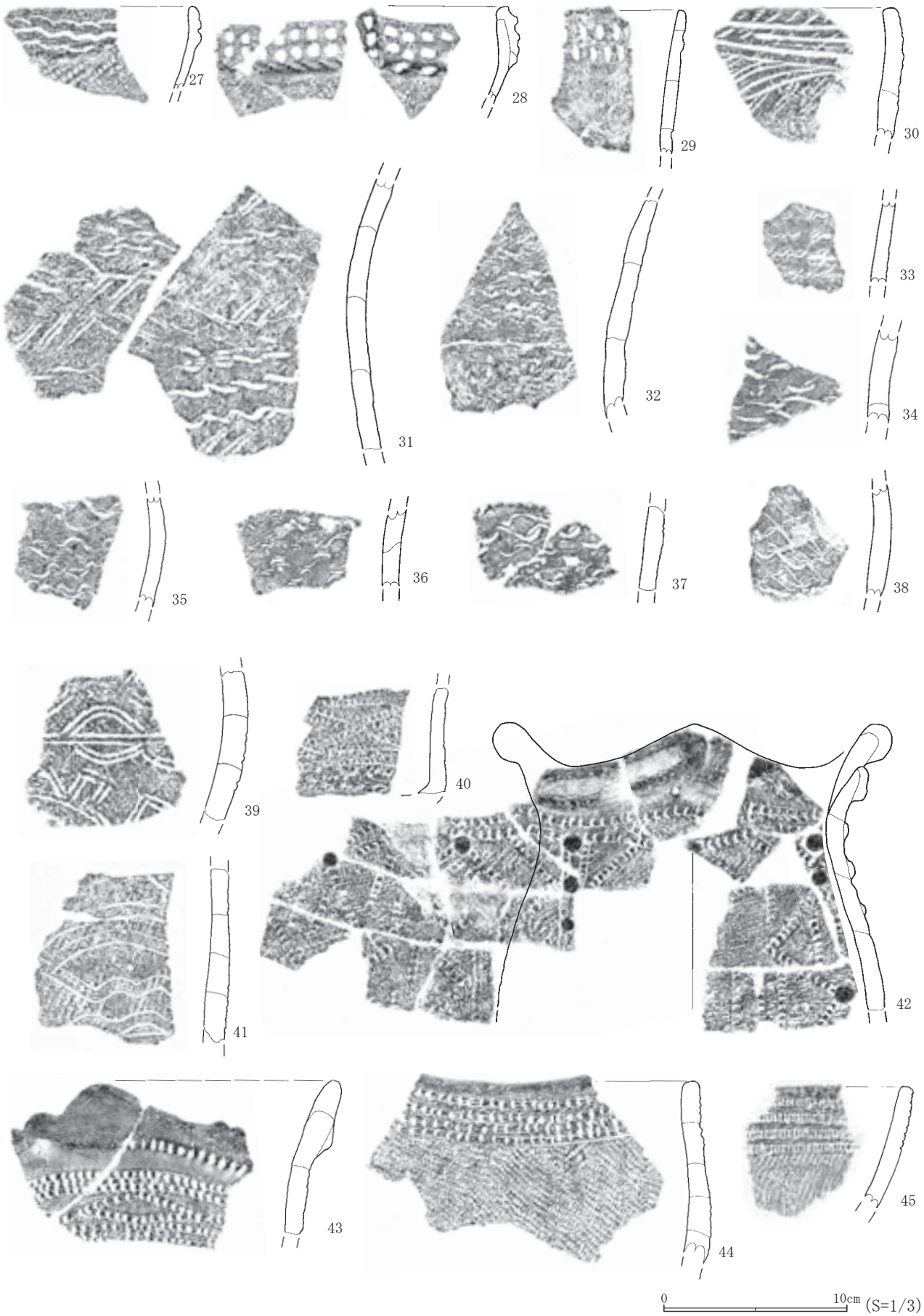
12 は土器片錘である。摩滅が激しいため地文は判然としないが、土器を加工して長方形の錘を作り出し、４辺に刻みを入れている。

13 から 20 は石器である。13 は珪質頁岩製の石鏃である。形態は二等辺三角形を呈し、尖頭部に向かって緩やかに弧を描く。脚部の抉りはやや浅い。尖頭部は折損している。14 は珪質頁岩製の石鏃である。形態は三角形を呈し、尖頭部に向かって緩やかに弧を描いている。脚部の抉りはやや浅い。素材の背面・腹面が一部残存している。15 は珪質頁岩製の縦長剥片を素材とした石匙である。ｂ面のつまみ部の調整は丁寧に行われている。16 は珪質頁岩製の楔形石器である。17 は珪質頁岩製の厚手の剥片を素材とした石核である。両面で求心状に剥離が行われている。自然面が一部残存している。18 は珪質頁岩製の厚手の剥片を素材とした石核である。ａ面に求心状の剥離が行われている。19 は玉髄の厚手の剥片を素材とした石核である。上下両端の他に、両側縁も打面となっている。20 は安山岩の原石を半割したものを用いた盤状求心石核である。原石は亜円礫と考えられる。21 は珪質凝灰岩の磨製石斧の基部である。手擦れによるためか、基部側が摩滅している。

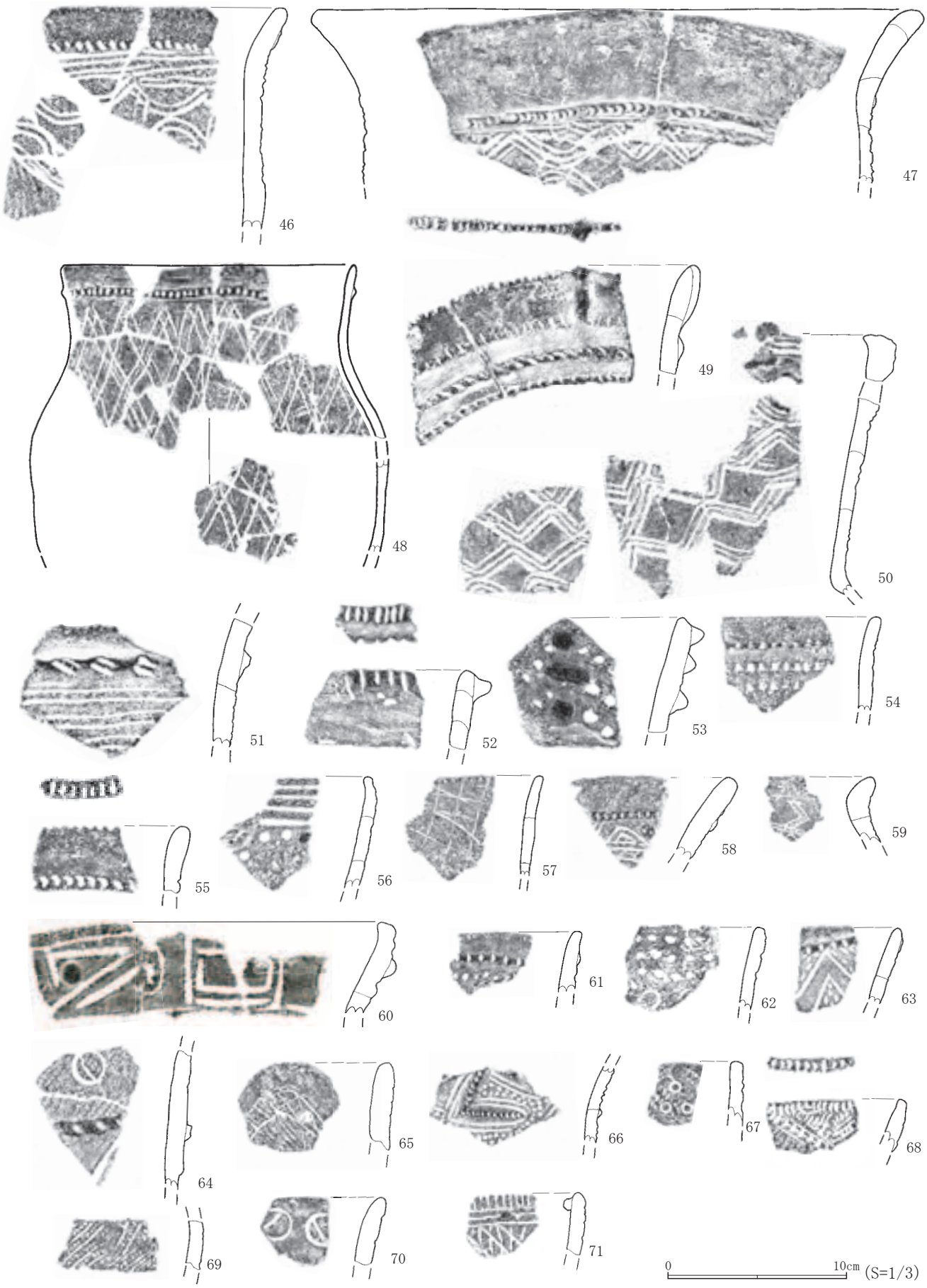
22・23 は須恵器である。22 は坏の体部から底部の破片である。底部に回転糸切痕が残る。内面全面に灰被りが見られる。断面形は体部下端がわずかに柱状となることから、９世紀代のものと考えられる。23 は甕の胴部破片である。表面は平行タタキによって整形されており、内面には矢羽根状の当具痕が観察される。８世紀代のものと考えられる。



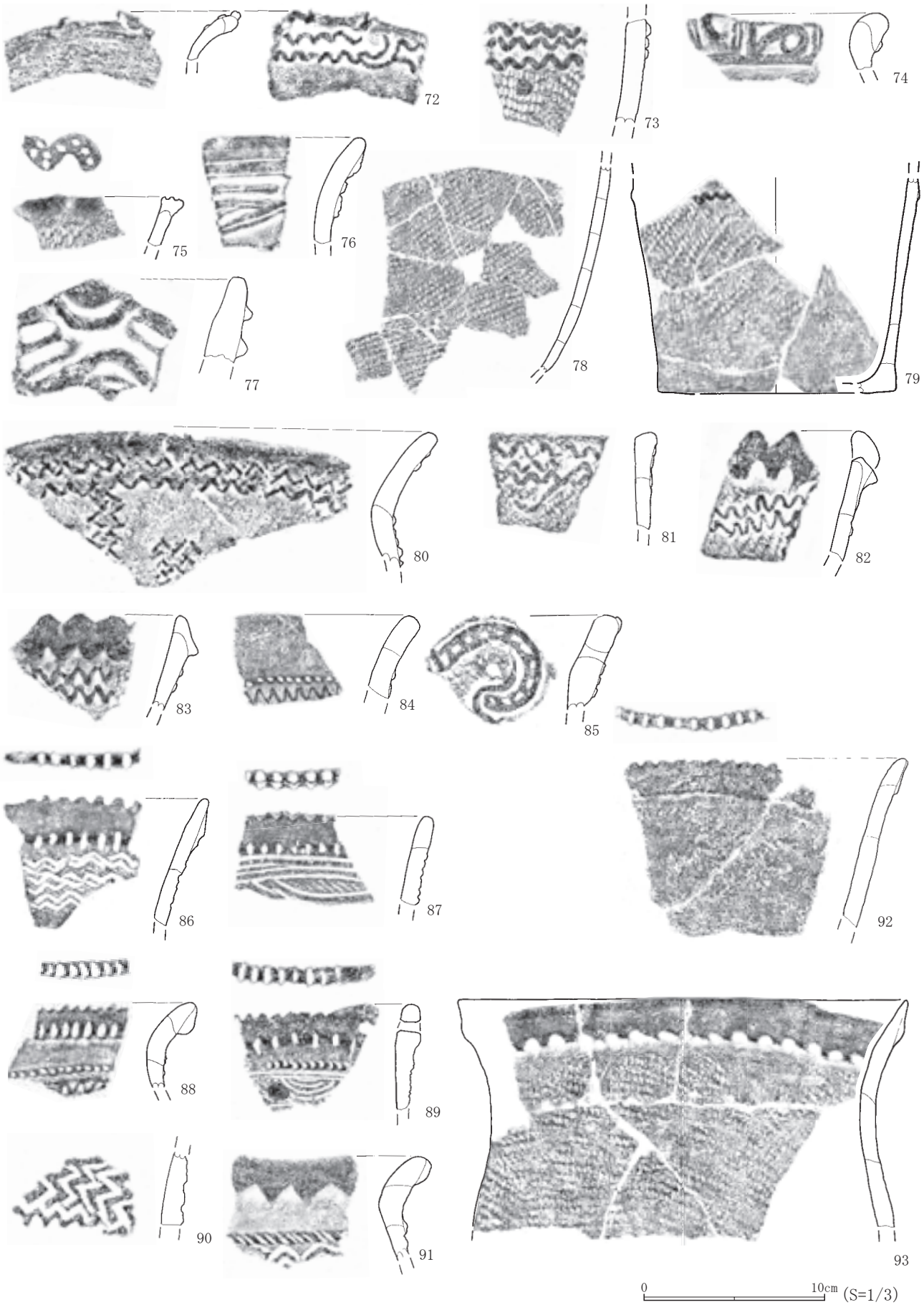
第 20 図　遺物包含層出土の土器（１）



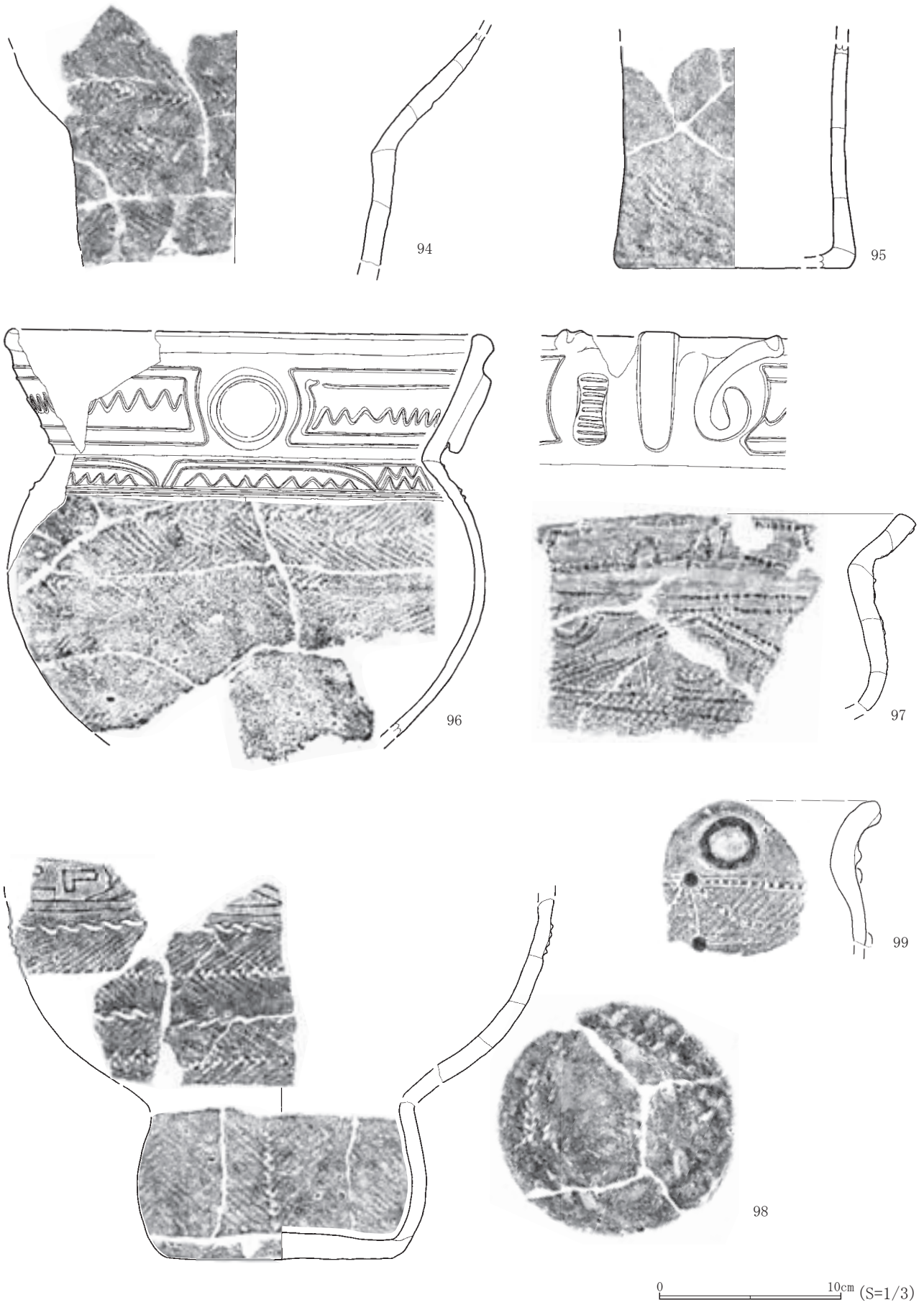
第 21 図　遺物包含層出土の土器（２）



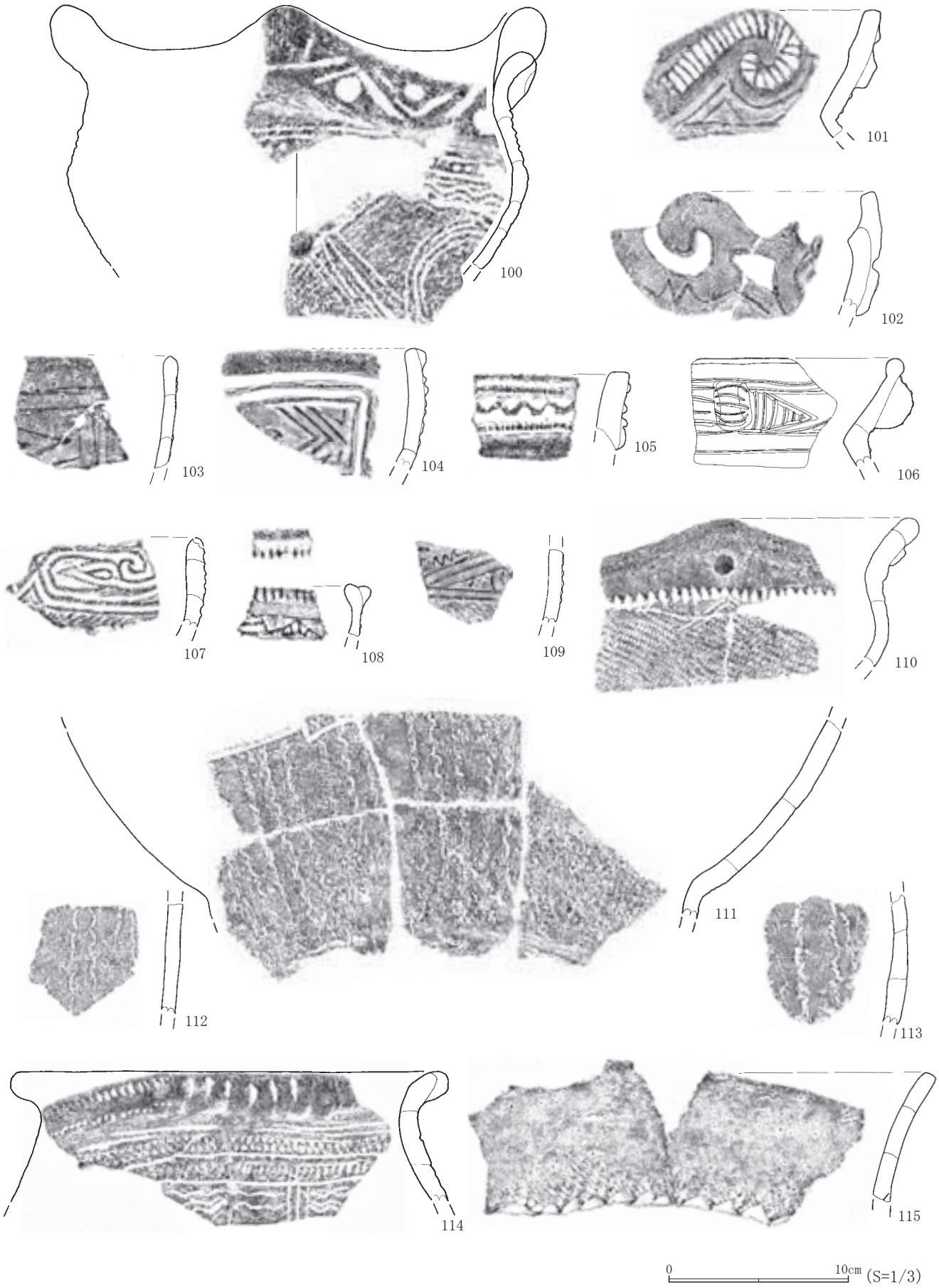
第 22 図　遺物包含層出土の土器（３）



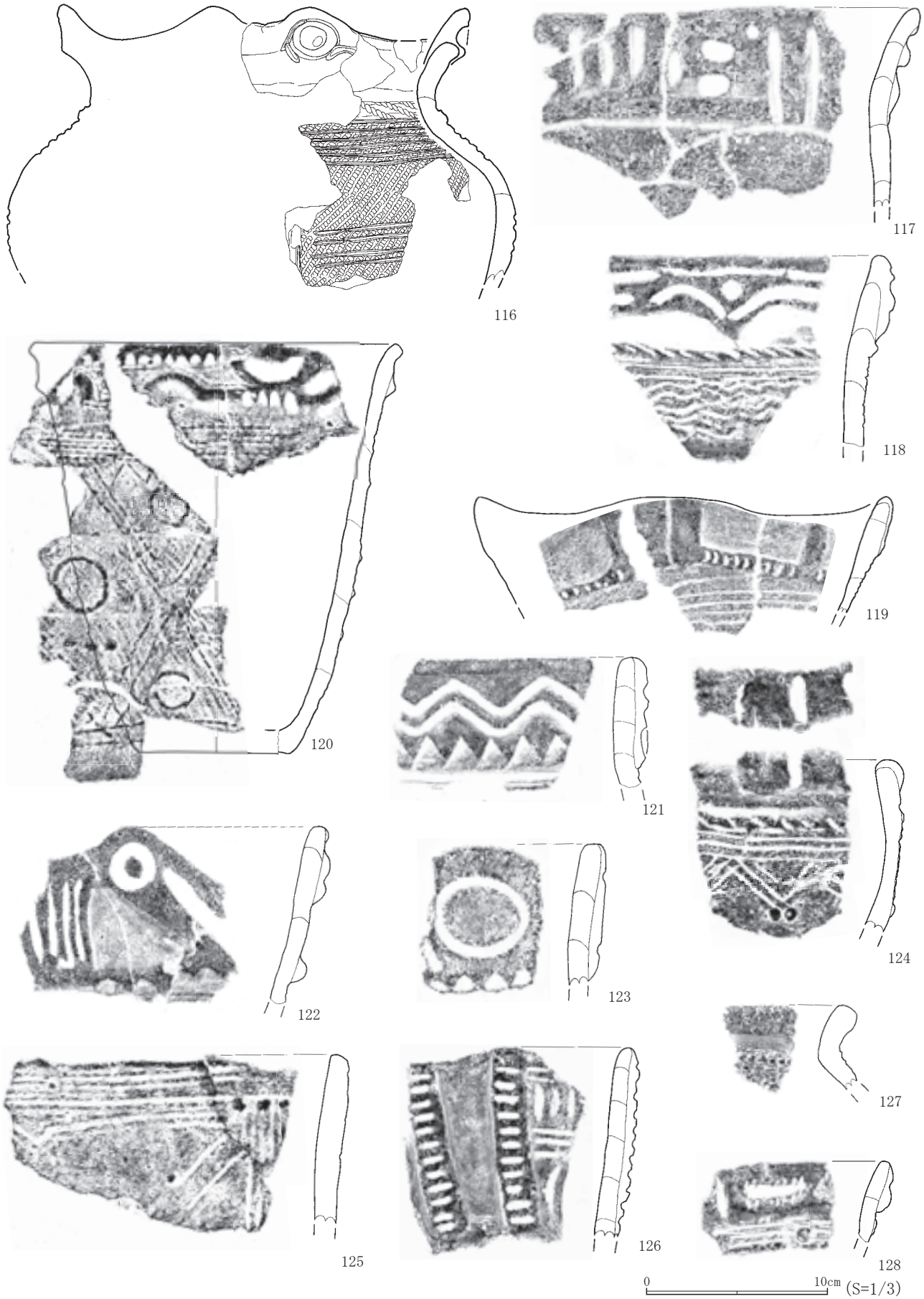
第 23 図　遺物包含層出土の土器（４）



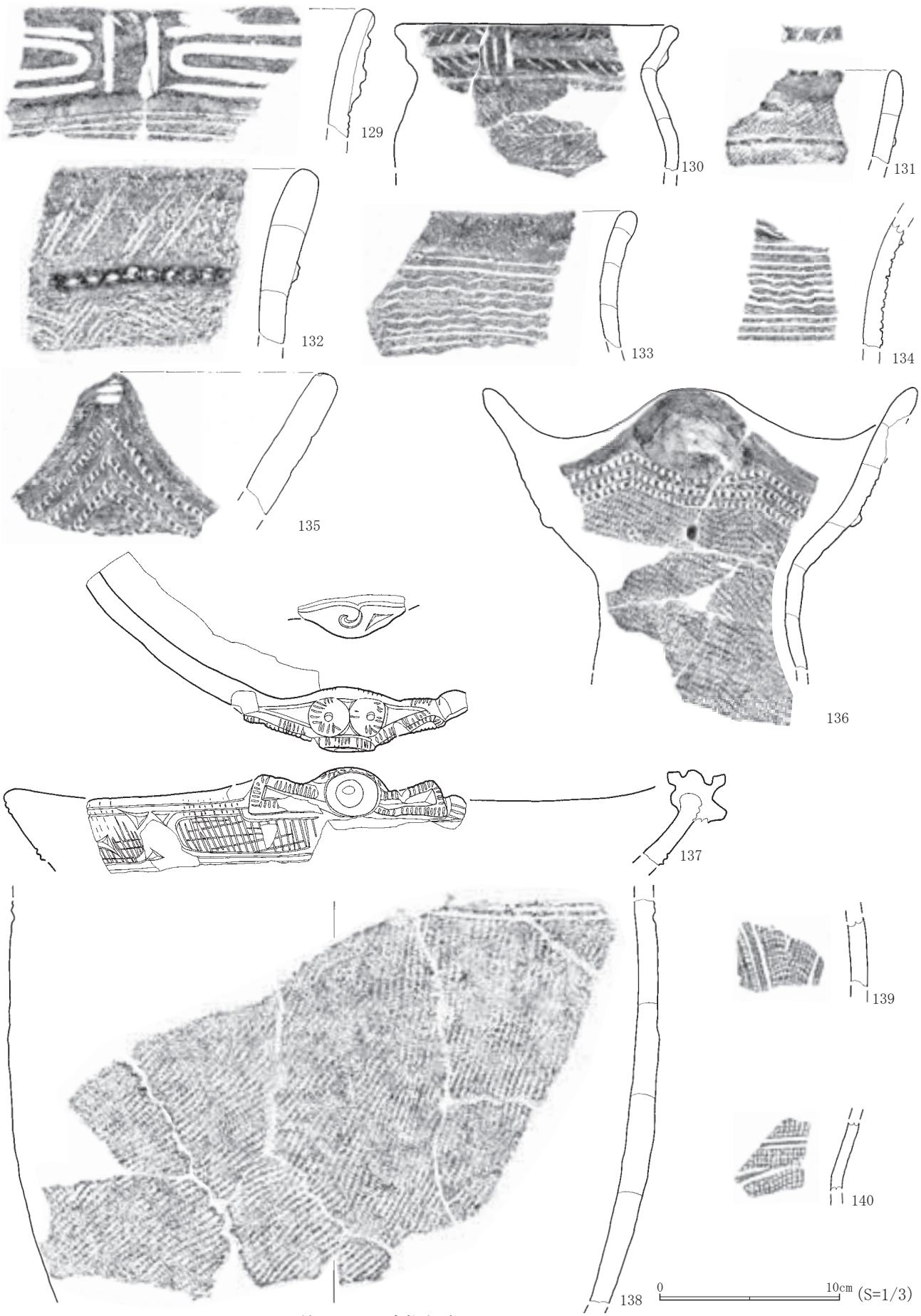
第 24 図　遺物包含層出土の土器（５）



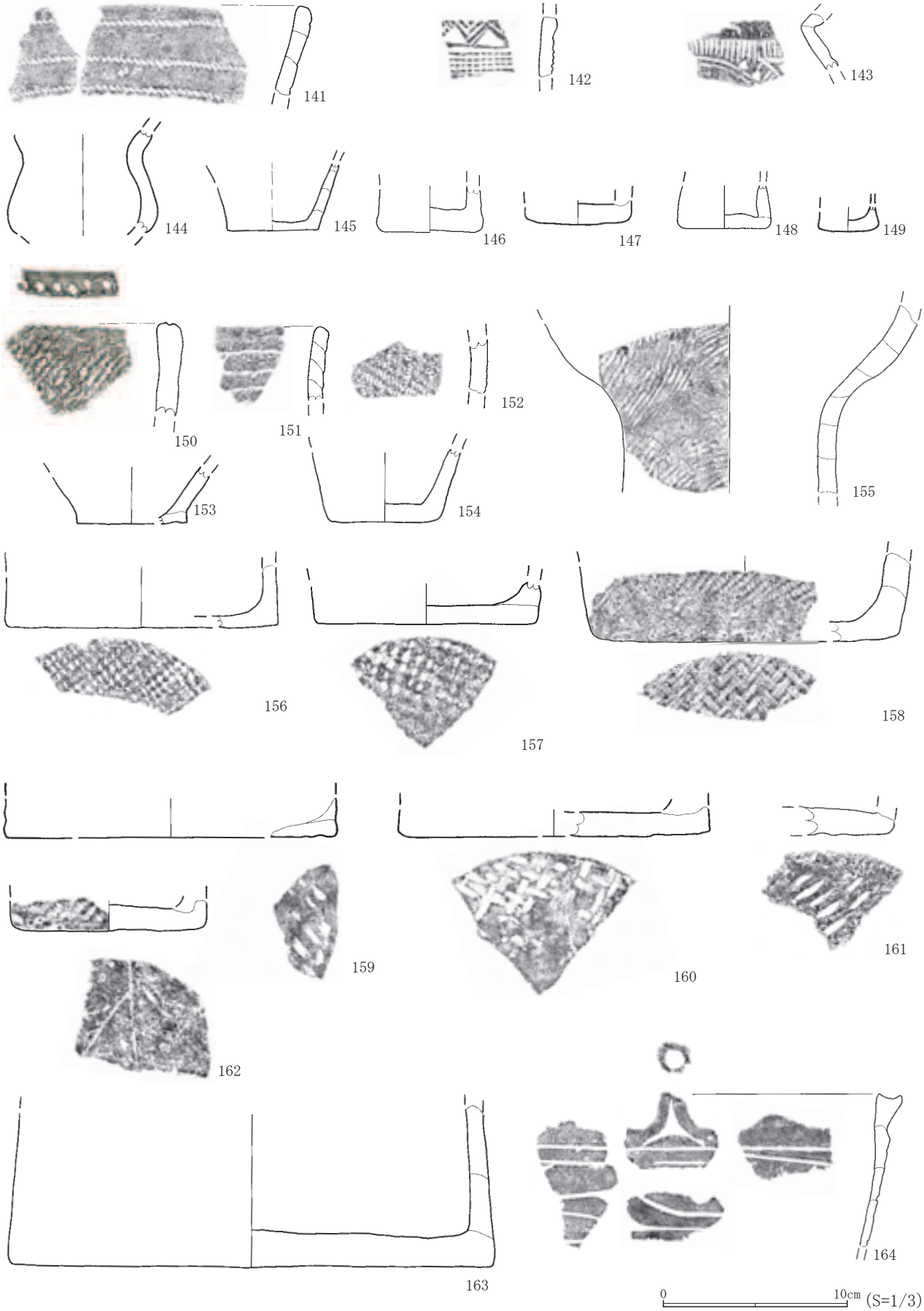
第 25 図　遺物包含層出土の土器（６）



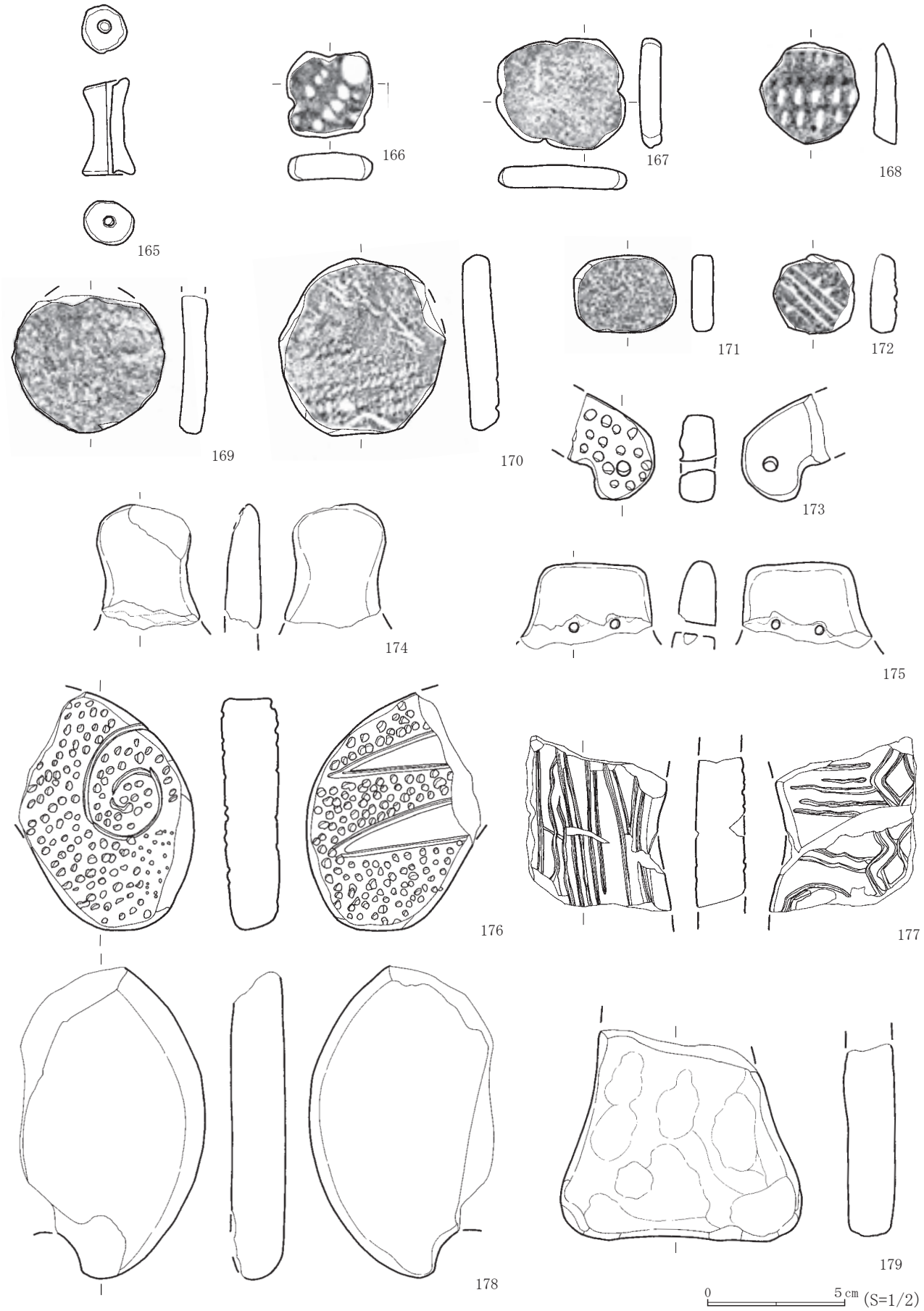
第 26 図　遺物包含層出土の土器（７）



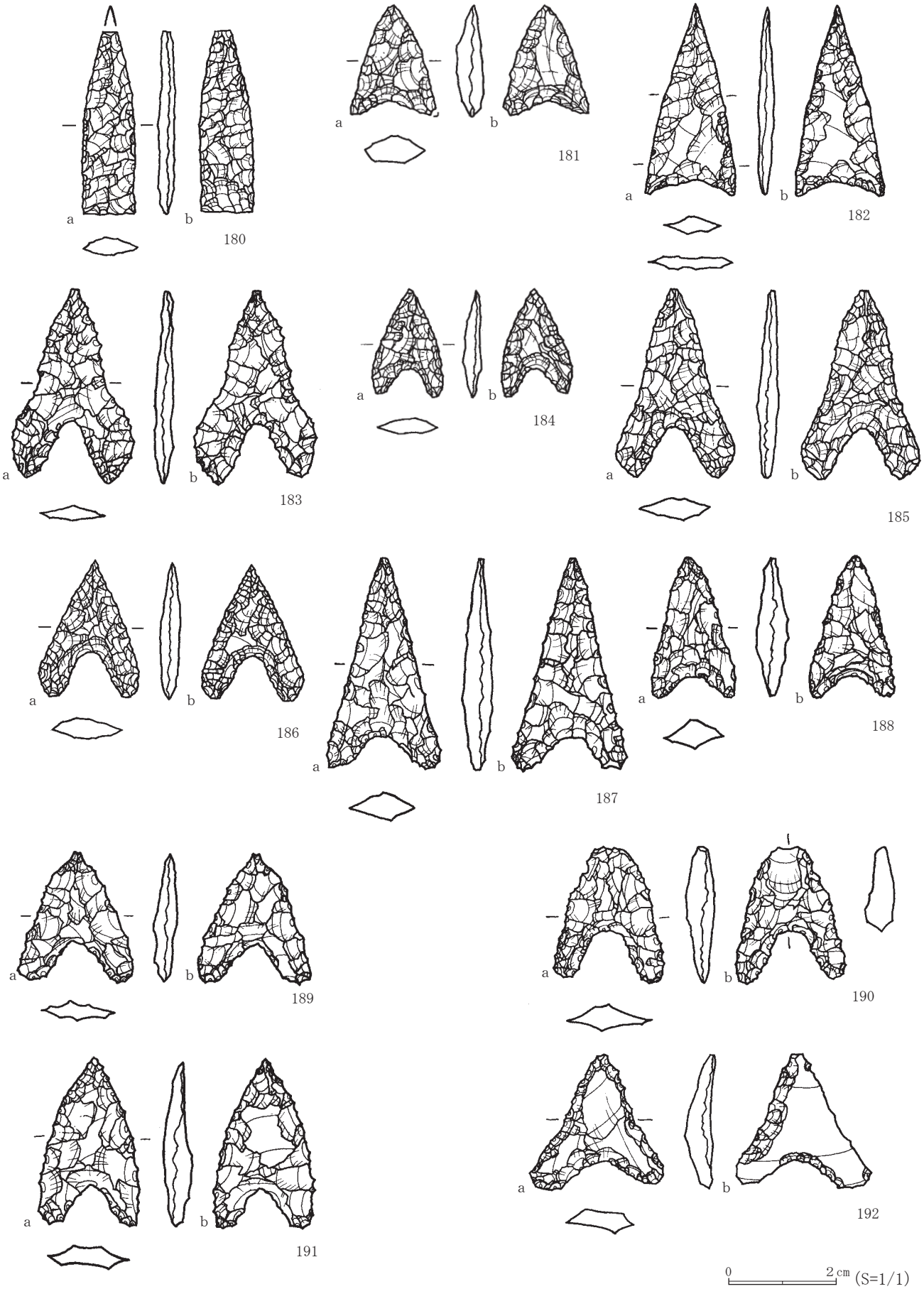
第 27 図　遺物包含層出土の土器（８）



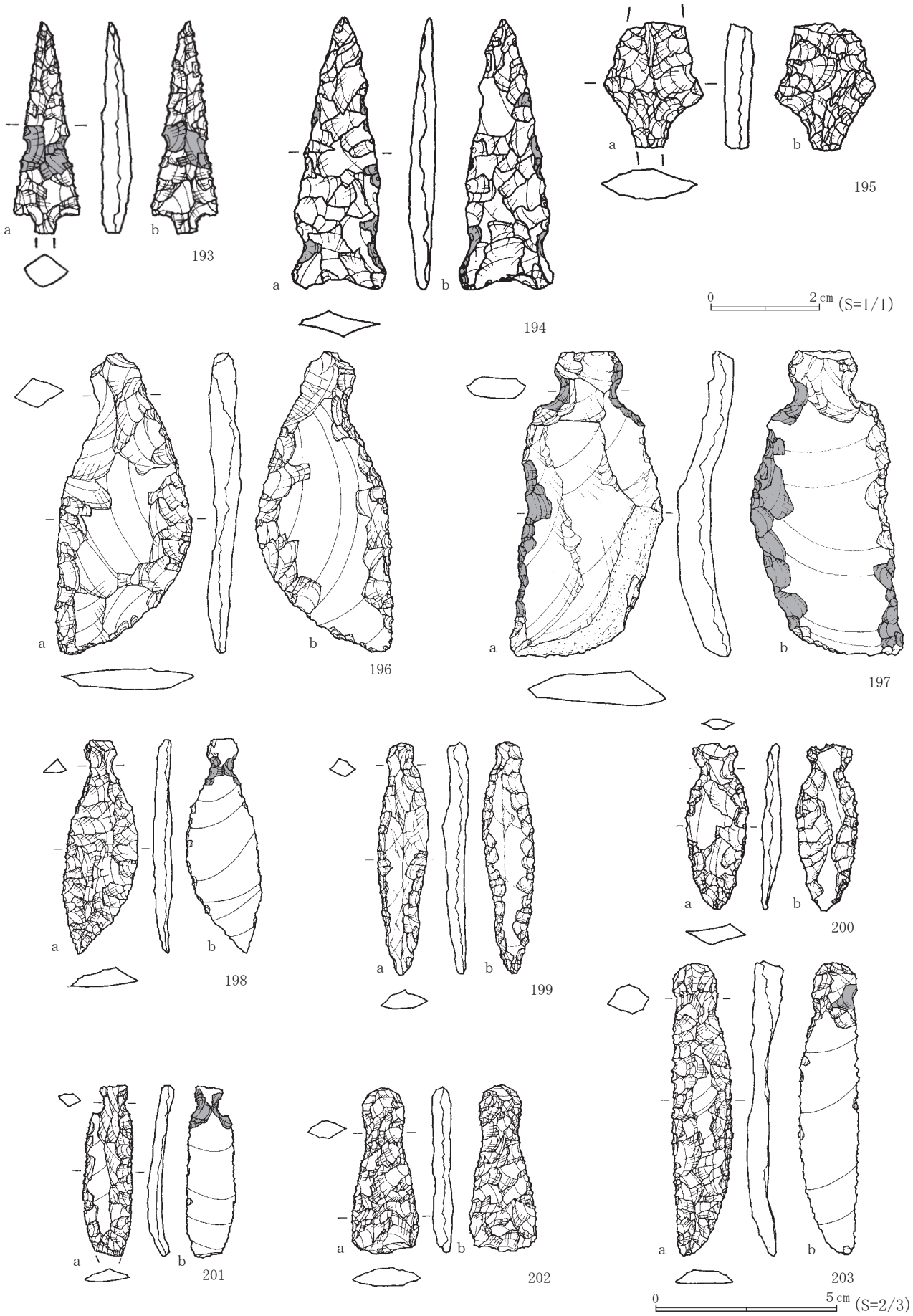
第 28 図　遺物包含層出土の土器（９）



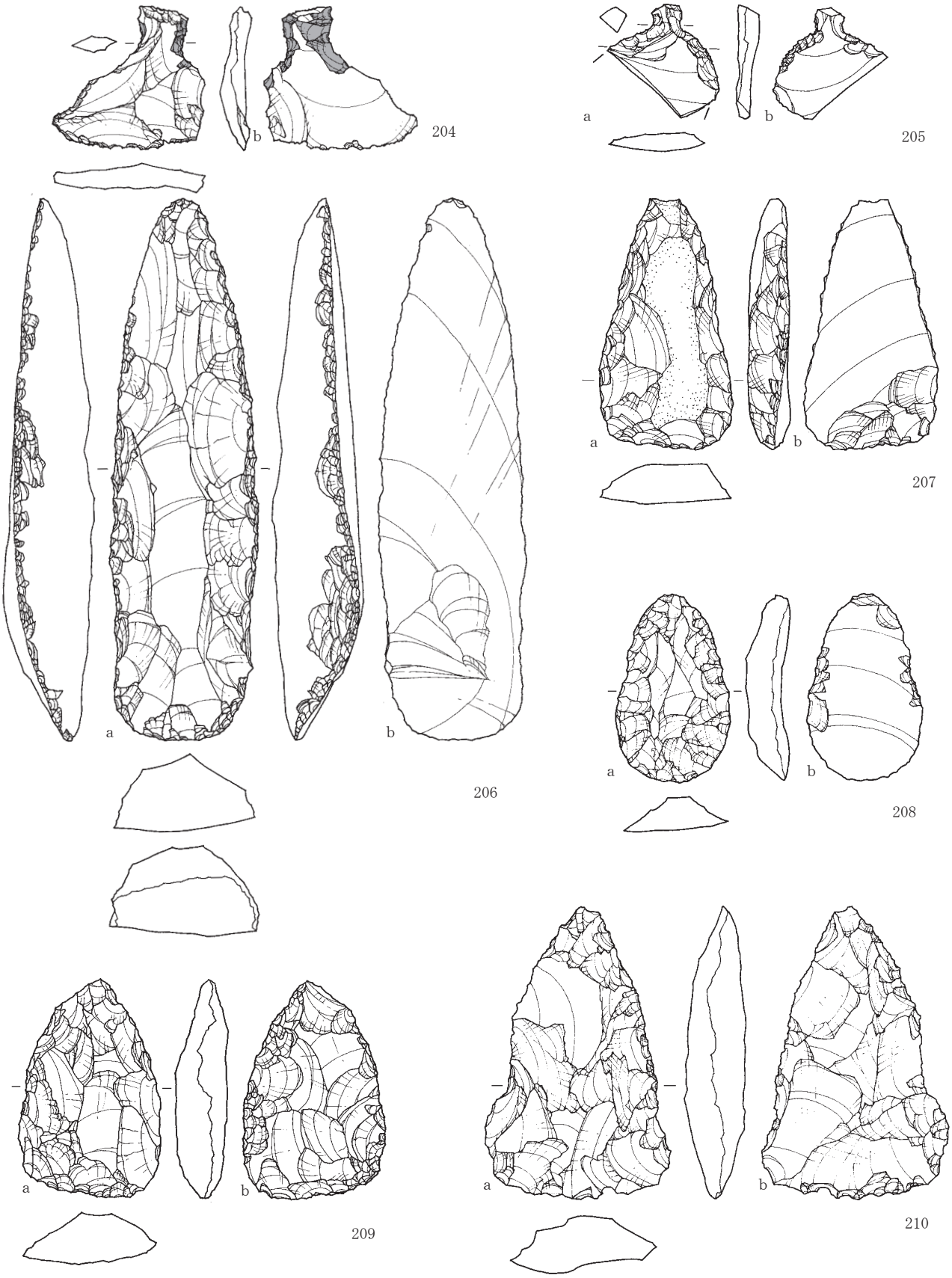
第 29 図　遺物包含層出土の土製品



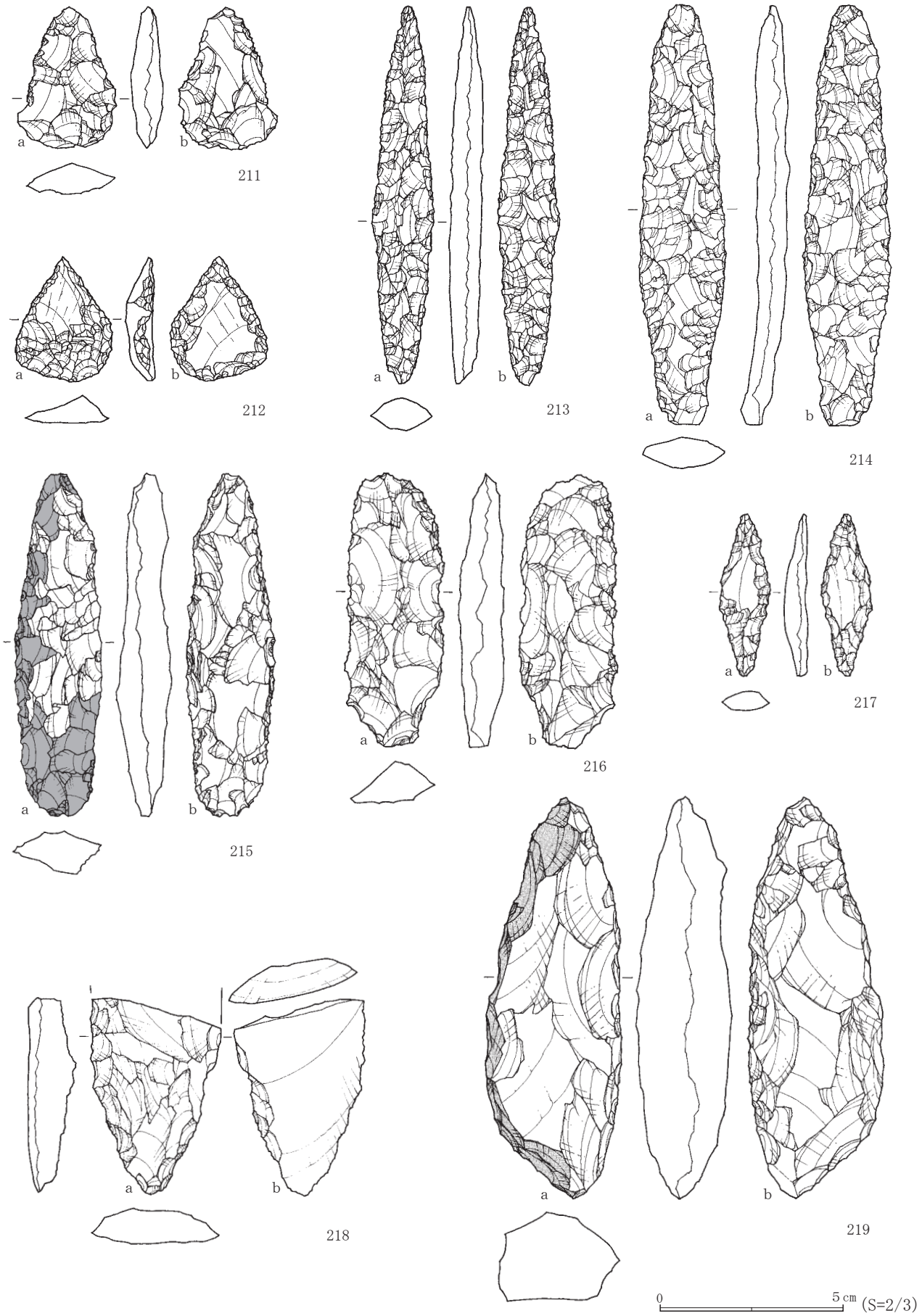
第 30 図　遺物包含層出土の石器（１）



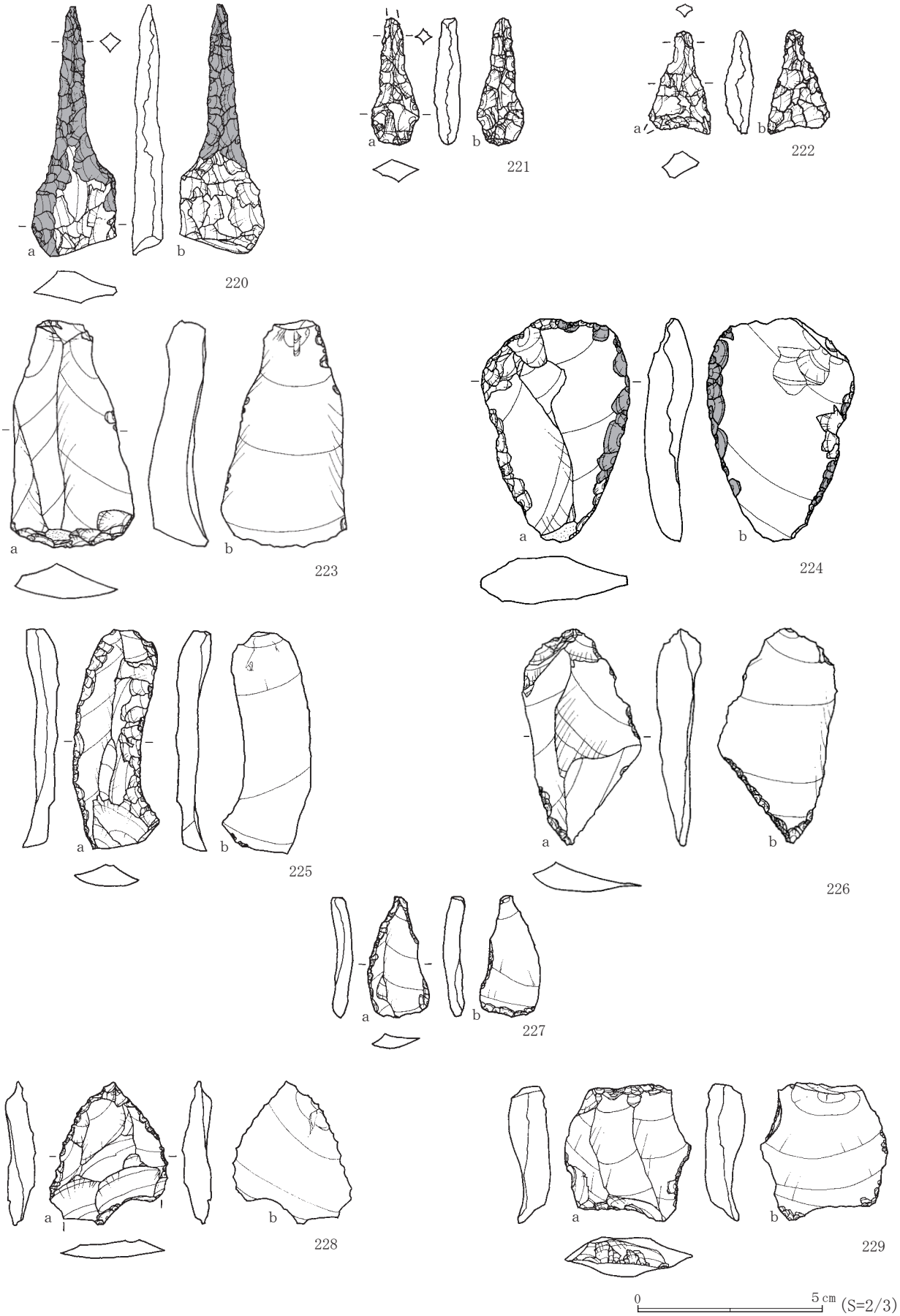
第 31 図　遺物包含層出土の石器（２）



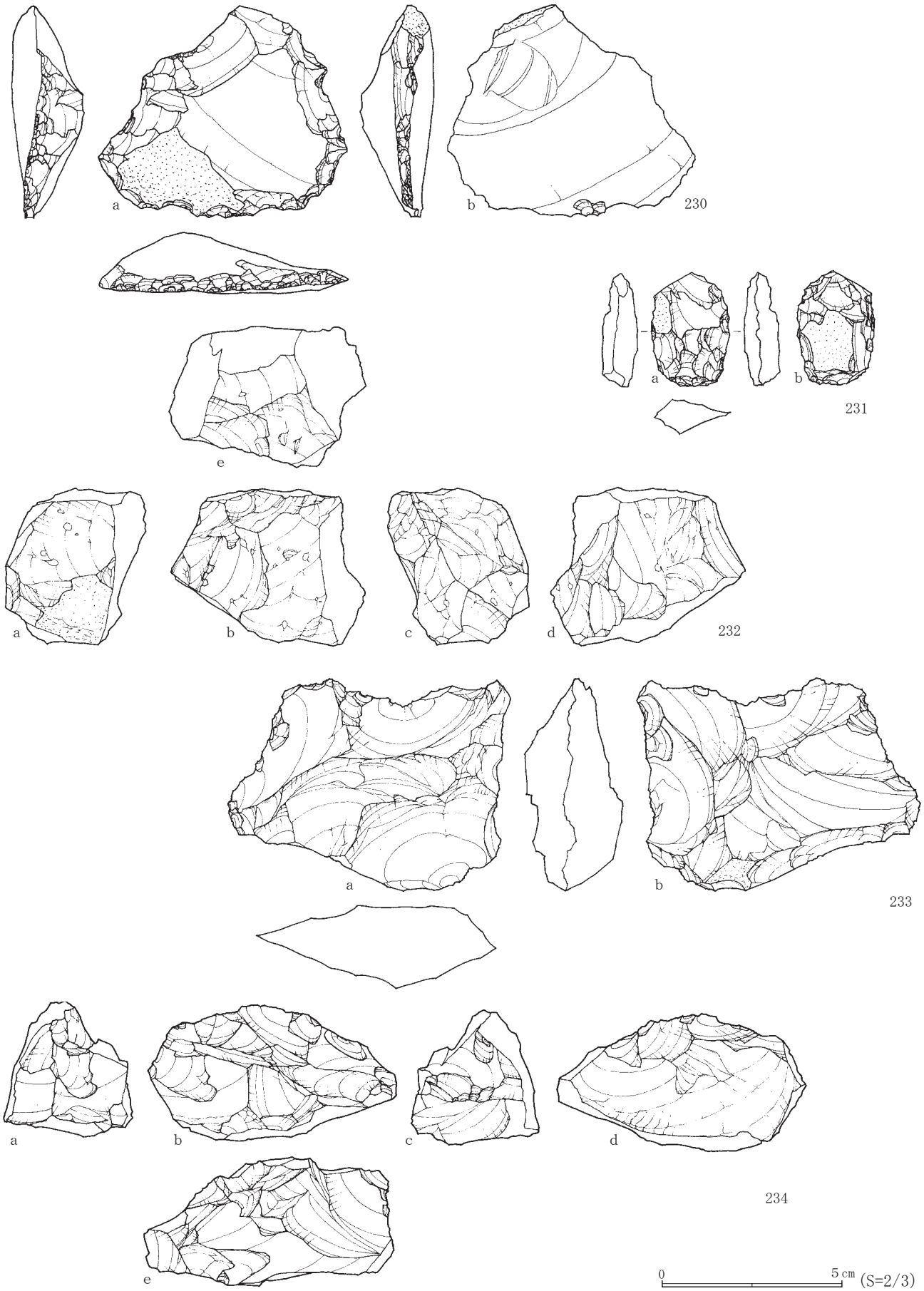
第 32 図　遺物包含層出土の石器（３）



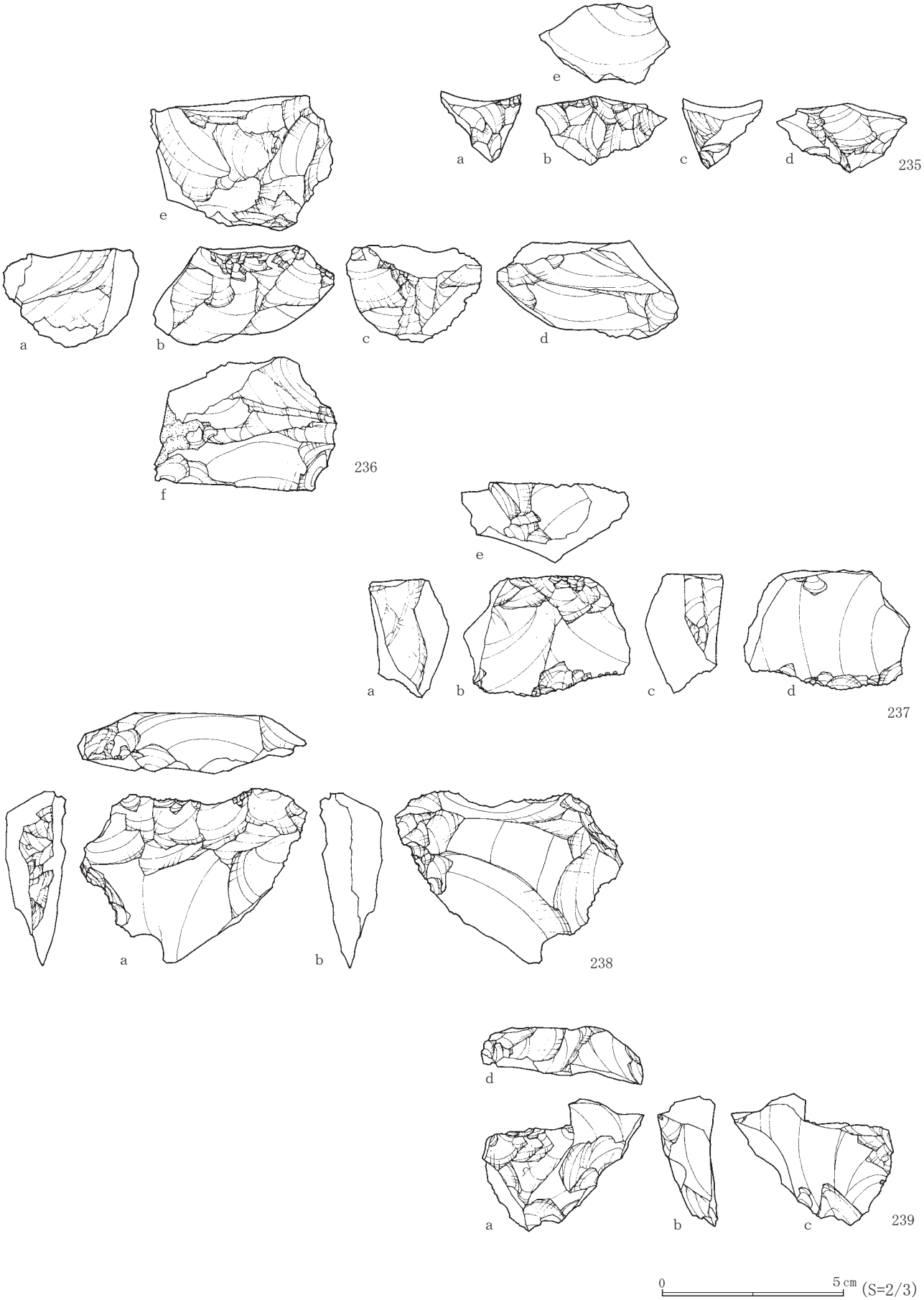
第33図　遺物包含層出土の石器（４）



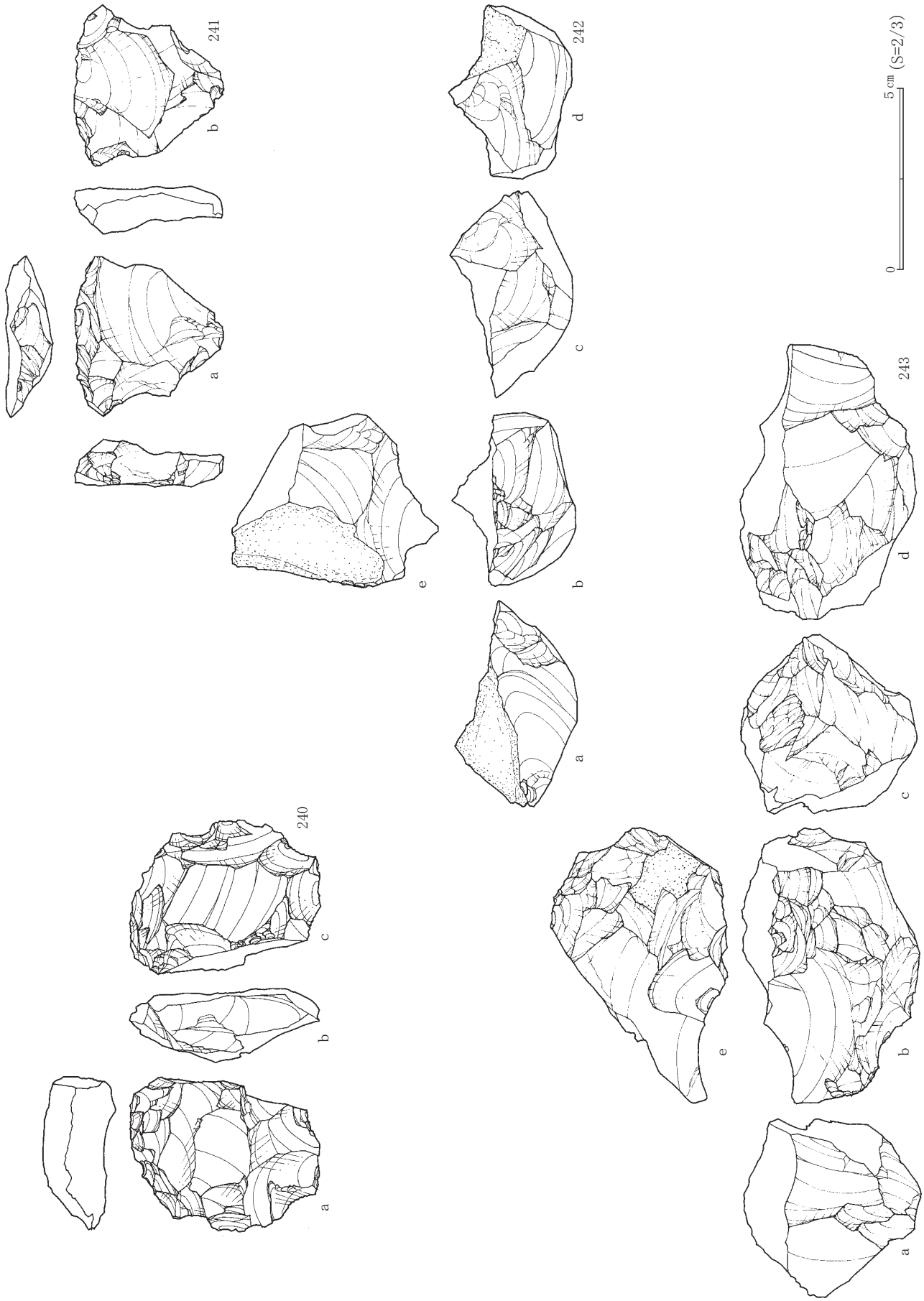
第 34 図　遺物包含層出土の石器（５）



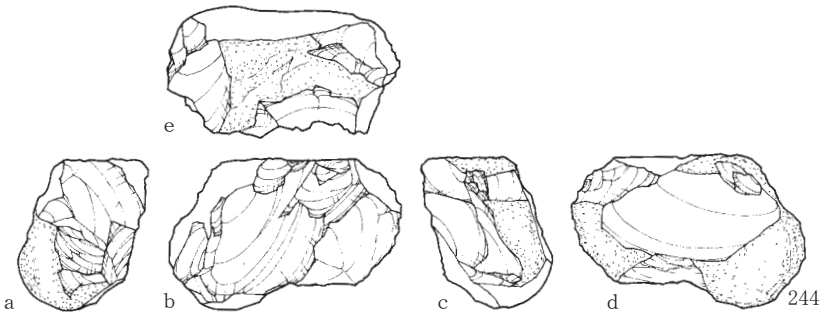
第 35 図　遺物包含層出土の石器（６）

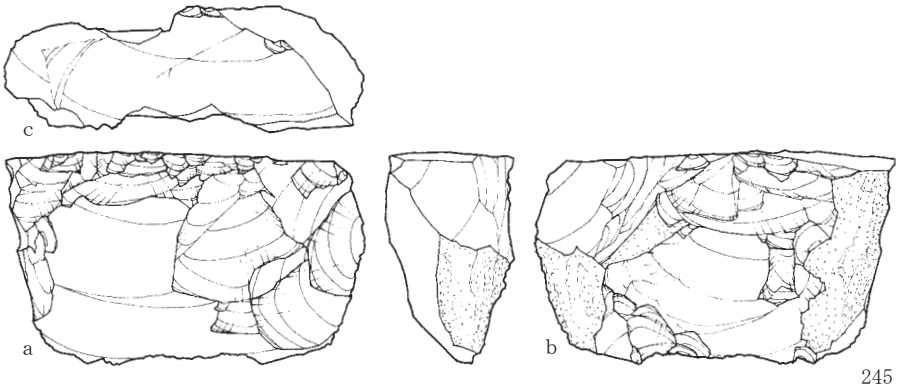


第 36 図　遺物包含層出土の石器（７）

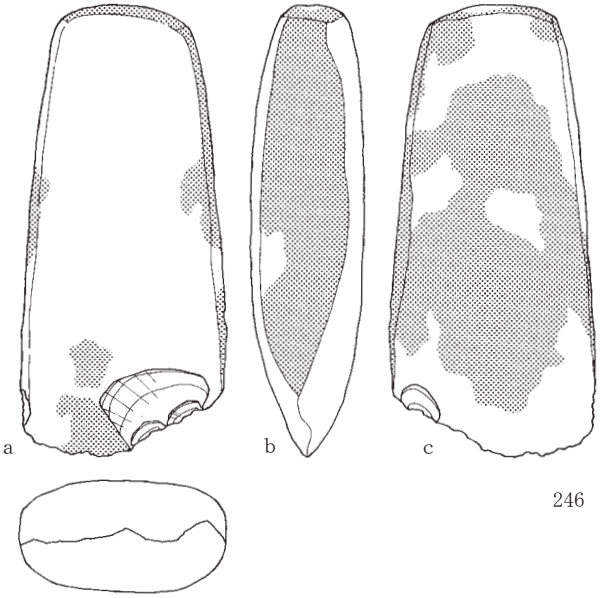


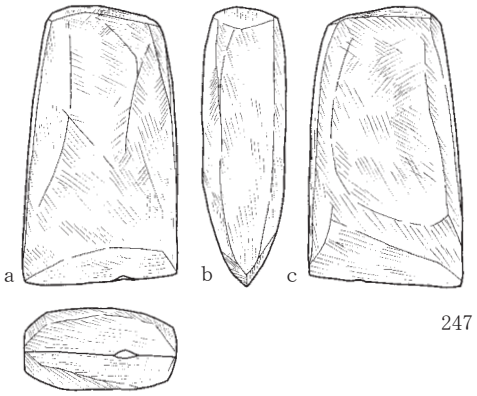
第 37 図　遺物包含層出土の石器（８）

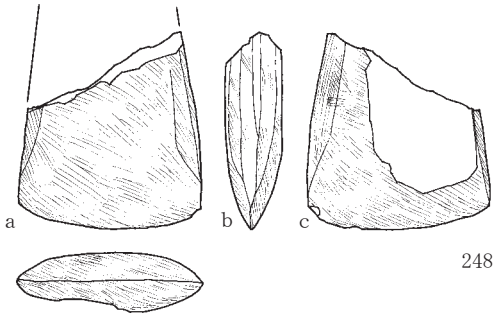




0 5cm (S=2/3)

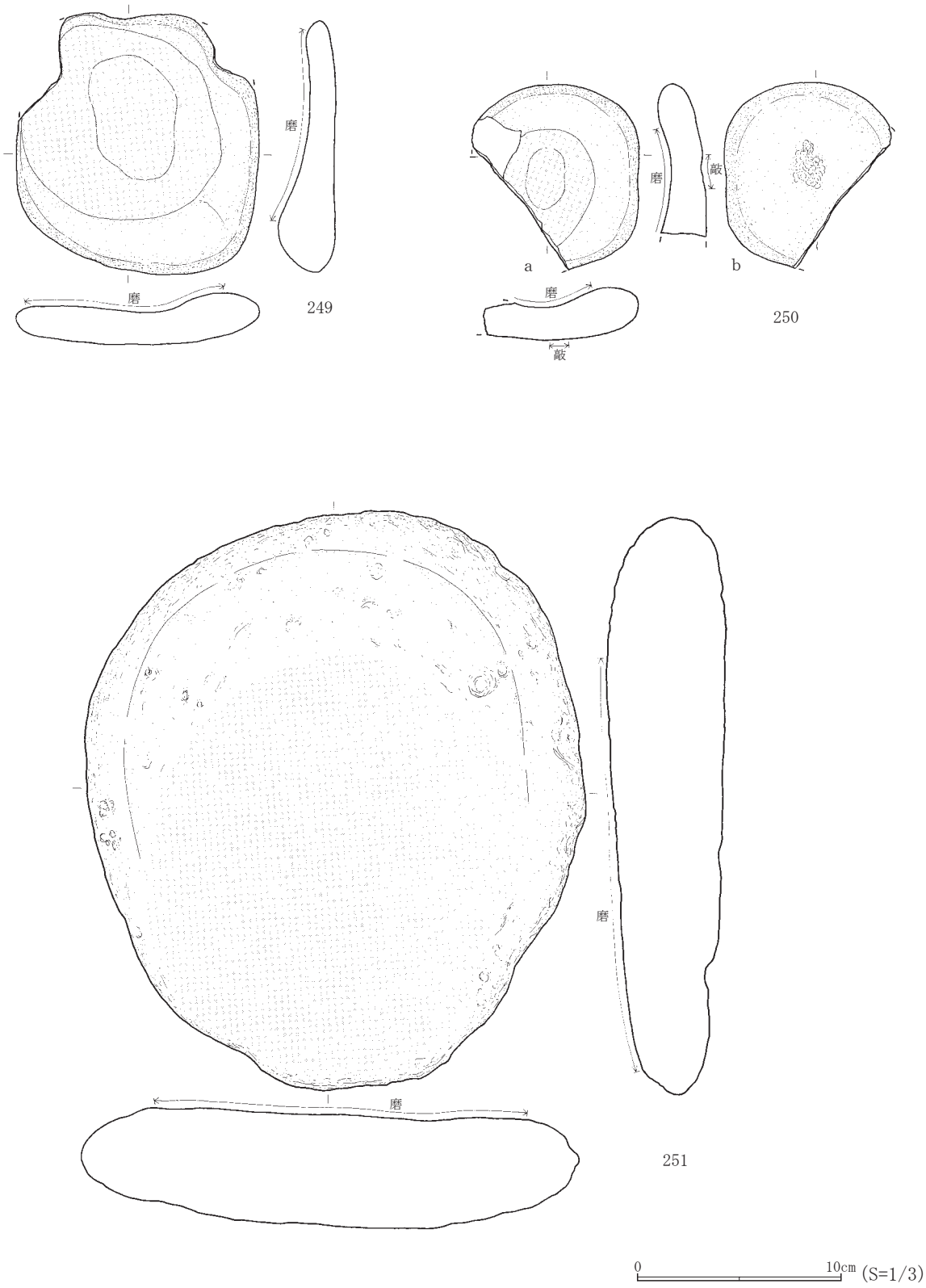




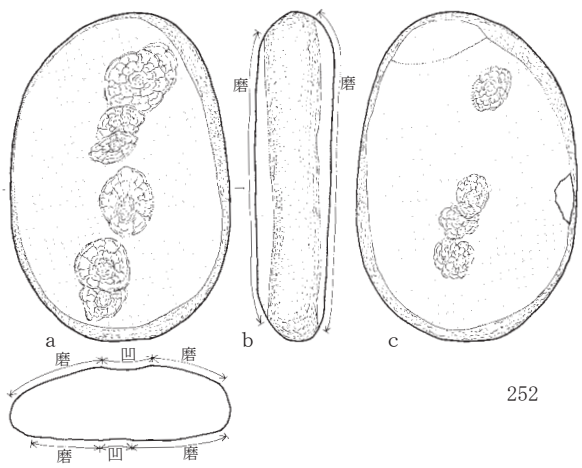


0 5cm (S=1/2)

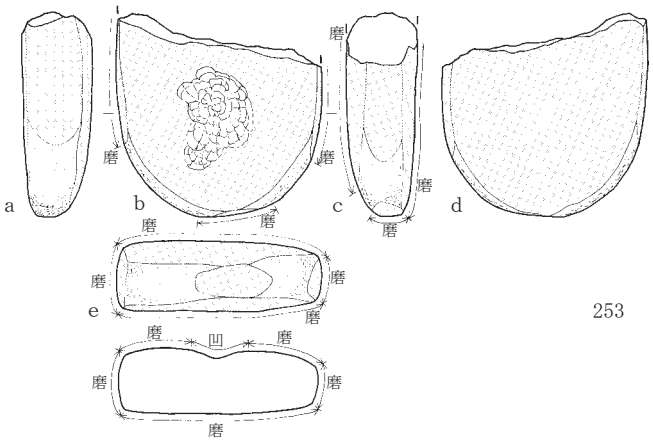
第 38 図　遺物包含層出土の石器（９）



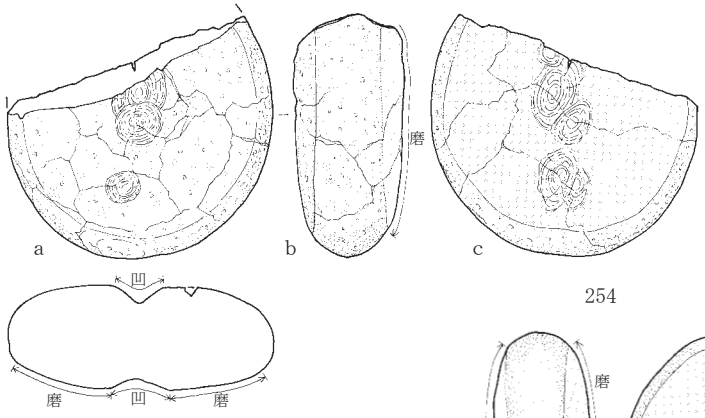
第 39 図　遺物包含層出土の石器（10）



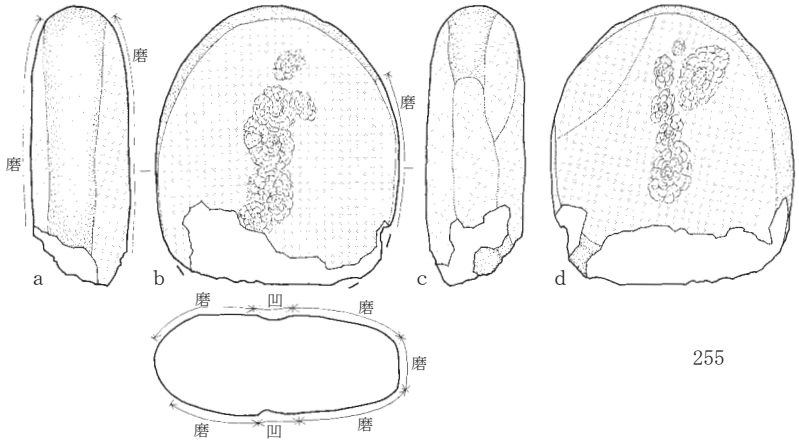
252



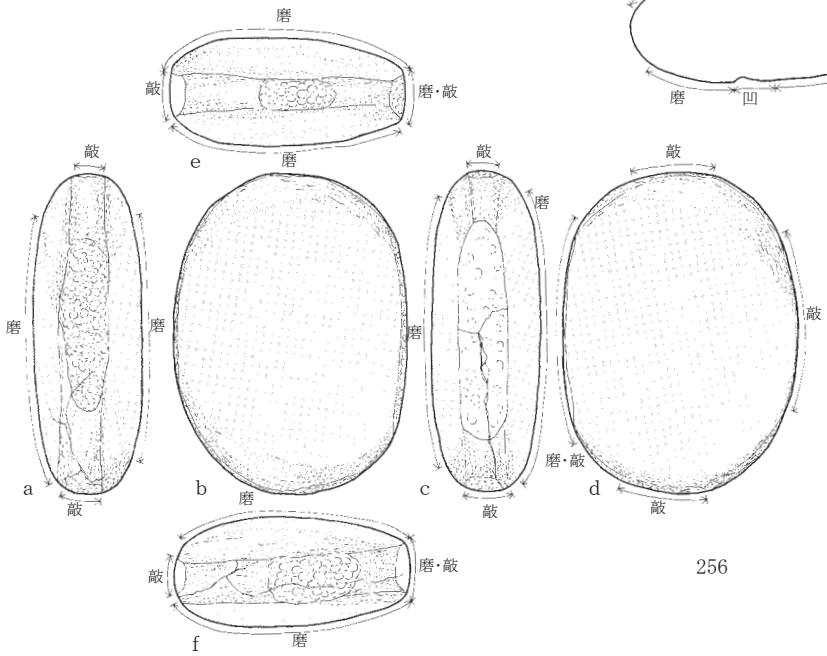
253



254



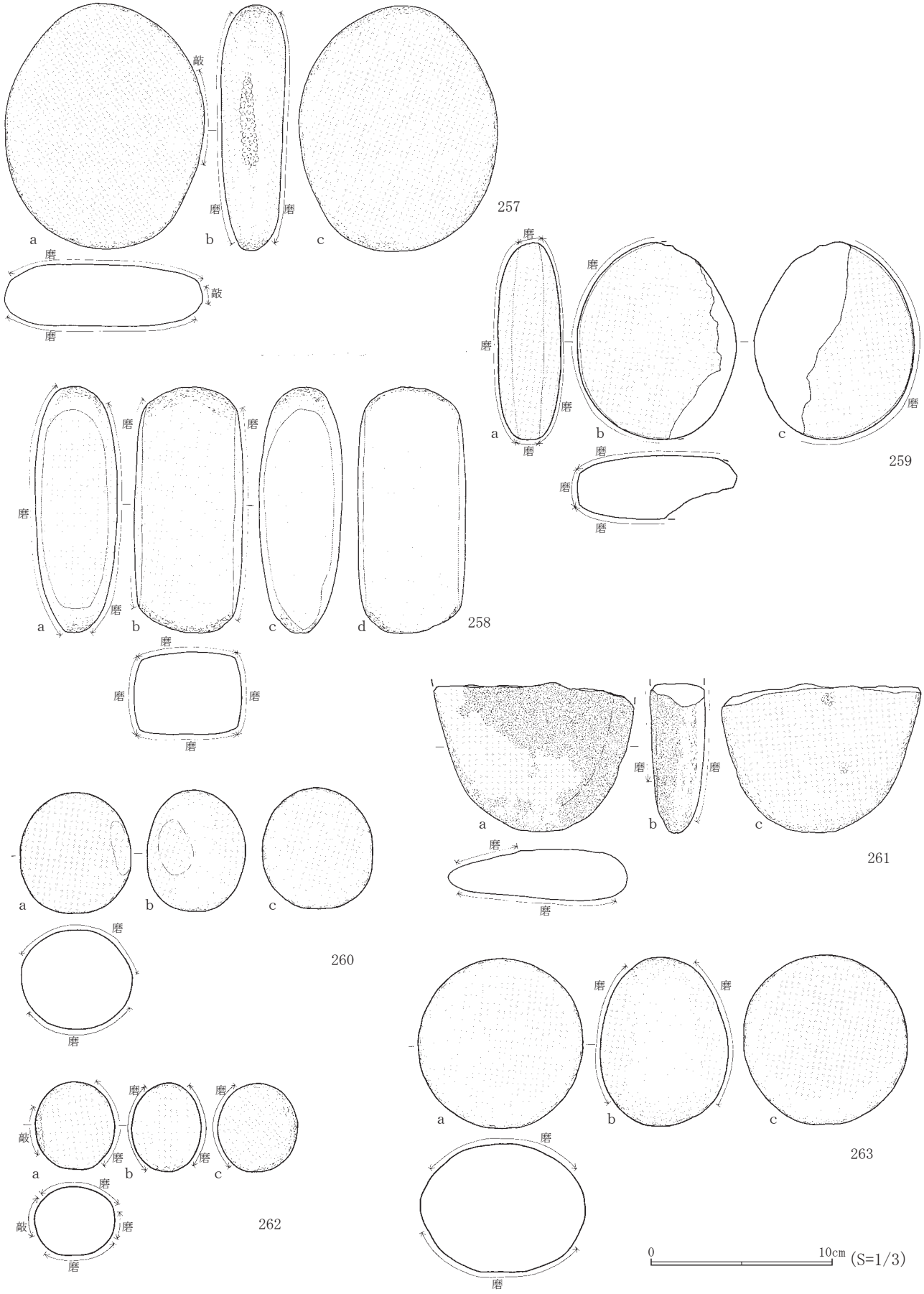
255



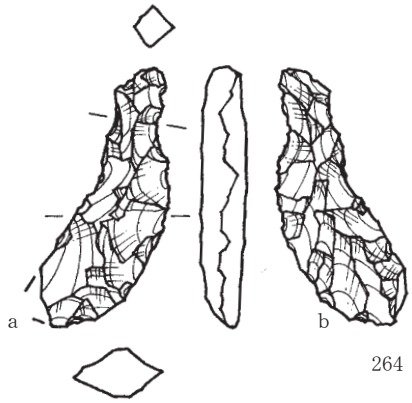
256

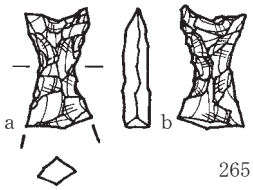
0 10cm (S=1/3)

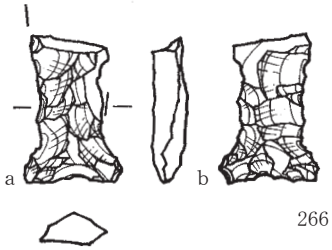
第 40 図　遺物包含層出土の石器（11）

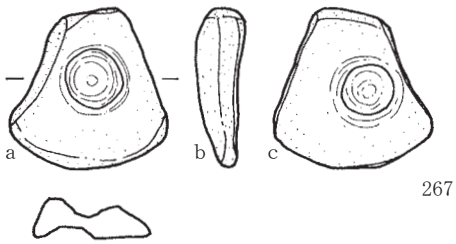


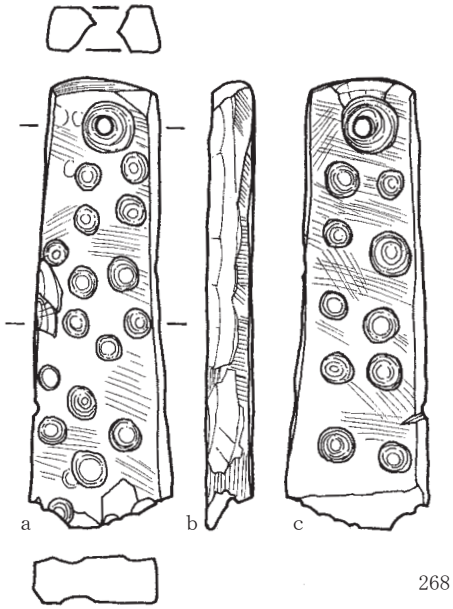
第 41 図　遺物包含層出土の石器（12）



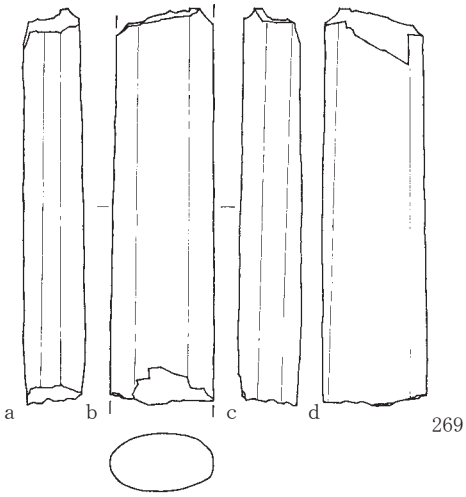






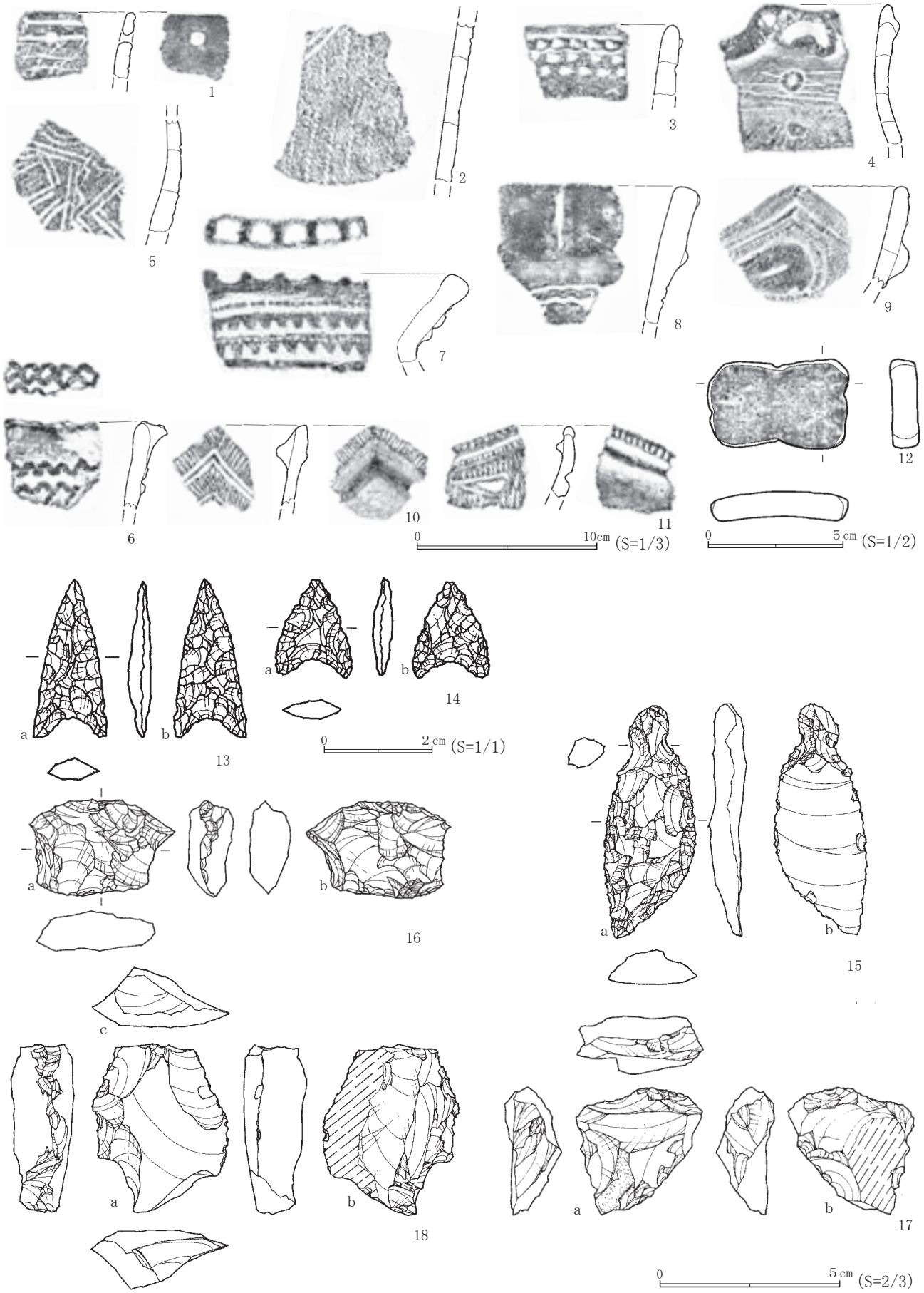


0 2cm (S=1/1)

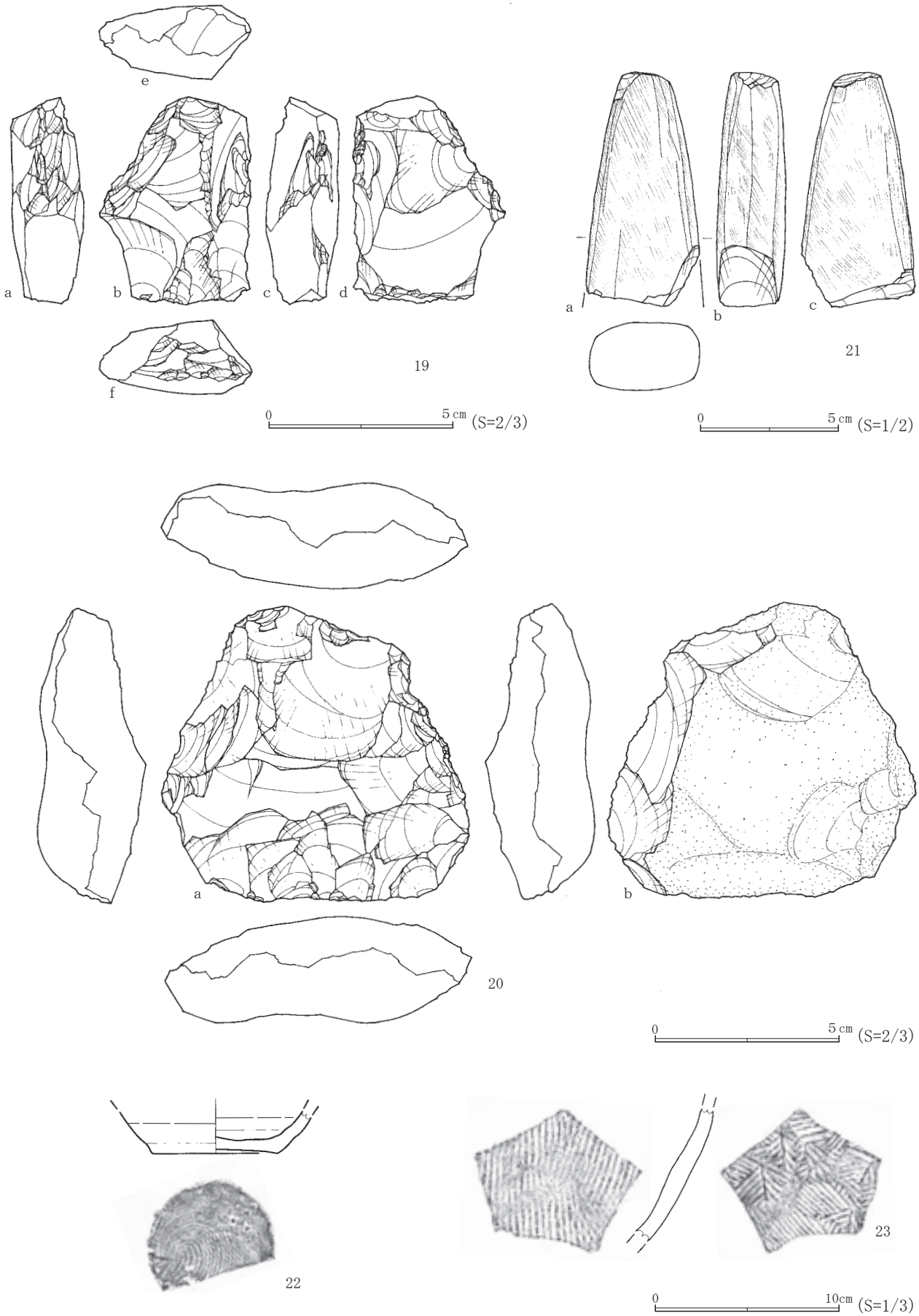


0 5cm (S=1/2)

第 42 図　遺物包含層出土の石器（13）



第 43 図　表土・攪乱出土遺物（1）



第 44 図　表土・攪乱出土遺物（2）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第20図 1	N8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 口唇部刻み 繊維混和	図版12-1
第20図 2	I8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 繊維混和 口径－ 器高(6.1) 底径－	図版12-2
第20図 3	G9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文RL 繊維混和 口径－ 器高(4.7) 底径－	図版12-3
第20図 4	H9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文(0段多条の)RL 波状口縁 口唇部刻み 繊維混和	図版12-4
第20図 5	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文ループ文(末端環付) 繊維混和	図版12-5
第20図 6	H10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文結束羽状縄文 繊維混和	図版12-6
第20図 7	E6	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文0段多条の羽状 繊維混和	図版12-7
第20図 8	E8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文羽状縄文 繊維混和	図版12-8
第20図 9	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文羽状縄文 直前段多条のLR 繊維混和	図版12-9
第20図 10	M8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文0段多条の縄文 繊維混和	図版12-10
第20図 11	O8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文撚糸文 菱形文をなす 繊維混和	図版12-11
第20図 12	L11	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文網目状撚糸文 口縁部に3条の連続刺突文 繊維混和	図版12-12
第20図 13	F8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文網目状撚糸文 繊維混和	図版12-13
第20図 14	C8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文網目状撚糸文 繊維混和	図版12-14
第20図 15	G9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文網目状撚糸文 繊維混和 口径－ 器高(3.9) 底径－	図版12-15
第20図 16	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文状撚糸文 2列の連続刺突文 繊維混和	図版12-16
第20図 17	I8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部から刺突が施された3条の太い粘土紐が垂下 その間を刺突 半截竹管による横位・斜位沈線文 繊維混和	図版12-17
第20図 18	F7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文結節回転文の下部に単節縄文 波状口縁 口縁部に沿って沈線文 刺突文 繊維混和	図版12-18
第20図 19	H9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文結節回転文 口縁部に沿って平行沈線文 繊維混和 口径－ 器高(6.0) 底径－	図版12-19
第20図 20	E6	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文網目状撚糸文 波状口縁 繊維混和	図版12-20
第20図 21	K10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文RL 口縁部に結節回転文 繊維混和	図版12-21
第20図 22	F7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文撚糸文L 円形刺突文が施された横位貼付文 内面スス付着 繊維混和	図版12-22
第20図 23	G8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 波状口縁？ 口縁部に沿って3条の横位沈線文 繊維混和	図版12-23
第20図 24	H8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文RL 口縁部半截竹管沈線文 繊維混和 口径－ 器高(17.9) 底径－	図版12-24
第20図 25	I8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	磨滅激しい 口縁部刺突が施された横位粘土紐貼付 繊維混和	図版12-25
第20図 26	F8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文RL 繊維混和	図版12-26
第21図 27	E8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文LR 口縁部貼付に竹管沈線による小波状文 繊維混和	図版13-27
第21図 28	C9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文不明瞭 口縁部に刺突が施された棒状貼付・横位2列の刺突文 その下に指頭による押圧痕が施された粘土紐貼付 繊維混和	図版13-28
第21図 29	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文S字状連鎖沈文 口縁部2列の刺突文	図版13-29
第21図 30	E8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	撚糸文 口縁部刻み 半截竹管沈線文による文様	図版13-30
第21図 31	D8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文と撚糸文 繊維混和	図版13-31
第21図 32	C9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文結束縄文 繊維混和	図版13-32
第21図 33	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文	図版13-33
第21図 34	B8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文	図版13-34
第21図 35	J9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文 繊維混和	図版13-35
第21図 36	O7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文	図版13-36
第21図 37	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文 繊維混和	図版13-37
第21図 38	M8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文S字状連鎖沈文	図版13-38
第21図 39	L10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	半截竹管による沈線文	図版13-39

第７表　遺物包含層出土遺物観察表（１）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第21図 40	L9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴下部	磨滅激しい　地文不明瞭　半截竹管による沈線文間を連続刺突し菱形状の文様を施文	図版13-40
第21図 41	L11	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文LR　半截竹管沈線文による弧線文・波状文	図版13-41
第21図 42	M8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部上半	地文縄文LR　波状口縁　口端部隆帯貼付　胴部半截竹管による縦線・斜線が連結し格子状をなす　交点にボタン状貼付 口径推 18.4 器高－ 底径－	図版13-42
第21図 43	K10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	波状口縁　口縁部貼付粘土帯下端に刻み　半截竹管による沈線間に連続刺突文	図版13-43
第21図 44	K10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	縄文はLR　波状口縁　口縁に沿って4条の半截竹管による沈線文　間を連続刺突	図版13-44
第21図 45	J10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文0段多条LR　口縁部4条の竹管押引きによる連続爪形文	図版13-45
第22図 46	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	口縁部刺突文　半截竹管による横位沈線文　弧状交互沈線文	図版14-46
第22図 47	I8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	頸部に刻みの施された横位粘土紐貼付　半截竹管による弧状交互沈線文 口径推33.0 器高(9.7) 底径－	図版14-47
第22図 48	C9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	口縁部に沿って刻みが施された横位粘土紐貼付　竹管沈線文による格子状の文様	図版14-48
第22図 49	M8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部刻み　口端部から短い貼付文が縦位に垂下　貼付粘土帯に刻み　その下に刻みが施された横位粘土紐貼付　半截竹管沈線文間刺突	図版14-49
第22図 50	C8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	口縁部に穿孔　三条一組の鋸歯状沈線文が連結し菱形状の文様をなす	図版14-50
第22図 51	I10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	磨滅激しい　半截竹管による刻みが施された粘土紐貼付　横位半截竹管沈線文	図版14-51
第22図 52	F7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部刻み　口縁部刻みが施された隆帯貼付	図版14-52
第22図 53	O9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　波頂下にボタン状貼付・棒状貼付　口縁に沿って3列の刺突文	図版14-53
第22図 54	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	半截竹管による横位2列の押引文　刻目のある粘土紐貼付	図版14-54
第22図 55	O7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部刻み　半截竹管による刺突文	図版14-55
第22図 56	F7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文不明瞭　口縁部に沿って4条の横位沈線文　円形刺突文	図版14-56
第22図 57	E6	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	沈線文による格子状の文様　繊維混和	図版14-57
第22図 58	J9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	刻みが施された横位粘土紐貼付　ボタン状貼付　半截竹管沈線文　内面スス付着	図版14-58
第22図 59	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	平行沈線間刺突による文様	図版14-59
第22図 60	L9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	沈線による三角形状・方形状の文様　ボタン状貼付	図版14-60
第22図 61	F7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文？　刻みが施された横位貼付文・連続刺突文	図版14-61
第22図 62	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部に沿って3段の円形連続刺突文　その下に円形竹管刺突文	図版14-62
第22図 63	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部に沿って刻みが施された横位粘土紐貼付　山形の平行沈線文・刺突文	図版14-63
第22図 64	F7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文LR　円形竹管による刺突文　刻みが施された横位貼付文	図版14-64
第22図 65	J9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文　口縁部に沿って平行沈線文　間に斜位沈線文	図版14-65
第22図 66	D8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	刻みが施された貼付文　半截竹管沈線文　円形刺突文	図版14-66
第22図 67	E8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文RL　円形竹管刺突文	図版14-67
第22図 68	N9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部刻み　口縁部半截竹管による沈線文・刺突文	図版14-68
第22図 69	O7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文付加条縄文LR+r	図版14-69
第22図 70	I8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	円形竹管刺突文　円内を二分割	図版14-70
第22図 71	G8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部から撚糸Rを縦回転して施文　その下に3条の横位沈線文と沈線による格子状の文様	図版14-71
第23図 72	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部内面に粘土紐貼付による小波状文	図版15-72
第23図 73	J9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文RL　粘土紐貼付による小波状文　ボタン状貼付 口径－ 器高(5.8) 底径－	図版15-73
第23図 74	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	蕨手状の粘土紐貼付	図版15-74
第23図 75	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部刺突が施された鋸歯状装飾体	図版15-75
第23図 76	I10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	粘土紐貼付　口縁部と粘土紐に縄文無節Lを押捺	図版15-76
第23図 77	M7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　波頂下に粘土紐貼付による向い合う半環文　口縁部に沿って沈線文	図版15-77
第23図 78	J10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文LR　沈線文	図版15-78

第８表　遺物包含層出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第23図 79	I8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴～底部	地文縄文LR 胴部に粘土紐貼付による小波状文 口径－ 器高(11.9) 底径13.1	図版15-79
第23図 80	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	粘土紐貼付による鋸歯状文・格子目文	図版15-80
第23図 81	M7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 粘土紐貼付による鋸歯状文	図版15-81
第23図 82	M7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 口縁端部に貼付による鋸歯状装飾体 その下に粘土紐貼付による鋸歯状文	図版15-82
第23図 83	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部鋸歯状装飾体 粘土紐貼付による鋸歯状文	図版15-83
第23図 84	G8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	刺突が施された1条の横位粘土紐貼付 その下に粘土紐貼付による鋸歯状文 口径－ 器高(4.5) 底径－	図版15-84
第23図 85	M9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁部 口縁に沿って粘土紐貼付による梯子状文が渦巻き状に施され中心に穿孔	図版15-85
第23図 86	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	口縁部貼付粘土帯に刻みを施し鋸歯状文 頸部山形沈線文	図版15-86
第23図 87	J10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文RL 口唇部・口縁部刻み 半截竹管沈線文	図版15-87
第23図 88	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部鋸歯状貼付文 刺突が施された粘土紐貼付 梯子状粘土紐貼付	図版15-88
第23図 89	K10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部刻み 口縁部鋸歯状文 穿孔 その下に刻みが施された粘土紐貼付 半截竹管による横線・弧線 ボタン状貼付	図版15-89
第23図 90	J8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	鋸歯状沈線文 粘土紐貼付による鋸歯状文 口径－ 器高(4.1) 底径－	図版15-90
第23図 91	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁 口縁鋸歯状装飾体 頸部刻みが施された粘土紐貼付 鋸歯状沈線文	図版15-91
第23図 92	J10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	無文 口縁部貼付 口唇部に刻み 内面に輪積みの痕跡を残す	図版15-92
第23図 93	K10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文RL 口縁部を指でつまみ微かな波状口縁 口縁部粘土紐の下部は沈刻鋸歯状文 口径推24.8 器高(12.6) 底径－	図版15-93
第24図 94	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	磨滅激しい 地文結束羽状縄文 口径－ 器高(12.7) 底径－	図版16-94
第24図 95	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴～底部	磨滅激しい 地文縄文RL 内面コゲ 口径－ 器高－ 底径推6.4	図版16-95
第24図 96	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	磨滅激しい 地文結束羽状縄文 口縁部ボタン状貼付2ヶ所と棒状・蕨手状貼付 口縁～頸部細い粘土紐による横位鋸歯状貼付 口径27.2 器高(24.5) 底径－	図版16-96
第24図 97	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	球胴形 地文縄文LR 結節浮線文による重環文・半環文・重三角文	図版16-97
第24図 98	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴～底部	地文結束羽状縄文・S字状連鎖沈文 細い粘土紐貼付による文様 底部に網代痕(磨消) 口径－ 器高(19.9) 底径12.0	図版16-98
第24図 99	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部上端	地文縄文LR 波頂下粘土紐貼付による円文 平行沈線間刺突文による変形X字文 その交点にボタン状貼付	図版16-99
第25図 100	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部上半	磨滅激しい 地文不明瞭 縄文RL？ 波状口縁 口縁部肥厚 沈線による鋸歯状文と円文 頸部半截竹管沈線文・小波状文・刺突文 胴部半截竹管沈線文による施文とボタン状貼付 口径26.0 器高(14.4) 底径－	図版17-100
第25図 101	H9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁 幅広の渦巻状貼付に細い粘土紐貼付 その下に細い粘土紐貼付	図版17-101
第25図 102	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	細い粘土紐が貼付けられた渦巻隆帯による舌状突起	図版17-102
第25図 103	L9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	細い粘土紐貼付	図版17-103
第25図 104	K10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	斜位粘土紐貼付	図版17-104
第25図 105	M8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	2条の横位結節浮線文間に細い粘土紐貼付による鋸歯状文と交互刺突	図版17-105
第25図 106	O7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	細い粘土紐貼付文施文 ボタン状貼付	図版17-106
第25図 107	O7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文不明瞭(LR？) 結節浮線文	図版17-107
第25図 108	N8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部・口縁部細い粘土紐貼付による施文	図版17-108
第25図 109	H10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文不明瞭 細い粘土紐貼付による鋸歯状文と結節浮線文	図版17-109
第25図 110	K8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文RL 球胴形 波状口縁 波頂下にボタン状貼付 口縁部下端刻みによる鋸歯状文	図版17-110
第25図 111	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縦方向へのS字状連鎖沈文 胴部に沈線文	図版17-111
第25図 112	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縦方向へのS字状連鎖沈文	図版17-112
第25図 113	L10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縦方向へのS字状連鎖沈文	図版17-113
第25図 114	M8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	口唇部刻み 半截竹管による変形爪形文 竹管による沈線文 口径推11.5 器高(7.2) 底径－	図版17-114
第25図 115	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文LR 頸部刻みによる鋸歯状文	図版17-115

第９表　遺物包含層出土遺物観察表（３）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第26図 116	L11	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文不明瞭（縄文LR？） 4単位の波状口縁 波頂下貼付による円文 頸部縄文無節Lが押捺 口径推22.4 器高－ 底径－	図版18-116
第26図 117	K10	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	磨滅激しい 地文不明瞭 口縁部粘土帯貼付に縦位・横位短沈線文	図版18-117
第26図 118	O7	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部肥厚 沈線による円文・弧線文・刻みのある貼付文 鋸歯状沈線文	図版18-118
第26図 119	K9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	磨滅激しい 波状口縁 口縁部から縦位粘土紐垂下 刻みの施された横位粘土紐貼付 半截竹管沈線文 口径推22.6 器高（5.9）底径－	図版18-119
第26図 120	L11	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～底部	地文縄文RL 口縁部粘土紐貼付による鋸歯状文・半環文 胴部結節浮線文によるX字文・粘土紐貼付による円文・ボタン状貼付 口径推20.0 器高22.7 底径推8.2	図版18-120
第26図 121	K8	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	鋸歯状沈線文 口縁部下端に刻み	図版18-121
第26図 122	J10	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁 波頂下に沈線による円文 棒状貼付 横位隆帯貼付	図版18-122
第26図 123	M7	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁 波頂下に沈線による円文 貼付粘土帯を三角形に刻み鋸歯状文	図版18-123
第26図 124	Q7	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	口唇～口縁部貼付 刻みのある貼付文 半截竹管による横位・斜位沈線文 交点にボタン状貼付	図版18-124
第26図 125	N9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・胴部	半截竹管による横線・縦線・斜線が格子状になり交点にボタン状貼付	図版18-125
第26図 126	L10	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	波状口縁 竹管沈線文が施された縦位隆帯貼付 横位・縦位短沈線文	図版18-126
第26図 127	H8	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文？ 頸部に結節浮線文 口径－ 器高（4.7）底径－	図版18-127
第26図 128	I9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部窓枠状の隆帯貼付に刻み 横位半截竹管沈線文にボタン状貼付	図版18-128
第27図 129	G8	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部肥厚 沈線文 口径－ 器高（7.2）底径－	図版19-129
第27図 130	F9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	球胴形 地文羽状縄文 口縁に2条の隆起帯 絡条体を圧痕 口径推15.0 器高（8.0）底径－	図版19-130
第27図 131	I9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文縄文LR 口唇部刻み 2条の横位粘土紐貼付	図版19-131
第27図 132	J9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	半截竹管による斜位沈線文・波状文 刺突が施された横位粘土紐貼付	図版19-132
第27図 133	F7	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	波状口縁 半截竹管による沈線文 小波状文	図版19-133
第27図 134	H10	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・頸部	粘土紐貼付 半截竹管沈線文による横位沈線文と小波状文	図版19-134
第27図 135	J9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文不明瞭 波状口縁 口縁部に沿って3条の竹管押引き文	図版19-135
第27図 136	K9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文RL 波状口縁 波頂下に粘土紐貼付剥落痕 口縁に沿って3条の平行沈線間爪形文 ボタン状貼付 口径推20.8 器高－ 底径－	図版19-136
第27図 137	O8	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇の正面・上面に円形浮文を主とする装飾の突起 口縁には格子目枠状文と三角形彫去の手法 口径推36.0 器高- 底径-	図版19-137
第27図 138	I9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文LR 胴部上端に半截竹管沈線文	図版19-138
第27図 139	K9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・胴部	小形巻貝による回転文 半截竹管による平行沈線文	図版19-139
第27図 140	O8	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・胴部	小形巻貝による回転文 半截竹管による平行沈線文	図版19-140
第28図 141	K9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部、縄文原体Lを押捺	図版20-141
第28図 142	O9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・頸部	三角形印刻文 半截竹管による押引き文	図版20-142
第28図 143	L9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	押引文 その下に三角形印刻文と沈線文	図版20-143
第28図 144	M9	Ⅰ 層	縄文土器	ミニチュア・頸部～胴部	磨滅激しい 地文不明瞭	図版20-144
第28図 145	C9	Ⅰ 層	縄文土器	ミニチュア・胴部下端～底部	磨滅激しい 地文不明瞭	図版20-145
第28図 146	F8	Ⅰ 層	縄文土器	ミニチュア・底部	地文不明瞭 口径－ 器高－ 底径5.7	図版20-146
第28図 147	K10	Ⅰ 層	縄文土器	ミニチュア・胴部下端～底部	地文不明瞭 胴部下端直線的に立ち上がる 口径－ 器高（2.55）底径5.0	図版20-147
第28図 148	K10	Ⅰ 層	縄文土器	ミニチュア・胴部下端～底部	地文不明瞭 胴部下端直線的に立ち上がる 口径－ 器高（2.3）底径5.0	図版20-148
第28図 149	O8	Ⅰ 層	縄文土器	ミニチュア・底部	胴部下端直線的に立ち上がる 口径－ 器高（1.4）底径3.3	図版20-149
第28図 150	L9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文不明瞭 （縄文R？） 口唇部円形刺突文	図版20-150
第28図 151	K9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・口縁部	地文無文 表面輪積み痕顕著	図版20-151
第28図 152	G8	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文RL	図版20-152
第28図 153	L9	Ⅰ 層	縄文土器	深鉢・胴部下端～底部	地文不明瞭 口径－ 器高（3.1）底径推6.0	図版20-153

第 10 表　遺物包含層出土遺物観察表（４）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別	器種・部位	文様・地文の特徴	写真図版
第28図 154	J9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部下端～底部	地文不明瞭 口径－ 器高(4.0) 底径推5.9	図版20-154
第28図 155	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部	地文縄文L	図版20-155
第28図 156	K8	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部下端～底部	地文不明瞭 胴部下端直線的に立ち上がる 底部スダレ状圧痕 口径－ 器高(3.3) 底径推14.8	図版20-156
第28図 157	E9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・底部	底部網代痕 内面被熱 口径－ 器高(2.3) 底径推12.0	図版20-157
第28図 158	K9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部下端～底部	磨滅激しい 地文斜行縄文 胴部下端直線的に立ち上がる 底部網代痕 口径－ 器高(4.7) 底径推16.8	図版20-158
第28図 159	I9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・底部	底部網代痕 口径－ 器高(2.2) 底径推18.0	図版20-159
第28図 160	I10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・底部	底部網代痕 口径－ 器高(1.6) 底径推17.0	図版20-160
第28図 161	L9	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・底部	底部網代痕	図版20-161
第28図 162	P7	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・底部	磨滅激しい 地文不明瞭縄文RL？ 底部木葉痕 口径－ 器高(1.5) 底径推10.6	図版20-162
第28図 163	L10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・胴部下端～底部	磨滅激しい 地文不明瞭 胴部下端直線的に立ち上がる 口径－ 器高(8.85) 底径26.4	図版20-163
第28図 164	L10	Ⅰ層	縄文土器	深鉢・口縁～胴部	地文縄文RL 磨消縄文 三叉文	図版20-164

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別・部位	径（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考	写真図版
第29図 165	L9	Ⅰ層	耳飾		3.6	1.9	1.8	7.0	臼状耳飾	図版21-165
第29図 166	L9	Ⅰ層	土器片錐	150.0	3.2	3.2	0.9	10.5	刺突文	図版21-166
第29図 167	E8	Ⅰ層	土器片錐		4.0	4.8	0.8	19.6	磨滅激しい	図版21-167
第29図 168	M9	Ⅰ層	土製円盤	3.7			0.9	10.0	連続刺突による爪形文	図版21-168
第29図 169	K9	Ⅰ層	土製円盤	5.6			0.9	27.0	地文不明瞭 繊維混入	図版21-169
第29図 170	O7	Ⅰ層	土製円盤	6.5			1.1	51.0	地文撚糸文R	図版21-170
第29図 171	M7	Ⅰ層	土製円盤		2.8	3.8	0.8	10.0	磨滅激しい 地文不明瞭 楕円形	図版21-171
第29図 172	M7	Ⅰ層	土製円盤	3.0			1.0	8.0	半截竹管沈線文	図版21-172
第29図 173	P7	Ⅰ層	板状土偶・腕部		3.9	3.2	1.3	14.8	手の先に小さな円孔があけられている 表面に円形刺突文を充填 裏面無文	図版21-173
第29図 174	I10	Ⅰ層	板状土偶・頭部		4.6	3.8	1.3	20.9		図版21-174
第29図 175	I10	Ⅰ層	板状土偶・頭部		3.2	4.8	1.4	17.1		図版21-175
第29図 176	K10	Ⅰ層	板状土偶・脚部		8.7	6.4	2.2	126.6	表面に円形刺突文を充填 沈線による渦巻文 裏面に円形刺突文を充填 沈線による三角形状の文様 三角形内無文	図版21-176
第29図 177	R6	Ⅰ層	板状土偶・体部		6.4	5.3	1.7	67.9	表面に半截竹管による縦位沈線文 裏面に半截竹管による横位沈線文と山形文を連結した菱形状の文様	図版21-177
第29図 178	O8	Ⅰ層	板状土偶・体～脚部		11.4	6.7		148.4		図版21-178
第29図 179	E8	Ⅰ層	板状土偶		7.0	8.8	1.9	150.0	表面に指頭痕あり	図版21-179

挿図番号	出土位置（グリッド）	層位	種別	器種	石材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考	写真図版
第30図 180	D8	Ⅰ層	石器	石鏃	珪質頁岩	35	10	4	1.2	平基無茎鏃	図版22-180
第30図 181	K9	Ⅰ層	石器	石鏃	流紋岩	21	16	5	1.0	凹基無茎鏃	図版22-181
第30図 182	F7	Ⅰ層	石器	石鏃	珪質頁岩	36	17	3	1.2	凹基無茎鏃	図版22-182
第30図 183	M9	Ⅰ層	石器	石鏃	玉髄	36	23	3	1.6	凹基無茎鏃	図版22-183
第30図 184	K9	Ⅰ層	石器	石鏃	珪質頁岩	20	13	3	0.6	凹基無茎鏃	図版22-184
第30図 185	K9	Ⅰ層	石器	石鏃	珪質頁岩	35	22	5	1.6	凹基無茎鏃	図版22-185
第30図 186	J10	Ⅰ層	石器	石鏃	珪質頁岩	25	19	4	1.0	凹基無茎鏃	図版22-186
第30図 187	K10	Ⅰ層	石器	石鏃	珪質頁岩	40	21	5	2.7	凹基無茎鏃	図版22-187
第30図 188	P7	Ⅰ層	石器	石鏃	流紋岩	27	15	6	1.3	凹基無茎鏃	図版22-188
第30図 189	H10	Ⅰ層	石器	石鏃	鉄石英	24	21	3	1.2	凹基無茎鏃	図版22-189

第 11 表　遺物包含層出土遺物観察表（５）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層 位	種 別	器 種	石 材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重 量（g）	備 考	写真図版
第30図 190	K8	Ⅰ 層	石器	石鏃	珪質頁岩	25	20	5	1.8	凹基無茎鏃	図版22-190
第30図 191	K8	Ⅰ 層	石器	石鏃	碧玉	31	20	6	2.3	凹基無茎鏃	図版22-191
第30図 192	P7	Ⅰ 層	石器	石鏃	珪質頁岩	25	25	5	1.7	凹基無茎鏃	図版22-192
第31図 193	O8	Ⅰ 層	石器	石鏃	珪質頁岩	39	12	5	1.7	中央部両面に二重パティナあり	図版23-193
第31図 194	H9	Ⅰ 層	石器	石鏃	珪質頁岩	50	17	5	3.4	二重パティナあり	図版23-194
第31図 195	N9	Ⅰ 層	石器	石鏃	玉髄	23	18	6	2.5	凸基有茎鏃	図版23-195
第31図 196	L10	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	84	33	8	21.9	縦型	図版23-196
第31図 197	L9	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	85	43	8	39.1	縦型 つまみ部と両側縁に二重パティナあり	図版23-197
第31図 198	I9	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	59	21	5	5.0	縦型 つまみ部に二重パティナあり	図版23-198
第31図 199	K10	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	64	4	6	4.7		図版23-199
第31図 200	M7	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	46	17	5	3.7	縦型	図版23-200
第31図 201	C8	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	47	14	4	2.9	縦型 つまみ部に二重パティナあり	図版23-201
第31図 202	I9	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	46	19	5	4.8	縦型	図版23-202
第31図 203	K8	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	81	12	6	10.3	縦型 つまみ部に二重パティナあり	図版23-203
第32図 204	F7	Ⅰ 層	石器	石匙	玉髄	39	42	7	7.9	横型 つまみ部に二重パティナあり	図版24-204
第32図 205	D8	Ⅰ 層	石器	石匙	珪質頁岩	(30)	30	5	3.3	横型	図版24-205
第32図 206	M8	Ⅰ 層	石器	石篦	珪質頁岩	143	20	24	127.7		図版24-206
第32図 207	C9	Ⅰ 層	石器	石篦	珪質頁岩	66	35	11	29.3		図版24-207
第32図 208	H8	Ⅰ 層	石器	石篦	珪質頁岩	49	30	8	14.7		図版24-208
第32図 209	C7	Ⅰ 層	石器	石篦	珪質頁岩	58	38	15	29.1		図版24-209
第32図 210	I9	Ⅰ 層	石器	石篦	珪質頁岩	72	49	16	46.7		図版24-210
第33図 211	P7	Ⅰ 層	石器	石篦	流紋岩	39	27	9	6.0		図版25-211
第33図 212	P7	Ⅰ 層	石器	掻器	珪質頁岩	34	26	8	5.6		図版25-212
第33図 213	E8	Ⅰ 層	石器	尖頭器	珪質頁岩	102	17	8	13.9	柳葉形	図版25-213
第33図 214	F7	Ⅰ 層	石器	尖頭器	珪質頁岩	123	26	9	29.9		図版25-214
第33図 215	F8	Ⅰ 層	石器	尖頭器	珪質頁岩	94	24	12	29.8	基部と表面の左側縁に二重パティナあり	図版25-215
第33図 216	M9	Ⅰ 層	石器	尖頭器	珪質頁岩	74	25	12	24.9		図版25-216
第33図 217	G9	Ⅰ 層	石器	尖頭器	珪質頁岩	44	13	6	3.3	木葉形	図版25-217
第33図 218	K8	Ⅰ 層	石器	尖頭器	流紋岩	53	35	12	23.6	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ状	図版25-218
第33図 219	D9	Ⅰ 層	石器	尖頭器	頁岩	109	36	26	120.6	木葉形（未） 左側縁に二重パティナあり	図版25-219
第34図 220	C8	Ⅰ 層	石器	石錐	珪質頁岩	68	22	8	9.1	刃部に二重パティナあり	図版26-220
第34図 221	I10	Ⅰ 層	石器	石錐	珪質頁岩	34	13	7	2.4		図版26-221
第34図 222	I8	Ⅰ 層	石器	石錐	流紋岩	28	17	7	2.1	凹基無茎鏃	図版26-222
第34図 223	O8	Ⅰ 層	石器	掻器	珪質頁岩	62	34	11	23.5		図版26-223
第34図 224	G8	Ⅰ 層	石器	二次加工のある剥片	珪質頁岩	60	40	13	25.2	両側縁に二重パティナあり	図版26-224
第34図 225	F9	Ⅰ 層	石器	削器	珪質頁岩	59	24	8	9.2		図版26-225
第34図 226	O9	Ⅰ 層	石器	二次加工のある剥片	珪質頁岩	59	33	8	14.7		図版26-226
第34図 227	E8	Ⅰ 層	石器	削器	珪質頁岩	33	16	4	2.1		図版26-227
第34図 228	K11	Ⅰ 層	石器	削器	珪質頁岩	38	32	5	6.4		図版26-228
第34図 229	F 7	Ⅰ 層	石器	掻器	珪質頁岩	37	34	12	12.8		図版26-229

第 12 表　遺物包含層出土遺物観察表（６）

挿図番号	出土位置（グリッド）	層 位	種 別	器 種	石 材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重 量（g）	備 考	写真図版
第35図 230	P7	Ⅰ 層	石器	複合掻器	珪質頁岩	59	70	16	55.2		図版27-230
第35図 231	L11	Ⅰ 層	石器	楔形石器	珪質頁岩	32	21	10	7.0		図版27-231
第35図 232	D9	Ⅰ 層	石器	石核	黒曜石	42	54	39	84.9		図版27-232
第35図 233	P7	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	59	78	18	81.0		図版27-233
第35図 234	O8	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	38	69	35	75.5		図版27-234
第36図 235	M9	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	19	36	22	9.7		図版28-235
第36図 236	P9	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	27	50	37	48.2		図版28-236
第36図 237	O7	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	33	46	21	27.8		図版28-237
第36図 238	L10	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	48	62	16	40.0		図版28-238
第36図 239	K10	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	36	44	15	18.2		図版28-239
第37図 240	F8	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	62	42	19	41.1		図版29-240
第37図 241	K8	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	40	44	13	16.1		図版29-241
第37図 242	J8	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	34	48	56	62.7		図版29-242
第37図 243	K10	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	49	76	49	149.3		図版29-243
第38図 244	J9	Ⅰ 層	石器	石核	鉄石英	30	46	23	40.7		図版30-244
第38図 245	J9	Ⅰ 層	石器	石核	珪質頁岩	42	71	23	85.7		図版30-245
第38図 246	L9	Ⅰ 層	石器	磨製石斧	輝緑岩	120	54	30	361.5		図版30-246
第38図 247	K10	Ⅰ 層	石器	磨製石斧	珪質凝灰岩	74	41	23	135.4		図版30-247
第38図 248	K8	Ⅰ 層	石器	磨製石斧	珪質凝灰岩	42	49	15	51.4		図版30-248
第39図 249	L10	Ⅰ 層	石器	石皿	デイサイト（石英安山岩）	129	119	30	538.5		図版31-249
第39図 250	F7	Ⅰ 層	石器	石皿	凝灰質砂岩	91	82	27	183.6		図版31-250
第39図 251	K9	Ⅰ 層	石器	石皿	安山岩	285	247	60	5420.0		図版31-251
第40図 252	K9	Ⅰ 層	石器	磨石	安山岩	131	88	32	468.9		図版31-252
第40図 253	I9	Ⅰ 層	石器	磨・凹石	安山岩	81	83	29	271.4		図版31-253
第40図 254	K9	Ⅰ 層	石器	磨・凹石	安山岩	96	106	45	447.8		図版31-254
第40図 255	F8	Ⅰ 層	石器	磨石	火山礫凝灰岩	111	98	40	478.2		図版32-255
第40図 256	L10	Ⅰ 層	石器	磨石	安山岩	128	94	44	717.6		図版32-256
第41図 257	H10	Ⅰ 層	石器	磨石	砂岩	135	112	35	763.7		図版32-257
第41図 258	L9	Ⅰ 層	石器	磨石	安山岩	136	60	46	558.4		図版32-258
第41図 259	G8	Ⅰ 層	石器	磨石	砂岩	109	90	30	452.7		図版32-259
第41図 260	J9	Ⅰ 層	石器	磨石	安山岩	68	61	55	320.8		図版33-260
第41図 261	O8	Ⅰ 層	石器	磨石	安山岩	83	111	31	365.4		図版33-261
第41図 262	E8	Ⅰ 層	石器	磨石	凝灰質砂岩	50	39	38	109.3		図版33-262
第41図 263	L10	Ⅰ 層	石器	磨石	安山岩	93	91	70	824.2		図版33-263
第42図 264	K10	Ⅰ 層	石器	異形石器	鉄石英	34	17	6	2.9		図版33-264
第42図 265	C8	Ⅰ 層	石器	異形石器	珪質頁岩	16	9	4	0.5		図版33-265
第42図 266	D9	Ⅰ 層	石器	異形石器	珪質頁岩	19	13	4	1.0		図版33-266
第42図 267	L11	Ⅰ 層	石器	垂飾品	頁岩	21	21	6	2.8		図版33-267
第42図 268	K9	Ⅰ 層	石器	垂飾品	粘板岩	59	19	6	13.1		図版33-268
第42図 269	K8	Ⅰ 層	石器	石剣	千枚岩	106	23	16	84.5		図版33-269

第 13 表　遺物包含層出土遺物観察表（７）

挿図番号	層 位	種 別	器 種・部 位	文 様 ・ 地 文 の 特 徴	写真図版
第43図 1	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	地文網目状撚糸文　口縁に沿って2条の沈線文　補修孔　繊維混和	図版34-1
第43図 2	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・胴部	地文撚糸R　半截竹管沈線文　繊維混和	図版34-2
第43図 3	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁に沿って連続刺突文の施された粘土紐貼付とその下に2列の連続刺突文	図版34-3
第43図 4	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁～頸部	地文縄文？　波状口縁　波頂部に刺突文　頸部に横位沈線文・ボタン状貼付	図版34-4
第43図 5	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・胴部	半截竹管沈線文による横線・縦線・斜線・弧線・波線の施文	図版34-5
第43図 6	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部に3条・口縁部に2条の小波文貼付	図版34-6
第43図 7	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	口唇部に棒状の粘土紐を列状に貼付　半截竹管押引文と三角形印刻文が交互に2列施される	図版34-7
第43図 8	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁部に太く短い粘土紐を縦位に2列貼付　その下に小波状沈線文	図版34-8
第43図 9	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　太い粘土紐貼付　口縁部と貼付の縁辺に緻密な結節浮線文	図版34-9
第43図 10	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　口縁部に連続爪形文が施され平行沈線によって区画される　内面は口縁部に沿って粘土紐貼付	図版34-10
第43図 11	表土・攪乱	縄文土器	深鉢・口縁部	波状口縁　口唇部刻み　平行沈線間爪形文　三角形印刻文　内面口縁部に沿って粘土紐貼付	図版34-11

挿図番号	層 位	種 別・部 位	径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考	写真図版
第43図 12	表土・攪乱	土器片錐		3.4	5.3	1.0	22.7	磨滅激しい	図版34- 12

挿図番号	層 位	種 別	器 種	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	備 考	写真図版
第43図 13	表土・攪乱	石器	石鏃	珪質頁岩	23	14	5	1.0		図版34-13
第43図 14	表土・攪乱	石器	石鏃	珪質頁岩	18	14	4	0.5	凹基無茎鏃	図版34-14
第43図 15	表土・攪乱	石器	石匙	珪質頁岩	64	25	11	13.8	縦型	図版34-15
第43図 16	表土・攪乱	石器	楔形石器	珪質頁岩	27	40	13	12.7		図版34-16
第43図 17	表土・攪乱	石器	石核	珪質頁岩	35	35	16	14.8		図版34-17
第43図 18	表土・攪乱	石器	石核	珪質頁岩	47	36	17	27.4		図版34-18
第44図 19	表土・攪乱	石器	石核	玉髄	57	40	20	49.0		図版34-19
第44図 20	表土・攪乱	石器	石核	安山岩	79	83	27	185.5		図版35-20
第44図 21	表土・攪乱	石器	磨製石斧	珪質凝灰岩	85	41	25	164.0		図版34-21

挿図番号	層 位	種 別	器種・部位	備 考	写真図版
第44図 22	表土・攪乱	須恵器	坏・体下～底部	外面横ナデ・ヘラ削り調整　内面ナデ調整　底部回転糸切り(左)　体部下端わずかに柱状になる　全面に灰被りが見られる　口径－ 器高(2.3) 底径6.8	図版35-22
第44図 23	表土・攪乱	須恵器	甕・胴部	外面に平行タタキ　内面に矢羽根状の当具痕　やや硬質　胎土に白色粒子・黒色粒子が見られる	図版35-23

第 14 表　表土・攪乱出土遺物観察表

第Ⅵ章　成果と課題

今回の調査において検出された遺構は227基である。そのうち、工事による掘削行為の影響が及ばないため検出に留めた遺構は139基、調査を実施した遺構は、土坑21基、ピット67基である。調査区の全域では、これらの遺構を覆う形で遺物包含層が確認された。

遺物は、土坑から485点、ピットから265点確認され、遺物包含層からは縄文土器15,104点、土製品20点、石器1390点、石製品３点、土師器・須恵器が21点出土している。また表土や攪乱から1,519点が出土している。

以下、今回の調査における成果と、今後の調査の課題を列記しておきたい。

１．検出された遺構について

今回の調査では、竪穴住居跡などの集落に直接関連する遺構は発見されず、土坑やピットが主体であった。これらの遺構は単独で発見された場合、その本来の機能や性格を把握することが困難であり、今回発見された遺構についても、残念ながらそのほとんどの性格が不明といわざるを得ない。わずかにＳＫ６土坑が陥穴、ＳＸ１性格不明遺構が住居跡である可能性を指摘できただけである。

遺構から出土した土器はすべて縄文土器で、大木１式から大木６式まで型式に幅がある。遺構の時期は、出土した遺物の内のより新しい時期の遺物に求められる。そのことを前提にすると、今回検出された遺構の中で、時期を判断できたものは、以下の29基である。

大木２ａ式	ピット49・52	計２基
大木２ａ・２ｂ式	ピット20・77	計２基
前期前半	ＳＫ５土坑	計１基
大木４式	ＳＫ３・６・20・21・24土坑、ピット12・14・66・73	計９基
大木５式	ピット16	計１基
大木４・５式	ＳＫ１土坑、ピット13	計２基
大木６式	ＳＫ４・９・14土坑、ピット９・34・61・72・74・75・ＳＸ１	計10基
前期後半	ピット39・48	計２基

このように大木４式・６式に比定される土器が出土する遺構が特に多いことから、今回の調査地点で発見された遺物包含層と遺構は、大木４式期以降にあたる縄文時代前期後半を中心とするものと考えられる。さらに、遺物の出土がない場合でも、上記の遺構と重複関係にある遺構については、その前後関係から時期を推定することも可能である。例えば、前期前半のものと考えられる遺構として、繊維土器の出土したＳＫ５土坑よりも古いピット８が挙げられる。さらに前期後半と推測できるものとして、土坑４基（ＳＫ７・10・16・19）、ピット２基（Ｐ15・71）が挙げられる。

次に、ＳＫ１土坑とＳＸ１性格不明遺構について触れておきたい。

ＳＫ１は、遺物包含層の掘り下げ途中で発見された唯一の遺構である。遺物は大木４・５式に帰属するものが出土しているが、大木６式土器を含む遺物包含層を掘り込んでつくられていることとは矛盾するので、縄文時代中期以降の遺構である可能性が考えられる。

ＳＸ１は一部をトレンチ状に掘り下げたのみで、その詳細は不明であるものの、遺構検出作業の段階から遺物が集中的に出土した。その中には、接合して大きな破片に復元できる土器が含まれており、住居跡である可能性も考えられる。出土遺物から判断して、遺構の年代は大木６式期に相当すると推定される。これまで縄文時代前期初頭

の集落跡と考えられてきた三神峯遺跡に、前期末葉に位置づけられる大木６式期の集落が存在していた可能性も浮かび上がってきた。今回発見された土坑やピットとともに、その広がりが注目されるところである。

２．遺物包含層について

遺物包含層は表土直下において検出され、調査区のほぼ全域を覆っていた。ただし層厚には大きな差があり、台地の中央部に近い南側では約 10 ㎝、斜面に近い北西側では約 40 ㎝を測る。ＳＫ１土坑以外、遺構はすべてこの層の直下から検出されており、この遺物包含層が遺構をパックしているような状態である。

遺物包含層の明確な性格やそれが形成される理由については不明であるが、少なくとも、当地を利用した後に、遺物包含層が形成されたことは確かである。今回検出された遺物包含層は、緩い斜面や浅い谷部に形成されている点で、山田上ノ台遺跡と類似する。山田上ノ台遺跡の遺物包含層の性格については、総合的な集落構造の検討や遺物の出土状況などから、「ごみ捨て場」と解釈されており（白鳥 1999）、当調査地点においてもその可能性が推察される。

遺物包含層の堆積した時期は、その形成過程が明確でないため不明である。出土土器から推察するとすれば、大木１式以降のものが含まれ、大木６式をピークとしてそれ以降のものは数量が激減することから、その形成時期は少なくとも前期末以降であろう。

次に、第１次・第３次調査地点検出の遺物包含層との類似点をまとめ、対応関係を考えてみたい。ただし、今回確認された遺物包含層には、年代差のある土器が混在した状態で含まれているため、その把握は容易ではないが、今後の調査のための予察としたい。まず、第２次調査地点の遺構確認面「灰褐色土層」と、第３次調査地点の基本層第３層「灰褐色粘質シルト」については、第Ⅱ章において指摘したように対応関係にある。いずれも竪穴住居跡が検出された面であり、遺物は少ないながらも、大木１式より前の型式に属する、縄文時代前期初頭の土器を包含していた。

当調査地点における基本層Ⅱ層は、遺物包含層（Ⅰ層）とロームへの漸移層（Ⅲ層）との間に堆積する灰褐色シルト層である。それは、調査区内に安定した堆積箇所が認められず、遺物の出土もなかったが、今後の調査においても検出される可能性は十分に考えられる。これと第１次･第３次のものとを比較すると、土色が類似している点、遺構の掘り込み面となっている点で類似を指摘でき、これらは対応関係にあると理解してよいものと思われる。

最後に、第１次･第３次調査地点で確認された遺物包含層との相違点を挙げる。当調査地点と大きく異なるのは、第１・３次調査地点では、それが２～３層に分層でき、それぞれの層中に大木１式･２ａ式、それらの前型式といった遺物が層位的に堆積していたということである。このことから、三神峯遺跡の遺物包含層の形成は、遺跡全体として一様でない可能性がある。集落の範囲と遺物包含層形成や範囲については、今後の調査成果に期待したい。

３．遺物包含層出土の石器について

今回の調査によって遺物包含層から出土した石器は 1,390 点である。Ａ区とＢ区の、ＦからＱ列の範囲全体から出土しており、明瞭な集中部は確認されなかった。包含層出土石器の内訳は、打製石器 1,275 点、磨製石器６点、礫石器 109 点であり、ほかに石製品が３点出土している。遺物包含層は、前述のように縄文時代前期末に形成されたものと考えられるが、大木１式から６式の土器がみられ、前期の古い時期から新しい時期までの石器を含んでいる可能性がある。しかし、包含層出土土器の大半が大木４式から６式の時期であることから、前期後半の資料が多くを占めるものと推測される。打製石器の内訳は、石鏃 94 点、石匙 22 点、石箆 12 点、尖頭器７点、石錐５点、楔形石器３点、掻器・削器 44 点、二次加工のある剥片 126 点、微細剥離痕のある剥片 90 点、異形石器３点、石核 28 点、剥片 836 点、砕片１点、原石１点、不明４点である。以下、数量的に比較的まとまっている石鏃と石匙について、1975 年に調査されたＣ地点から出土した前期前半の資料と比較検討を行い、その後、包含層出土石器全体に係る問題に触れ、まとめとしたい。

石鏃

今回出土した製品の中で資料数の最も多い器種は石鏃である。94 点中 40 点は基部の抉りが深く器体の３分の１ほどの深さまで抉りこまれた凹基無茎石鏃で、抉りの浅いものや平基無茎のものは 34 点に留まる。表裏両面に素材剥離面を残す例もあるが、全体が丁寧な調整剥離面に覆われているものが多い。完形品を含む長さの計測可能な石鏃の平均長は 2.9 ㎝である。石材は珪質頁岩が多く、他に流紋岩、碧玉、玉髄などが認められる。一方、第３次調査地点出土資料は凹基無茎で抉りの浅いものが大半を占めている。表裏両面には素材剥離面が残存し、周縁加工の調整に留まるものも多い。平均長は 2.2 ㎝であり、石材は全て珪質頁岩である。

両者を比較すると、まず基部形態に違いが認められる。基部の抉りは、第３次調査地点出土資料は浅く、やや弧状を呈するものが殆どであるが、それに対して今回出土した石鏃では深く抉りこまれているものが多く出土している。一般的傾向として、古い時期の石鏃は平基無茎もしくは浅い凹基無茎のものが多いとされており（鈴木 1994）、矛盾はないと言える。相対的に大形化する点もこれまでの指摘通り、時期的に後出する特徴である。また、今回出土した石鏃は調整剥離が精緻さを増し、器体のより深くまで入りこんでおり、大形化する一方で器厚が減少する傾向も指摘できる。石材の選択傾向は、ほとんど珪質頁岩を主体としている第３次調査地点出土資料と比較すると、珪質頁岩を主体としながらも流紋岩、碧玉、玉髄等の遺跡周辺で入手可能な石材がみられるように変化している。

石匙

石鏃に次いで出土点数が多い器種は石匙である。縦型と横型の両者がみられ、縦型が 19 点出土しているのに対して、横型は３点である。第３次調査によって出土した石匙は 76 点であり、内訳は縦型 55 点、横型 13 点、不明８点である。ともに縦型が大半を占め、縄文時代前期を通して縦型の石匙が多く製作されていることがわかる。今回出土した縦型の石匙は縦長剥片を素材とし、打面側につまみ部を作出しているものが多い。第３次調査地点出土資料も縦長剥片が多く用いられ、つまみ部を打面側に作出している資料が多い点は同様であるが、素材剥片の末端側につまみ部が形成されているものもみられる。末端が肥厚する剥片を素材とする例であり、このことから、報告では、つまみ部が素材剥片の厚みのある部分に作り出されることが指摘されている。

石匙の調整剥離は基本的に素材剥片の表面に施され、裏面はバルブ除去やつまみ部作出の調整が主である。この点については今回出土した石匙と第３次調査地点出土資料に違いはないが、今回の資料には裏面の周縁に調整が施される例も散見される。

二重パティナを有する石器について

資料中の、特に製品に、石器の調整剥離面に風化の度合いの違いが確認された（二重パティナ）。風化の度合いの異なる剥離面が認められた石器は、第 18 図ピット 34 出土遺物、第 31 図－ 193・194・197・198・201・203、第 32 図－ 204、第 33 図－ 215・219、第 34 図－ 220・224 の 12 点である。掲載外の遺物にも二重パティナが観察される資料が６点認められ、合計 18 点である。器種では石鏃４点、石匙９点、石錐１点、二次加工のある剥片１点、尖頭器３点となる。

打製石器では、使用による刃こぼれ等のため加工を施して刃部再生がなされたり、製品に新たに調整を加えて元の形態と異なる石器を作り出すことが行われる場合がある。今回出土した石器に確認された二重パティナは、新たに調整された部位や調整後の石器の形状から後者により生じたものと推定される。このような行為が行われた背景としては、三神峯遺跡において継続的に集落が営まれたため、周辺に古い時期の石器が存在し、それらを再利用することによって新たな石器を作り出したものと考えられる。

石核・素材・製品

石篦や尖頭器など素材からの大きな形態変化を伴うものは、製品よりも一回りか二回り大きな素材が必要である。

また、出土した剥片に大型のものがあることから、剥離された石核や原石もそれに見合う大きさを有していたものと推定される。一方、石鏃や石匙、石錐、掻器・削器類等は、さほど大型の素材を必要とはしない。それぞれの素材が、大型の石核から一連の剥片剥離作業過程で剥離され、その中から目的とする製品に適した剥片が選択されて用いられたと推測されるが、今後、母岩別の分析や接合関係の検討等が必要である。

出土剥片等には、背面に自然面が大きく残されている資料は、それほど多くは認められなかった。石材採取地などで原石の自然面除去作業が行われ、その上で遺跡内に運び込まれた可能性が考えられる。剥片の観察分析や接合作業は、石材の搬入形態や運び込まれた後の消費状況の解明にもつながるものと考えられることから、製品のみならず剥片に関しても、より詳細な分析を行う必要があろう。

４．おわりに

三神峯遺跡はこれまで縄文時代前期初頭の大集落として認識されてきた。しかし、今回の調査によって三神峯遺跡の新たな集落像が浮かび上がってきた。土坑、ピット、遺物包含層から出土した大木６式の豊富な遺物を見ると、それらの時期にも集落が存在した可能性が考えられる。特に大木６式の土器の出土が最も多く、個体が識別できる状態に復元できるものも含まれていた。また前期のそれ以外の時期についても、例えば大木４式に比定される遺物は、大木６式の資料に次いで充実している。このことから、前期初頭頃に当地に最初の集落が営まれ、その後規模の大小はともかくも、縄文時代前期を通して何らかの遺構がつくられ続け、また廃絶していったものと推測され、やがて前期後半から末葉にかけて、再び本格的な集落が営まれるに至ったものと推察される。今後、台地の平坦部での調査が行われれば、前期初頭だけでなく前期末葉の竪穴住居跡などが検出される可能性は高いものと思われる。

当調査地点の遺跡形成の変遷としては、前期後半を中心として土坑やピットがつくられた時期と、それらが廃絶した後に遺物包含層が形成された時期という２段階が認められる。遺構や遺物包含層を含めて、出土する遺物は縄文時代前期のものがほとんどで、中期以降の遺物が極端に少ないことから、中期以降にこの土地を積極的に利用した痕跡は認められない。遺跡の時期の下限もこの頃に求められるのであろうが、今後の調査の進展に期待したい。

最後に今回の調査において出土した遺物の中には、土偶や石剣などのいわゆる「第二の道具」（小林 1977）が含まれていた。今回はその分析の方向も見出せず、材質や文様構成を報告するにとどめたが、物質文化に頼りがちな現代人の我々よりも遥かに豊かな精神世界を持っていたと思われる、縄文人達の内面を知る上で貴重な資料である。出土位置や出土状況などを詳細に記録する等、今後の調査に生かしたいと思う。

第Ⅶ章　まとめ

1．三神峯遺跡は、仙台市太白区三神峯一丁目地内に所在する。遺跡は名取川の形成した河岸段丘上に位置している。

2．今回の調査は三神峯公園再整備事業の実施に伴って、2008年6月24日～9月16日まで実施した。調査面積は、514㎡である。

3．調査の結果、227基の遺構が確認され、このうち土坑21基、ピット67基について掘り下げを行った。また、遺構を覆う形で遺物包含層を検出した。遺物は、縄文時代前期初頭から中期初頭、古代の土師器・須恵器などが出土しているが、縄文時代前期後半のものを主体としている。

4．当該地は、集落内で土坑やピットが密集しており、大木6式頃まで断続的に利用される時期と、その後遺物包含層が形成される時期の2段階の変遷が認められる。

5．縄文時代前期初頭の集落と認識されてきた三神峯遺跡に、新たに前期後半の集落が存在した可能性が推測される。

引用・参考文献

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第1号　日本考古学会

大賀　健　2004「箆状垂飾（石製品）」『季刊　考古学』第89号　雄山閣

小笠原好彦　1984「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究1　考古学篇』渡辺信夫編

角田市教育委員会　1994『土浮貝塚　平成5年度調査概要』

興野義一　1967「大木式土器理解のために（Ⅰ）」『月刊　考古学ジャーナル』№.13　ニュー・サイエンス社

興野義一　1968 a「大木式土器理解のために（Ⅱ）」『月刊　考古学ジャーナル』№.16　ニュー・サイエンス社

興野義一　1968 b「大木式土器理解のために（Ⅲ）」『月刊　考古学ジャーナル』№.18　ニュー・サイエンス社

興野義一　1968 c「大木式土器理解のために（Ⅳ）」『月刊　考古学ジャーナル』№.24　ニュー・サイエンス社

興野義一　1969「大木式土器理解のために（Ⅴ）」『月刊　考古学ジャーナル』№.32　ニュー・サイエンス社

興野義一　1970「大木式土器理解のために（Ⅵ）」『月刊　考古学ジャーナル』№.48　ニュー・サイエンス社

興野義一　1984「大木式土器について」『宮城の研究1　考古学篇』　渡辺信夫編

小林圭一　2008「瘤付土器」『総覧　縄文土器』　小林達雄編

小林達雄　1977「土偶」『日本陶磁全集3　土偶・埴輪』　中央公論社

白鳥良一　1974「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古歴史論集』　宝文堂

白鳥良一　1989「前期大木式土器様式」『縄文土器大観』　小学館

白鳥良一　1999「第二章第四節　縄文集落と住居」『仙台市史　通史編1　原始』仙台市

鈴木道之助　1994『図録・石器入門事典＜縄文＞』

仙台市教育委員会　1973『三神峯遺跡北東部緊急発掘調査概報』

仙台市教育委員会　1980『三神峯遺跡発掘調査報告書－東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部C地点緊急発掘調査－』

仙台市教育委員会　1987『山田上ノ台遺跡－昭和55年度発掘調査報告書－』

仙台市教育委員会　1994『北原街道B遺跡－仙台市宮城地区－』

仙台市教育委員会・宮城県道路公社　2000『高田B遺跡』

仙台市教育委員会　2004『上野遺跡－平成15年度確認調査・第5次発掘調査報告書－』

仙台市史編さん委員会　1994「2　地形と地質」『仙台市史　特別編1　自然』　仙台市

仙台市史編さん委員会　1995『仙台市史　特別編2　考古資料』　仙台市

仙台市史編さん委員会　1999『仙台市史　通史編1　原始』　仙台市

仙台市史編さん委員会　2005『仙台市史　通史編1　原始　旧石器時代〔改訂版〕』　仙台市

大工原豊　2008『縄文石器研究序論』

中野幸大　2008「大木7 a～8 b式土器」『総覧　縄文土器』　小林達雄編

名取市教育委員会・宮城県警察本部　1998『泉遺跡〔宮城県警察学校建設関係発掘調査報告書〕』

丹羽　茂　1989「中期大木式土器様式」『縄文土器大観』　小学館

早瀬亮介　2008「前期大木式土器」『総覧　縄文土器』　小林達雄編

松田光太郎　2003「大木6式土器の変遷とその地域性－縄文時代前期末葉の東北地方中・南部の土器編年－」『神奈川考古』第39号　神奈川考古同人会

森　幸彦　2008「大木9・10式土器」『総覧　縄文土器』　小林達雄編

山形県教育委員会・建設省東北地方建設局山形工事事務所　1990『押出遺跡発掘調査報告書』

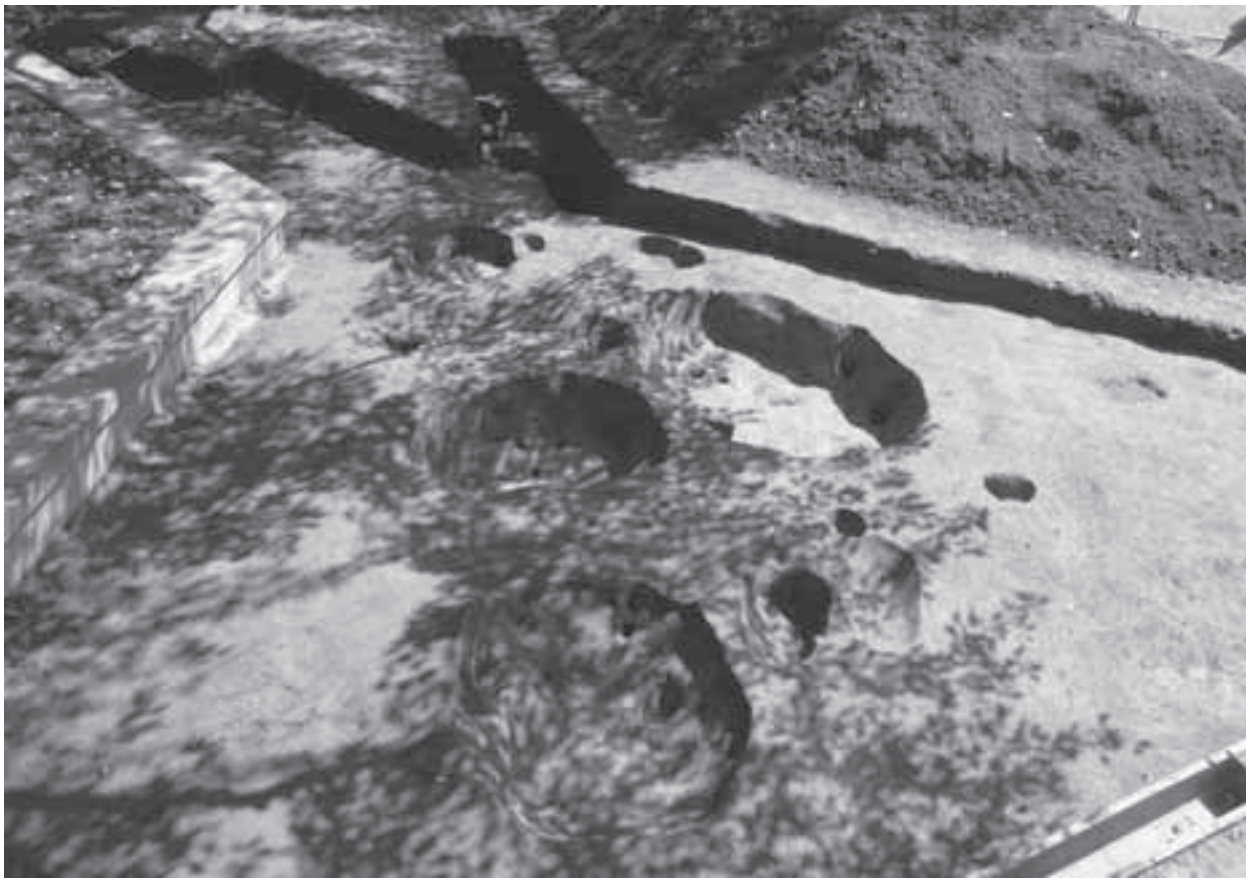
利府町教育委員会・宮城県住宅供給公社　1987『菅谷　六田遺跡－縄文時代前期中葉集落跡の発掘調査報告－』

写真図版

調査区全景（東から）

調査区遺構検出時全景（北西から）

写真図版　2



Ａ区完掘状況（部分）（北西から）

Ａ区完掘状況（部分）（北から）

Ｂ区完掘状況（部分）（東から）

Ｂ区完掘状況（部分）（西から

Ｃ区全景（東から）

Ｄ区全景（北から）

ＳＫ３土坑完掘状況（南から）

ＳＫ３土坑土層堆積状況（南から）

ＳＫ３土坑遺物出土状況（南西から）

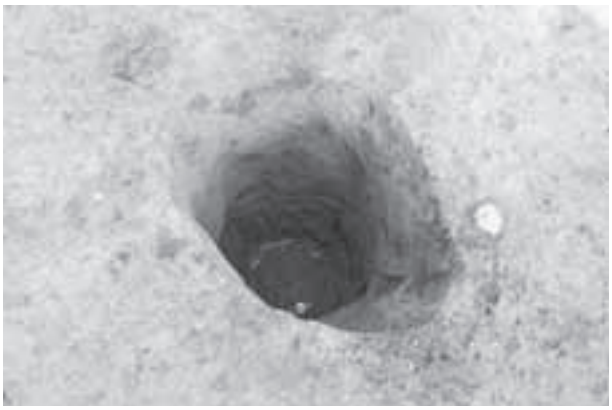
ＳＫ４土坑完掘状況（東から）

ＳＫ４土坑遺物出土状況（南西から）

ＳＫ６土坑土層堆積状況（北西から）

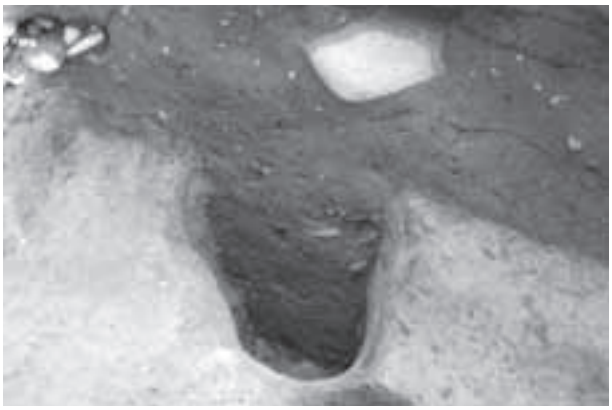
ＳＫ 14 土坑他完掘状況（南東から）

ＳＫ 14 土坑土層堆積状況（南から）



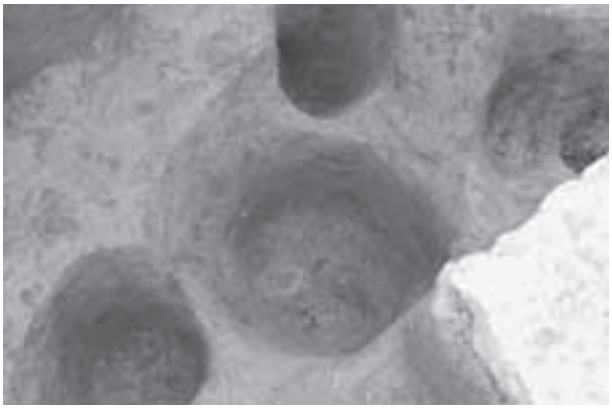
ピット 14 完掘状況（南から）

ピット 34 遺物出土状況（西から）

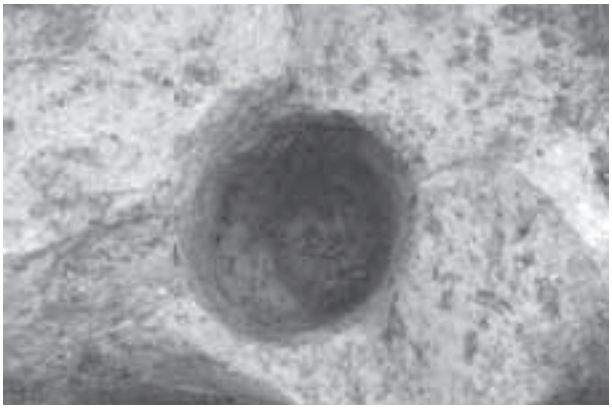


ピット 35 土層堆積状況（北から）

ピット 41 土層堆積状況（北から）

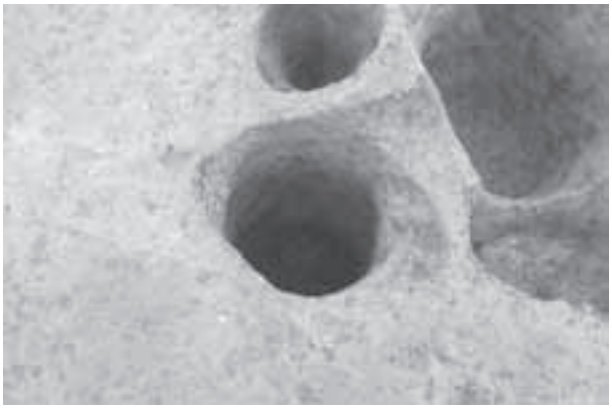


ピット 47 完掘状況（北から）

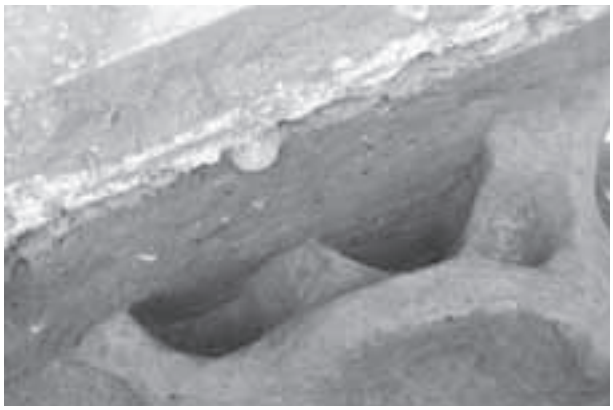


ピット 48 完掘状況（北から）

ＳＫ 16 土坑、ピット 20・47・48・49 土層堆積状況（北から）

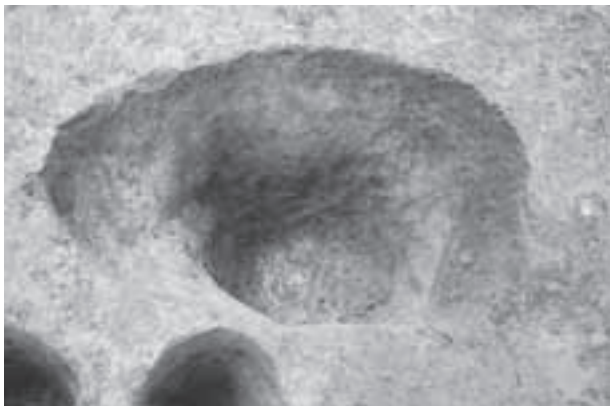


ピット 61 完掘状況（西から）

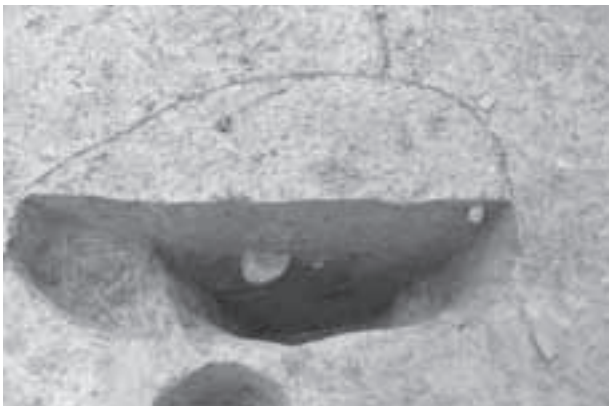


ピット 65・66 土層堆積状況（南から）

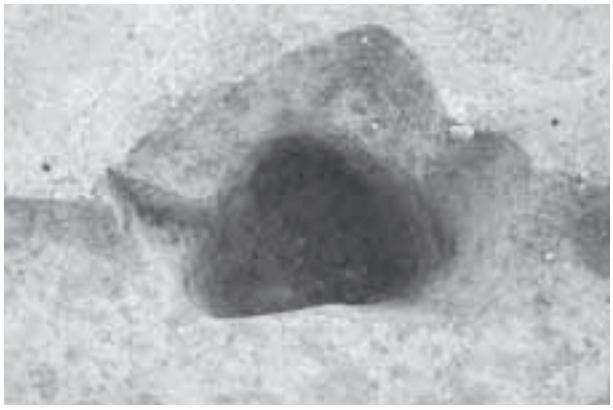
ＳＫ 19 土坑、ピット 72 土層堆積状況（南から）



ピット 4 完掘状況（北西から）



ピット 74 土層堆積状況（北西から）



ピット 75 完掘状況（南西から）

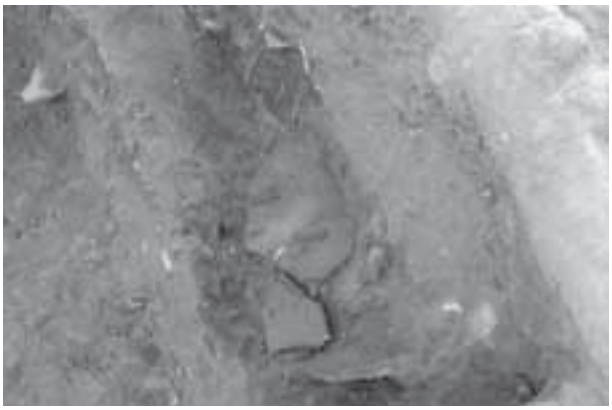
ピット 76 完掘状況（北から）

ＳＫ 16 土坑、ピット 76 土層堆積状況（北から）

Ｈ 10 区周辺遺構完掘状況（西から）

ＳＸ１性格不明遺構土層堆積状況（南東から）

遺物包含層出土遺物（実測No.98）



遺物包含層出土遺物（実測No.96）

Ｂ区南壁土層堆積状況（北東から）

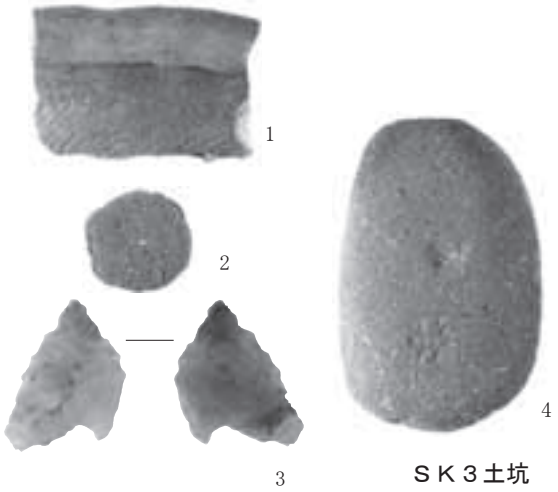
Ｂ区西壁土層堆積状況（北から）

深掘区４土層堆積状況（北から）

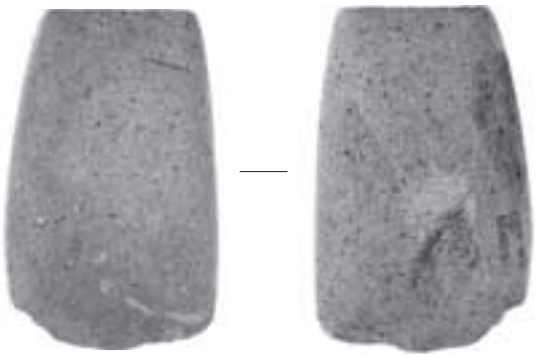
深掘区５土層堆積状況（北から）

作業風景

ＳＫ４土坑



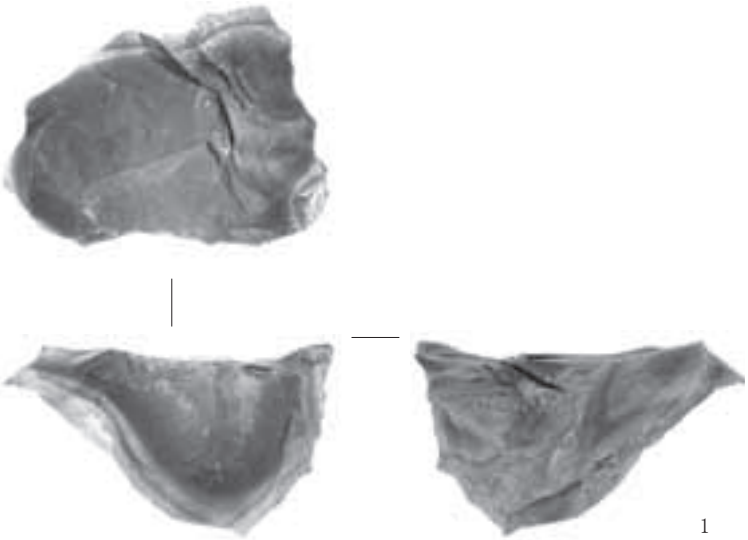
ＳＫ３土坑



ＳＫ５土坑

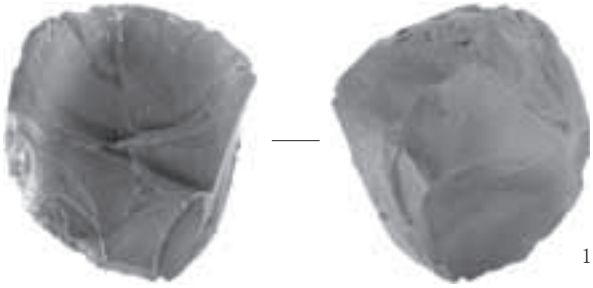
ＳＫ９土坑

ＳＫ 14 土坑



ＳＫ 16 土坑

遺構内出土の遺物（１）



1

ピット４

1

ピット 13

1

ピット 16

1

ピット 20

1

1

ピット 35

2

ピット 34

1

ピット 39

1

ピット 49

1

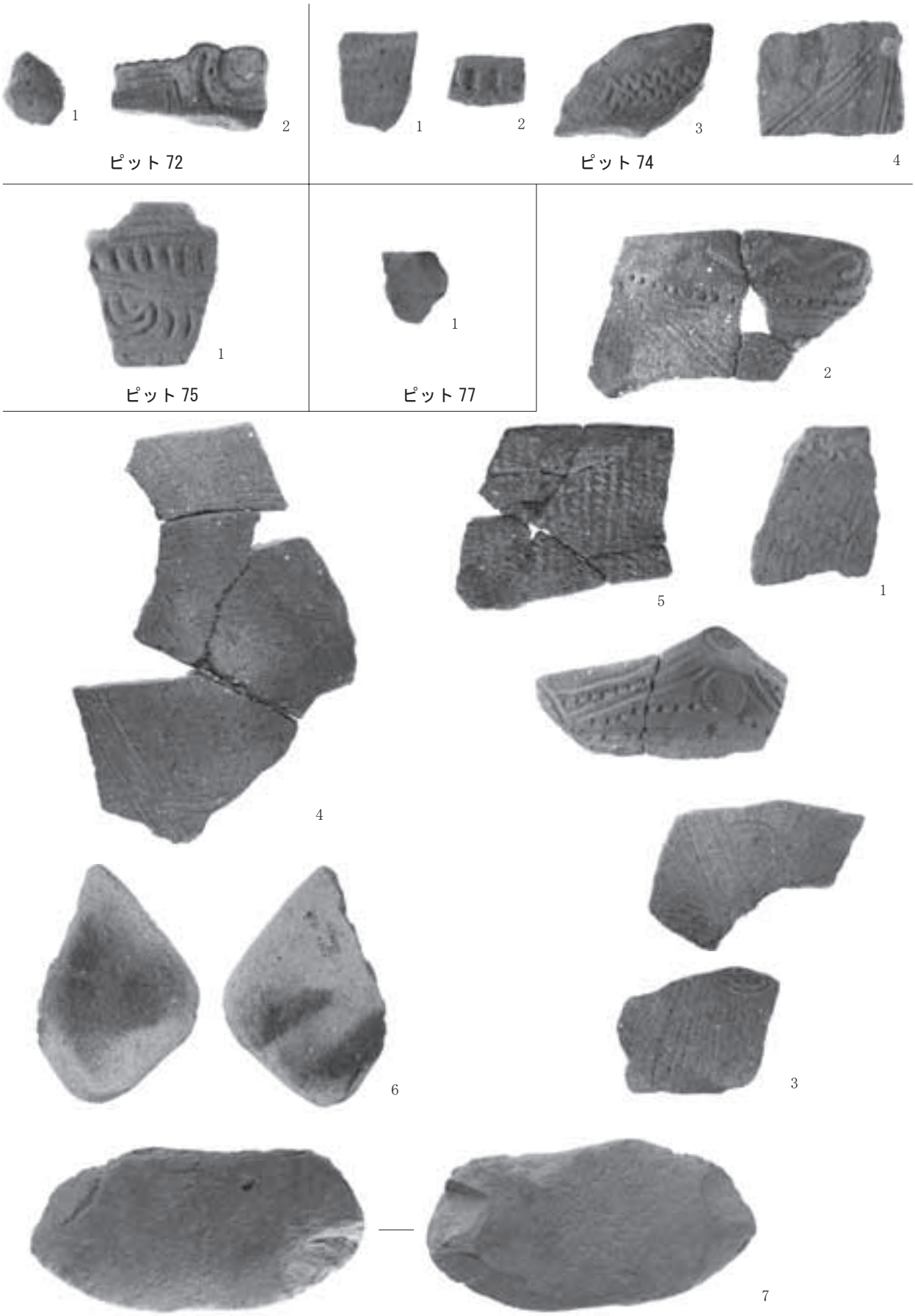
ピット 52

1

2

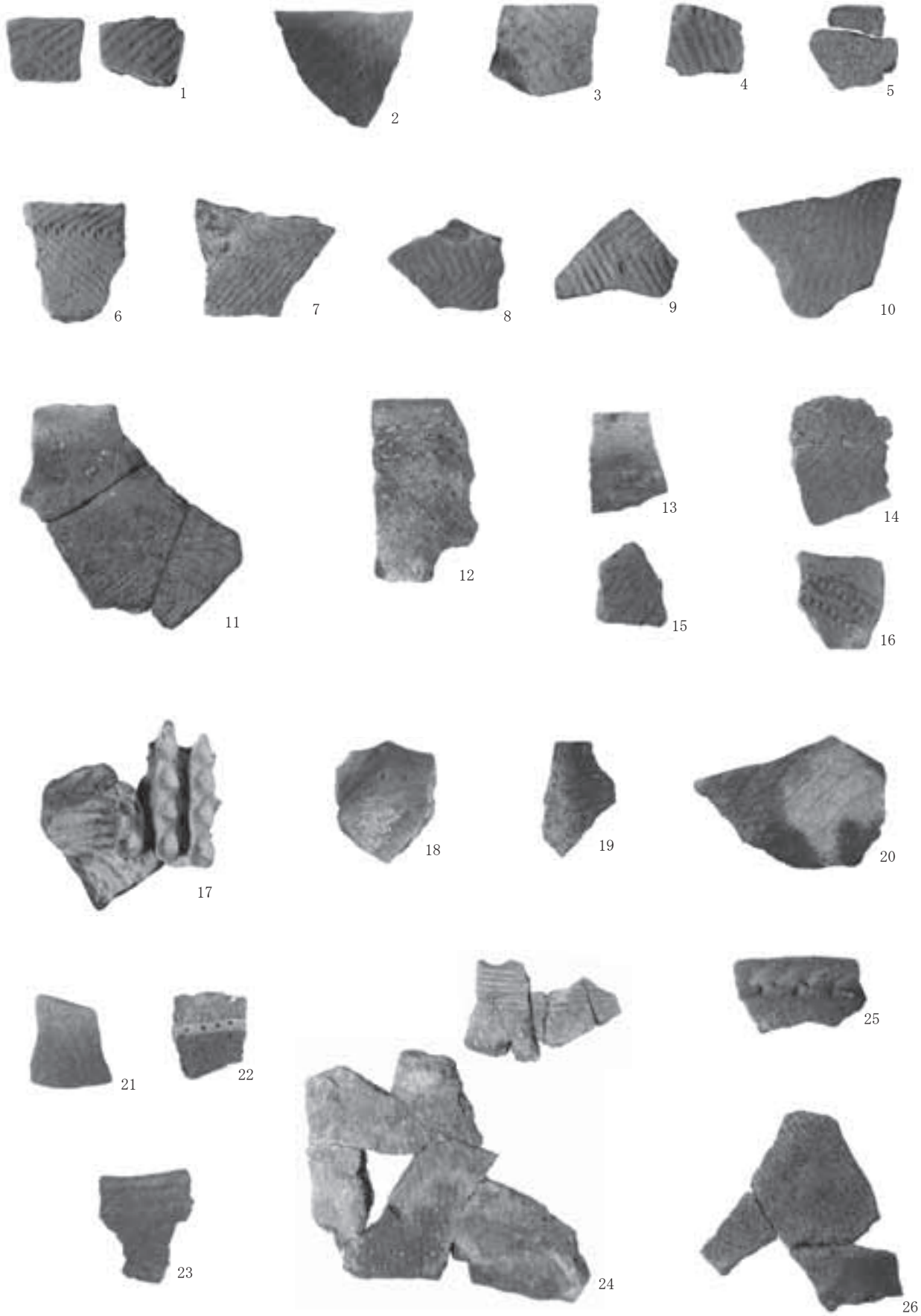
ピット 61

遺構内出土の遺物（２）



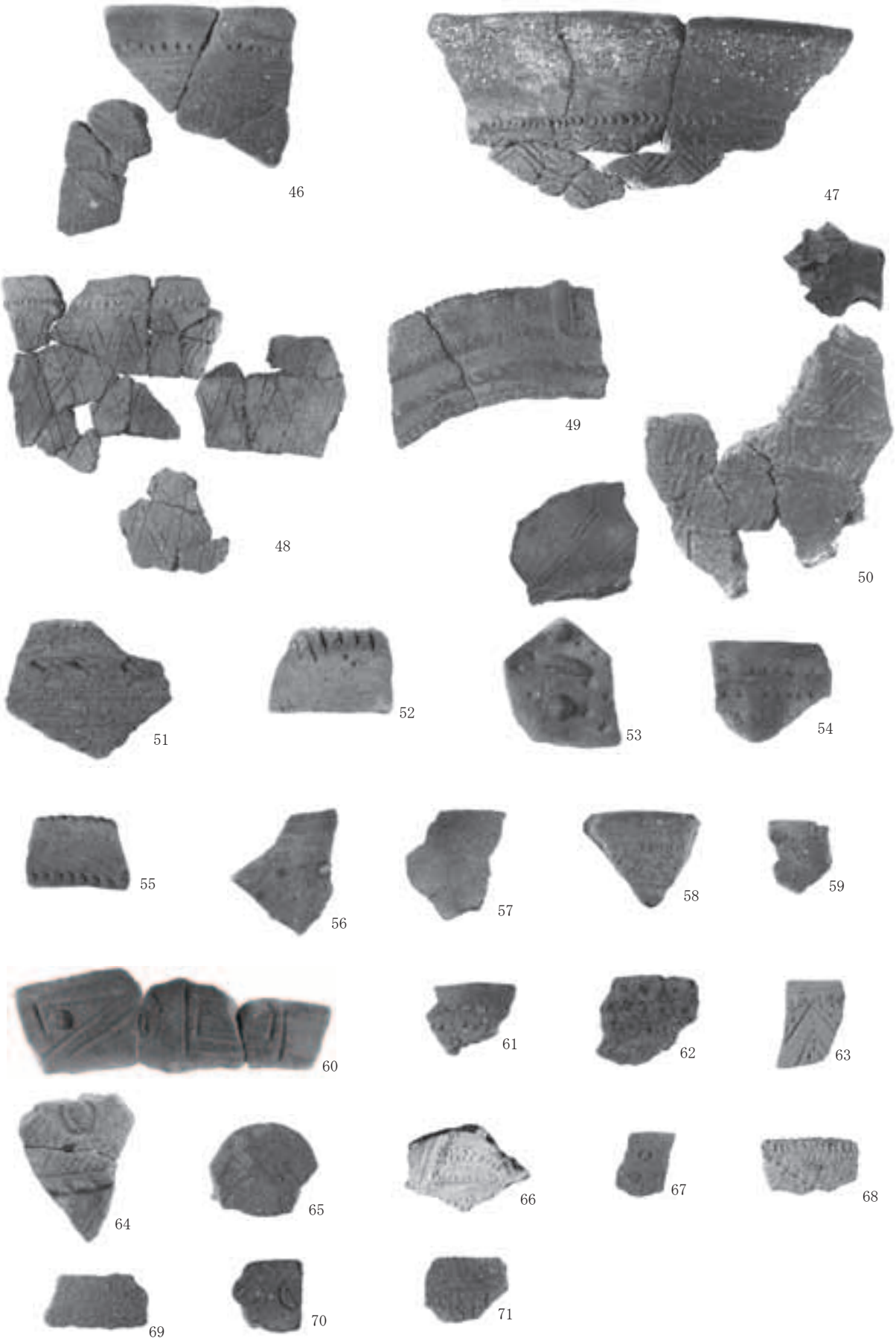
ＳＸ１性格不明遺構

遺構内出土の遺物（３）

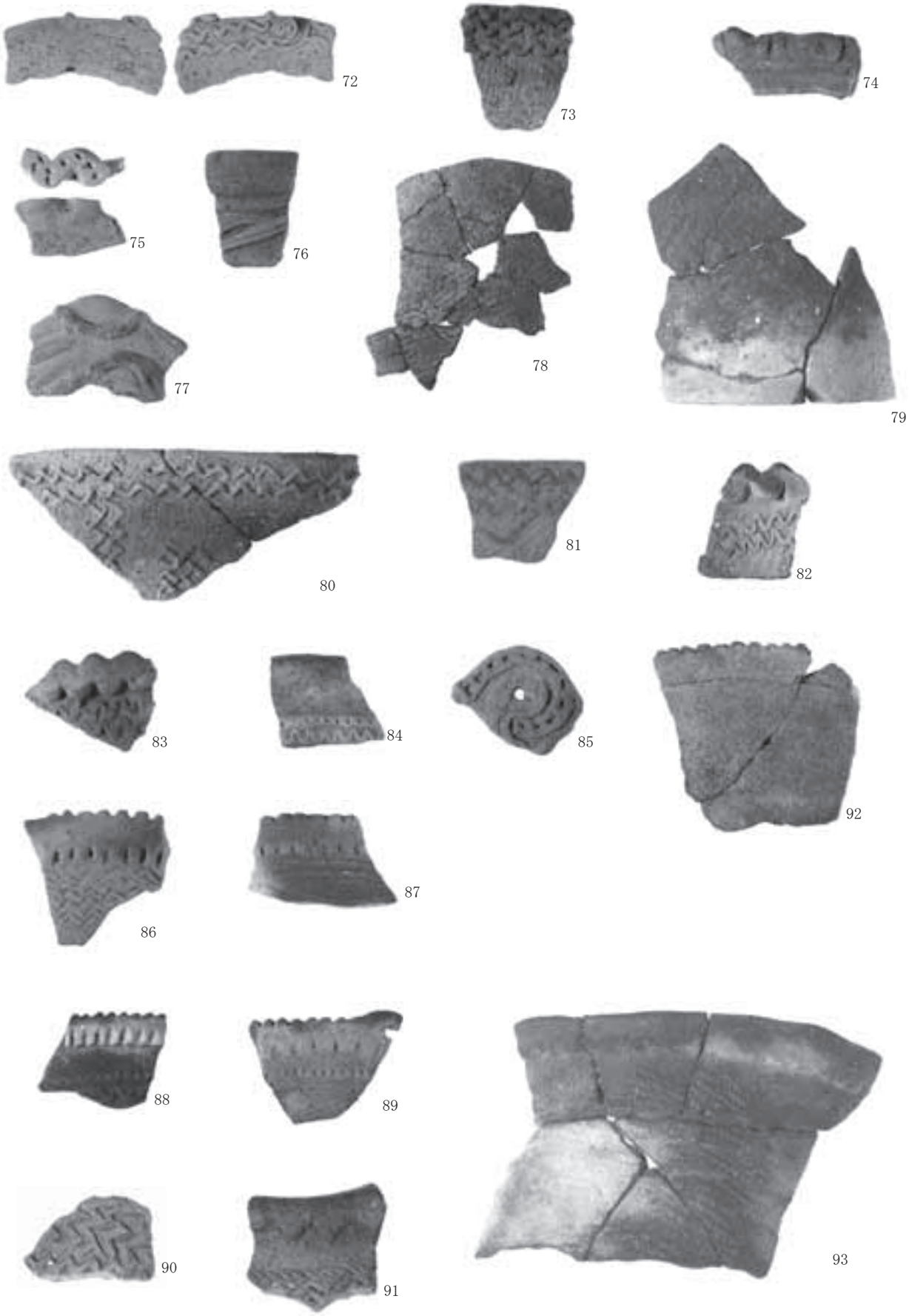


遺物包含層出土の土器（１）

遺物包含層出土の土器（２）

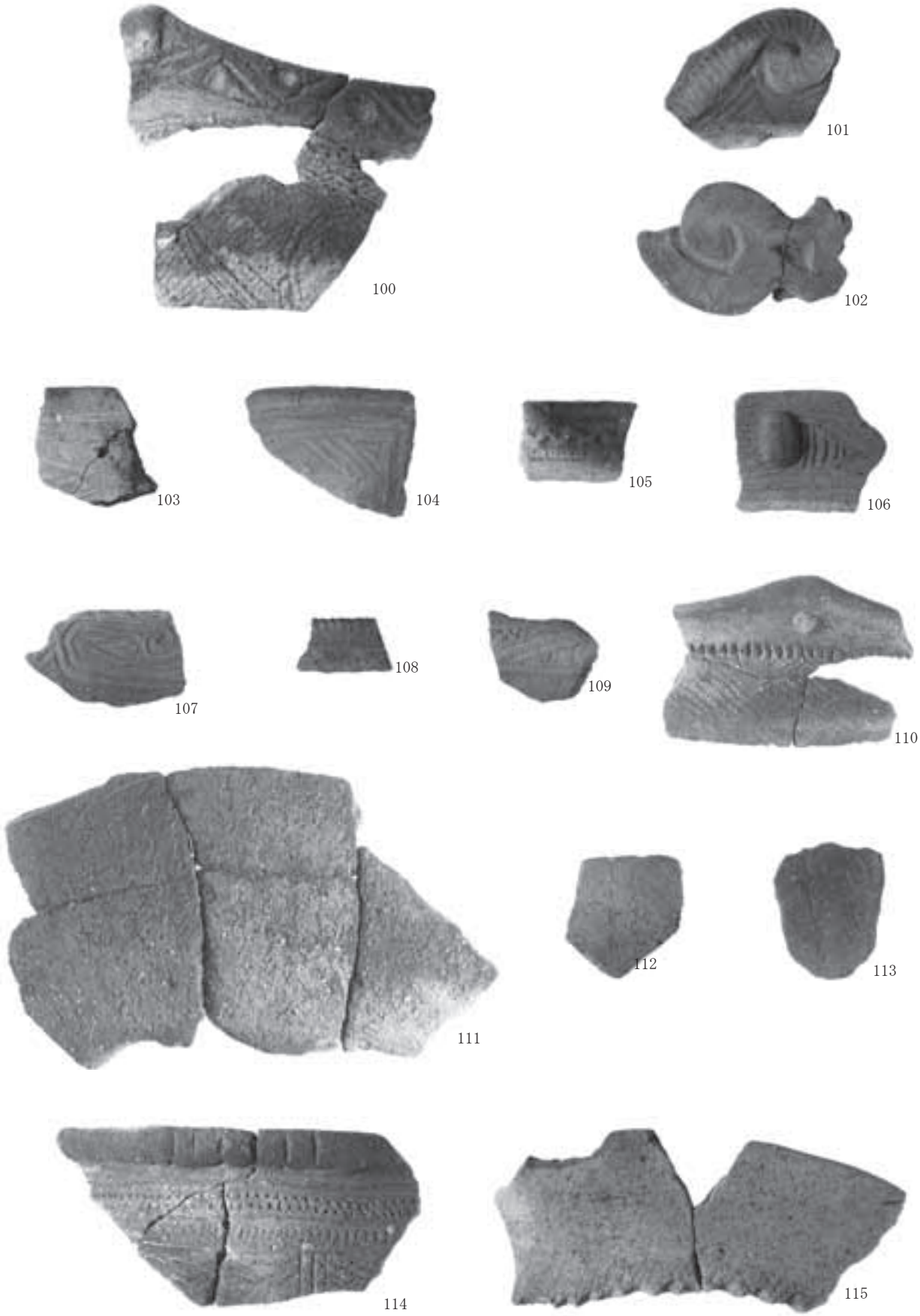


遺物包含層出土の土器（３）



遺物包含層出土の土器（４）

遺物包含層出土の土器（５）



遺物包含層出土の土器（６）

116

117

118

120

119

121

124

122

123

127

125

126

128

遺物包含層出土の土器（７）

129

130

131

132

133

134

135

137

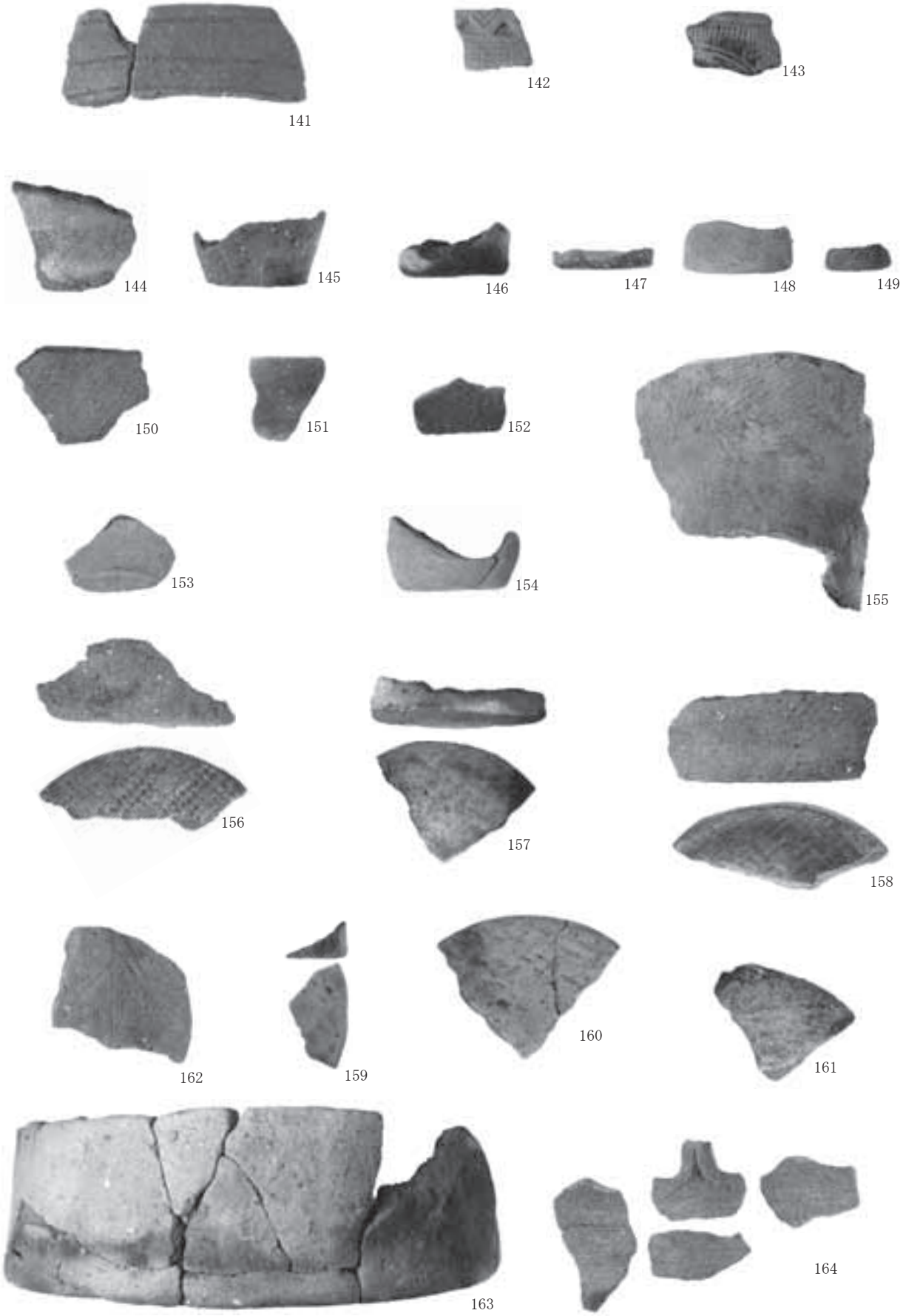
136

138

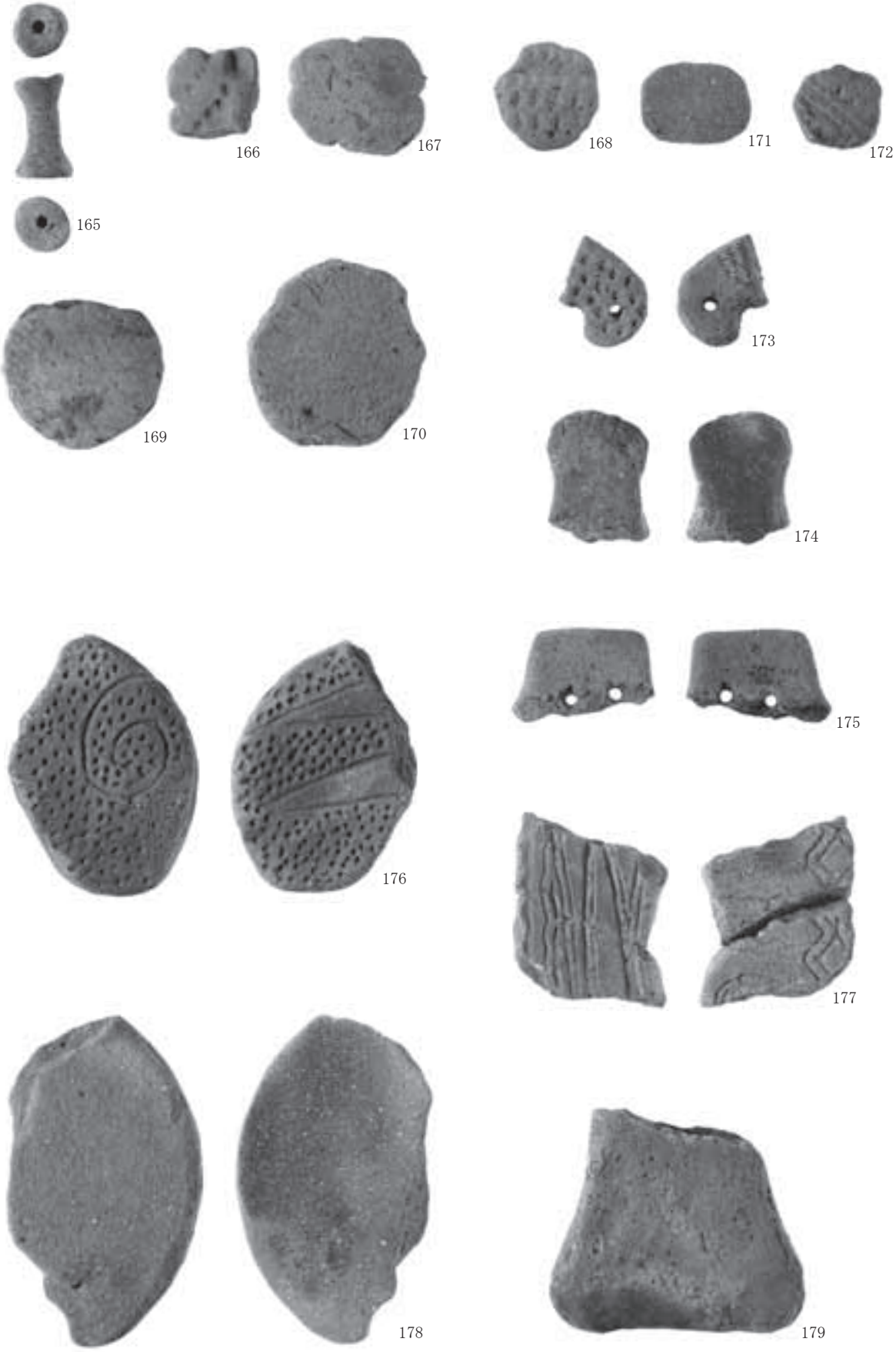
139

140

遺物包含層出土の土器（８）

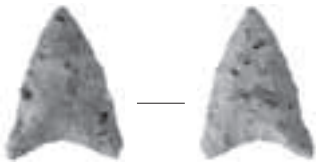


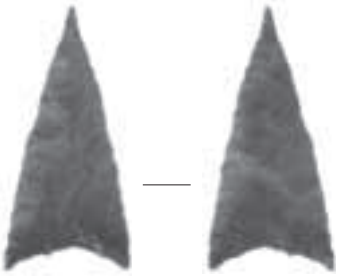
遺物包含層出土の土器（９）



遺物包含層出土の土器（10）

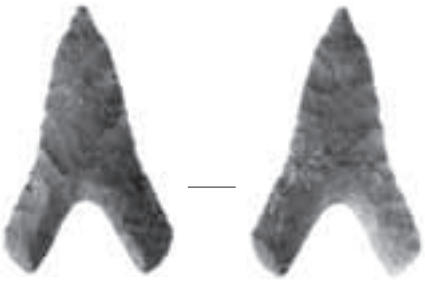
180


181


182

183

184


185

186

187

188

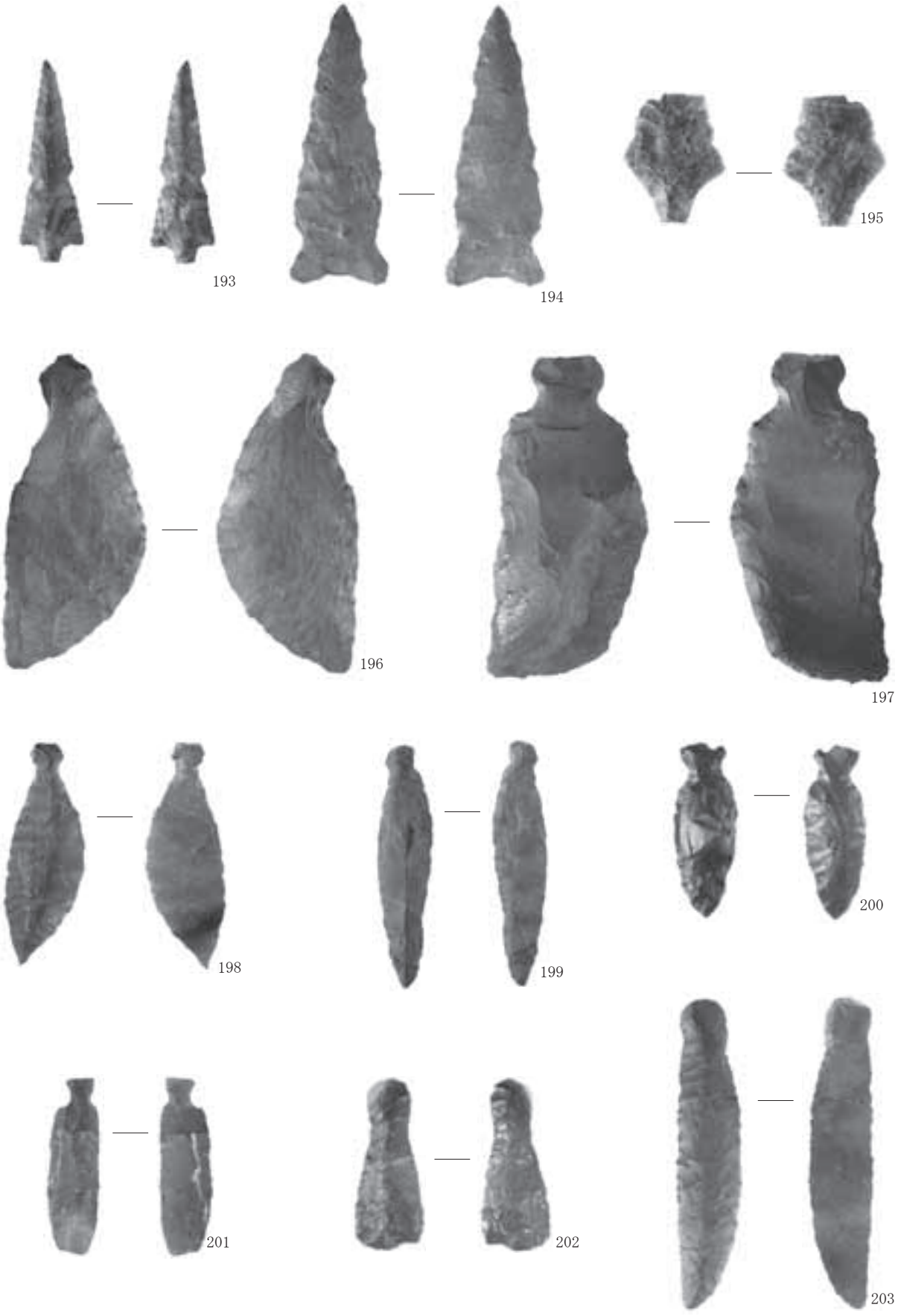
189

190

191

192

遺物包含層出土の石器（１）

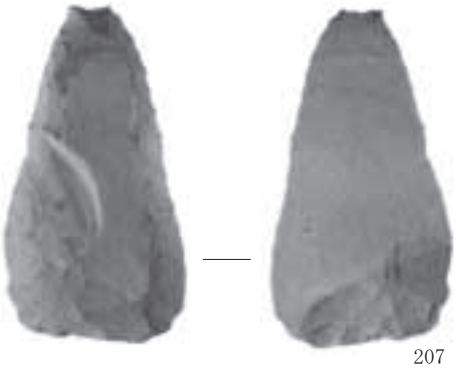


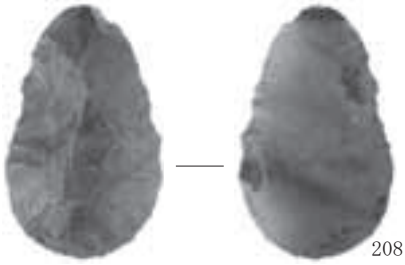
遺物包含層出土の石器（２）

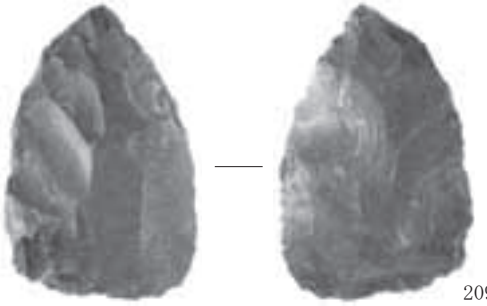
204

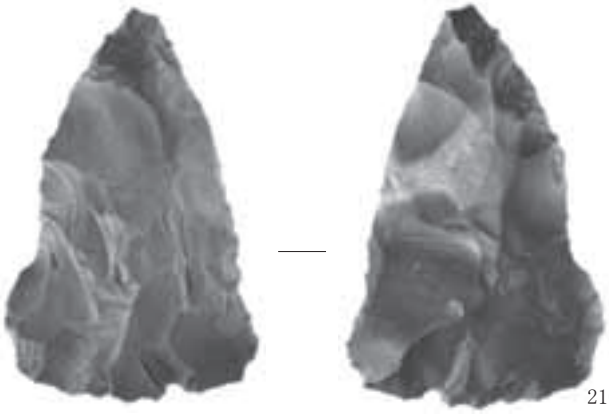
205

206

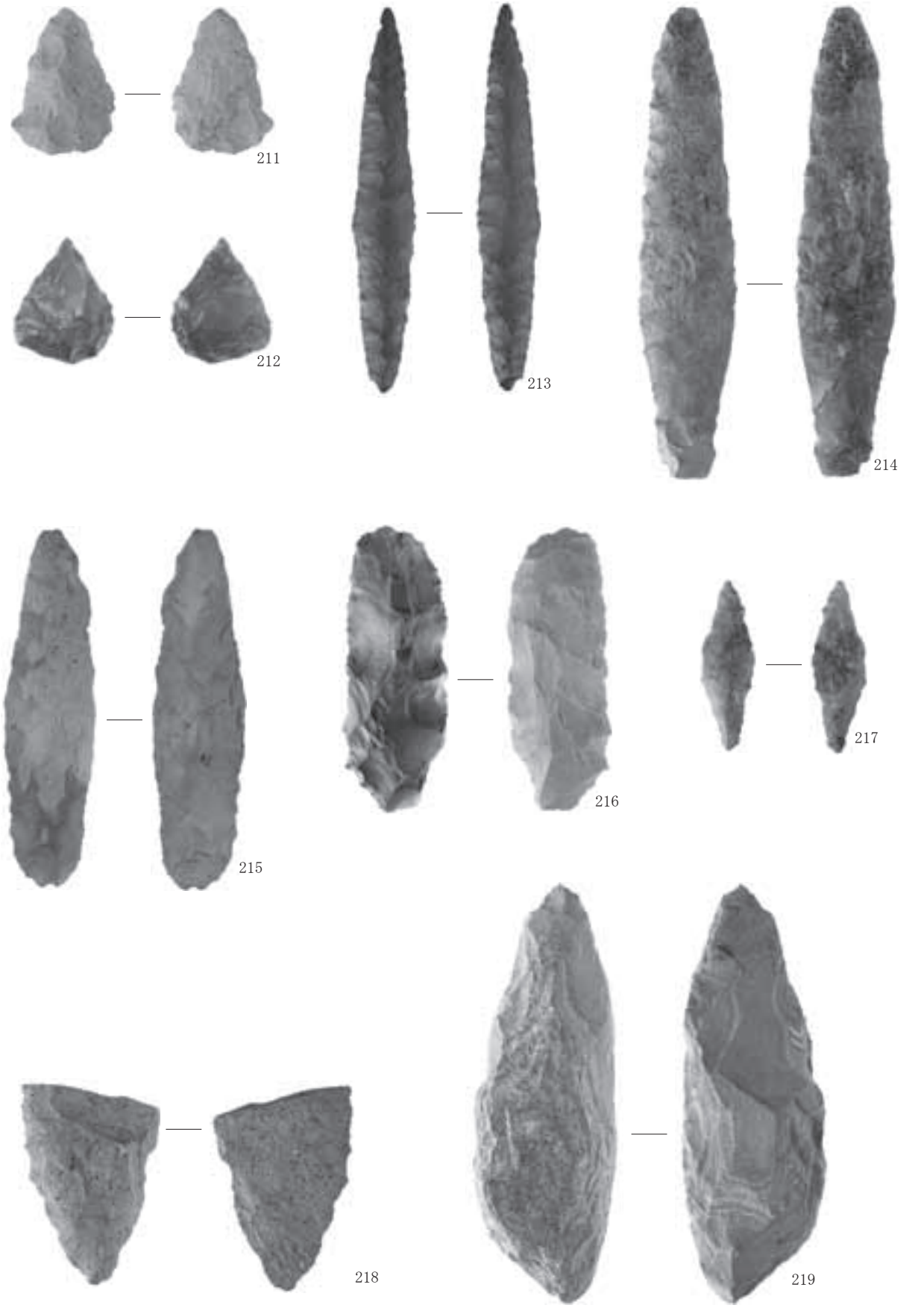

207


208

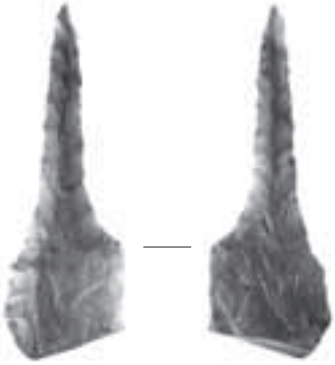

209


210

遺物包含層出土の石器（３）

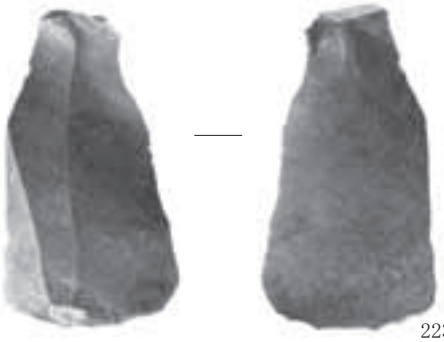


遺物包含層出土の石器（４）

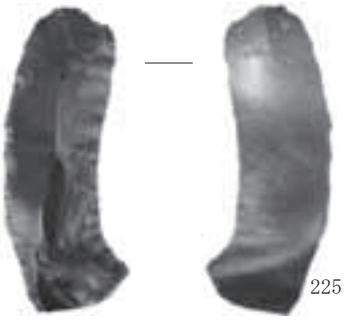

220

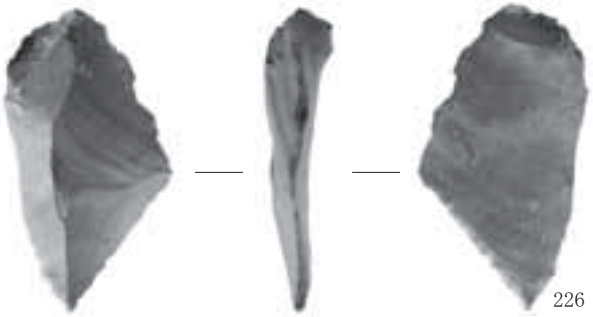
221

222

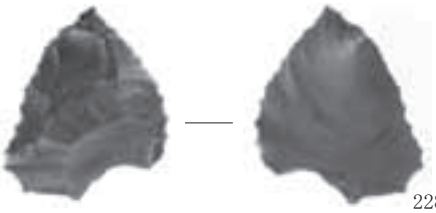

223

224


225

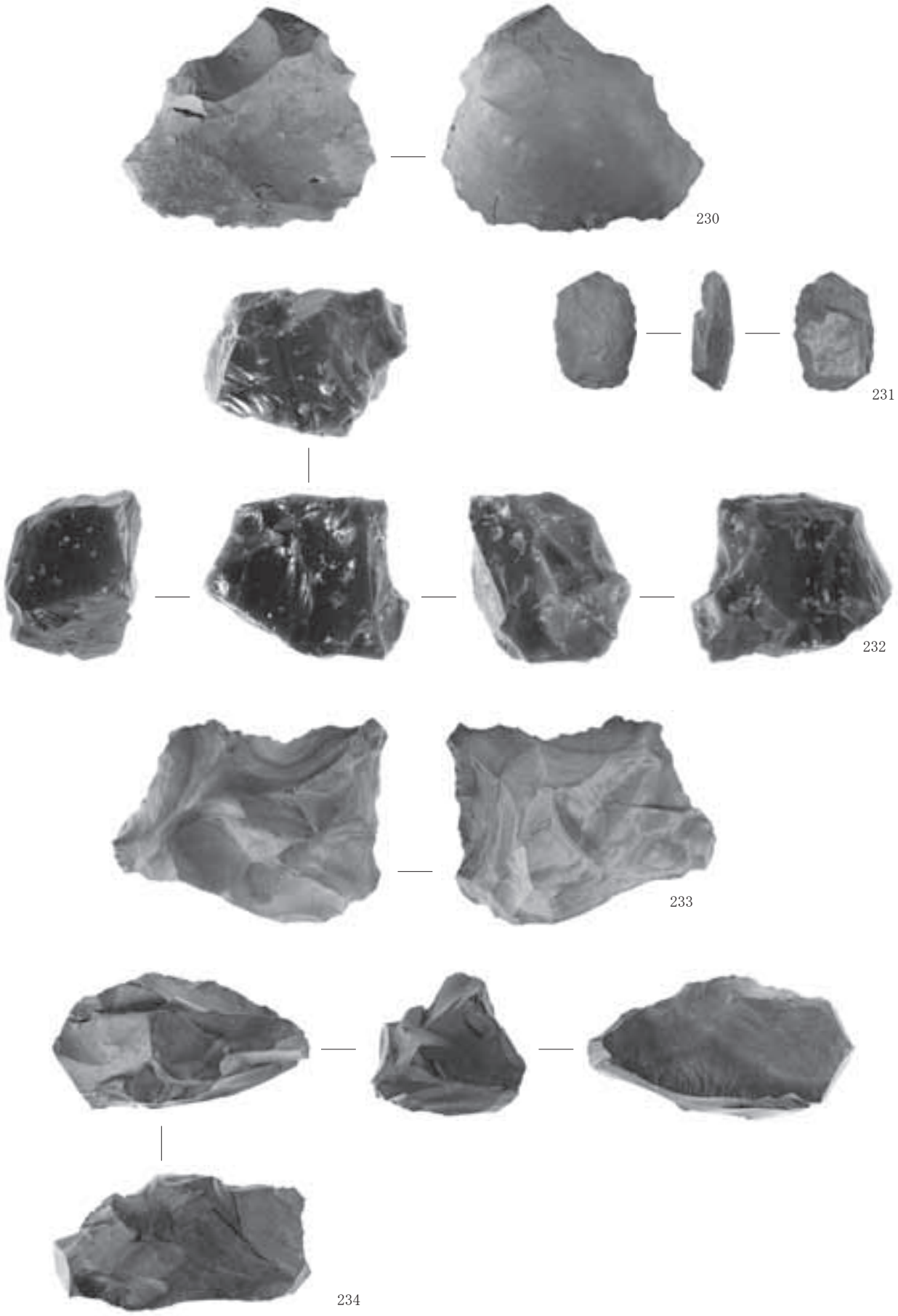

226

227

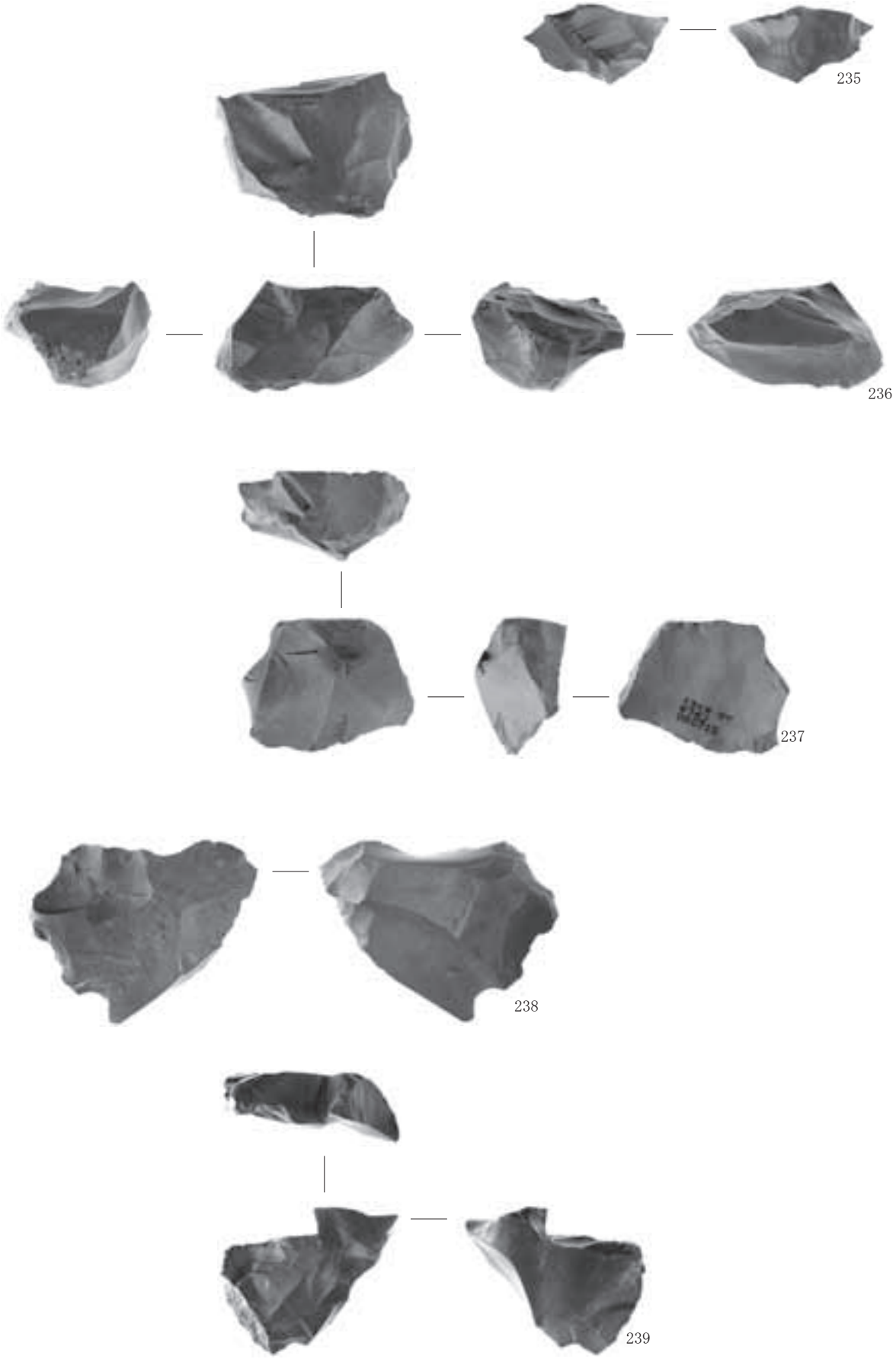

228

229

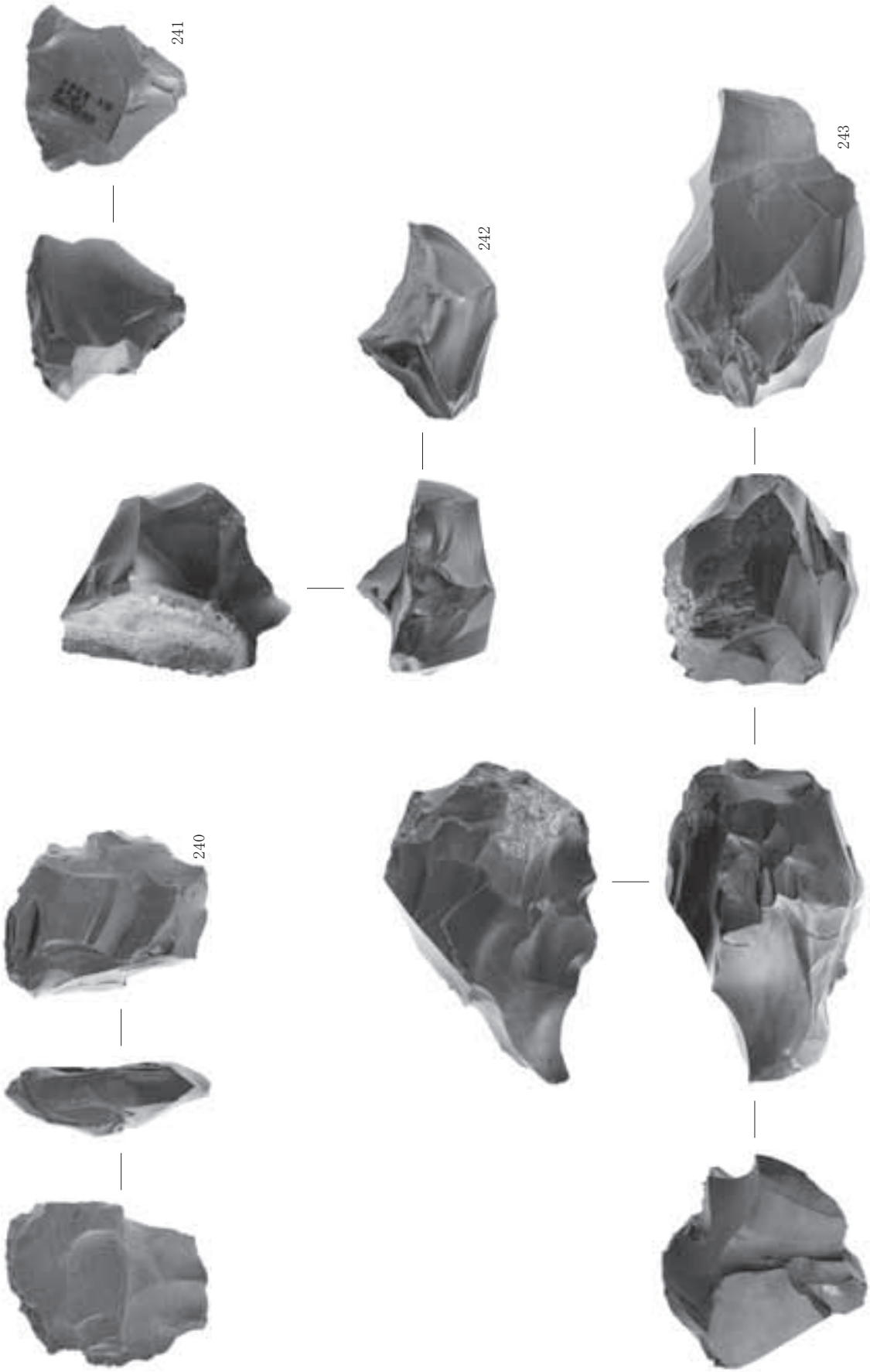
遺物包含層出土の石器（５）



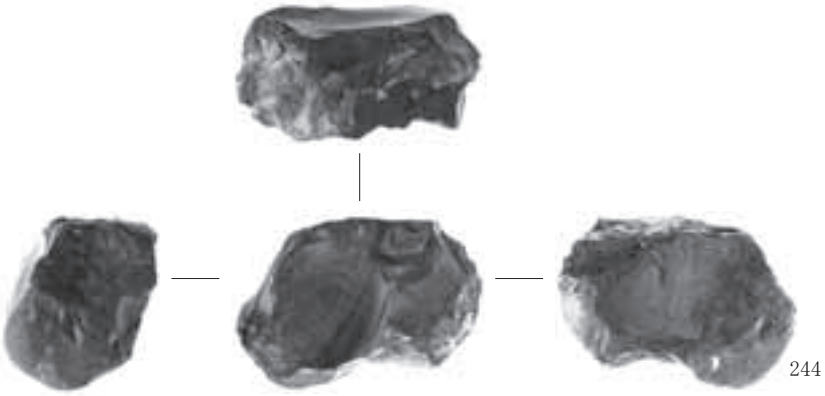
遺物包含層出土の石器（６）



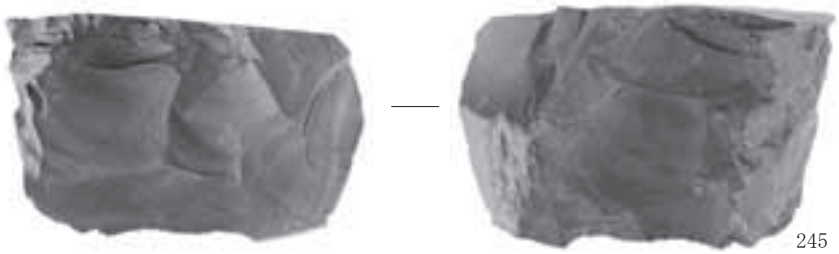
遺物包含層出土の石器（７）



遺物包含層出土の石器（８）



244



245

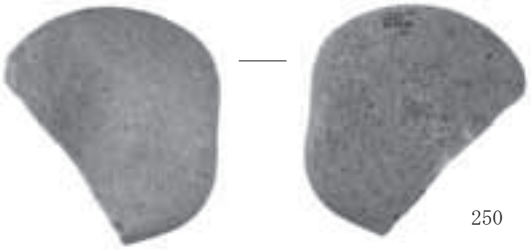
246

247

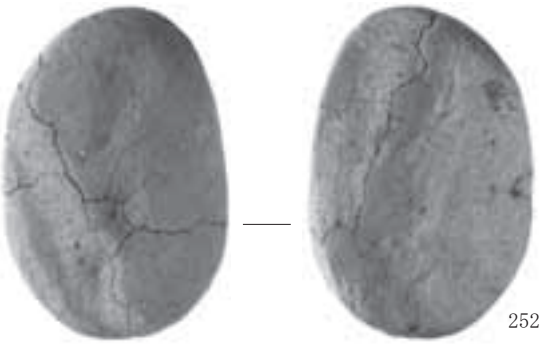
248

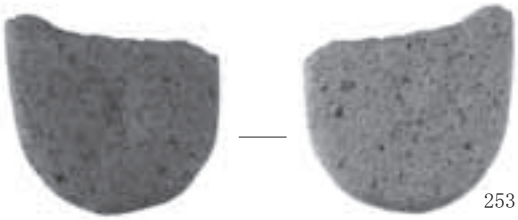
遺物包含層出土の石器（９）

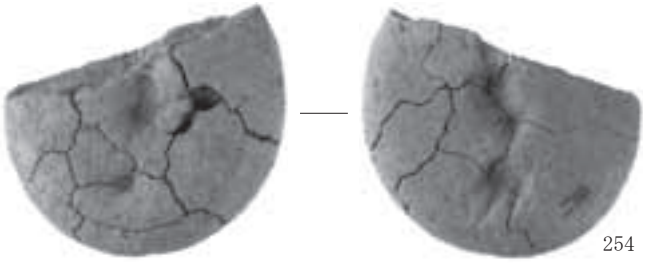
249


250

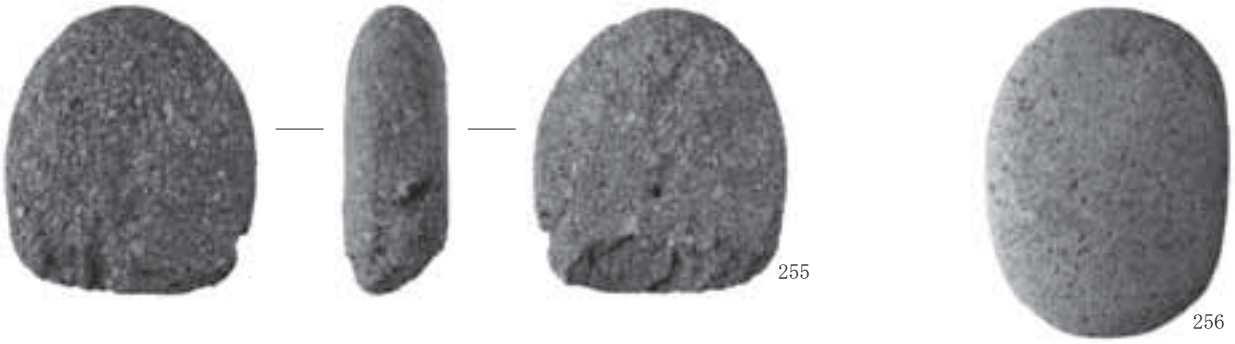
251


252

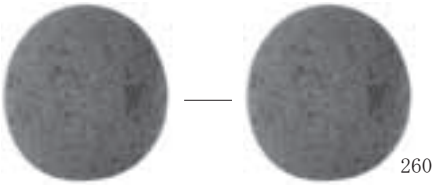

253

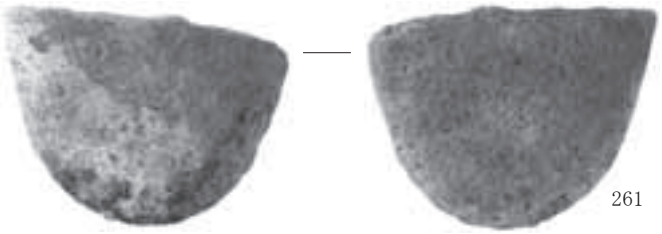

254

遺物包含層出土の石器（10）

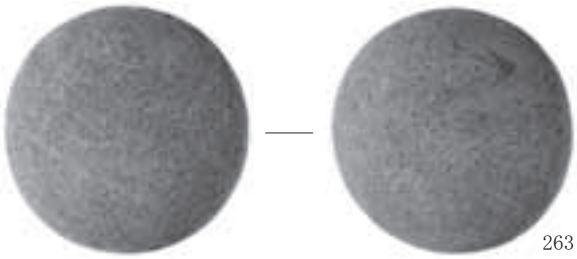


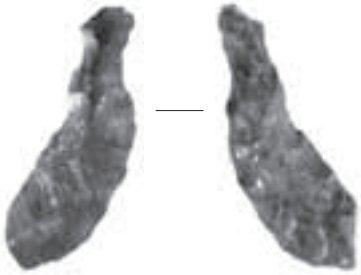
遺物包含層出土の石器（11）


260


261

262


263


264

265

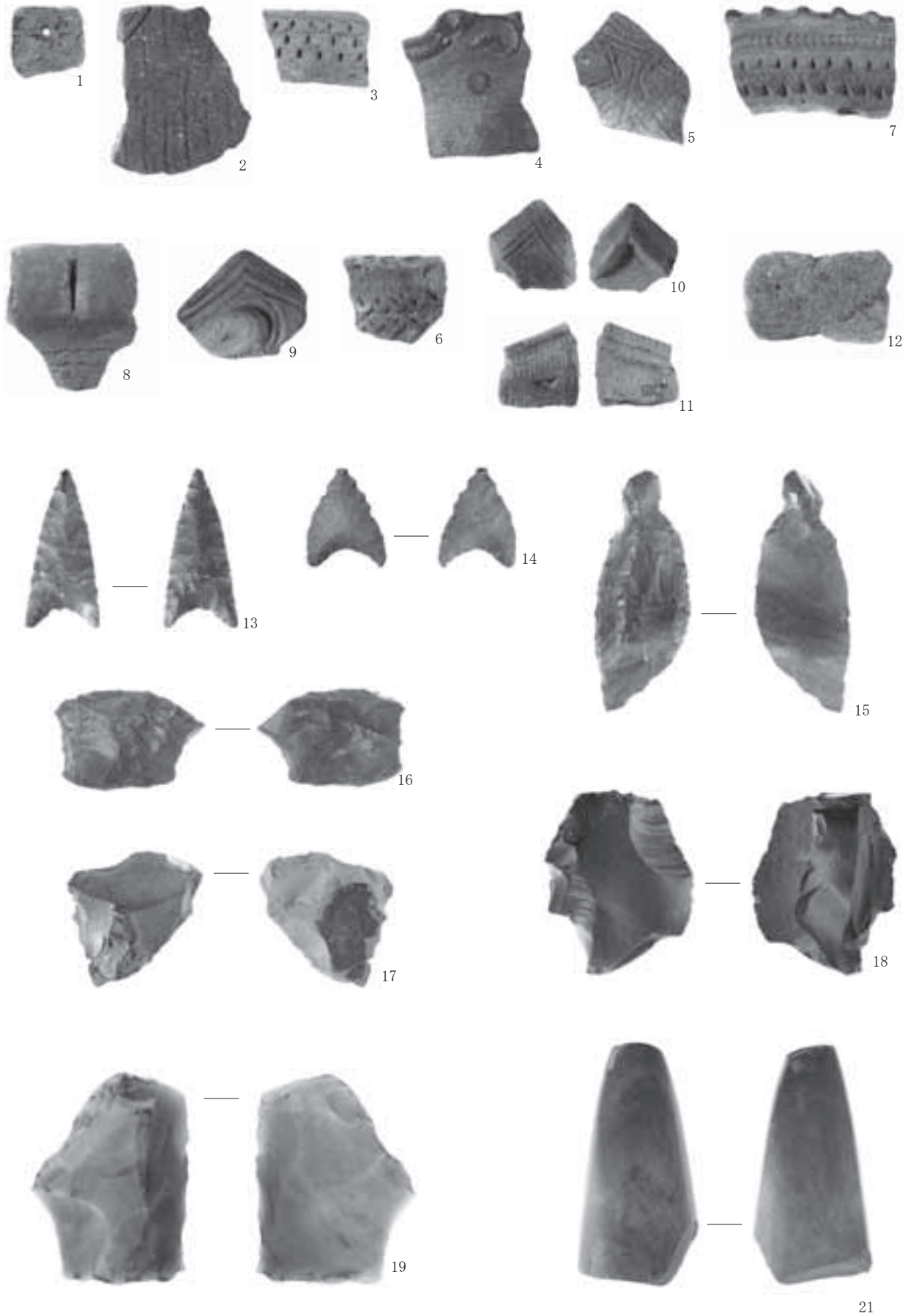
266

267

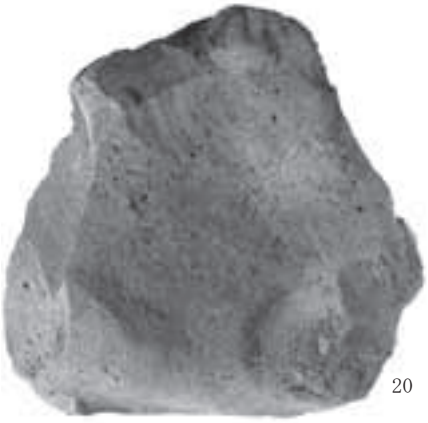
268

269

遺物包含層出土の石器（12）

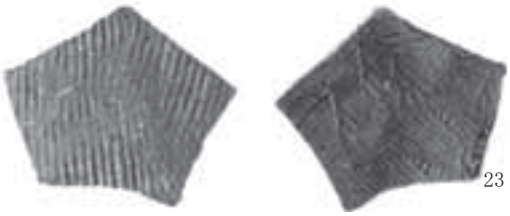


表土・攪乱出土遺物（１）



20

22



23

表土・攪乱出土遺物（２）

報 告 書 抄 録

ふりがな	みかみねいせきーだい6じはっくつちょうさほうこくしょー
書名	三神峯遺跡－第6次発掘調査報告書－
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第338集
編著者名	大久保弥生　荒井　格　山中リュウ　宇井義典
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号　　TEL　022-214-8894
発行年月日	2009年3月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市区町村	遺跡番号					
三神峯遺跡（みかみねいせき）	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし） 太白区三神峯（たいはくくみかみね） 1丁目地内（ちょうめちない）	04100	01004	38° 13′ 33″	140° 51′ 27″	2008.6.24 ～ 2008.9.16	514㎡	三神峯公園 再整備事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代 前期・中期	土坑　21基 ピット　67基 性格不明遺構　139基	縄文土器 土製品 石器 石製品 土師器 須恵器	

仙台市文化財調査報告書第338集

三神峯遺跡

－第6次発掘調査報告書－

2009年　3月

発　行　　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　022（214）8894

印　刷　　株式会社共同印刷
東京都府中市寿町３－13－８
TEL　042（368）2001